新富町文化財調査報告書 第13集

県営農村基盤総合整備パイロット事業(尾鈴二期地区
七又木工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 七又木地区遺跡

HACHI MAN GAMI
## 八幡上遺跡

NANA MATA GYI
## 七又木遺跡

GYIN DAI GA SAKO
## 銀代ヶ迫遺跡

1992.3

宮崎県新富町教育委員会

七又木地区遺跡遠景（一ッ瀬川より新田原台地を望む）

銀代ヶ迫遺跡（上段に八幡上遺跡）

花弁状住居検出状況（オレンヂ層はアカホヤ火山灰）

花弁状住居（八幡上遺跡 2 号住居）

# 序

新富町教育委員会は、宮崎県の委託を受けて、昭和63年度、七又木地区県営農村基盤総合パイロット事業地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しました。本書はその成果報告書です。

七又木地区遺跡の調査では、典型的な花弁状住居跡に代表される弥生時代後期の集落跡が検出された八幡上遺跡や弥生時代後期の集落跡および古墳時代前期の集落跡が検出された銀代ヶ迫遺跡が確認されました。それらの遺跡からは、蜆貝の採集という一ッ瀬川などとの係わりを想像させる食生活遺物や住居跡の変遷など弥生時代から古墳時代前期にかけての散村的なありかたを垣間見せてくれる遺構など学術的に貴重な成果を収めることができました。この成果が学校教育・生涯教育の場でひろく活用されることを希望いたします。

尚、本報告書作成に際しましては、宮崎県一ッ瀬土地改良事務所および宮崎県教育庁文化課のご理解とご協力を頂きましたことにつきまして心から御礼申し上げます。

平成4年3月1日

新富町教育委員会

教育長　清　郁雄

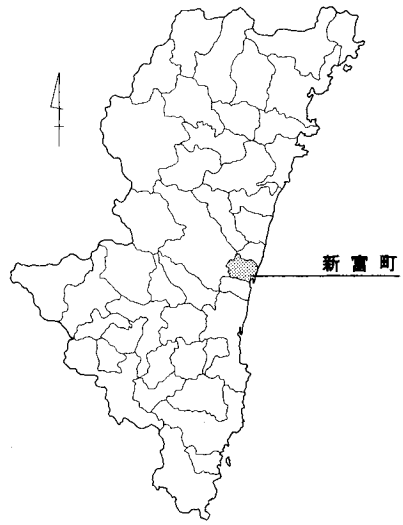
# 例　　言

1. 本報告は、宮崎県新富町教育委員会が県営農地保全整備事業（七又木工区）に伴って実施した八幡上（はちまんがみ）遺跡、七又木（ななまたぎ）遺跡、銀代ケ迫（ぎんだいがさこ）遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査実施期間

   昭和63年８月９日から平成元年２月10日までの間
3. 調査組織

| | | | |
|---|---|---|---|
| 調査主体 | 新富町教育委員会 | （昭和63年度） | （平成３年度） |
| | 教育長 | 小田幸一 | 清　郁雄 |
| | 社会教育課長 | 比江島武志 | 新名正坦 |
| | 同補佐 | 井下吉盛 | 小野　保 |
| | 同文化財担当 | 松原富美彦 | 有田辰美 |
| | 同庶務 | 児玉真由美 | |
| 調査員 | 近藤　協（宮崎県教育庁文化課）、（現宮崎県総合博物館） | | |
| 特別調査員 | 下條信行（愛媛大学教授）、中村　純〔花粉分析〕 | | |

4. 本書に掲載した挿図は、近藤の他、永峰まり子、杉尾肇子、杉尾愛恵、倉永和恵の諸氏が行いこれを作成した。
5. 本報告の執筆・編集は近藤が行った。



# 本　文　目　次


第Ⅰ章　序
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　遺跡の立地と環境 …… 2
　第3節　調査の概要 …… 5

第Ⅱ章　八幡上遺跡の調査
　第1節　調査の概要 …… 5
　第2節　縄文時代の遺構 …… 7
　　1. 集石遺構 …… 7
　　2. 弥生・古墳時代の遺構 …… 10
　　3. 竪穴住居出土遺物 …… 35
　　4. 土　壙 …… 47
　　5. 掘立柱建物 …… 50

第Ⅲ章　七又木遺跡
　第1節　調査の概要 …… 53
　第2節　遺構と遺物 …… 53
　　1. 集石遺構 …… 53
　　2. 一号円形周溝墓 …… 53
　　3. 一号円墳周溝 …… 61
　　4. 土　壙　墓 …… 61

第Ⅳ章　銀代ヶ迫遺跡
　第1節　調査の概要 …… 63
　第2節　先土器時代面の調査 …… 65
　　1. 遺　物 …… 66
　第3節　遺　構 …… 72
　　1. 竪穴住居 …… 72
　　2. 遺　物 …… 102

第Ⅴ章　ま　と　め …… 110
　附　花粉分析の結果 …… 120

# 挿　図　目　次


第1図　八幡上・七又木・銀代ヶ迫遺跡位置図 …… 1
第2図　八幡上・七又木・銀代ヶ迫遺跡発掘区位置図 …… 3・4
第3図　八幡上遺跡遺構分布図 …… 6
第4図　八幡上遺跡集石遺構実測図(1) …… 8
第5図　八幡上遺跡集石遺構実測図(2) …… 9
第6図　八幡上遺跡1号竪穴住居実測図 …… 10
第7図　八幡上遺跡2号竪穴住居実測図 …… 11
第8図　八幡上遺跡3号竪穴住居実測図 …… 12
第9図　八幡上遺跡4号竪穴住居実測図 …… 13
第10図　八幡上遺跡5号竪穴住居実測図 …… 14
第11図　八幡上遺跡6号竪穴住居実測図 …… 14
第12図　八幡上遺跡7号竪穴住居実測図 …… 14
第13図　八幡上遺跡9号竪穴住居実測図 …… 14
第14図　八幡上遺跡8号竪穴住居実測図 …… 15
第15図　八幡上遺跡10号竪穴住居実測図 …… 16
第16図　八幡上遺跡11号竪穴住居実測図 …… 17
第17図　八幡上遺跡12号竪穴住居実測図 …… 17
第18図　八幡上遺跡13号竪穴住居実測図 …… 17
第19図　八幡上遺跡1号竪穴住居出土遺物実測図 …… 22
第20図　八幡上遺跡2号竪穴住居出土遺物実測図 …… 23
第21図　八幡上遺跡3号竪穴住居出土遺物実測図(1) …… 24
第22図　八幡上遺跡3号竪穴住居出土遺物実測図(2) …… 25
第23図　八幡上遺跡3号竪穴住居出土遺物実測図(3) …… 26
第24図　八幡上遺跡3号竪穴住居出土遺物実測図(4) …… 27
第25図　八幡上遺跡3号竪穴住居出土遺物実測図(5) …… 28
第26図　八幡上遺跡3号竪穴住居出土遺物実測図(6) …… 28
第27図　八幡上遺跡4号竪穴住居出土遺物実測図 …… 29
第28図　八幡上遺跡6号竪穴住居出土遺物実測図 …… 29
第29図　八幡上遺跡8号竪穴住居出土遺物実測図 …… 30
第30図　八幡上遺跡9号竪穴住居出土遺物実測図 …… 30
第31図　八幡上遺跡10号竪穴住居出土遺物実測図 …… 31
第32図　八幡上遺跡11・12号竪穴住居出土遺物実測図 …… 32
第33図　八幡上遺跡12号竪穴住居出土遺物実測図 …… 33
第34図　八幡上遺跡13号竪穴住居出土遺物実測図 …… 34
第35図　八幡上遺跡3号竪穴住居出土土器分類図 …… 37・38
第36図　1・2・3・4・5・6号土壙実測図 …… 46

第37図　4号土壙出土弥生土器実測図 …… 48
第38図　8号土壙実測図 …… 49
第39図　1号・2号掘立柱建物実測図 …… 51
第40図　3号・4号掘立柱建物実測図 …… 52
第41図　七又木遺跡発掘区・遺構分布図 …… 54
第42図　七又木遺跡集石遺構実測図(1) …… 55
第43図　七又木遺跡集石遺構実測図(2) …… 56
第44図　七又木遺跡集石遺構実測図(3) …… 57
第45図　七又木遺跡出土縄文土器実測図 …… 59
第46図　七又木遺跡一号円形周溝墓実測図 …… 60
第47図　七又木遺跡一号円墳実測図 …… 60
第48図　七又木遺跡土壙実測図 …… 61
第49図　銀代ヶ迫遺跡遺構分布図 …… 64
第50図　銀代ヶ迫遺跡出土旧石器実測図 …… 65
第51図　銀代ヶ迫遺跡土層断面図 …… 65
第52図　銀代ヶ迫遺跡集石遺構実測図(1) …… 67
第53図　銀代ヶ迫遺跡集石遺構実測図(2) …… 68
第54図　銀代ヶ迫遺跡1号竪穴住居実測図 …… 69
第55図　銀代ヶ迫遺跡2号竪穴住居実測図 …… 69
第56図　銀代ヶ迫遺跡4・5号竪穴住居実測図 …… 70
第57図　銀代ヶ迫遺跡3号竪穴住居実測図 …… 70
第58図　銀代ヶ迫遺跡6号竪穴住居実測図 …… 70
第59図　銀代ヶ迫遺跡7号竪穴住居実測図 …… 71
第60図　銀代ヶ迫遺跡9号竪穴住居実測図 …… 71
第61図　銀代ヶ迫遺跡8号竪穴住居実測図 …… 73
第62図　銀代ヶ迫遺跡10号竪穴住居実測図 …… 74
第63図　銀代ヶ迫遺跡14号竪穴住居実測図 …… 74
第64図　銀代ヶ迫遺跡11号竪穴住居実測図 …… 75
第65図　銀代ヶ迫遺跡12号竪穴住居実測図 …… 75
第66図　銀代ヶ迫遺跡13号竪穴住居実測図 …… 76
第67図　銀代ヶ迫遺跡15号竪穴住居実測図 …… 77
第68図　銀代ヶ迫遺跡17号竪穴住居実測図 …… 78
第69図　銀代ヶ迫遺跡18号竪穴住居実測図 …… 78
第70図　銀代ヶ迫遺跡16号竪穴住居実測図 …… 79
第71図　銀代ヶ迫遺跡19号竪穴住居実測図 …… 79
第72図　銀代ヶ迫遺跡21号竪穴住居実測図 …… 80
第73図　銀代ヶ迫遺跡20号竪穴住居実測図 …… 81
第74図　銀代ヶ迫遺跡21号竪穴住居実測図 …… 81

第75図　銀代ヶ迫遺跡23号竪穴住居実測図 …… 82
第76図　銀代ヶ迫遺跡24号竪穴住居実測図 …… 83
第77図　銀代ヶ迫遺跡25号竪穴住居実測図 …… 84
第78図　銀代ヶ迫遺跡26号竪穴住居実測図 …… 84
第79図　銀代ヶ迫遺跡１号竪穴住居出土遺物実測図(1) …… 88
第80図　銀代ヶ迫遺跡１号竪穴住居出土遺物実測図(2) …… 89
第81図　銀代ヶ迫遺跡４・５号竪穴住居出土遺物実測図 …… 89
第82図　銀代ヶ迫遺跡８号竪穴住居出土遺物実測図 …… 90
第83図　銀代ヶ迫遺跡６号竪穴住居出土遺物実測図 …… 90
第84図　銀代ヶ迫遺跡７号竪穴住居出土遺物実測図 …… 90
第85図　銀代ヶ迫遺跡10号竪穴住居出土遺物実測図 …… 91
第86図　銀代ヶ迫遺跡11号竪穴住居出土遺物実測図 …… 92
第87図　銀代ヶ迫遺跡12号竪穴住居出土遺物実測図 …… 93
第88図　銀代ヶ迫遺跡９号竪穴住居出土遺物実測図 …… 93
第89図　銀代ヶ迫遺跡13号竪穴住居出土遺物実測図 …… 94
第90図　銀代ヶ迫遺跡14号竪穴住居出土遺物実測図 …… 94
第91図　銀代ヶ迫遺跡15号竪穴住居出土遺物実測図 …… 94
第92図　銀代ヶ迫遺跡15号竪穴住居出土遺物実測図(1) …… 95
第93図　銀代ヶ迫遺跡15号竪穴住居出土遺物実測図(2) …… 96
第94図　銀代ヶ迫遺跡17号竪穴住居出土遺物実測図 …… 97
第95図　銀代ヶ迫遺跡18号竪穴住居出土遺物実測図 …… 97
第96図　銀代ヶ迫遺跡19号竪穴住居出土遺物実測図 …… 98
第97図　銀代ヶ迫遺跡21号竪穴住居出土遺物実測図 …… 98
第98図　銀代ヶ迫遺跡20号竪穴住居出土遺物実測図 …… 98
第99図　銀代ヶ迫遺跡22号竪穴住居出土遺物実測図 …… 98
第100図　銀代ヶ迫遺跡24号竪穴住居出土遺物実測図(1) …… 99
第101図　銀代ヶ迫遺跡24号竪穴住居出土遺物実測図(2) …… 100
第102図　銀代ヶ迫遺跡24号竪穴住居出土遺物実測図(3) …… 101
第103図　銀代ヶ迫遺跡26号竪穴住居出土遺物実測図 …… 101
第104図　八幡上遺跡検出の住居址群（弥生中期～古墳前期） …… 111
第105図　Ⅰ期（弥生中期末） …… 111
第106図　Ⅱ期（弥生後期初頭） …… 112
第107図　Ⅲ期（弥生後期前半） …… 112
第108図　Ⅳ期（弥生後期中葉） …… 113
第109図　Ⅴ期（古墳前期） …… 113
第110図　銀代ヶ迫遺跡検出の住居址群（弥生後期中葉～古墳前半） …… 115
第111図　Ⅰ群 …… 115
第112図　Ⅱ群 …… 116
第113図　Ⅲ群（古墳時代前半に相当する一群） …… 116
第114図　弥生土器（甕）の分類 …… 118

# 第１章　　序

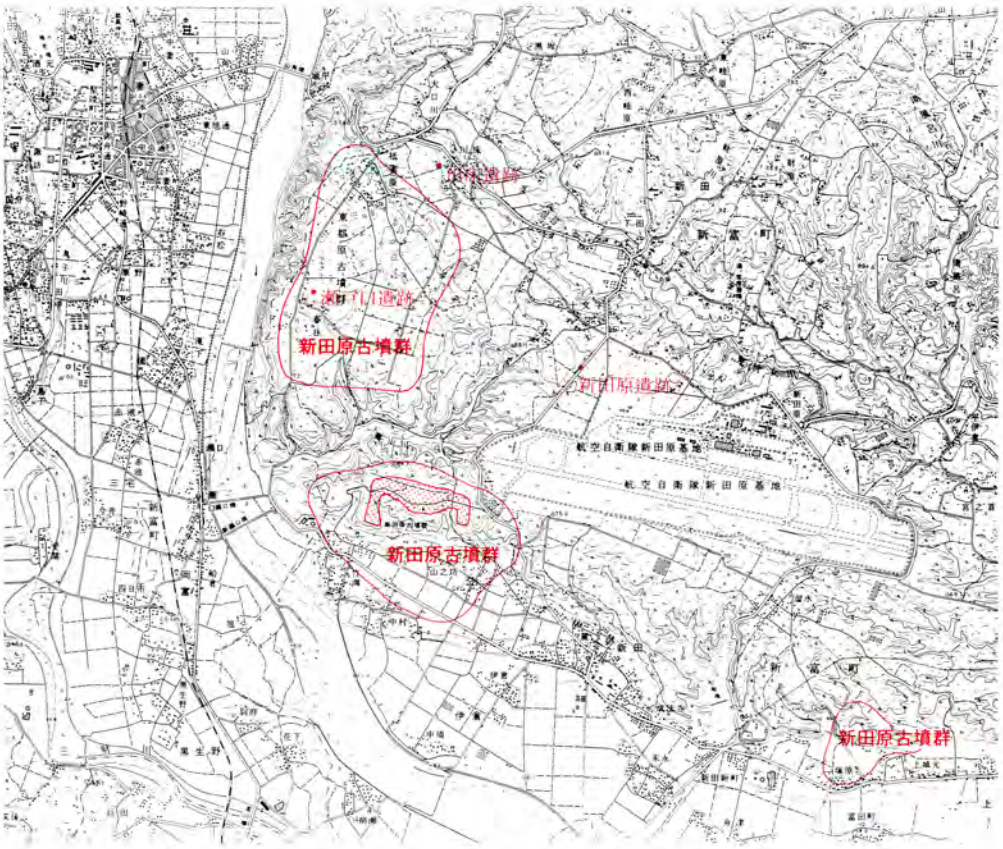
## 第１節　調査に至る経緯

新富町では昭和48年より県営農村基盤総合整備パイロット事業が進められており、昭和63年度は七又木工区16haの工事が施行された。

この地区は、昭和56年新富町教育委員会が行った遺跡詳細分布調査により、遺跡の存在が確認されており、国指定史跡新田原古墳群の一角でもある。

工事に先立ち６月に試掘調査を実施した結果、7.5haを調査対象として宮崎県一ッ瀬土地改良事業所と事前に協議を重ね、古墳は現状のままとし、事業施行上保存が困難な個所については記録保存の措置をとるため発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、昭和63年８月より平成元年２月まで行った。




**第１図　八幡上・七又木・銀代ヶ迫遺跡位置図**

## 第2節　遺跡の立地と環境

宮崎県のほぼ中央部を流れる一ッ瀬川と小丸川に挟まれた洪積台地は、宮崎平野に発達する段丘地形のなかでも顕著に発達したもので、標高の高いほうから茶臼原面(Ⅶ面－標高120m級)、三財原面（Ⅵ面－標高90m級)、新田原面（Ⅴ面－標高70m級）と呼称される。本遺跡の位置する新田原（にゅうたばる）は、一ッ瀬川下流左岸にあって、北は鬼付女川を隔てて三財原に接し、西は急崖となって一ッ瀬川を眺み、南は一ッ瀬川の形成した沖積平野に接する。また、新田原台地は、日置川水系、鬼付女川水系、藤山川水系による開析が進み、複雑な谷状地形を形成して断片化しつつある。

七又木地区遺跡は、このような一ッ瀬川下流左岸台地（新田原面）の最西端にあたり、新富町大字新田八幡上、七又木、銀代ヶ迫に所在する。この地区は北に流れる藤山川の開析分断によって、あたかも一ッ瀬川に向かって延びる舌状の丘陵様を呈している。なお、当地区は航空自衛隊第五航空団新田原基地の滑走路西端に連続する位置にあたる。

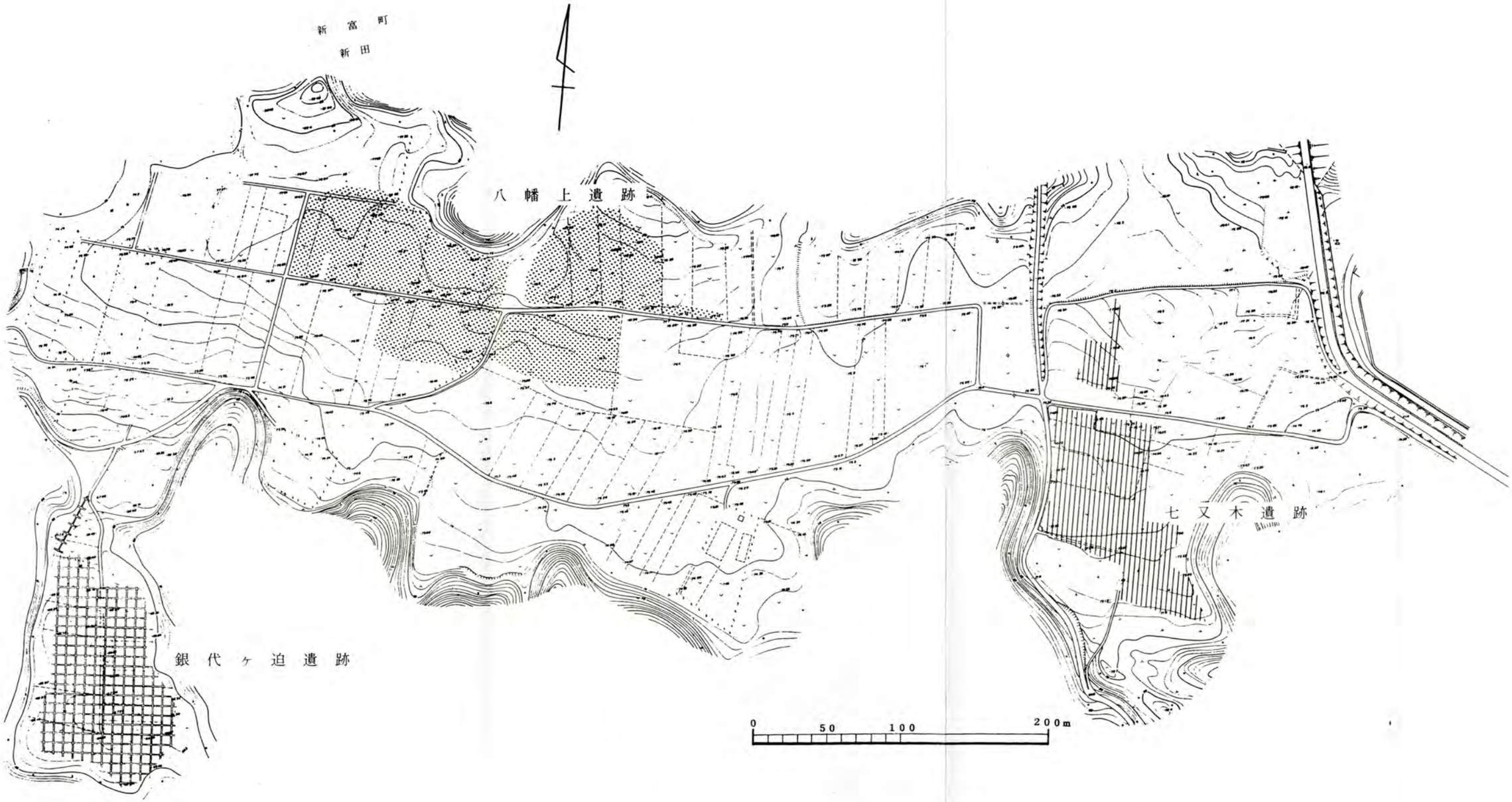
また、海岸部に眼を移すと一ッ瀬川の河口付近には南北に延びる四列からなる砂丘列があり、その第4砂丘列上には弥生前期の板付Ⅱ式の壺形土器が出土した日置字今別府にある今別府遺跡があり、県内でも最も早く弥生時代の到来した先進地である。

これらの砂丘列上は弥生前期から古墳時代にかけての遺跡の宝庫でもあり、大淀川河口に展開する橲遺跡や石上遺跡とおなじような立地、環境にあるものとおもわれ、近辺の後背地を生活の基盤とする集落が考えられる。

弥生時代も中期になると沖積地に面した低丘陵地に点々と集落が営まれるようになる。この時期の代表的遺跡である鐙遺跡では、全掘はおこなわれてはいないものの県内初のＶ字溝が発見されている。また、薗田遺跡にほど近い低地面には自然丘陵を改変して整形された本県最古の古墳である下屋敷1号墳が立地している。

今回発掘した遺跡から最寄りの遺跡には、本遺跡から北東1.6kmにあって藤山川の解析谷を眺む台地上にのり、花弁状住居を検出した新田原遺跡や、2.5km北には周溝墓・土壙墓が200基余り検出されて注目された川床遺跡がある。また、本遺跡一帯は国指定史跡新田原古墳群の分布域内にあたっている。

「新富町の文化財」遺跡詳細分布調査報告書　新富町教育委員会　1982
「新田原遺跡・瀬戸口遺跡・蔵園地下式横穴墓」新富町文化財調査報告書 第4集 新富町教育委員会 1986
「川床遺跡」　新富町文化財調査報告書 第5集 新富町教育委員会 1986




第2図　八幡上・七又木・銀代ヶ迫遺跡発掘区位置図

### 第３節　調査の概要

七又木地区遺跡においては、昭和63年２月、６月の二次にわたる宮崎県文化課による試掘調査の結果、概ね三ヶ所の主要な遺構・遺物の分布域を確認していた。本調査にあたっては、作付が急がれる対象区中央部（A区・八幡上遺跡）から調査に着手し、順次、A区につづく台地上にあって東側端にあたる調査区（B区・七又木遺跡)、つづいて、約10m下位にあたる舌状に張り出した台地（C区・銀代ヶ迫遺跡）の順で調査を実施した。

## 第Ⅱ章　八幡上遺跡の調査

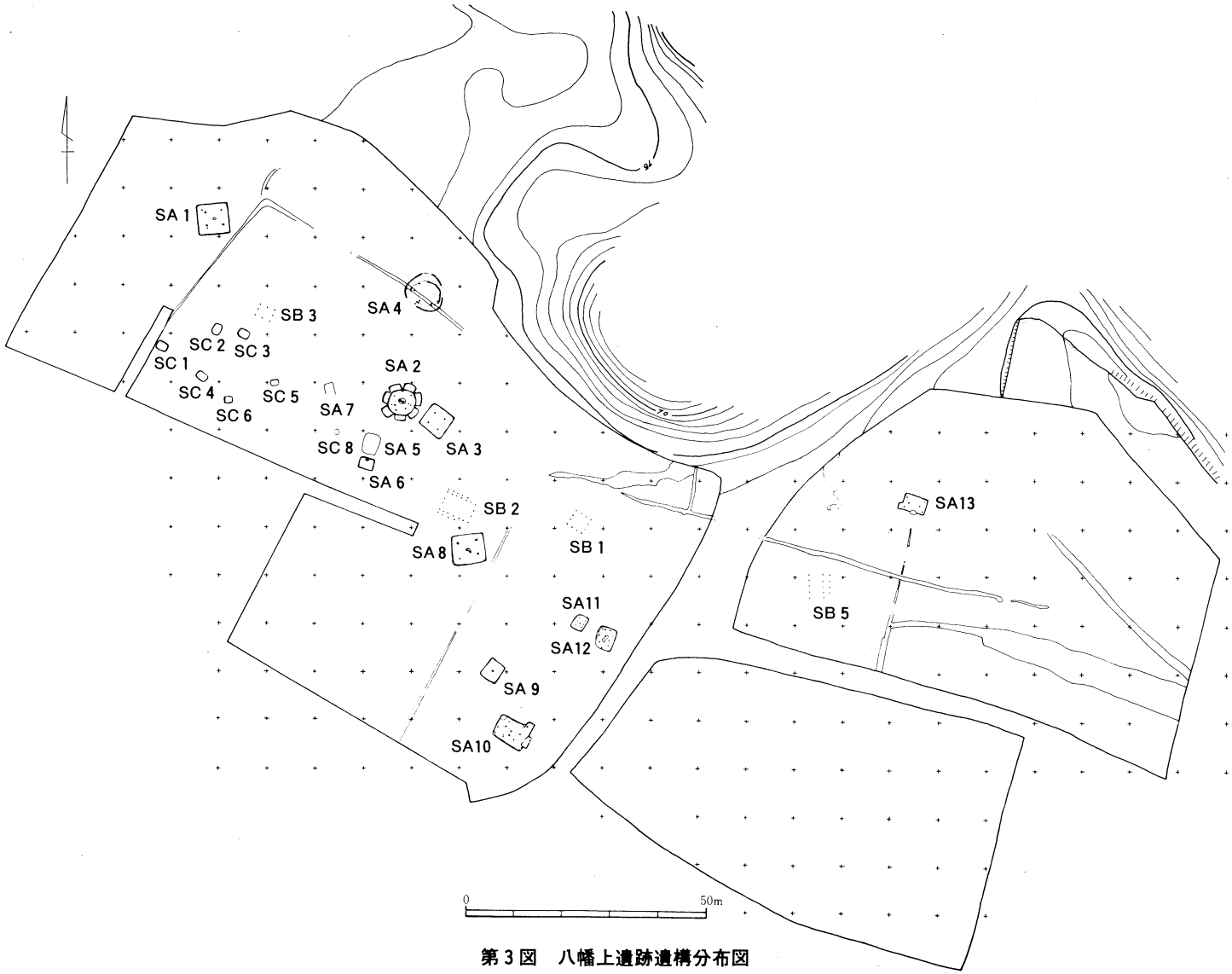
### 第１節　調査の概要

東西に長く延びている台地上の中央西側寄りの一角にあって、北縁は藤山川によって形成された深い開析谷に接する発掘区である。調査区は、上記の開析谷の一部が半円形状に侵入してできた谷地形の湧水地を基点とするかたちで東西250m、南北90mの約18,900㎡にわたって設定した。

赤ホヤ火山灰層上面において検出された遺構には、竪穴住居13軒、掘立柱建物５棟、土壙８基、溝状遺構、その他がある。竪穴住居跡は発掘区の中央から西側を中心にそれぞれ固有の住居プランをもってやや散慢に分布する傾向をみせている。

このうち弥生時代にあたると考えられる竪穴住居は８軒あって、その住居プランは独自の形状をもつものがあり、古墳時代の規格化された方形プランにないバリエーションを展開する。その内訳は、不整円形プランとなるもの（SA４)、円形プランの縁辺にそって方形の張り出し区画をもって花弁状を呈するもの、(SA２)、小型の方形・長方形プランとなるもの（SA６．９．11．12)、長方形プランに張り出し区画を一ヶ所あるいは二ヶ所設けるもの（SA10・SA13）などがある。住居の規模は、その住居面積において、最大45.92㎡（SA２）から最小6.52㎡（SA６）までとばらつきがあって、円形、花弁状あるいは、方形＋張り出し区画を有するものが大型で、方形・長方形プランのものは、それよりかなり懸け離れて小規模であるという傾向がみられ、いわゆる標準型を指摘するのに躊われる。小規模な住居は、あるいは、例えば11・12号竪穴住居にみるように他の住居とはやや異なった性格を有していた可能性があり、11・12号竪穴住居においては、他の住居においては出土しなかった大型の甕片が顕著にみられ、焼土面も検出していないという特徴をみいだすことができる。

古墳時代の住居跡は、遺構面が浅く上面削平の著しかった５号・７号住居を除き、いずれも、規格性の高い方形四主柱型式の竪穴住居（SA１．３．８）が良好な遺存状態で検出されている。




第３図　八幡上遺跡遺構分布図

## 第2節　縄文時代の遺構

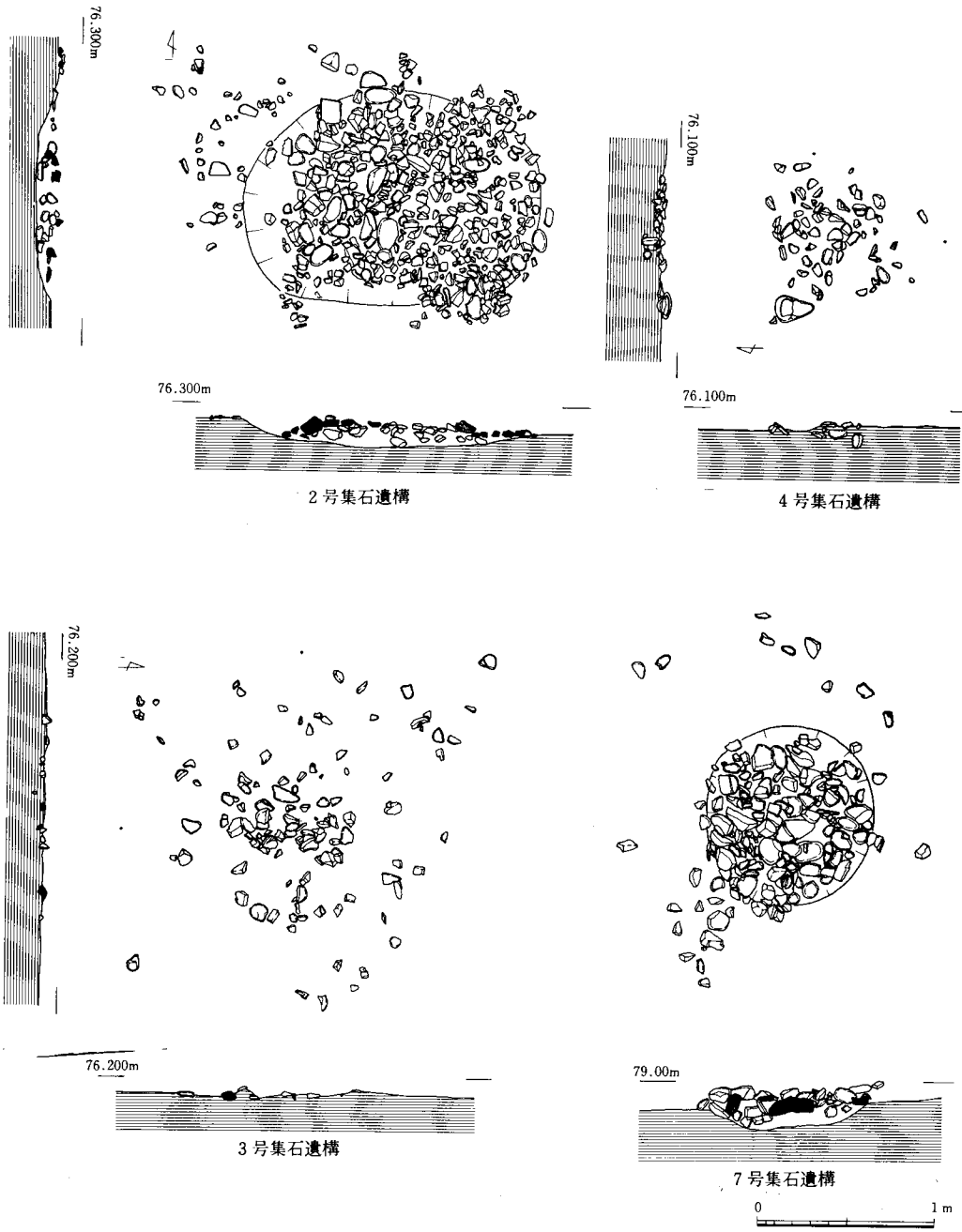
### 1.　集石遺構

本遺跡における縄文時代の遺構は、焼礫の散布と、その範囲域に点在する焼礫集積の遺構、いわゆる集石遺構に限られる。散礫の範囲は、例外的に小域にとどまっており、F12、G12、H12、G13、I13区を中心とする約400㎡の範囲内であり、焼礫自体も、比較的疎な散石状態を示していた。6号、7号の位置する周辺では散礫がみとめられず、ほとんど他の集石群から孤立している状態にみえるが、この二基はむしろさらに東側に営まれたと考えられる（すでに削平されている）集石遺構群の周辺に位置していたものと、とらえたい。いずれにせよ、本遺跡における集石遺構の立地は、すぐ北側にある開析谷の湧水点の近辺、台地端縁辺に営まれており、典型的な立地条件を備えている。

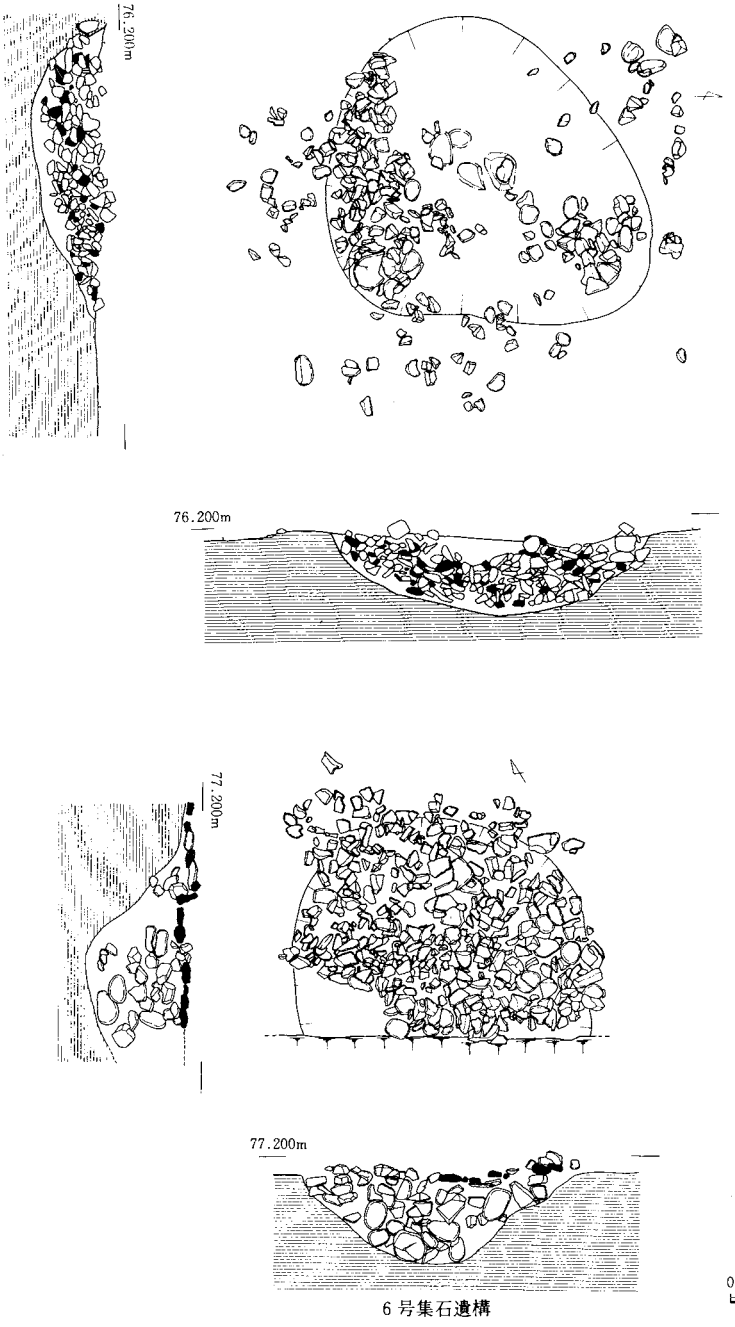
調査区内で7基を検出しており、うち3基が集石下に掘込みをもたず面的に集積するものである。遺物は、周辺の散礫範囲内から押型文土器の小片、黒曜石チップ、チャート製チップが出土している。

表1　八幡上遺跡検出集石遺構計測表

| 号 | 検出地区 | 遺構規模（長径×短径×深さ）cm | 掘込みの有無 | 床面配石の有無 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| SI.1 | G12 | 120×110×（－） | 無 | 無 | 平面に集積されるタイプである。礫は比較的大で密に集石する。 |
| SI.2 | G12 | 170×160×16 | 有（楕円） | 無 | 浅い掘込みをもつ。拳大の礫他、小破砕礫も多い。 |
| SI.3 | H12 | 150×150×（－） | 無 | 無 | 礫は、かなり疎な状態で散石する。 |
| SI.4 | H12 | 90×80×（－） | 無 | 無 | 礫の点数自体が少なく疎に集石する。 |
| SI.5 | H13 | 160×150×35～40 | 有（不定楕円） | 無 | 掘り込みが深く、小礫がびっしりつまっている。 |
| SI.6 | L23 | 160×(120＋α)×50 | 有（円） | － | 配石は無いが、底ちかくに人頭大の大礫が組込まれている。底付近の埋土は黒褐色で、炭化粒を含む。 |
| SI.7 | J26 | 100×100×20～25 | 有（円） | 無 | 約1mの範囲に密に集石し、礫は比較的大。 |

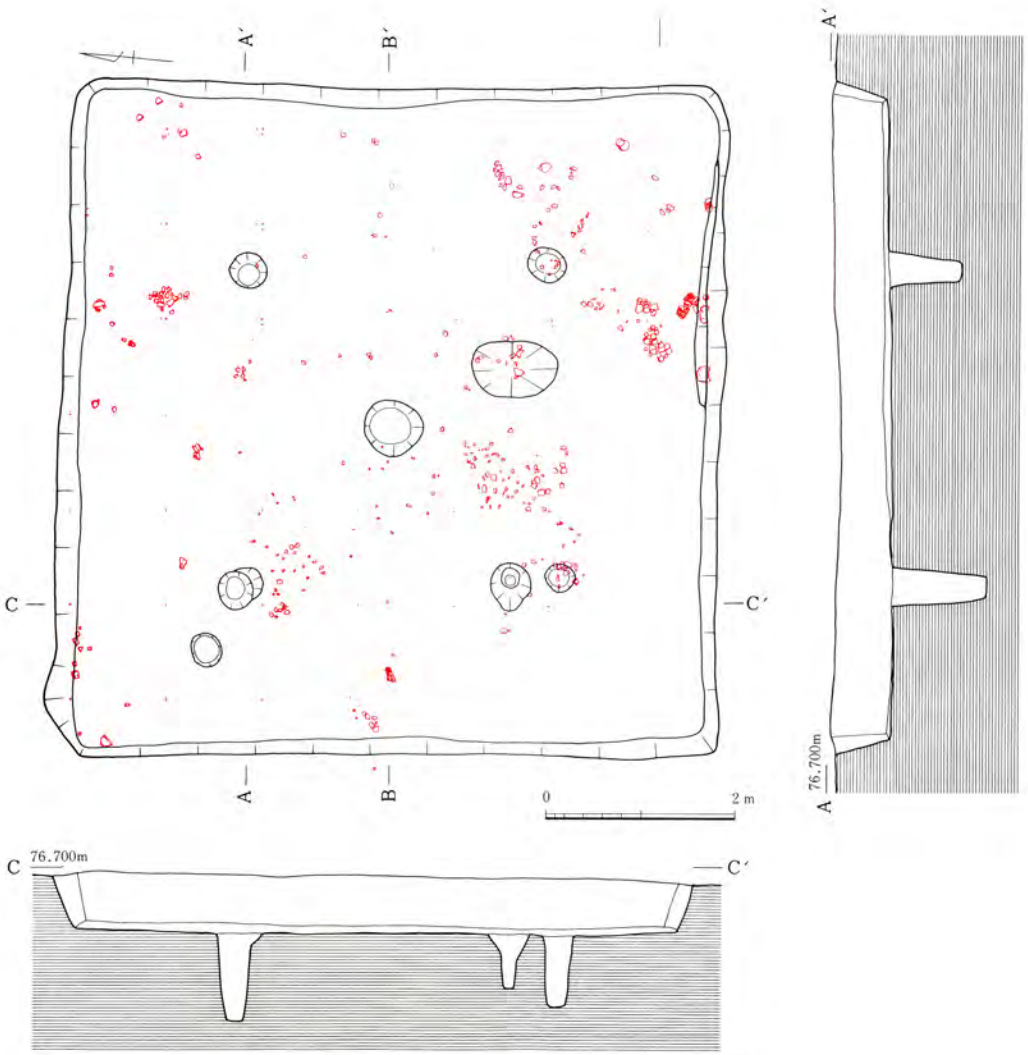



**第4図　八幡上遺跡集石遺構実測図(1)(1/40)**




6 号集石遺構

**第 5 図　八幡上遺跡集石遺構実測図(2)( 1/40)**

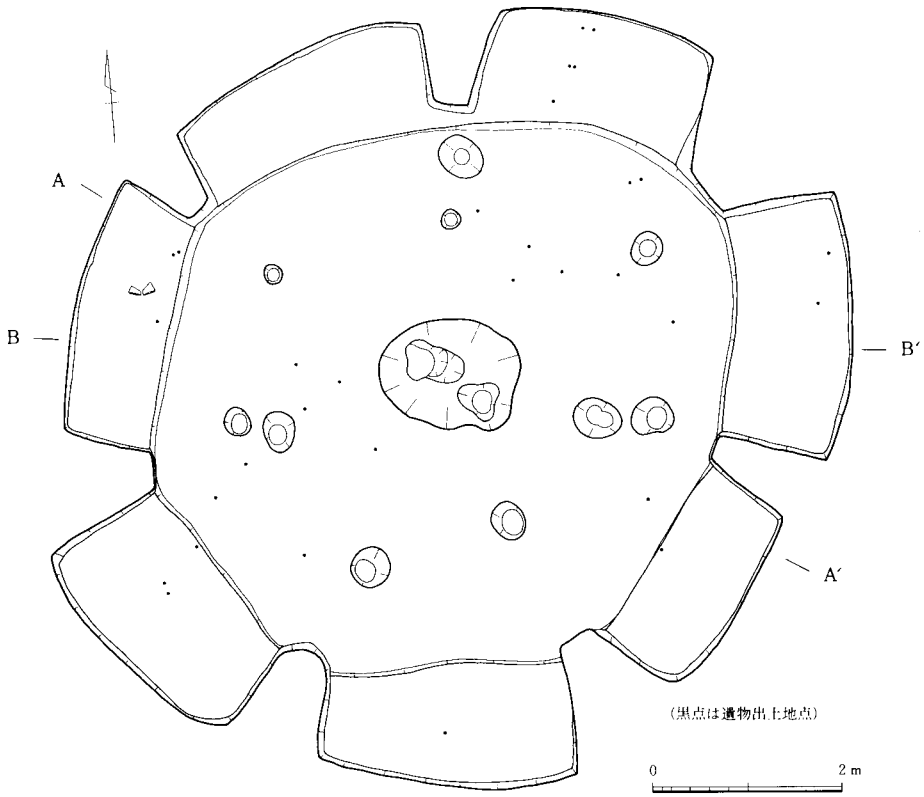


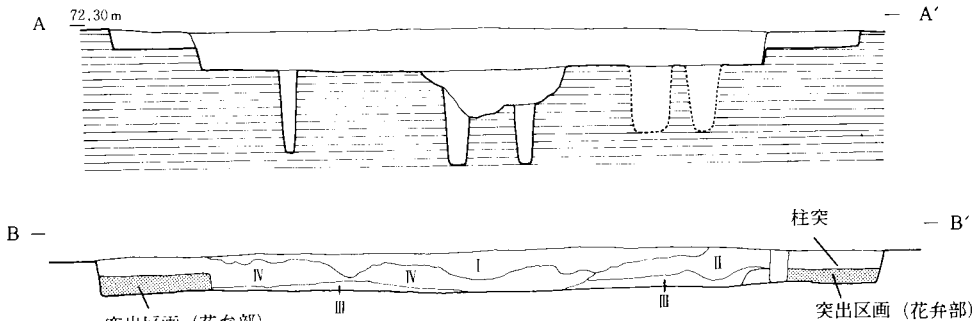

第６図　八幡上遺跡１号竪穴住居実測図（1/80）

## 2.　弥生・古墳時代の遺構

### １号竪穴住居（第６図）

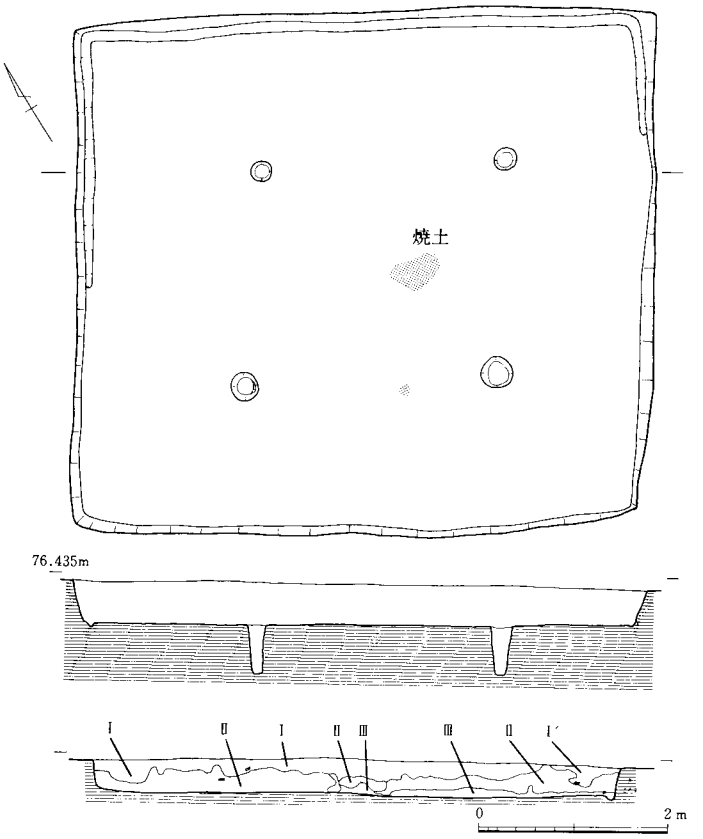
Ａ区北端で検出した南北辺6.6m、東西6.9mの方形住居でＡ区内で最大規模を有する。最寄の住居は南東方向40mにある４号住居跡であるが、ほぼ同時期と考えられる３号住居跡は85m離れている。遺構検出面から床面までは平均53㎝程あり遺存状態は良好といえるもので、覆土は自然に埋没した状況を示していた。主柱穴はＰ１～Ｐ４を想定することができ壁面と並行して設けられている。Ｐ１～Ｐ２間は3.3m、Ｐ２～Ｐ４間は3.1m、Ｐ４～Ｐ３間は3.3m、Ｐ３～Ｐ１間は3.4mを計測する。Ｐ１～Ｐ４の平均の深さは78㎝である。Ｐ１～Ｐ４主柱穴の中央に直径60㎝、深さ80㎝の円形掘り込みＰ５を有する。本住居跡は、先述の




Ⅰ　漆黒土（やや粘性、堅くしまる）
Ⅱ　黒褐色土（堅くしまる、灰褐色の雲状ブロックが混る）
Ⅲ　褐色土（堅くしまる、やや粘性がある）
Ⅳ　黒褐色土（Ⅱ層に似ているがやや明るい）
突出区画　混赤ホヤブロック、粒状斑

**第７図　八幡上遺跡２号竪穴住居実測図（1/80）**




Ⅰ　灰褐色土　攪乱土、黒褐色土がラミナ状に入る。かたくしまる、土器片を含む。
Ⅰ′　灰褐色土　赤ホヤブロックが多く混る。
Ⅱ　褐色土　粒子こまかく均一、やや、やわらかい。
Ⅲ　褐色土　Ⅱ層より明るい。ブロック状のかたまりが入る。かたくしまっている。

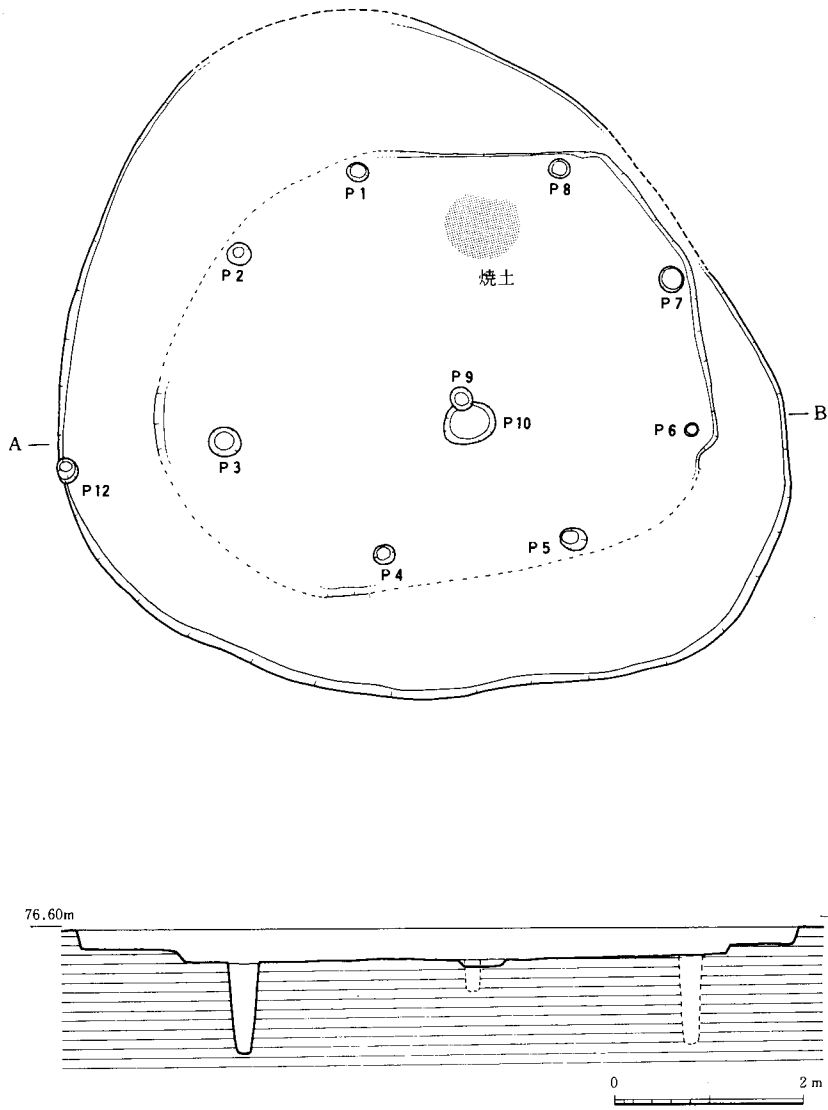
**第8図　八幡上遺跡3号竪穴住居実測図(1/80)**

値を得るような大形の住居跡であるために、Ｐ５は中央主柱穴の可能性が大であるとおもわれる。南面において幅７cm、深さ５cmの壁帯溝を検出しているが、全周した形では検出されていない。

**２号竪穴住居（第７図）**

Ｇ９区にあり、SA３に極めて隣接する。ほぼ同時期にあたるSA４からは南に24mのところにある全直径8.3m、内円中心径5.6mの花弁状の住居である。不整円形プランを基調として、円周外縁にそって長方形の突出した区画を７ヶ所設ける。各区画間は内円に向かって突きだす台形の壁状を呈する。

内部の円形部を外周する長方形区画（Pr１～７）は、内中心部より16～24cm高く造られているが、この部分の床は内円中心部床面まで一担掘り下げた後に、新たに盛り貼られたものである。

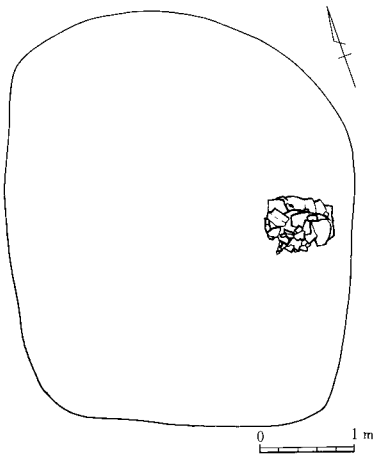



**第9図　八幡上遺跡4号竪穴住居実測図(1/80)**

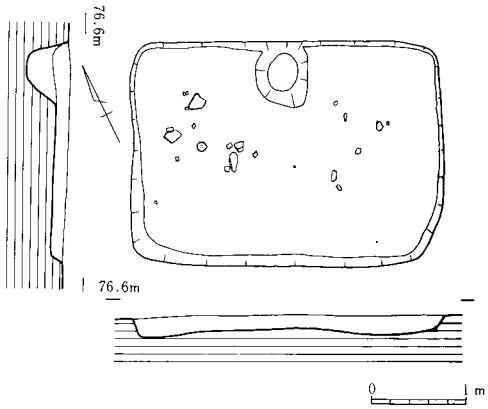
長方形区画（花弁部）の面積は、小さいもので1.96㎡、大きなもので2.96㎡、平均2.56㎡の値をとっており、長辺2.5m、短辺1.2mというところがその平均的規模である。Pr3では、その床面上に砥石（2点に折損）が出土し、その対面する内円区画付近では石鏃とその剝片が多く出土している。

内円中心区画の外周に沿って、また先の台形壁に対応する形で柱穴が巡っている。掘り方は直径20～35cmの円形、楕円形を呈し深さはP1－93cm、P2－89cm、P3－78cm、P4－68cm、P5－80cm、P6－79cm、P7－79cm、P8－73cm、P9－72cm、P10－70cmを計測する。

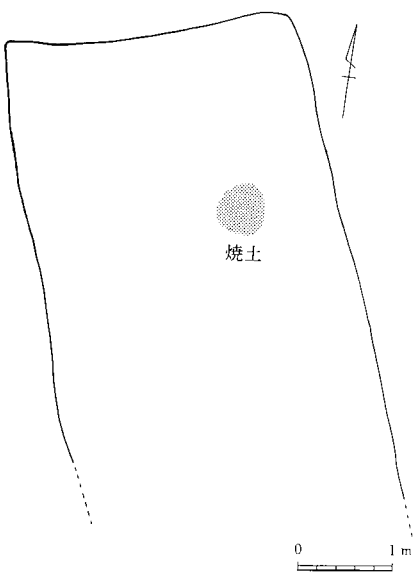
内円区画の中心部に不整楕円形（1.2m×1.5m）の掘り込みがあり、その掘り込みの中に



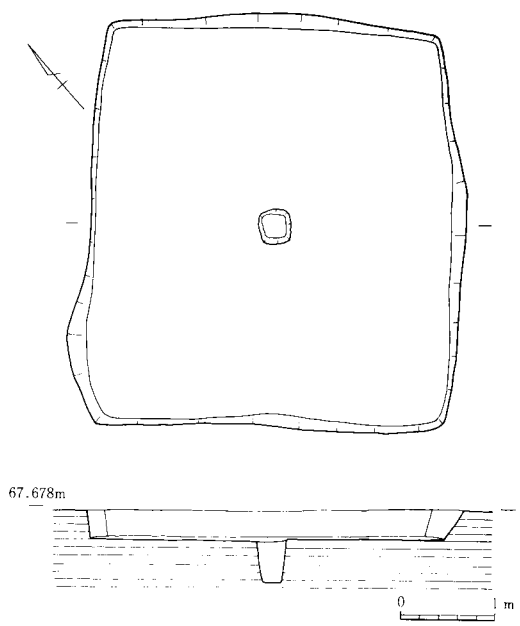

第10図　八幡上遺跡 5 号竪穴住居実測図 ( 1/80)



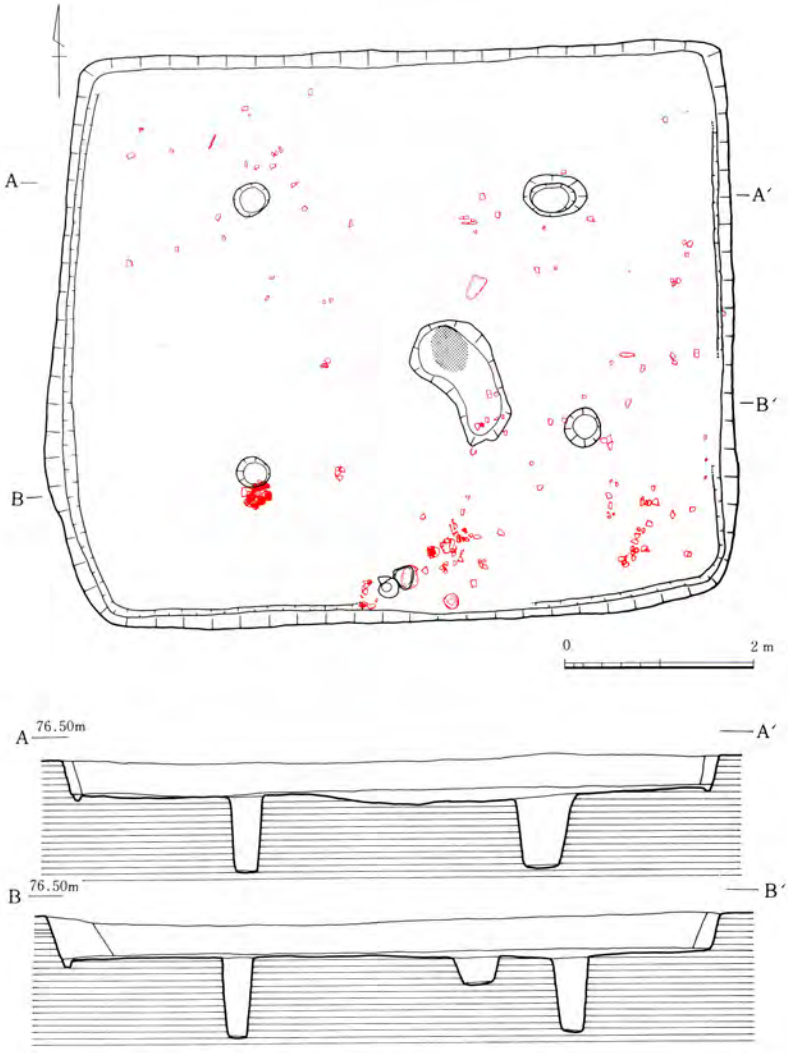

第11図　八幡上遺跡 6 号竪穴住居実測図 ( 1/80)




第12図　八幡上遺跡 7 号竪穴住居実測図 ( 1/80)




第13図　八幡上遺跡 9 号竪穴住居実測図 ( 1/80)

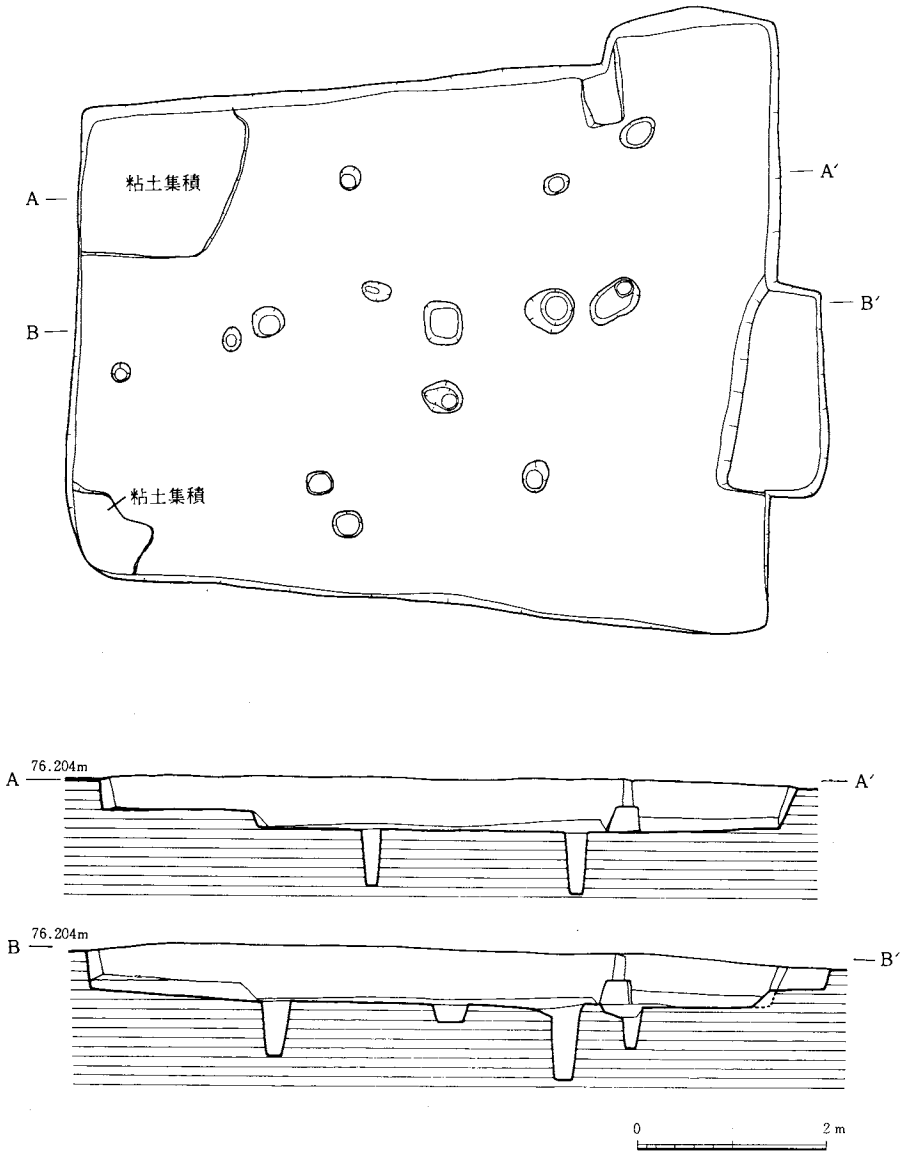



**第14図　八幡上遺跡８号竪穴住居実測図（1/80）**

２つ並んで、掘り方隅丸三角形の深さそれぞれ85㎝の中央柱穴をみる。２号住居跡はいわゆる花弁状住居跡としては、その規模、規格(柱穴の配列等)とも典型的なものと考えられる。

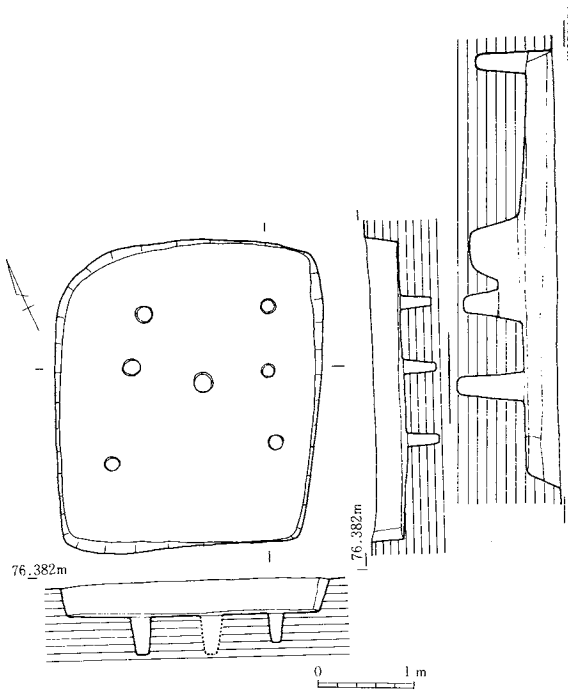
３号竪穴住居（第８図）

２号住居跡（花弁状住居）の東に極めて近接して検出された方形住居でＧ10区に位置する。南北辺5.4m、東西6.1mの床面規模を有する。壁高は38㎝を計測し、良好な残存状態といえる。北・西辺に幅10㎝、深さ４㎝の壁帯溝を検出するが、他の各辺では不明瞭であった。直径20～30㎝の四つの柱穴が、住居の対角線上に配置される。各柱穴間隔はＰ１～Ｐ２

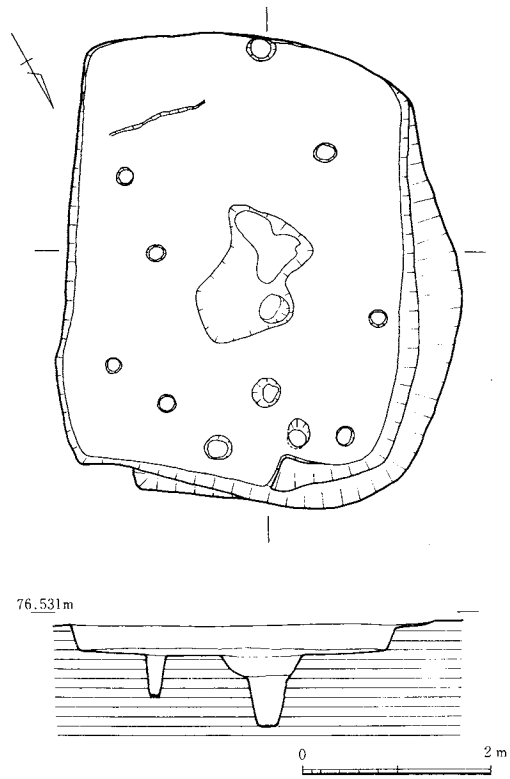



**第15図　八幡上遺跡10号竪穴住居実測図(1/80)**

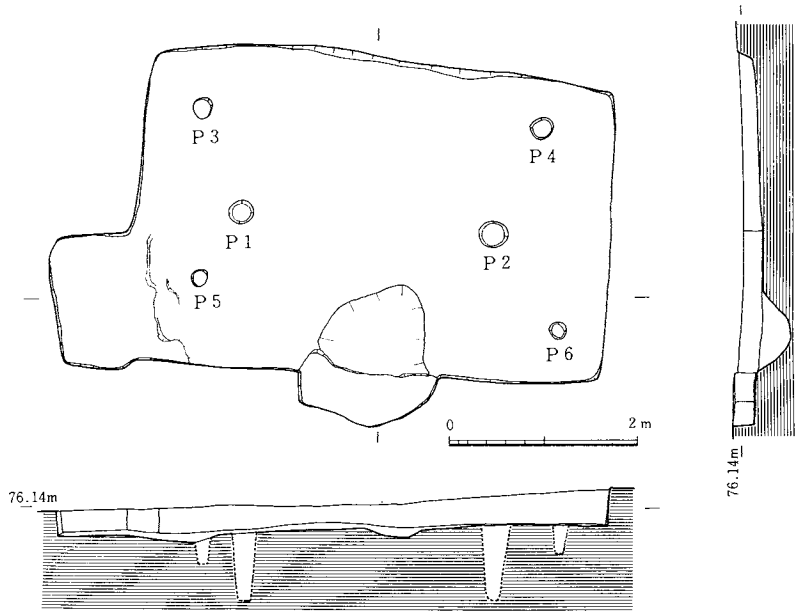
間で2.55m、P2～P4間で2.4m、P4～P3間で2.6m、P3～P1間で2.3mあり、床面の長辺、短辺の比率とほぼ同じ値を示す。柱穴の深さは51～59cmとなりこれも平均している。四つの柱穴の中心からやや東寄りに30cm×45cmの範囲で、P3とP4間に10cm×10cmの




第16図　八幡上遺跡11号竪穴住居実測図(1/80)




第17図　八幡上遺跡12号竪穴住居実測図(1/80)




第18図　八幡上遺跡13号竪穴住居実測図(1/80)

範囲で厚さ約３㎝の焼土塊および焼土面が認められた。

遺物は、住居埋土の中層から床面ちかくまで土器の大破片、細片が多く認められている。

**４号竪穴住居（第９図）**

Ｅ10区に位置し、北端の谷部（湧水地点）に最も近接した地点にある。溝状遺構（SEI）が東西に横ぎり、南北方向は試掘時のトレンチが入る。また、住居址の北東側四分の一の上層が攪乱されているため、遺構検出時点ではその部分の遺構輪郭は確認できていない。

住居プランは隅丸の三角形と表現すべき不整円形である。南北直径7.3m、東西のそれは7.7mを計測する。住居の中心区画は８本の柱穴に沿って一段落ち込んでいる。すなわち外縁部と内部中心区画面との比高は11～13㎝と比較的小さな段差である。南西の壁面は検出面からの壁高がよく残っているところで、その地点の高さ（外縁部と比高）は、検出面より30㎝強を計測する。内部中心区画の形状は中心柱穴に沿って円形に巡るかとおもえるが、東側の隅は角度をもつので不整な多角形状を呈するかとおもわれる。

内部中心区画の縁部隅に等間隔８箇所検出された柱穴はそれぞれ円形の掘り方を有し、直径20～30㎝、深さはそれぞれＰ１－99㎝、Ｐ２－103㎝、Ｐ３－48㎝、Ｐ４－79㎝、Ｐ５－69㎝、Ｐ６－56㎝、Ｐ７－96㎝、Ｐ８－103㎝である。中心区画の中央よりやや南東寄りには楕円形（45㎝×50㎝）の浅いＰ10と径25㎝、深さ36㎝のＰ９がある。Ｐ10の埋土中からは炭化粒を多く確認しているが、焼土は混らない。焼土面は中心区画の北東隅近くに55㎝×80㎝の範囲で検出している。

完形に近く復元できる大破片の土器は数少なく、小破片が多い。これらはまた内部中心区画内、そのなかでも南東隅部に比較的多く集中する傾向にある。焼土面のそばで出土した磨製石剣と小型両刃石斧は床面の直上から出土している。

**５号竪穴住居（第10図）**

花弁状住居（２号住居）と６号住居の二つの弥生住居に挟まれた古墳時代の住居である。５号住居は赤ホヤ火山灰上面の検出面において、かろうじて住居床面の輪郭が検出されたにとどまり、壁高、および主柱穴も確認できていない。住居プランも埋土不鮮明のために不確実であるが、南北辺4.4m、東西辺3.7mを測り、不整隅丸方形状を呈していたものと考えられる。長辺の東縁に、ほぼ完全に復元しえる甕一個体分が出土している。

**６号竪穴住居（第11図）**

Ｈ９にあり、５号住居跡に近接する。検出面から床面までの高さ平均20㎝程で、上部の遺存状態は良いほうではない。黒褐色の堅くしまったほとんど分層できない土を埋土としてお

り、礫片と甕の比較的大きな破片を床面ちかくより検出した。長辺3.25m×短辺2.35mの長方形プランを呈する小規模な住居跡である。焼土、柱穴等は床面では検出されていない。

7号竪穴住居（第12図）

最寄りの古墳時代住居である5号住居から、北西約12m離れた位置にある。これも5号住居同様、床面の輪郭がかろうじて確認できたのみで、住居壁は検出し得なかった。南北辺5.4m＋α、東西辺3.3mを計測する長方形プランである。焼土面は、住居中央よりやや北寄りに径約50cmの円形状で検出している。タタキ調整のある甕片の出土から、古墳期の住居とした。

8号竪穴住居（第14図）

同時代（古墳期）にあたる3号住居の南28mに位置する。規模は東西辺6.9m、南北辺6.1m。検出面から床面までの壁高35cm～40cm。住居址床面内に四ヶ所の主柱穴を正方形に配置し、P1～P2間で3.2m、P2～P3間で2.5m、P3～P4間で3.5m、P4～P1間で2.9mの距離を測り、それぞれの掘り方は径35cm平均の円形（P2のみ楕円形掘方）で、深さは床面よりP1－82cm、P2－76cm、P3－86cm、P4－77cmをそれぞれ計測する。

四ヶ所の主柱穴のほぼ中心部に径約40cm、深さ5.0cmの焼土面の広がりがあるが、それはまた南に向かって広がる不整楕円状の浅い掘込みにともなって確認されたものである。

また、北面壁をのぞく他の壁において、深さ約6cm、幅約10cmの壁帯溝が巡っている。

9号竪穴住居（第13図）

L11区にあって、同時期の住居址、10号、11号、12号が近くにある。4.0m×4.3m×0.3m（深さ）とほぼ正方形プランをもつ住居である。住居址埋土は、黒褐色のひじょうに堅い性質のものでこれ一層を埋土とするものであった。主柱穴は、住居中心に一個のみの検出であった。掘方は隅丸方形状で、深さは45cmを計測する。

10号竪穴住居（第15図）

N12区に位置する。長方形プランを意図しながら、住居址東端辺の北側隅と、東側に長方形の突出した区画を有し住居址の西辺4.8m、東辺6m、南・北辺7.5mを測る台形状の変形住居である。北東隅部の張り出した区画は、長さ1.8m、幅60cmにわたるものでこの区画の西側辺には、住居内部に向かって突き出す長さ60cm、幅40cm、高さ30cmの掘り残して造りだされた壁状の施設がある。また、この区画と住居中心部との床面の高さはほとんど同じである。西側辺の南よりになる突出した区画は長さ2.2m、幅1.0mあって、住居中心部より約22cm高くつくられた段となる。この部分は地山を掘りこんで造られている。

住居址西辺の北東隅部と南西隅部には灰白色土が貼られており、床面中央部レベルより約17cm高まった段を形成する。北東隅のそれは1.8m×1.5mの範囲、南西部隅のそれは80cm×80cmの不定形の範囲に広がる。灰白色土は粘性のあるこまかなシルト質で、乾燥すると灰白色でサラサラしている。

11号竪穴住居（第16図）

12号住居址に極めて隣接する小型の住居である。隅丸方形のプランで南北3.4m、東西2.6mを計測する。壁高は赤ホヤ土面の検出面から平均30cmである。柱穴は長軸両辺にそってやや不揃いであるが3対あり、円形の掘り方は直径25cm程度、深さは32cm程度、深さは32cm～39cmを測るもので、ほぼ中心に直径35cm、深さ40cmのやや大きな柱穴がみられる。住居面積に比較して、柱穴の数が多いのが特徴といえる。

12号竪穴住居（第17図）

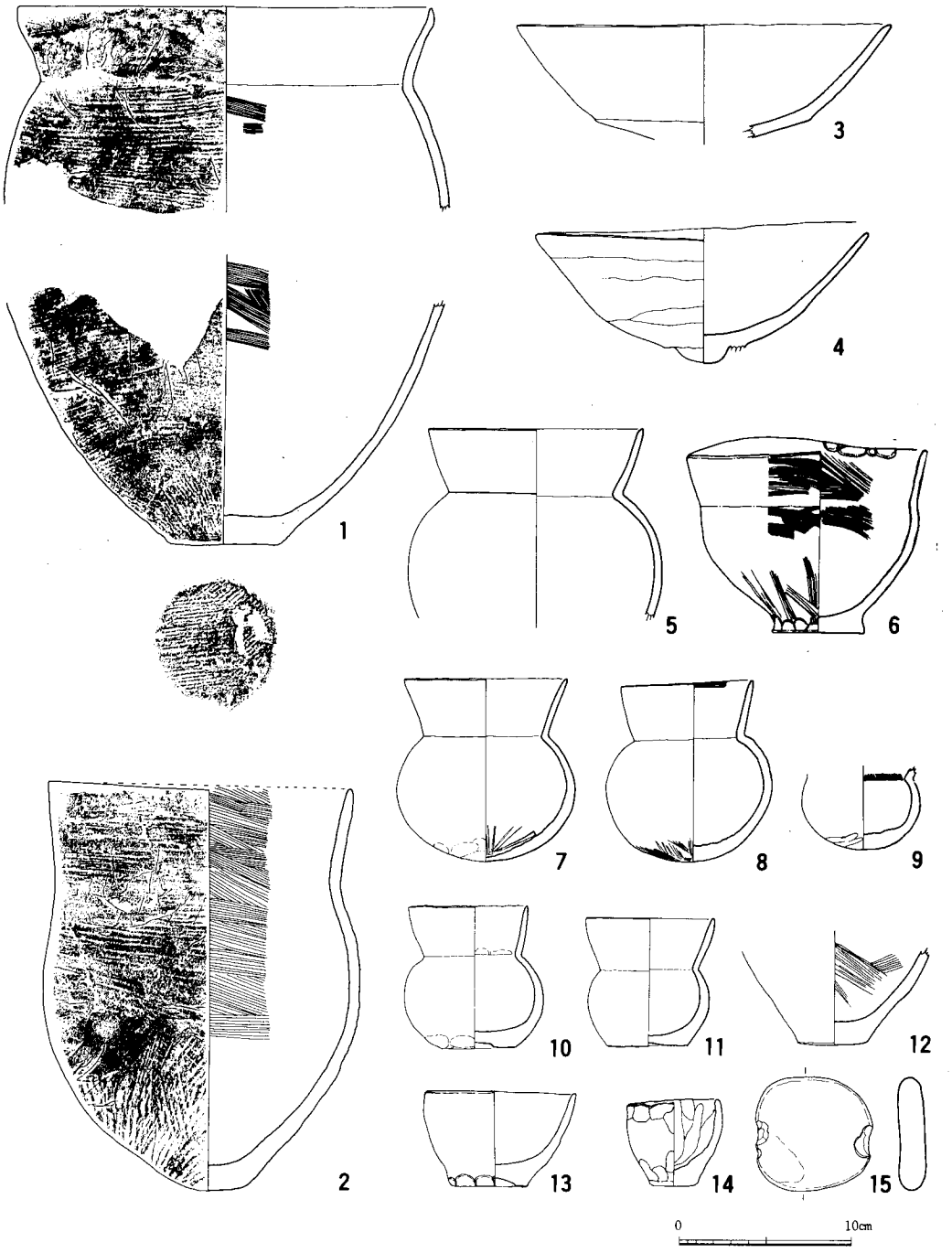
11号住居のすぐ東隣に近接し、11号住居と時期を同じくする。南北4.9m、東西4.1m、壁高（東側22cm、西側33cm）のやや正方形にちかい隅丸方形状の住居である。長辺の北隅の段や、西縁全体にみられる浅く段状になった部分をみると建て替えが行われた可能性が疑われる。

中央には南北1.4m、東西1.0m、深さ約20cmの不整な掘り込みがあって、その中に南北軸に二ヶ所の中央主柱穴とおもわれる円形－Ｐ１深さ58cm、不整形－Ｐ２深さ75cmの掘り込みをみる。住居の縁近く、とくに北側に多くみとめられるが、18cm～30cm径の掘方円形の柱穴が11ヶ所検出されたが、いずれが主要な柱穴であるか特定しがたい。床面からの深さにもバラツキがあり、Ｐ3－30cm、Ｐ4－62cm、Ｐ5－21cm、Ｐ6－48cm、Ｐ7－42cm、Ｐ8－21cm、Ｐ9－33cm、Ｐ10－43cm、Ｐ11－32cm、Ｐ12－27cm、Ｐ13－51cmをそれぞれ計測する。なお、焼土面は検出されていない。遺物は、ほぼ住居前面に、特に集中することなく出土しているが、他の住居にくらべて大型の甕等の大破片が多いのが特記される。

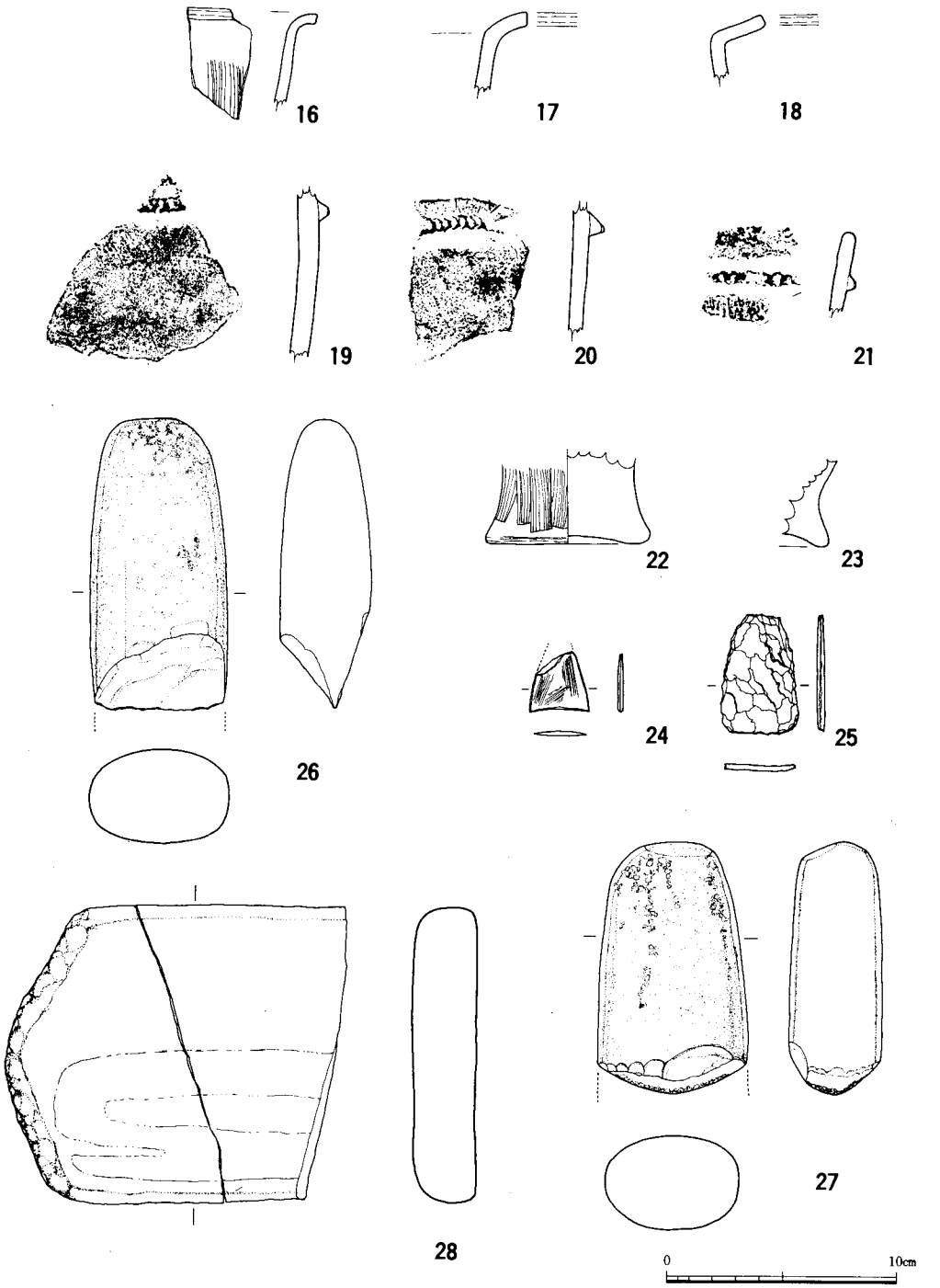
13号竪穴住居（第18図）

Ｉ20区にあり検出した住居址中では、ひとつ離れて最東端にあって藤山川の形成した開析谷を背にする。主軸を東西方向にもつ長辺5.0m×短辺3.9mの長方形を基調とする住居で西側の短辺側には南側の長辺を延長したかたちで長1.4m×短0.75mの規模で長方形の張り出し区画をもつ。張り出し部は住居址床面レベルとほぼ同じである。この区画の床面からは磨製石斧一点が出土している。南側の長辺中央付近には住居址外側に張り出した長1.4m×幅35～50cmの不定型区画がある。この張り出しに対応して住居址側に深さ37cm、0.9m×1.1m

の不整円の掘り込みがみられる。埋土は粘性が少なく、炭化粒の混じる明黄灰色土となっているが、明確な焼土ではない。柱穴は6個の主柱穴からなる。それは住居の四隅に対応する位置にある4つの主柱穴と、住居址主軸上の内寄りに先の四主柱穴よりやや大きめの主柱穴2個よりなる。6個の主柱穴のうち、住居址主軸上の西寄りと東寄りに位置する主柱穴は、それぞれ直径約30㎝の円形掘方をもって、P1では深さ75㎝、P2で深さ77㎝の値を示す。四隅近くに位置する柱穴P3～P6はP1P2に比べてやや小さな掘方、直径20㎝で深さ23㎝～31㎝を計測する。出土した断面台形のL字状口縁甕からA区で検出された住居址中、もっとも古い。



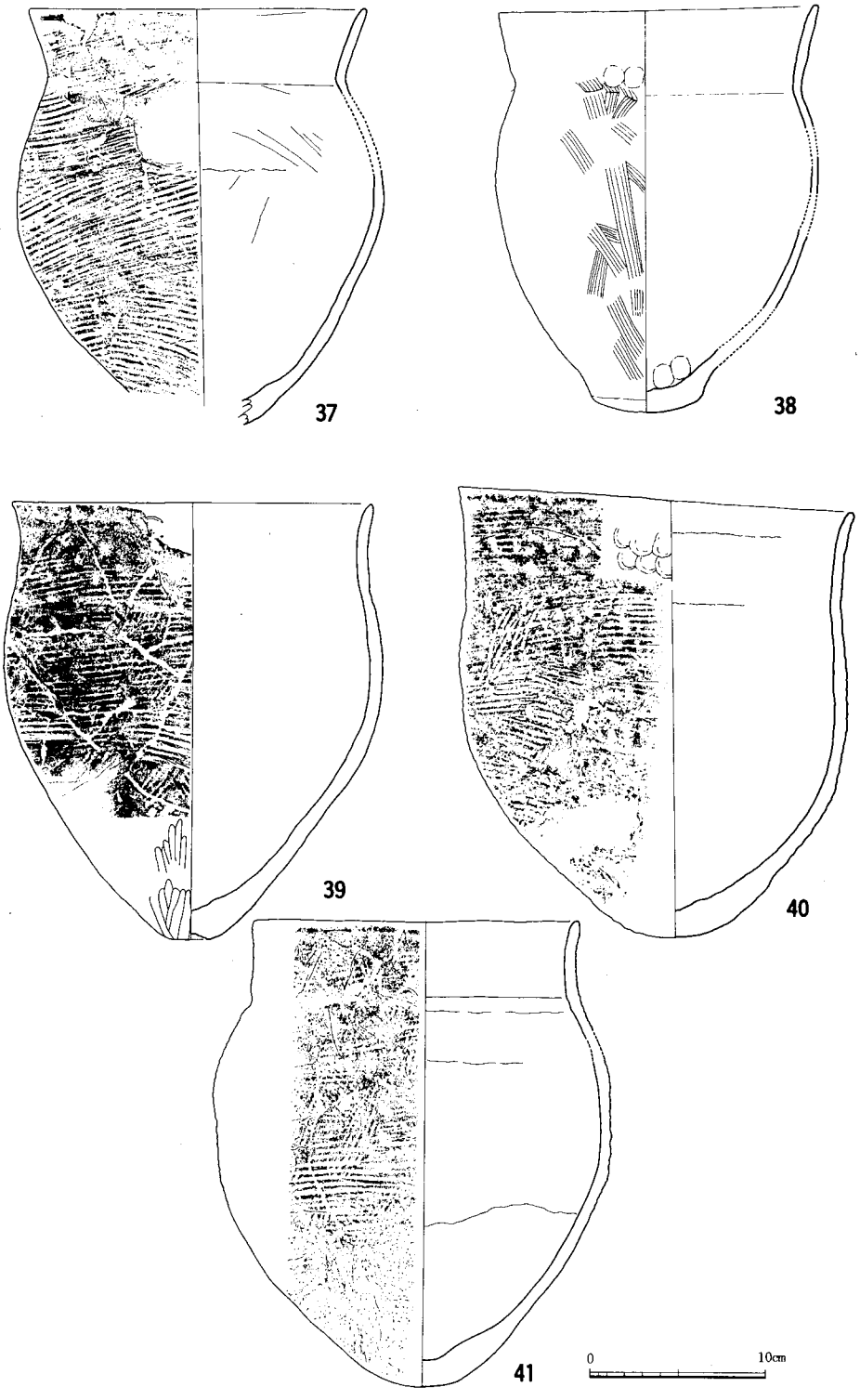

第19図　八幡上遺跡１号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）




第20図　八幡上遺跡２号竪穴住居出土遺物実測図（1/3）

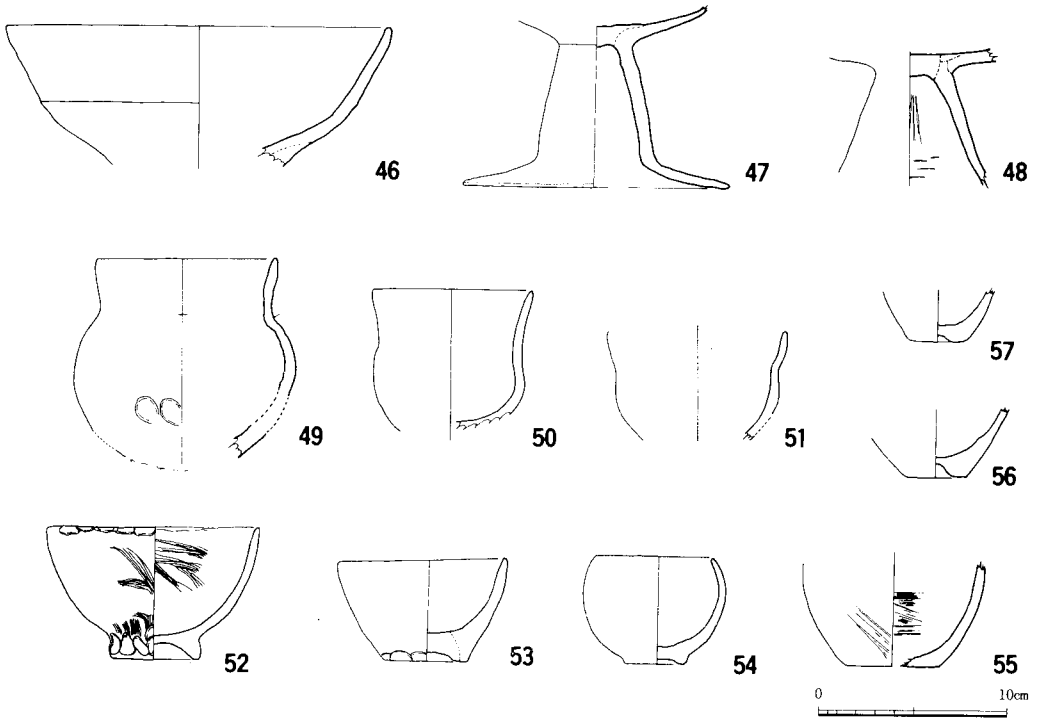
第21図　八幡上遺跡３号竪穴住居出土遺物実測図(1)(１/４)

第22図　八幡上遺跡３号竪穴住居出土遺物実測図(2)(１/４)

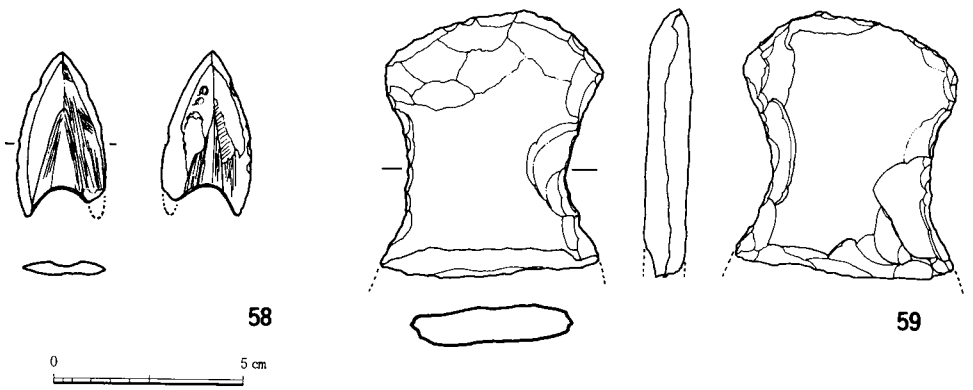



第23図　八幡上遺跡３号竪穴住居出土遺物実測図(3)(１/４)

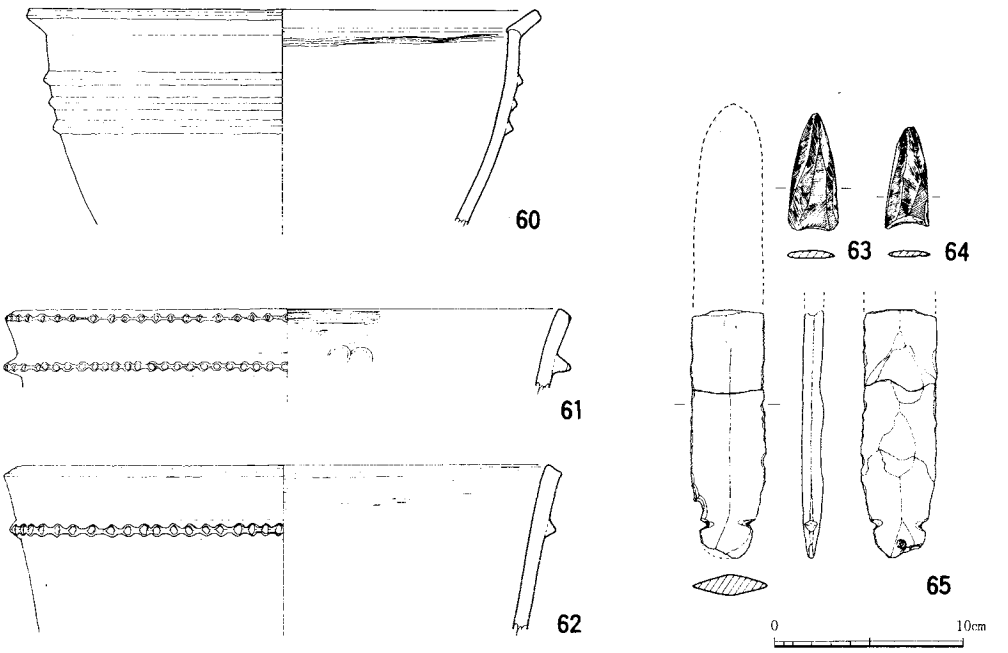
第24図　八幡上遺跡３号竪穴住居出土遺物実測図(4)(１/４)



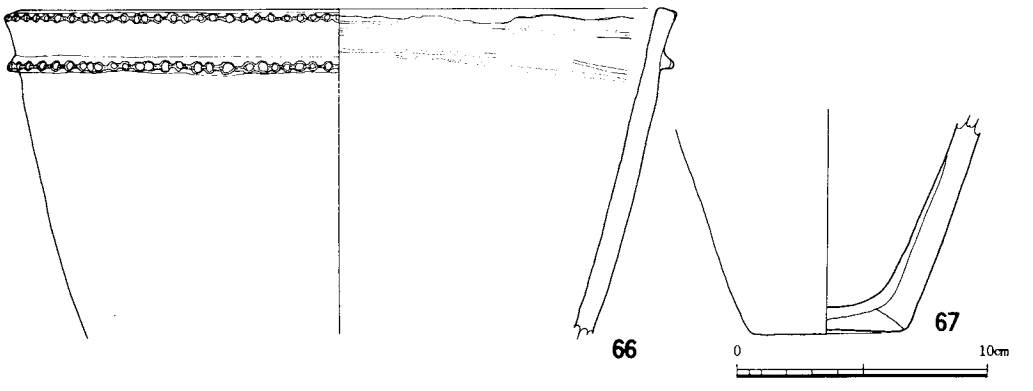

第25図　八幡上遺跡３号竪穴住居出土遺物実測図(5)(１/４)



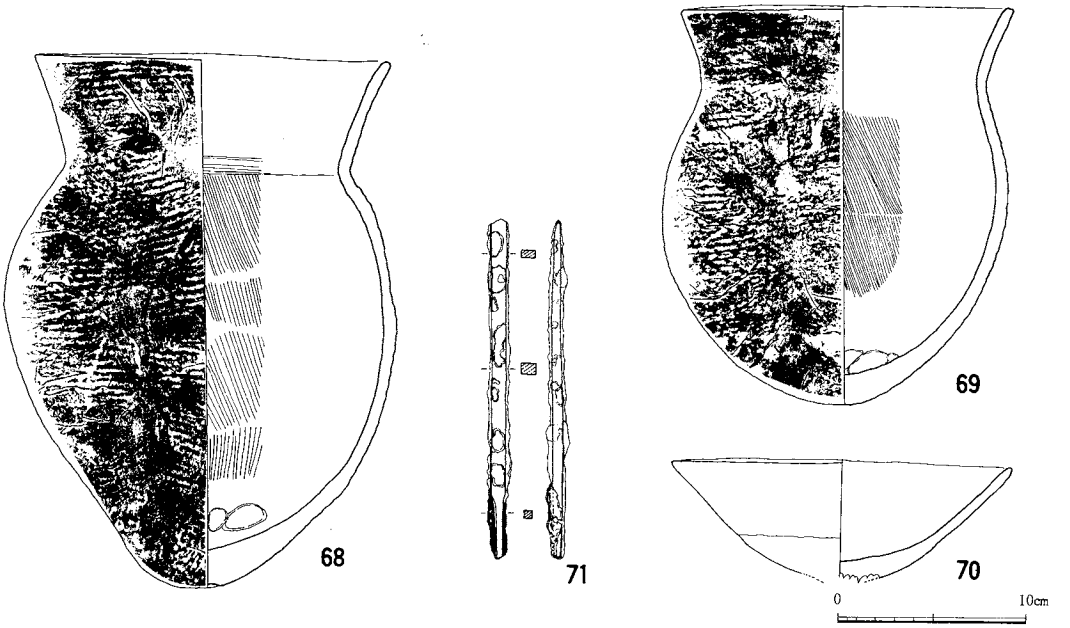

第26図　八幡上遺跡３号竪穴住居出土遺物実測図(6)(１/２)



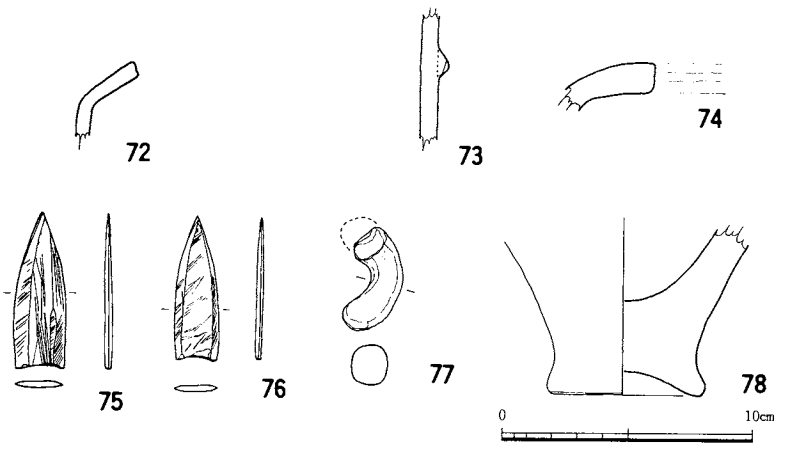

第27図　八幡上遺跡４号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）



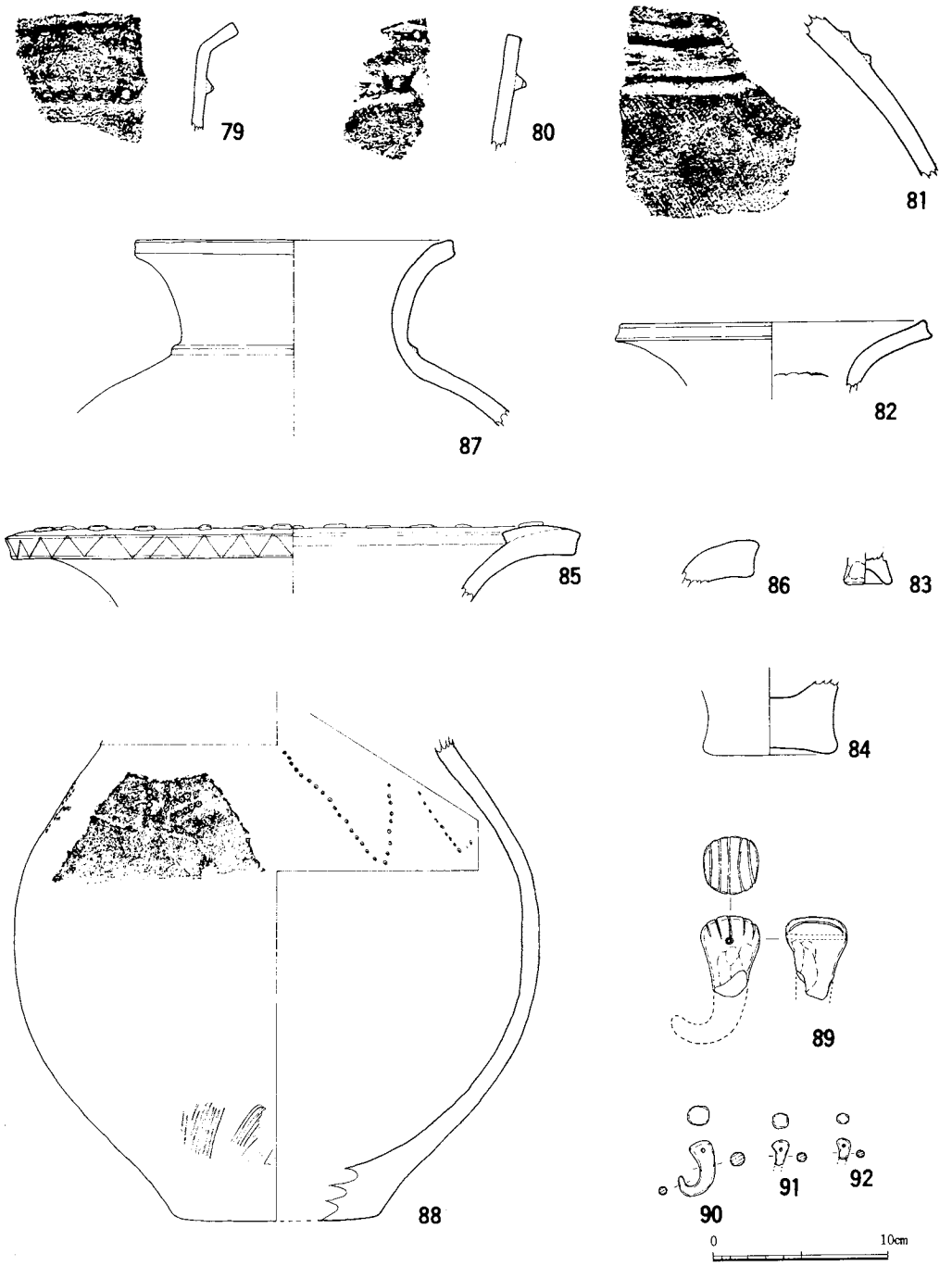

第28図　八幡上遺跡６号竪穴住居出土遺物実測図（1/3）



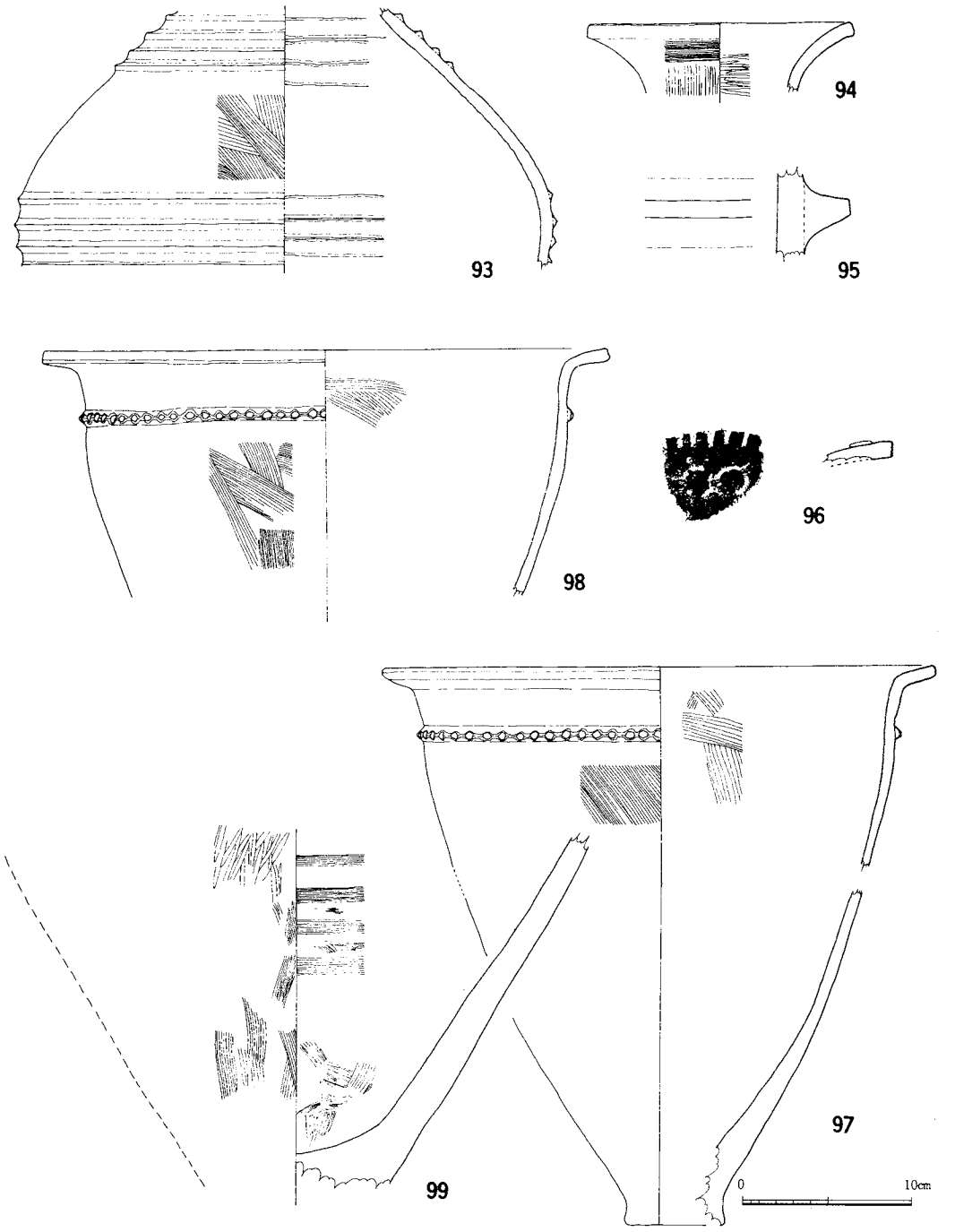

第29図　八幡上遺跡８号竪穴住居出土遺物実測図（1／4）



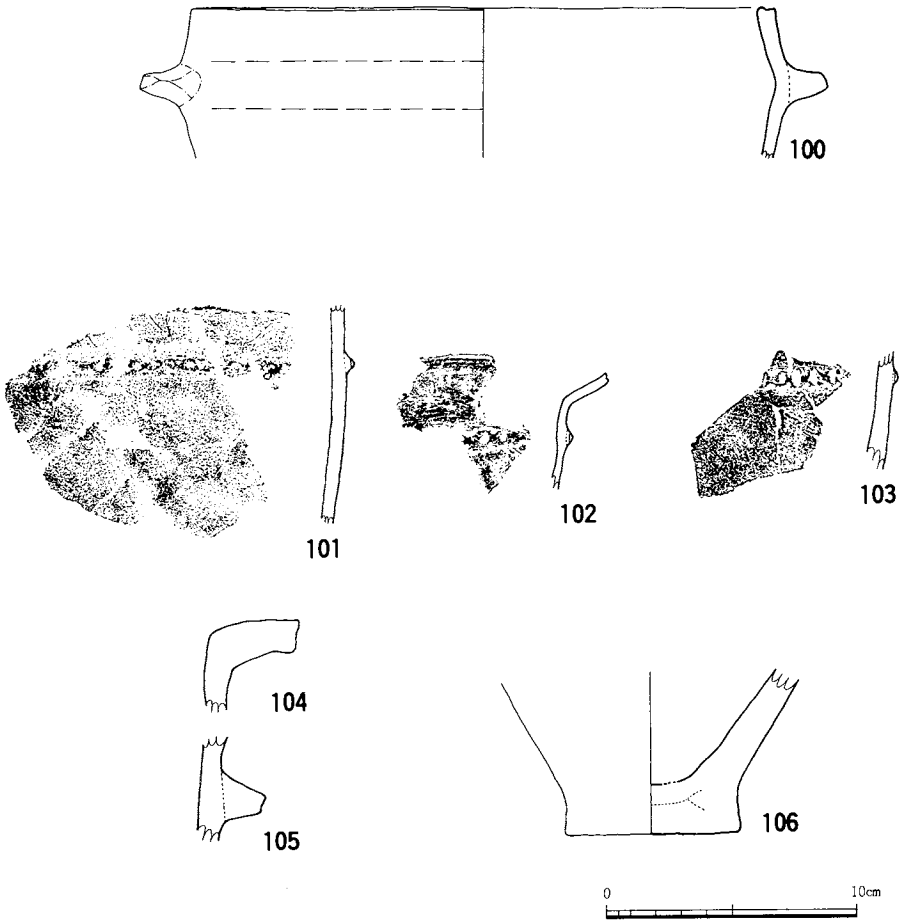

第30図　八幡上遺跡９号竪穴住居出土遺物実測図（1／3）



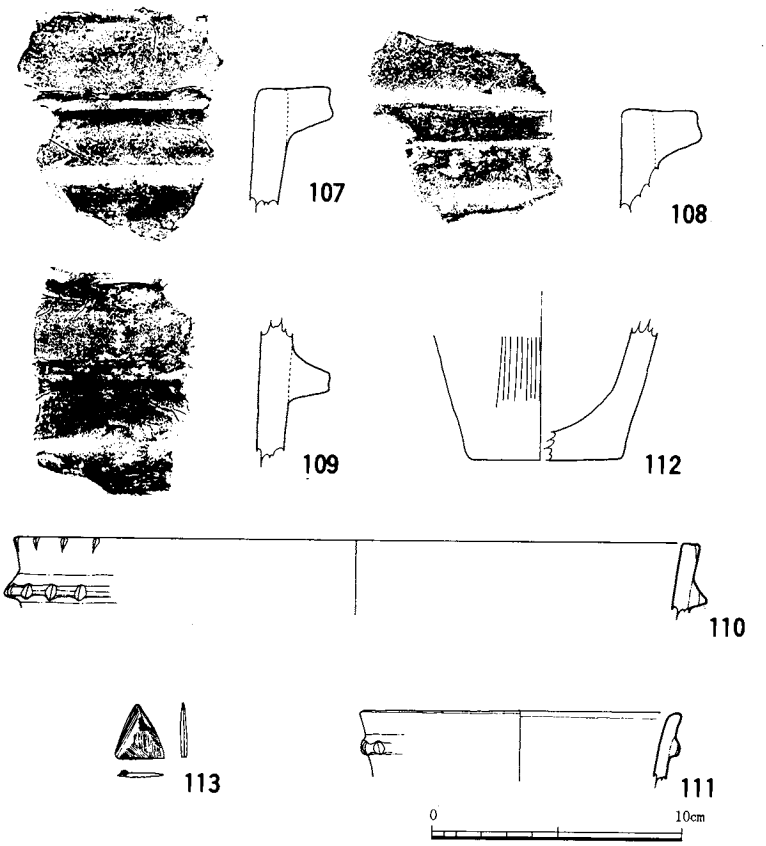

第31図　八幡上遺跡10号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）




**第32図　八幡上遺跡11・12号竪穴住居出土遺物実測図(1/4)**




第33図　八幡上遺跡12号竪穴住居出土遺物実測図（1/3）




第34図　八幡上遺跡13号竪穴住居出土遺物実測図（1／3）

## 3. 竪穴住居出土遺物

### 1号竪穴住居出土遺物

遺物は、甕、高坏、鉢、坩、小坩、手捏土器からなる。

甕

1.は比較的薄手の甕であり、ゆるやかにふくらみながら底部にいたり平底となる。口縁端部に特徴があり、尖って丸くおさめられる。胴部の半ばは欠損している。外面口辺部はヨコナデ調整、以下、底部底までタタキ調整となる。タタキ調整はヨコ方向の浅く細やかなもので、胴部最下端はタテ方向のタタキである。内面の調整は、口辺部をのぞいて細やかなハケメ調整である。内外面とも浅黄橙色を呈し、1.0～3.0mm大の茶色石、5.0mm大の硅石を多く含んでいる。

2.は口辺部の傾きが弱く、ずん胴気味。底部は丸底にちかいが、わずかに平坦面がある。口辺部はヨコ方向タタキ。口辺直下から下端まで左上がりの斜方向タタキ、ほか底部まで粗いタテ方向タタキとなる。内面は口辺、胴部下方まで細かいハケメ調整。なお、外面の口縁端から底部ちかくまで媒が厚く付着している。胎土中に3.0～5.0mm大の大きな砂粒を含んでいる。焼成はやや軟質で赤褐色から橙色を呈している。器高23.8cm、口径17.0cmを計測する。

高　坏

高坏は脚部を欠くもの2点が出土した。3.は口径21.8cmで坏下部に明瞭な稜をもって屈曲する。4.は口径19.3cmで、ひどくひずんでいる。坏下部に稜をもたずゆるく伸びている。外面に粘土帯のつなぎ目をみる。

小　坩

7、8、9、10、11は小坩である。丸底のもの7、8、9と、平底から上底状のもの11、12がある。

### 2号竪穴住居出土遺物

土器は小片のみで、大破片は出土せず、また、数ヶ所に集中することもなく、床面直上から検出されたものもない。石斧2点は住居址中央部にある柱穴中から検出されたものであり、砥石は花弁部直上に置かれたような状態で出土している。

土　器

16は器壁薄く、口縁が短く急反する甕形土器の口縁部であり、内外に稜線をもたない。外面はタテ方向のハケメ調整、内面、口縁付近がヨコナデ、以下ナデ調整となる。17は急

反する口縁に内面稜をつくる。外面には媒が厚く付着している。1.0mm大の砂粒を多く含み、口縁端は平坦にちかいが、浅く凹む。18は比較的長い口縁部が強く外反して「く」の字状を呈し、外反した口縁部内側はやや凹み気味。1.0～2.0mm大の石英粒を多く含む。外面のヨコナデ調整は丁寧に施されている。

19、20は同じく甕形土器の口縁部直下の刻目突帯附近の胴部片である。刻目は2点とも細かく几帳面に刻まれている。胎土は細かく、焼成も良い。19は微砂粒、20は5.0mm大の砂粒と硅石粒を含む。19は外面に細かいハケメ、20はハケメのあとナデ調整となる。下城式の口縁部である21は風化著しく、焼成も不良であり赤褐色を呈するもの。口縁部は丸くおさめられ、刻目突帯までは長いほうである。内側の調整は太いヨコ方向の条痕のあとナデ調整となっており特徴的である。22、23は甕形土器の底部である。22はタテ方向の細かく密なハケメで浅い上げ底。

石　器

24は唯一、完形にちかい磨製石鏃で先端を欠く。全長に比して幅が広い。暗灰色泥板岩製。25は磨製石鏃の未製品とおもわれ、両面から粗く剥離されて半成形している。緑灰色泥板岩製。26、27は磨製石斧であるが、2点とも半折損した後に、再使用されている。26は両面から剥いだあと、再度刃部をつくり石斧として使用されている。27には潰痕が多く、敲石として再使用されたものと推定される。28は砥石であり、二つに割れて出土した。明褐色の中粒砂岩製で、ヨコ方向に浅く凹んでいる。

**3号竪穴住居出土遺物**

**甕**

K－1類

胴部中ほどに最大径があり、それは口径より大きな値を示す。全体のプロポーションは、バランスのとれた短胴である。外反する口辺部と胴部の境が明瞭で内外面に稜線をつくる。口縁端部中央が凹んで溝状となる。底部は平底の面影を多少のこす丸底といえるもので肥厚している。タタキ調整となるものは口辺部を除く全面、底部まですべてタタキとなる。

K－2類

胴部中央に最大径があり、口径は、胴部径より大きな値をとる。全体径は底部にむかって胴中央付近からやや尖りぎみにしぼる砲弾状となる。底部は完全な丸底である。外反する口辺部と胴部の境はやや不明瞭である。口縁端は尖り気味で丸くおさめられる。外面の

甕

K-1類

K-2類

K-3類

K-4類

K-5類

K-6類

高　坏

小　坩

小　鉢

壺

T-3類

T-2類

T-1類

第35図　八幡上遺跡3号竪穴住居出土土器分類図

| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 外面 | 文様および調整 内面 | 焼成 | 色調 外面 | 色調 内面 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 21 | 29 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部 | □唇部～□縁――ヨコナデ<br>胴部――ナナメのタタキ<br>底部付近――うず巻状のタタキ | □唇部～□縁――ヨコナデ<br>胴部――ナデ | 良好 | 橙（5YR 7/6） | 黄橙（10YR 8/6） | 1～4㎜の赤褐色、灰色の砂粒を多く含む。 | |
| 21 | 30 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部 | □唇部～□縁――ヨコナデ<br>胴部――ヨコのタタキの後ヨコナデ<br>底部付近――タタキの交差 | □唇部┐<br>胴部┘――ナナメのナデ<br>胴部下位～底部――灰色変 | 良好 | 橙（5YR 7/6）<br>にぶい赤褐色（5YR 7/6） | 橙（5YR 7/6）<br>褐灰（10YR 5/1） | 1～5㎜の褐色、灰色の砂粒を多く含む。 | 胴部全体にススが付着しており□縁部にはススの痕跡がある。 |
| 21 | 31 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部 | □唇付近――ヨコのハケ目をヨコのへらみがき<br>胴部――ナナメのハケ目をタテのへらみがき | □縁部――ヨコのハケ目<br>胴部――ハケ目<br>底部――指おさえ | 良好 | □縁～胴部―にぶい黄橙(10YR 6/3)<br>底部―にぶい黄橙（10YR 7/4） | 左に同じ | 1㎜位の茶褐色の砂粒を含む。 | 内面底部付近に直径120㎜位の黒変がある。 |
| 22 | 32 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部 | □縁部――タタキ<br>胴部――ヨコのタタキ<br>底部付近――ナデ | □縁下位～胴部上位――ヨコのタタキナナメのナデ<br>胴部下位――ナナメのナデ | 良好 | 浅黄橙（7.5YR 8/3） | 橙（7.5YR 7/6）<br>灰褐（□縁部）（7.5YR 6/2） | 1～4㎜の赤褐色、灰色の砂粒を多く含む。 | □縁部をやや斜めにタタキをした後、胴部をヨコにタタキ回ったと思われる。 |
| 22 | 33 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部 | □縁部┐<br>胴部┘―ヨコ方向の平行線のタタキ<br>胴部下位――タタキのあとナナメ上にナデ上げている | □縁部――ヨコナデ<br>胴部――ナナメ上にナデ上げている | 良好 | 浅黄橙（10YR 8/4）<br>浅黄橙（7.5YR 8/6） | 浅黄橙（10YR 8/4）<br>橙（7.5YR 7/6） | 1～5㎜の白黒、茶褐色の砂粒を多く含む。 | |
| 22 | 34 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部付近 | □唇部――ヨコナデ<br>□縁部――ナナメ方向の平行線のﾀﾀｷ<br>胴部――ヨコとナナメの平行線のﾀﾀｷ | □縁部――ヨコナデ<br>胴部――ナナメ上にナデ上げている | 良好 | 黄橙（10YR 8/6） | 左に同じ | 1～4㎜の茶褐色の砂粒を多く含む。 | 内面が全体的に黒く変色している。 |
| 22 | 35 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部 | □縁部――少し粗めのヨコナデ<br>胴部――ヨコのハケ目<br>底部――ナデ | □縁部――ヨコ方向のハケ用<br>胴部――ナナメのハケ目<br>底部――ナデ | 良好 | 淡黄（2.5YR 8/4） | 浅黄橙（10YR 8/3） | 4㎜内の赤褐色、灰色の砂粒を多く含む。 | |
| 22 | 36 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部 | □縁部――タタキのあとナデ<br>胴部――タタキ | □縁部┐<br>胴部下位┘― 黒変している | 良好 | 浅黄橙（7.5YR 8/6） | にぶい黄橙（10YR 6/4） | 1～3㎜の茶褐色の砂粒を多く含む。 | 底面部が卵形でくぼみがあり半径3㎜位出ている。 |
| 23 | 37 | A SA3 | 甕 | □縁部～胴部下位 | □縁部～胴部下位――ヨコ方向のタタキ | 一部にナナメとヨコのナデあり | 良好 | 浅黄橙（10YR 8/3） | 灰白（10YR 8/2）<br>褐灰（10YR 4/1） | 1～5㎜の茶褐色、灰色の砂粒を多く含む。 | 胴部から□縁にかけて全体にススが付着している。 |
| 23 | 38 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部 | □縁部――ヨコナデ<br>胴部――ナナメとタテのハケ目<br>底部――ナデ | □縁部――ヨコナデ<br>胴部～底部――ナデ（指おさえあり） | 良好 | 橙（5YR 6/6） | 左に同じ | 1～2㎜の　色の砂粒を多く含む。 | |
| 23 | 39 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部 | □縁部――ナデ<br>胴部――ヨコ方向に強いタタキがあるが全体的に交差のタタキもある<br>底部付近――へらみがき | □縁～胴部上位――ナデ<br>胴部中位～下位――ヨコナデ～タテナデ<br>底部――ナデ | 良好 | 浅黄橙（7.5YR 8/6） | 左に同じ | 1～3㎜の赤褐色、灰色の砂粒を多く含む。 | |
| 23 | 40 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部 | □縁部～胴部下位――ヨコ方向にタタキ<br>底部付近――ナデ | □縁～胴部下位――ヨコナデ<br>底部――ナデ | 良好 | 浅黄橙（7.5YR 8/6） | 浅黄橙（7.5YR 8/4）<br>褐灰（10YR 5/1） | 1～4㎜の褐色、灰色の砂粒を多く含む。 | 内面胴部は風化気味。<br>外面□縁～胴部にかけて全面にスス厚く付着。<br>全体にかたむいている。 |
| 23 | 41 | A SA3 | 甕 | □縁部～底部 | □縁部――ヨコ方向のタタキ<br>胴部 ―┌ヨコ、ナナメのタタキ<br>　　└ヨコのタタキの後ﾅﾅﾒのナデ<br>底部――ヨコナデ | □縁部――ヨコナデ<br>胴部上位―ナナメ方向のナデ<br>胴部下位～底部――タテ方向のナデ | 良好 | 橙（5YR 7/8）<br>黄橙（10YR 8/6） | 浅黄橙（7.5YR 8/6） | 2㎜内の白色、茶褐色の砂粒を多く含む。 | 胴部をススがめぐる。 |

| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 外面 | 文様および調整 内面 | 焼成 | 色調 外面 | 色調 内面 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 24 | 42 | A SA3 | 壺 | □縁部～胴部上位 | □縁部——ヨコナデ<br>頸部～胴部上位——タテ、ヨコ、ナナメに交差したタタキ | □縁部——ヨコナデ<br>胴部上位—ナナメ方向のナデ | 良好 | 橙（7.5YR 7/6） | 橙（5YR 7/6） | 1～4㎜の茶褐色、白色、灰色の砂粒を多く含む。 | 全体に丸みのある面取りがしてある。 |
| 24 | 43 | A SA3 | 壺 | □縁部～底部 | □縁部——ヨコナデ<br>頸部～胴部中位——ヨコ方向に交差したタタキ　ナデ<br>胴部下位～底部——タテにナデ、粗い | □縁部<br>胴部上位—ヨコナデ | 良好 | 橙（7.5YR 7/6） | 左に同じ | 1～2㎜の赤褐色、灰色の砂粒を多く含む。 | 底部は、はっきりしない。外面底部付近は剥離が多い。突帯付。 |
| 24 | 44 | A SA3 | 壺 | □縁部～底部 | □縁部——ヨコナデ<br>胴部——ヨコとナナメ方向のタタキ<br>底部付近——交差したタタキ | □縁部・胴部下位——ハケメの後ナデ<br>底部——指押さえ | 良好 | 浅黄橙(10YR 8/3)<br>橙（5YR 7/6） | 浅黄（2.5Y 8/4） | 3㎜内の茶灰色の砂粒を多く含む。 | |
| 24 | 45 | A SA3 | 壺 | □縁部～底部 | □縁部——ヨコナデ<br>胴部——ヨコにタタキ<br>底部付近——交差したタタキ | □縁部——ヨコナデ<br>胴部中位—ナナメ方向のナデ<br>底部付近——ナデ | 良好 | 浅黄橙(2.5YR6/8)<br>橙（7.5YR 6/6） | 浅黄（2.5YR 6/8） | 1～4㎜の赤褐色、灰色の砂粒を多く含む。 | |
| 25 | 46 | A SA3 | 高坏 | 坏部 | ヨコナデ | ヨコナデ | 良好 | 浅黄橙(10YR 8/4) | 浅黄橙(10YR 8/3) | 1～2㎜の茶褐色の砂粒を多く含む。 | |
| 25 | 47 | A SA3 | 高坏 | 脚部～裾部 | 脚部——磨いているのか不明瞭<br>裾部——ヨコナデ | 脚部——粘土のかえりがある<br>へらの後部でナデて後、指でナデている | 良好 | 橙（5YR 6/6） | 左に同じ | 1～2㎜の灰色、薄茶の細砂粒を含む。 | |
| 25 | 48 | A SA3 | 高坏 | 坏部～脚部 | 坏部——ナデ<br>脚部——ヘラでナデた後、少しナナメにナデている。 | 円盤充塡部——ナデ<br>脚部——ヘラけずり | 良好 | 橙（7.5YR 7/6） | にぶい黄褐色（10YR 5/3） | 1～2㎜の茶褐色の砂粒を多く含む。 | |
| 25 | 49 | A SA3 | ミニチュア | □縁部～底部付近 | □縁部～胴部下位——ヨコナデ<br>底部付近——ナデ | □縁部～胴部下位—ヨコナデ<br>底部付近——ナデ | 良好 | にぶい黄橙（10YR 7/4） | 左に同じ | 1㎜位の砂粒を含む。 | 外面の□縁付近と内面の底部付近に黒変あり。 |
| 25 | 50 | A SA3 | 小型丸底坩 | □縁部～胴部 | □縁部・胴部——ヨコナデ | □縁部——ヨコナデ<br>胴部——磨耗のため不明 | 良好 | 橙（7.5YR 7/6） | にぶい黄褐色（10YR 5/4） | 1～3㎜の茶褐色の砂粒を多く含む。 | |
| 25 | 51 | A SA3 | ミニチュア | □縁部～底部付近 | ヨコナデ | ナデ | 良好 | にぶい黄橙（10YR 7/4） | 左に同じ | 精良（砂粒を含まない） | 外面に黒変あり。 |
| 25 | 52 | A SA3 | 鉢 | □縁部～底部 | □縁部～胴部下位—ナナメ方向のナデ<br>底部付近——タテハケ目<br>□縁と底部に指頭圧痕あり | □縁～胴部—ナナメのハケ目<br>底部——ナデ | 良好 | にぶい褐色（7.5YR 5/4） | 左に同じ | 1～2㎜の薄茶の砂粒を含む。 | 外面は全体の1/4、内面は全体の1/3の黒変あり。 |
| 25 | 53 | A SA3 | ミニチュア | □縁部～底部 | ヨコナデ | ヨコナデ | 良好 | 橙（5YR 6/6） | 左に同じ | 1～3㎜の茶褐色の砂粒を多く含む。 | 粘土のつぎ目がある。 |
| 25 | 54 | A SA3 | ミニチュア | □縁部～底部 | □縁部——ヨコナデ<br>胴部～底部近く——ナナメのナデ<br>底部——タテナデ | □縁部近く——ヨコナデ<br>胴部～底部——ナナメのナデ | 良好 | にぶい黄橙（10YR 7/3） | 左に同じ | 1～2㎜の茶色の砂粒を含む。 | |
| 25 | 55 | A SA3 | ミニチュア | 胴部～底部 | ヨコナデ | ハケ目 | 良好 | にぶい橙（7.5YR 7/4） | 左に同じ | 1～3㎜の茶褐色の砂粒を含む。 | へラの線刻あり。 |
| 25 | 56 | A SA3 | ミニチュア | 胴部～底部 | ナナメのナデ | ナナメのナデ | 良好 | 浅黄（2.5YR 7/4）<br>灰黄（2.5YR 6/2） | 灰黄（2.5YR 7/2） | 1～2㎜の茶褐色の砂粒を含む。 | 粘土のかえりがある。 |
| 25 | 57 | A SA3 | ミニチュア | 胴部～底部 | ヨコナデ | ナデ | 良好 | にぶい黄橙（10YR 7/4） | | 1～2㎜の茶褐色の砂粒を含む。 | |

調整がタタキになるものは、口縁部から底部にかけて、口縁に平行かあるいは浅い斜方向の全面タタキとなる。

K－3類

口縁部はややながめにゆるく外反し、胴部との間にくびれをつくって頸部となるが、外面には稜をつくらない。胴部中央から上半に最大胴部径があり、それは口径と同等かやや大となる。胴部中央付近からゆるくしぼりながら底部に至る。底部は平底ではあるが底はアールがついている。

K－4類

口縁部が直にちかくのびるようになり、口縁端ちかくで弱く外反する。胴部との境がもはや不明瞭となり頸部がなくなる。プロポーションはずん胴で、底部にかけて尖り気味の丸底となる。口縁から胴部下半までタタキ痕があり、以下、ヘラミガキ調整となるものもみられる。

K－5類

口縁部は頸部から直にのびて外反せず直口縁となる。胴部中央に最大胴部径があり、口縁部との間に明瞭な頸部をつくる。胴部径は口径により大きな値をとる。底部は尖り気味の丸底。口縁から胴部下半にかけてタタキ調整がみられる。

壺

T－1類

外反せずに直立する単口縁となるもの。胴部は中ほどに最大径をもち、底部にかけてやや尖った丸底となるものと、球形になるものがある。

T－2類

単口縁でやや内湾気味に外傾する。

T－3類

外反する二段の口縁を有する複合口縁壺で、頸部にX状刻目突帯を貼付するもの、胴部形状不明。

**4号竪穴住居出土遺物**

**(1) 弥生土器**

60は復元推定口径約26.4cmの口縁が「く」の字に急外反して、口縁内側に明瞭な稜をみる甕である。口縁の外反屈曲部直下に三条の刻目のない突帯が巡っている。内面は丁寧なナデ調整、外面は口縁端部から最下位の突帯にかけて厚く媒が付着する。内外面とも赤褐色を呈

し、胎土に長石小粒、金雲母、石英が多く含まれている。この種の甕の出土は本遺跡においてはこの4号住居のものただ一点である。61、62は下城式の甕である。61では口縁端部がやや凹み、口縁端部外側にも細かくしっかりした刻目が施され、突帯は強く高く張り出している。内側の調整はヨコ方向から斜方向のナデで、一部指頭の圧痕が観察される。胎土に白色の硅石3.0mm大の礫混入がめだち長石と石英の極小粒が含まれる。

62は刻目突帯からゆるやかに外反し、口縁端部は凹んでいる。61とちがって口縁部外側には刻目を施さない。突帯にはやや大き目の刻目が細かく深く刻まれる。口縁外側から刻目下まで媒が付着する。内面の口縁下2.5cmまで、明瞭なヨコナデ痕、以下丁寧なナデ仕上げでなめらかである。

(2) 磨製石剣（第27図65）

65は4号住居の床面で出土した鉄剣形磨製石剣である。剣先が折れて現長12.8cm、幅3.9cm、厚1.0cmを測る。やや粒子の粗い灰色の泥板岩製で、片面は剝がれて薄くなっている。末端部から上1.5cmの部分両脇より擦り切り状のえぐりが入る。断面はやや壊れた菱形で、鎬は端部近くで左右に曲がる。

(3) 磨製石鏃（第27図63、64）

整形のための擦り面が多く見られるもので、やや粗野な印象を受ける。63は長6.1cm、幅2.6cm、厚3.5mm、64は、長5.3cm、幅2.3cm、厚3.0mmいずれも、粒子の極めて細かい緑灰色泥岩製である。

6号竪穴住居出土遺物（第28図66、67）

下城式の甕片で全形を把握できる遺物である。66. 67は同一個体であるが胴下部を欠く。

66は口縁端部外側と口縁直下の突帯に刻目を有するもの。刻目は細かく密に刻まれ、突帯は断面三角形で丈が高い。復元推定口径25cmを計測する。調整は外面風化して剝げて不明。内面は口縁裏付近でハケメに似るヨコナデ調整痕が観察される。

胎土に0.5～1.0cm大の白色硅石の大礫が混入し、他に長石、砂粒を含む。

8号竪穴住居出土遺物

甕

68は器高28.7cm、口径18.5cmを測る尖り気味で丸底底部の甕形土器である。口縁部が長く外反、口縁と胴部の境はくびれて明瞭な頸部となるが、外面は稜をつくらない。内面には曖昧な稜をつくる。胴部最大径は胴部中ほどからやや上にあり、口径より大きな値をとる。胴部中ほどから、底部にかけてやや長胴ぎみにしぼって丸底となる。

外面調整は、口辺部から胴部上半までが、タタキ目をタテ、ヨコにくわえた格子目状、胴部中ほどが水平タタキ、下端がタテ方向のタタキ調整と特徴がある。内面は底部ちかくまで細かいハケメ、内面口辺部ヨコナデ、底部は圧痕がのこる。口縁から胴部中ほどまで媒が厚く付着している。

69は器高21.2cm、口径16.7cmで、胴が短く丸底を呈する。外面に口縁端直下から胴下半まで、タテ方向タタキのあとヨコタタキでつくられた格子目状のタタキが顕著である。胴部下部から底部にかけてはタタキ調整をナデ消している。内面の調整は口辺からくびれ部直下までかヨコナデ、以下底部ちかくまでこまかいハケメ調整、底部は指頭圧痕がみられる。

高　坏

70は脚部を欠損するが、高坏の坏部である。口径17.5cm、高6.7cm。坏下部に稜をつくらないがつなぎ目は確認できる。外部ヨコナデ、内面は風化のため不明。焼成やや軟で赤橙色を呈する。

鉄　器

71は今回の調査で唯一検出された鉄器である。長18.1cm、幅0.7cm、厚さ0.5cmを計測する。先端は器幅と同幅で薄く整形され刃部状に仕上げられている。後端は器幅が徐々に挟ばまって尖り、柄に挿入されていたことを窺せている。

9号竪穴住居出土遺物

72、73は甕の口縁部、および口縁直下の刻目突帯部である。72は口縁部の小片で、口径は復元できない。器厚は薄く、口縁は急に外反する。1.0mm大の砂粒が多量に含まれ、色調は橙色を呈する。73は風化著しく、摩耗している。1.0mm大の茶砂粒を多量に含み、石英を少量含む。78は甕形土器の底部であろう。浅い上底である。外面、風化摩耗している。74は壺の口縁で、口縁端は肥厚し、ゆるく凹んでいる。外面は粗いナデ、内面ナデ調整。少量の石英と、1.0～3.0mm大の茶砂粒を含む。これも小片で口径の復元不可能、77は先端部を欠く土製勾玉で、断面は円形にちかい。全長（現）4.0cm。75、76は極めて薄く、鋭利につくられた緑泥板岩製の石鏃である。出土石鏃中、最も丁寧に美しく整形されている。75は全長6.2cm、76は全長5.7cmを測る。

10号竪穴住居出土遺物

(1)　弥生土器

79はやや屈曲（外反）の弱い「く」の字口縁甕である。低い刻目突帯が屈曲部直下に巡

る。風化著しく胎土の砂粒が表面に浮きでている。80は下城式甕の小片で、口縁は外反しない。口縁端部外面にも刻目を施す。81、82、85、86は壺形土器の破片である。81は肩部であろう。刻目のない低い突帯が二条巡っている。突帯下に斜位のハケ目がみとめられ、焼きは堅緻で淡黄褐色を呈している。85は鋤先状の口縁形をもつ大型壺で、口縁端部に鋸歯状の刻線文、口縁平坦面上に1.0～1.5cm径の円形浮文を貼付する。推定口径約32.8cm、白色の硅石1.0～3.0mm大を多く含んでいる。86はより大型の壺の口縁部であろう。83は高台状の底部で手捏ねの小型土器である。84はおそらく甕形土器の底部とおもわれる。88の壺の肩部には竹管刺突による「W」字形の連続文がみられる。

(2) 土製勾玉

89、90、91、92は10号住居址内より出土した土製勾玉である。89は他の3点に比べて格段に大きなもので頭部の径3.3cmを測る。平坦に成形された頭部に孔軸に平行する沈線5条がみられ、いわゆる丁字頭勾玉の土製模造品とおもわれ、尾部を欠いている。90、91、92はほぼ同じ位置で出土しているが、床面よりはやや上位である。90は完形品であり、頭部は平坦で円形、直径1cmある。全長3.1cmを測る。

**11号竪穴住居出土遺物**

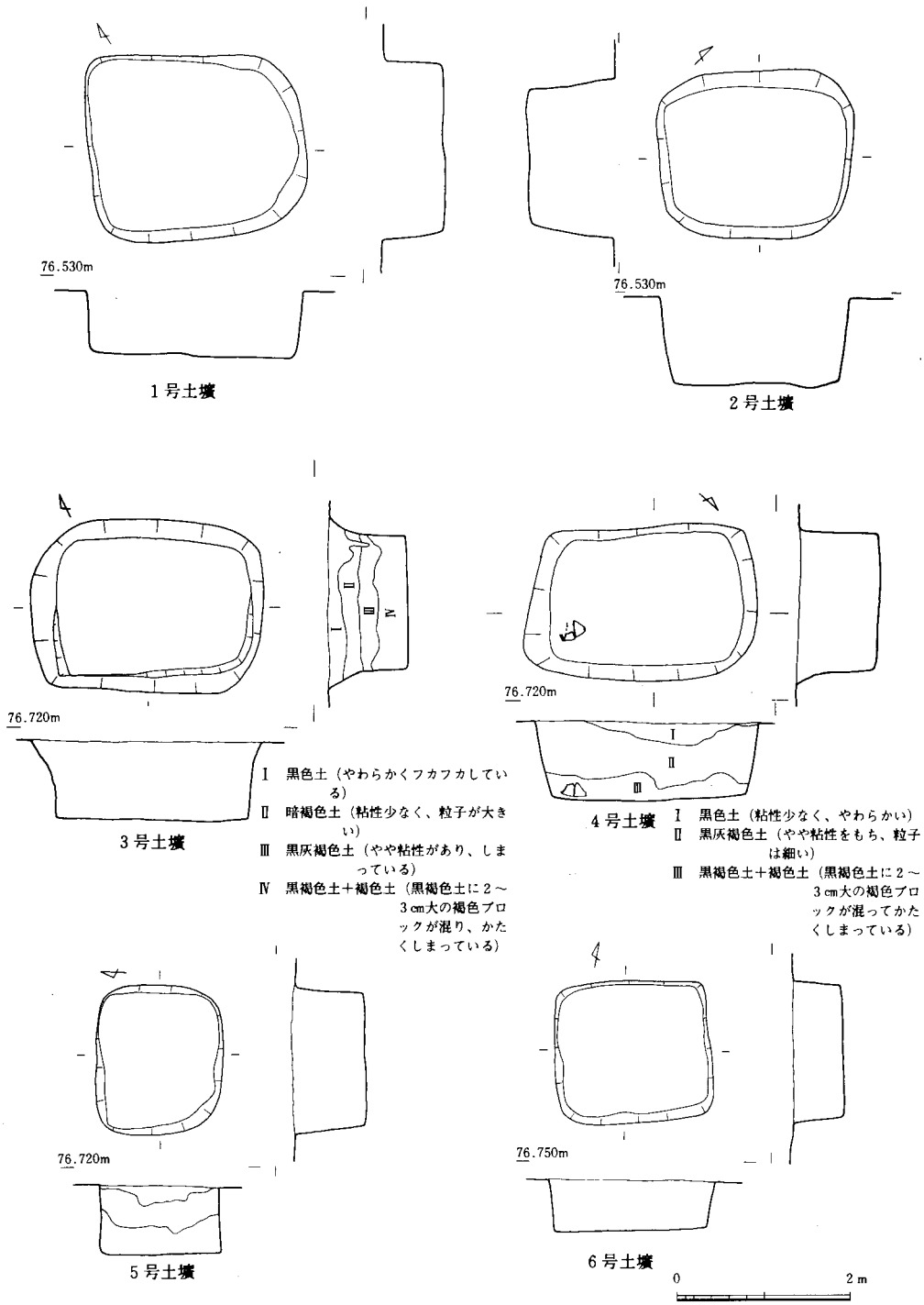
| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 | | 焼成 | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外面 | 内面 | | 外面 | 内面 | | |
| 32 | 93 | SA11 | 壺 | 頸部～胴部上半 | ヨコナデ、ナナメハケメ | ヨコ方向の太いナデ、凹凸がある | 良好 | 浅黄(Hue2.5YR7/4) | | 2.0～3.0mm大の灰、茶色砂粒、石英を含む。 | 4条の突帯が巡る。 |
| 32 | 94 | SA11 | 壺 | 口縁片 | タテハケメのあとナデ | 細いヘラ状のモノでナデ | 良好 | 明黄褐(Hue10YR7/6) | | 1.0～2.0mm大の茶砂粒を多く含む。 | |
| 32 | 95 | SA11 | 大甕 | 突帯部片 | ヨコナデ | ナデ | 良好 | にぶい黄橙(Hue10YR7/3) | | 2.0～3.0mm大の灰色砂、ﾁｬｰﾄ粒を多量に含む。 | |
| 32 | 96 | SA11 | 壺 | 口縁部片 | ナデ | —— | やや軟 | にぶい黄橙(Hue10YR6/4) | | 2.0mm大の砂粒石英を含む。 | 円形浮文がつく。 |

12号竪穴住居出土遺物

| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 | | 焼成 | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外面 | 内面 | | 外面 | 内面 | | |
| 32 | 97 | SA12 | 甕 | 口縁～底部 | ナナメハケメ | ヨコ、ナナメハケメ | 良好 | にぶい橙 (Hue7.5YR7/3) | | 1.0mm大の茶砂粒を多く含む。 | 突帯から胴部上面にかけて煤付着。 |
| 32 | 98 | SA12 | 甕 | 口縁～胴部上 | 細かいナナメハケメ | 粗いナナメハケメ | 良好 | にぶい橙 (Hue7.5YR7/3) | | 1.0mm大の茶砂粒を多く含む。 | 口縁から胴部上面までひどく煤付着。 |
| 32 | 99 | SA12 | 大甕 | 底部 | 上部（ミガキ）底部（タテハケメ） | ヨコハケメ、粗いハケメ | 良好 | 橙 灰褐色 | | 1.0～2.0mm大の茶砂粒きわめて多い。角閃石、金雲母を含む。 | 底部外面欠損 |

13号竪穴住居出土遺物

107、108、109は中型甕の小片であり、口径は復元できない。おそらく同一個体と推定される。107、108はその口縁部であり、典型的な逆「L」字状口縁を呈している。109はその口縁直下の突帯部となろう。3点とも赤橙色をして、極めて硬緻であり、内面はナデ調整となっている。胎土に長石を多量に、その他、石英、茶色石、金雲母を含んでいる。110、111は下城式甕の口縁部である。110の口縁端部外側には切り込みの鋭い刻目が約1cmごとに入る。口縁直下の突帯は、断面三角形で鋭く突きだし、その刻目も左右から丁寧に鋭利に刻まれている。口縁の外面に煤付着。外面色は灰褐色、内面は黄褐色。胎土に砂粒、石英、金雲母を含む。111は極めて小型の下城式甕。推定復元口径12.3cm。口縁端部は丸くおさめられている。刻目突帯はとがらずぼってりしている。刻目は丁寧に左右から刻まれている。内外とも橙色をしている。112は下城式甕の底部である。外面、タテ方向にハケメ痕がのこる。胎土に白色石英を多量に含んでいる。113は磨製石鏃である。器長2.2cm、幅1.7cmを測る。




**第36図　1・2・3・4・5・6号土壌実測図(1/80)**

## 4. 土　壙

調査区中央からみて南西部にあるE5・E4・E6・F5・G6・G7に群集する土壙群である。分布する範囲は南北15m、東北30mのなかにおさまり、この域外には全くみられない。形状的にみれば、隅方の方形から長方形のプランをもって、床面まで直に掘り込まれ、埋土の堆積状態も同一という特徴をもった、ほぼ同時期に営まれた性格不詳の土壙群である。時期的には6基の土壙うち、4号土壙の床面から出土した甕形土器により、弥生時代後期中葉にあたる。ただし、当調査区内において、これ等の土壙と同時期にあたる住居址はなく、直接かかわると考えられる集落は、当調査区より約10m下段に広がる銀代ヶ迫遺跡の集落である。

### 1号土壙

F4区にあり、同種の土壙としては発掘区の西端に位置する。2.5m×2.1m規模の隅丸の不整方形プランを有し、そのプランのままほぼ直に検出面から約70cm掘られて、フラットな床面まで達する。床面上に何らの遺構も持たず、また主要な遺物も検出されていない。埋土は3層に分層でき上層より小土器片、礫片がわずかに包含されている。

### 2号土壙

E5区にあり3号土壙から西5mに隣接する。2.2m×1.9m規模でこれも隅丸の不整方形土壙。床面までほぼ直に掘られて、約1.0mでフラットな床面となる。これも1号土壙同様、土器胴部小片、礫片の他、図示できる遺物を包含していない。

### 3号土壙

SB3の南西3mにある。これも隅丸方形の平面形状を呈して、長辺2.65m、短辺2.0m、深さ0.9mの値をとる。床面まで直に掘られて、床面は全くフラット。埋土は四層に分層でき、床面近くの第4層はもっとも厚く、黒褐色土中に2～3cm大の褐色ブロックが多く混入するもので、堅くしまっている。Ⅰ～Ⅲ層は自然に、時間をかけて堆積された自然堆積状態を示しているが、Ⅳ層のそれは比較的短期に人為的に埋められた状況を示しているようにおもわれる。

### 4号土壙

F5区にあって主軸の方向を1号・3号と同じくする。平面形は隅丸の不整長方形で、長辺と短辺との比率は1.4：1である。長辺260cm、短辺180cm、深さは検出面から90cmを測る。長辺側では床面までほぼ直に掘られて、褐色粘質土層にまで及び、その層が床面となる。床面はほぼフラットで、掘り込み等の作事跡はまったくみられない。埋土は三層に分層

できるがいずれも堅くしまっており、Ⅲ層にのみ褐色粘質土の小ブロックが顕著である。

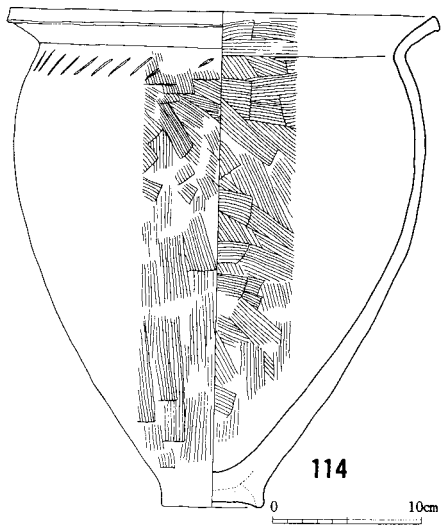
南東隅部の床面上に甕一個体が検出されている。

**5号土壙**

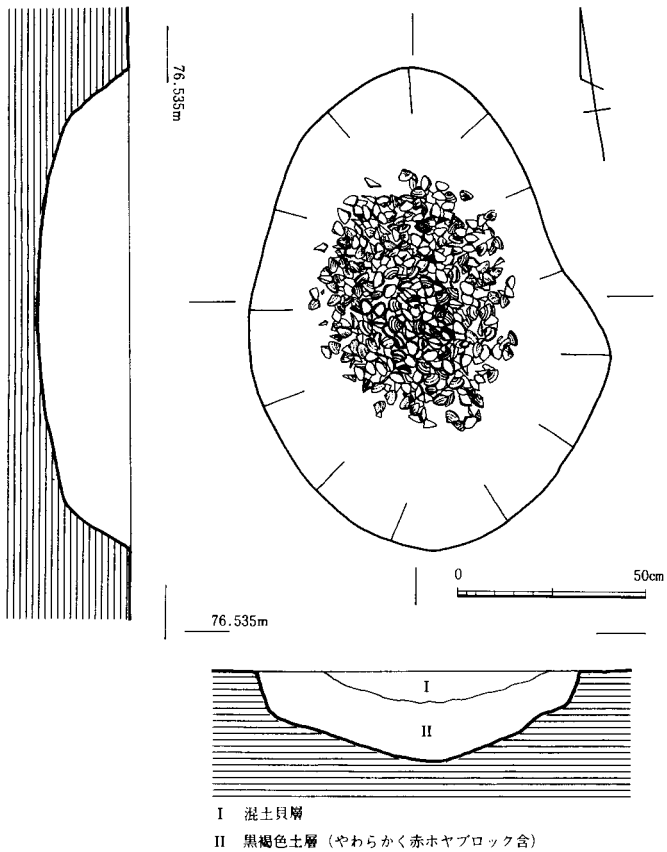
G7区にあって主軸を東西方向にとる。平面形状は正方形にちかい隅丸の不整長方形といえるもので、床面まで直に掘り込まれている。長辺170cm、短辺145cm、深さ49cmを測る。堅くしまった埋土中に土器片数点を含むが、床面付近では検出していない。

**6号土壙**

G6区にあって土壙群ではもっとも南端にあるものである。隅丸方形をとる平面形状を有するもので、長辺175cm、短辺165cm、深さ60cmの値をとる。直に掘り込まれて、床面はこれも全くのフラット。土壙中に遺物を持っていない。




**第37図　4号土壙出土弥生土器実測図(1/5)**




**第38図　8号土壙実測図**

**8号土壙**（貝殻を充填した土壙）

8号土壙の形状は、長軸を南北にとる不整楕円形で、その値は120cm×90cm×24cm（深さ）である。深さは赤ホヤ面上でそろえた検出面からの値であり、土壙底はすり鉢状に窪んで、周壁は底部やや上部から急に立ちあがっている。この土壙自体はむろん入念に掘られたという印象はない。貝殻の集積は土壙の中心部の70cm×50cmの範囲にあるが、土壙底にまでは及んでいない。下層では土混じりの貝層となり、さらに下層では貝層を含まない、やわらかな黒褐色土となっていた。貝殻のほとんどはヤマトシジミであり、他は数パーセントのカワニナであって、その他の貝類を全く含んでいなかった。ヤマトシジミには煮炊きの際に生じたものと考えられる白灰色のうすい付着物のみられるものがあり、あきらかに残滓として投棄されたものである。おそらくこの土壙は残滓としての貝殻のほかに、そのほかの食物の残飯をいっしょに投棄したおそらく一家族、一軒分規模のごみ捨て用の土壙と推定される。

## 5. 掘立柱建物

### 1号掘立柱建物

Ⅰ13区にあって、20m北は谷部となる。最寄りの住居址では、SB2・SA8・SA11・SA12がほぼ同距離にある。規模としては3間×3間の正方形プラン建物で、桁行・梁間3.5m床面積12.25㎡を測る。掘方は整った円形で、平均20㎝の直径をもって、深さ平均25㎝程度である。柱間寸法は平均して1.0mあり、ほぼ一定したものである。

### 2号掘立柱建物

SA8の北に隣接し、SB1から西へ約20mに位置する二面廂付掘立柱建物で、掘立柱建物中で最大の床面積（26.6㎡）をもつ。桁行方向を北西にもち、6間（6.7m）×3間（4.0m）の北側に4間、南側に3間の廂を付設すると考えられるものである。桁行の柱間は約1.0mを測る極端に短い間隔である。南側の廂部の柱穴は、桁行のそれと対応するが北側廂はふぞろいとなる。平均の直径35㎝の円形掘方は、深さ平均50㎝を測るしっかりしたものである。

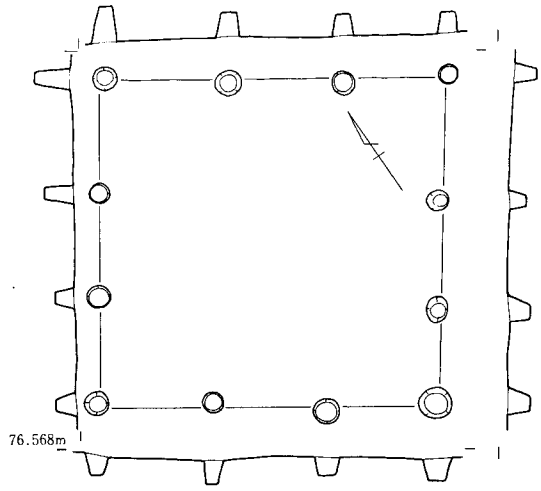
### 3号掘立柱建物

土壙群（SC1～6）の北、E6区にあり、最寄りの住居址は北15mにSA1、西30mにSA4、南東15mにSA7が位置する。桁行方向を北西にもつ2間×2間の建物で、桁行（7.8m、7.5m）、梁間（6.0m、6.6m）、床面積47.88㎡を測る。

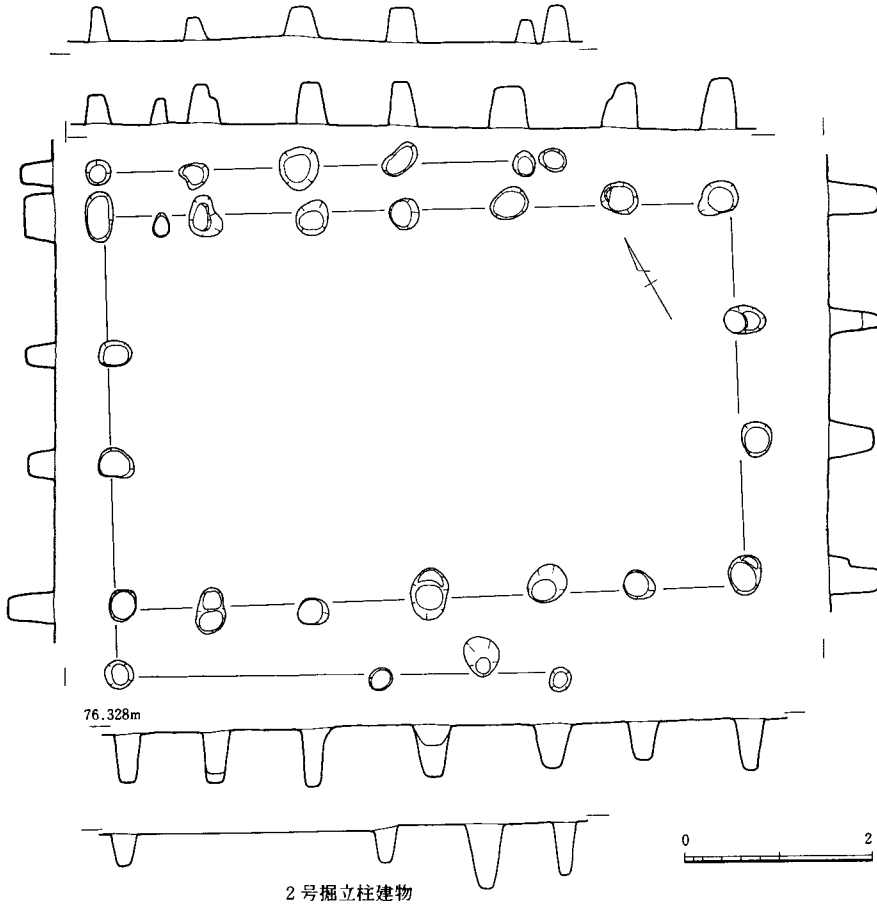
### 4号掘立柱建物

1号～3号掘立柱建物と唯一主軸方向を異にし、ほぼ南北方向に主軸をもつ。その位置も、もっとも東端にあり、13号竪穴住居に近接する。

梁間（1間）、桁行（4間）に、東側に3間の幅広い廂をもつ一面廂付掘立柱建物である。梁間2.75m、桁行4.9m（柱間寸法1.2m）、床面積13.2㎡、廂部4.2㎡を計測する。

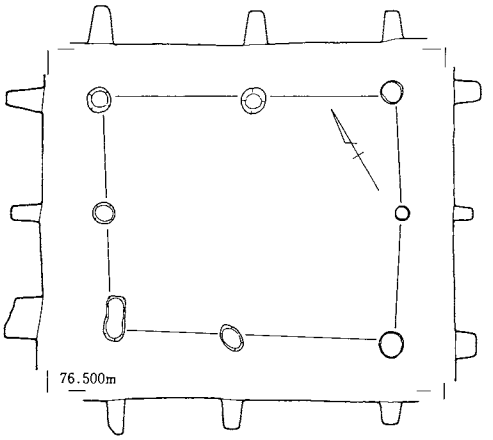



1 号掘立柱建物

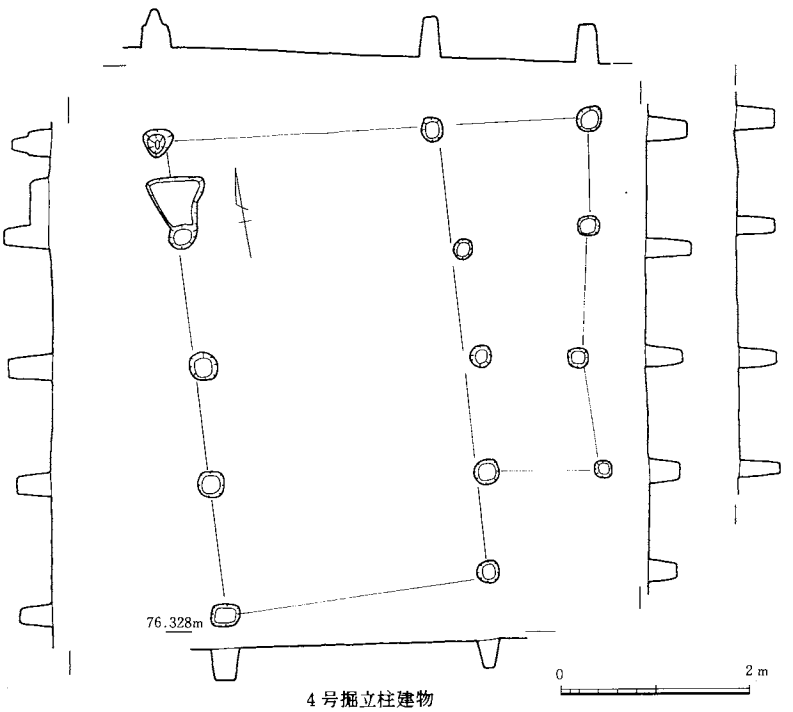



2 号掘立柱建物

**第39図　1 号・2 号掘立柱建物実測図(1/80)**




3号掘立柱建物




4号掘立柱建物

**第40図　3号・4号掘立柱建物実測図(1/80)**

# 第Ⅲ章　七又木遺跡

## 第１節　調査の概要

主要台地の東端にあり、西端にある銀代ヶ迫遺跡と同じように南へ舌状に張り出す平均標高74mの台地状地形である。調査地の北側最高位には国指定新田原古墳群に属する第34号・37号および未指定の古墳があって、この部分がもっとも原地形をよく残すものとおもわれる。原地形は、第34・37号墳一帯から南へかけてゆるやかに傾斜する。この舌状台地の南端の縁部には前方後円墳数基が位置している。

調査区は、第34・37号の西側950㎡、および南側の8,500㎡を設定した。検出した遺構には縄文時代早期の集石遺構、古墳周溝、円形周溝墓、土壙墓、溝状遺構、および前大戦中の旧陸軍航空基地関連の誘導路跡等である。

## 第２節　遺構と遺物

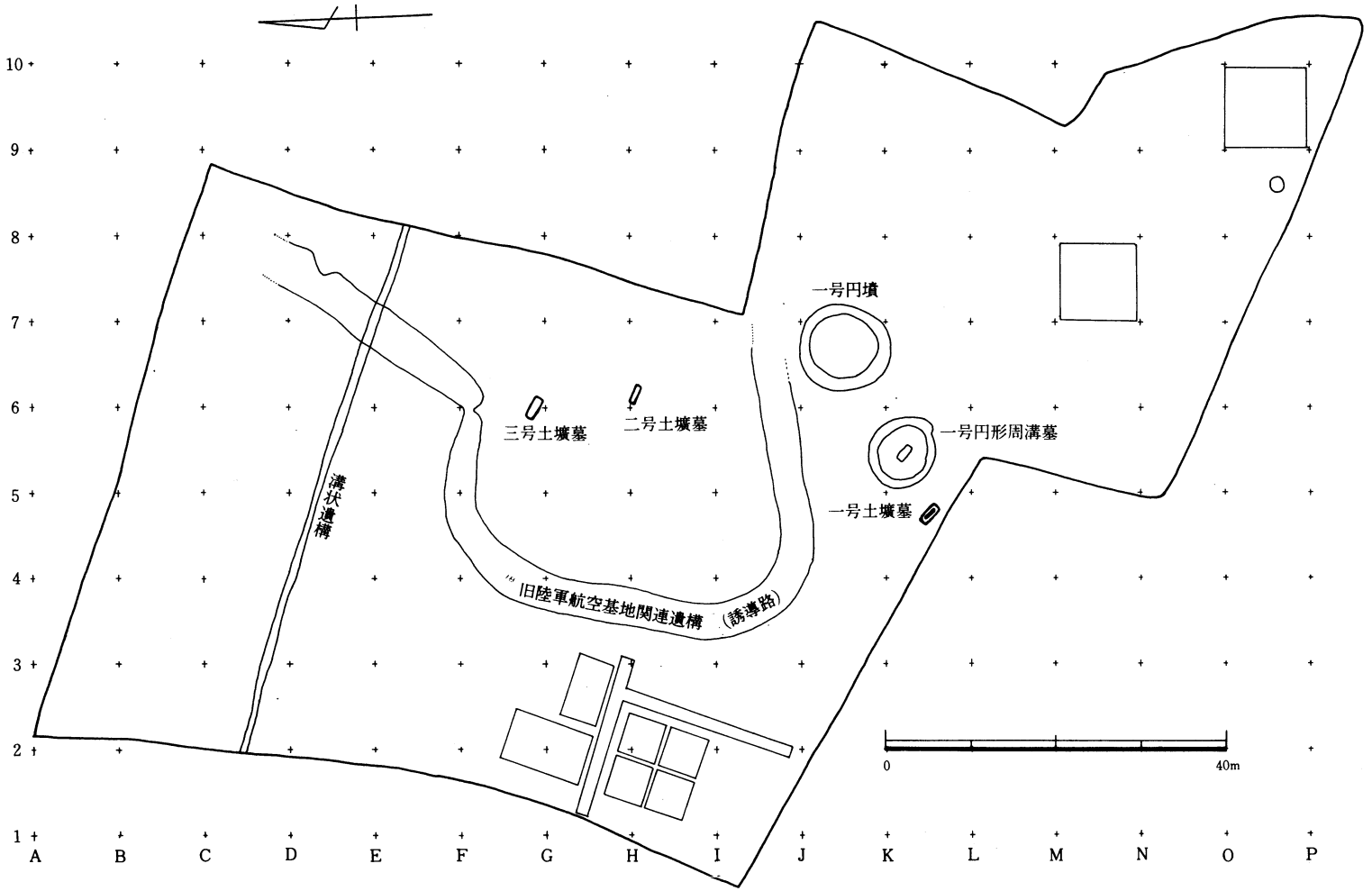
### 1.　集石遺構

本遺跡での集石遺構のあり方は、八幡上遺跡での諸相に準拠している。湧水点は台地南側の深い谷部にあり、その湧水地を眺む範囲に濃密な焼礫分布域が広がっている。焼礫分布域はⅠ区Ⅱ区Ⅲ区を中心として東にやや離れてⅤ区にも及ぶ。ただ、おそらく前者と後者は一体のものではなく、出土遺物によっては相照できないものの、焼礫域の密度、石材の相違によって時期差のあるものと推定している。

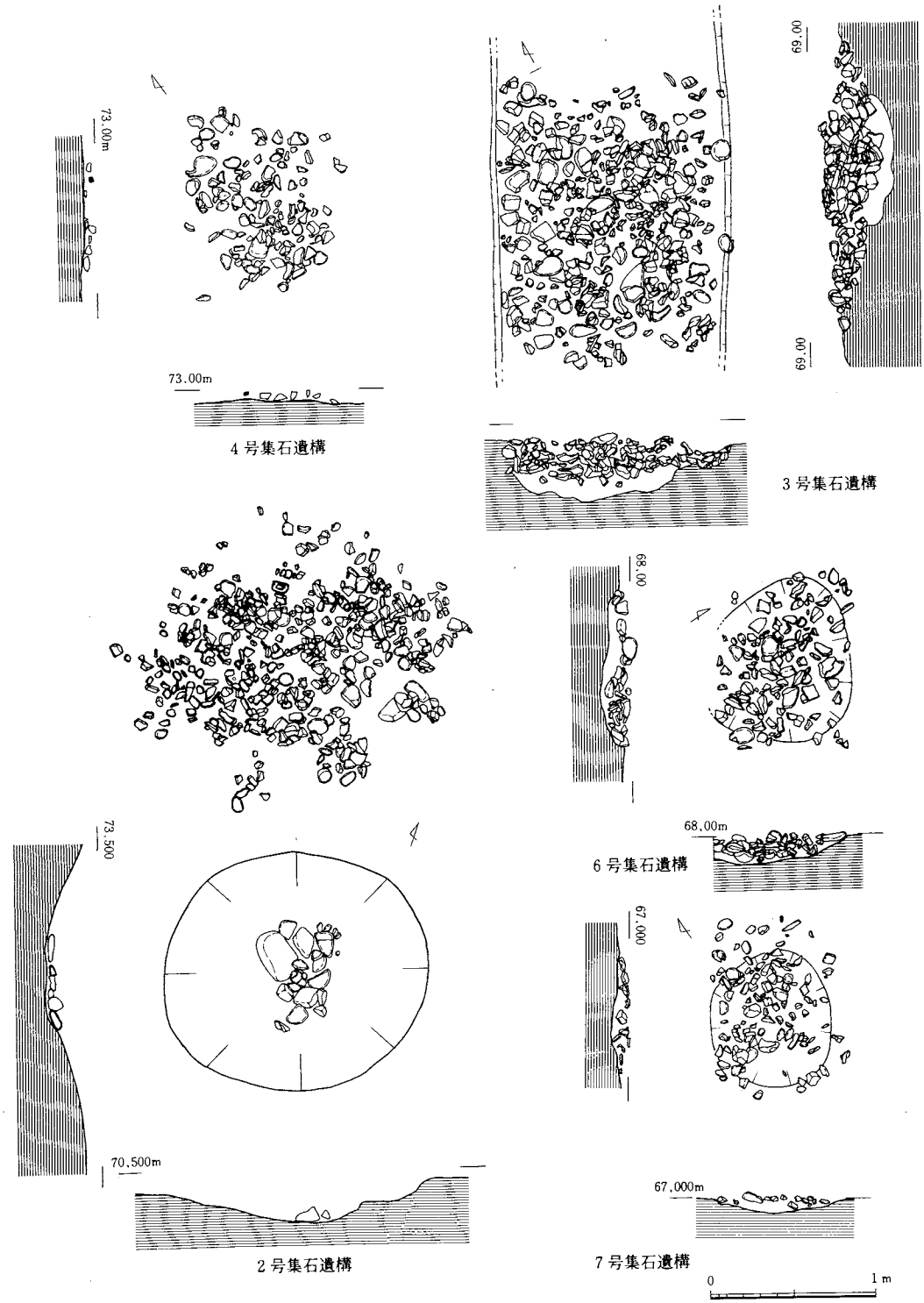
それぞれが近接して営まれている集石遺構は、集石下に土壙をもつもの13基、土壙をもたず面的に集積するもの２基がある。遺物は散礫中に出土したものである。

### 2.　一号円形周溝墓

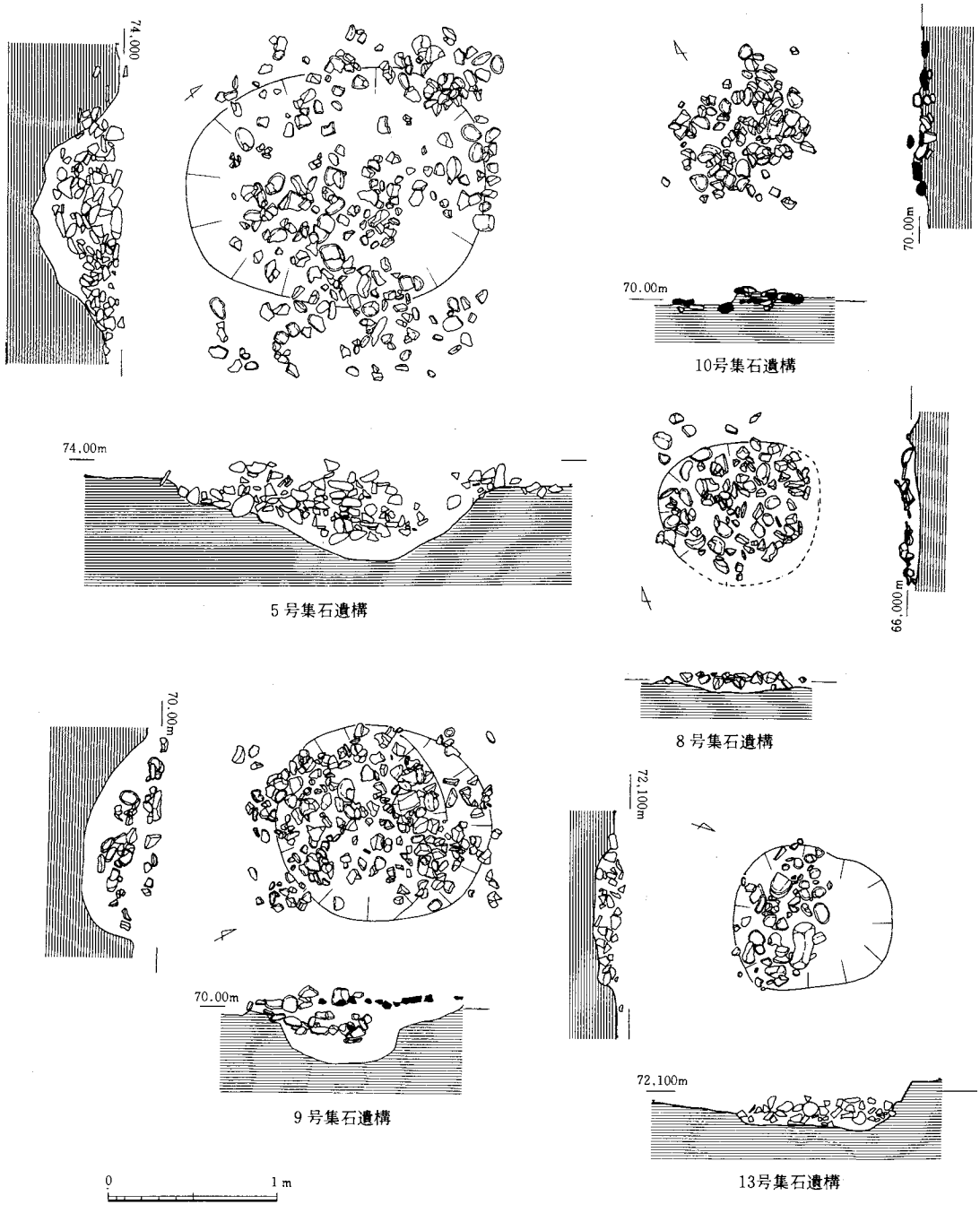
発掘区の南端にあり円形に全周する溝の中心に主体部を有する周溝墓である。本遺構の北東10.4m（主体部から円墳中心部まで）に１号円墳、８m南西には本遺構の主体部と主軸方向を同じくする１号土壙墓が隣接する。遺構は南北直径7.4m、東西直径8.4mのやや不整な円形周溝が幅70～110mで全周するものであり、周溝自体は上部大きく削平されて検出面（赤ホヤ火山層）から溝底までの深さは４㎝～12㎝ほどが遺存しているにとどまる。周溝の南南東隅は角ばっているがこれは最近の土壙である。遺物は、周溝埋土中より土師質の土器片２点が出土したのみで、主体部からの出土もない。周溝中央に掘りこまれた主体部は主軸をN－49°－Wにもつ310㎝×85㎝×36㎝（深さ）の方形状土壙に、東端の両側に主軸に直行



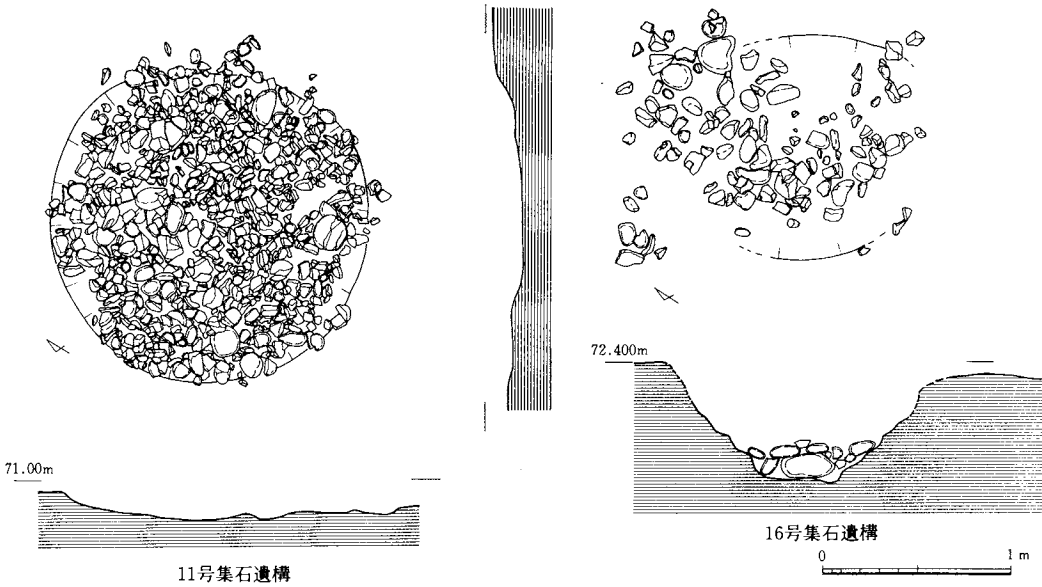

**第41図　七又木遺跡発掘区・遺構分布図**




**第42図　七又木遺跡集石遺構実測図(1)(1/40)**

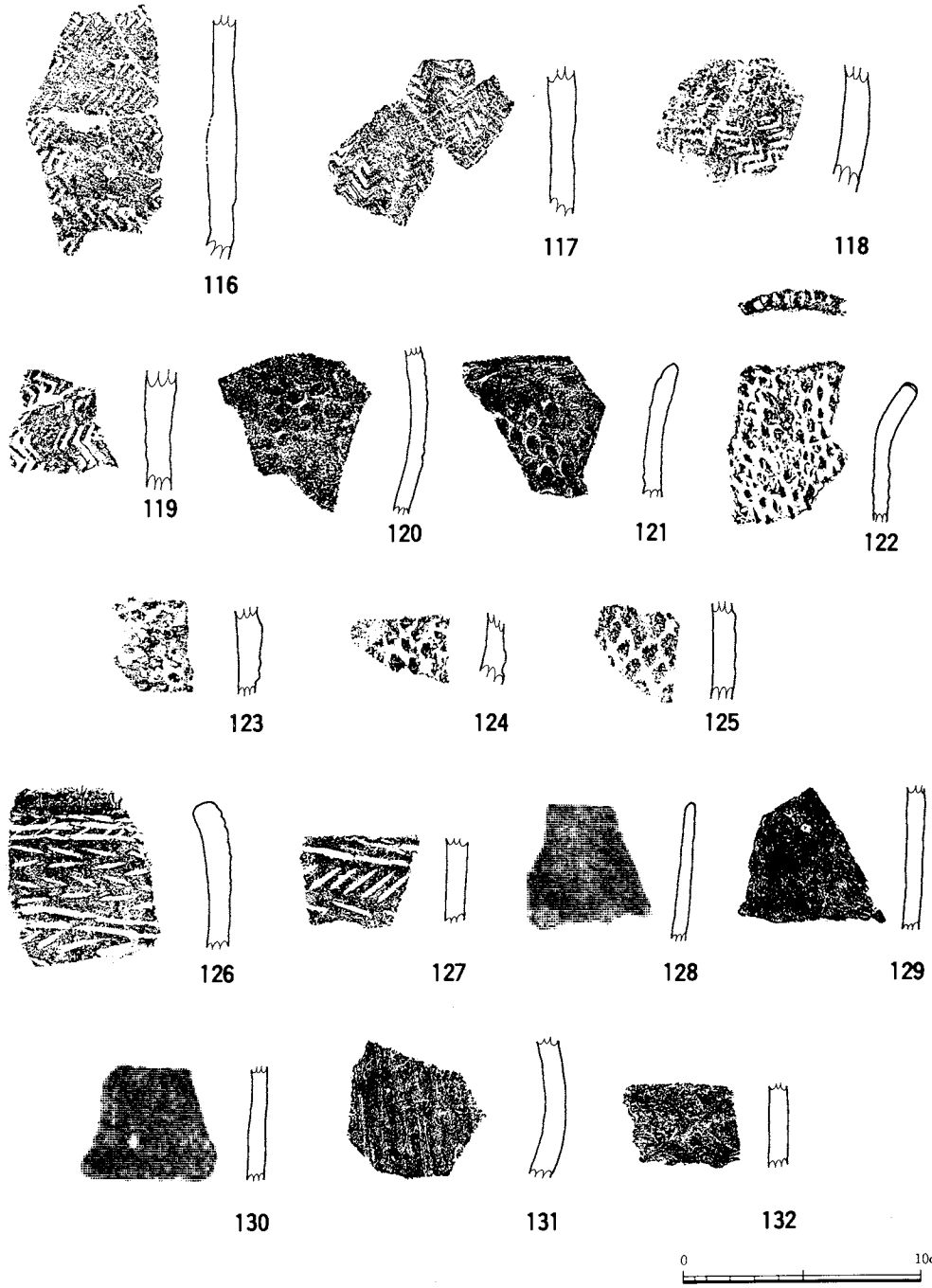



**第43図　七又木遺跡集石遺構実測図(2)(1/40)**

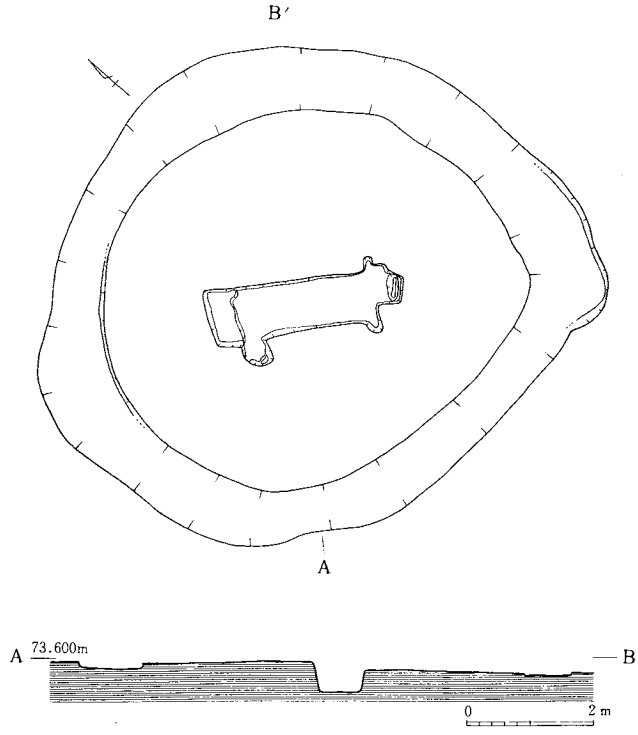



**第44図　七又木遺跡集石遺構実測図(3)(1/40)**

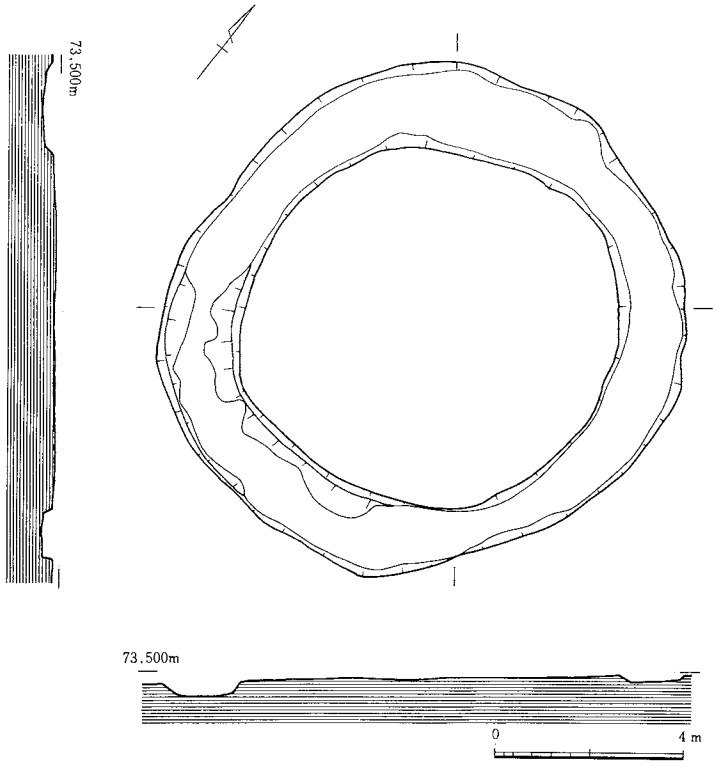
| 図面番号 | 遺物番号 | 器形 | 器部 | 器面調整 外面 | 器面調整 内面 | 器面調整 底面 | 文様 外面 | 文様 内面 | 胎土 | 色調 外面 | 色調 内面 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 45 | 116 | 深鉢 | 胴部片 | —— | ヨコナデ一部風化ぎみ | — | 山形押型文風化ぎみ | — | 1～2㎜前後の褐色、赤褐色、灰色。半透明の粒を含む。 | 明赤褐 | にぶい赤褐にぶい橙 | 良好 | 117と同一個体 |
| 45 | 117 | 〃 | 〃 | —— | ナデ | — | 山形押型文風化ぎみ | — | 上に同じ。 | 明赤褐 | にぶい赤褐にぶい橙 | 良好 | 116と同一個体 |
| 45 | 118 | 〃 | 〃 | —— | ナナメ方向のナデ | — | 山形押型文 | — | 0.5～1㎜前後の淡黄半透明、黒色で光る粒を含む。 | 橙 | にぶい橙 | 良好 | 119と同一個体 |
| 45 | 119 | 〃 | 〃 | —— | ナナメ方向のナデ | — | 山形押型文 | — | 上に同じ。 | 橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 118と同一個体 |
| 45 | 120 | 〃 | 〃 | —— | ナデ | — | 楕円押型文 | — | 1～2㎜前後の角閃石を多く、石英、長石を含む。 | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 良好 | |
| 45 | 121 | 〃 | 口縁 | ナデ | ナデ | — | 楕円押型文 | — | 1～2㎜前後の角閃石、石英を多く、長石を含む。 | にぶい橙 | にぶい黄橙 | 良好 | |
| 45 | 122 | 〃 | 〃 | —— | ナデ | — | タテ楕円押型文 | タテ沈線 | 3㎜大の長石を多く、細かい石英、角閃石を少量含む。 | 浅黄橙にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 良好 | 口唇部に刻目 |
| 45 | 123 | 〃 | 胴部片 | —— | ナデ | — | 楕円押型文風化ぎみ | — | 1～2㎜前後の黒色で光る粒、乳白色粒を含む。 | 浅黄橙 | 淡黄 | 良好 | 124・125と同一個体 |
| 45 | 124 | 〃 | 〃 | —— | ナデ | — | 楕円押型文 | — | 上に同じ。 | 浅黄橙 | 淡黄 | 良好 | 123・125と同一個体 |
| 45 | 125 | 〃 | 〃 | —— | ナデ | — | 楕円押型文 | — | 上に同じ。 | 浅黄橙 | 淡黄 | 良好 | 123・124と同一個体 |
| 45 | 126 | 〃 | 口縁 | —— | ヨコケズリ | — | 矢羽状線刻 | — | 1㎜前後の長石、金雲母を多く、石英を含む。 | 明褐 | 明褐 | 良好 | 127と同一個体 |
| 45 | 127 | 〃 | 胴部片 | —— | ヨコケズリ | — | 矢羽状線刻 | — | 上に同じ。 | 明褐 | 明褐 | 良好 | 126と同一個体 |
| 45 | 128 | 〃 | 口縁 | ナデ | ナデ | — | —— | — | 細かい長石、石英、茶色の粒を含む。 | 赤褐 | にぶい赤褐 | 硬 | |
| 45 | 129 | 〃 | 胴部片 | ナデ | ナデ | — | —— | — | 細かい石英、茶色の粒を含む。 | 明赤褐 | 赤褐 | 良好 | |
| 45 | 130 | 〃 | 〃 | ナデ | ナデ | — | —— | — | 細かい石英、長石を含む。 | 明赤褐 | 明褐 | 良好 | |
| 45 | 131 | 〃 | 〃 | ヨコナデ | ナデ | — | —— | — | 細かい長石、石英、1～2㎜前後の茶色の粒、5㎜大の茶色の石を含む。 | 橙 | にぶい赤褐 | 良好 | |
| 45 | 132 | 〃 | 〃 | 不定方向のナデ | ナデ | — | —— | — | 1～2㎜前後の長石を多く、石英、茶色の粒を含む。 | 橙 | 明赤褐 | 良好 | |




第45図　七又木遺跡出土縄文土器実測図（1/3）




第46図　七又木遺跡一号円形周溝墓実測図(1/120)




第47図　七又木遺跡一号円墳実測図(1/120)

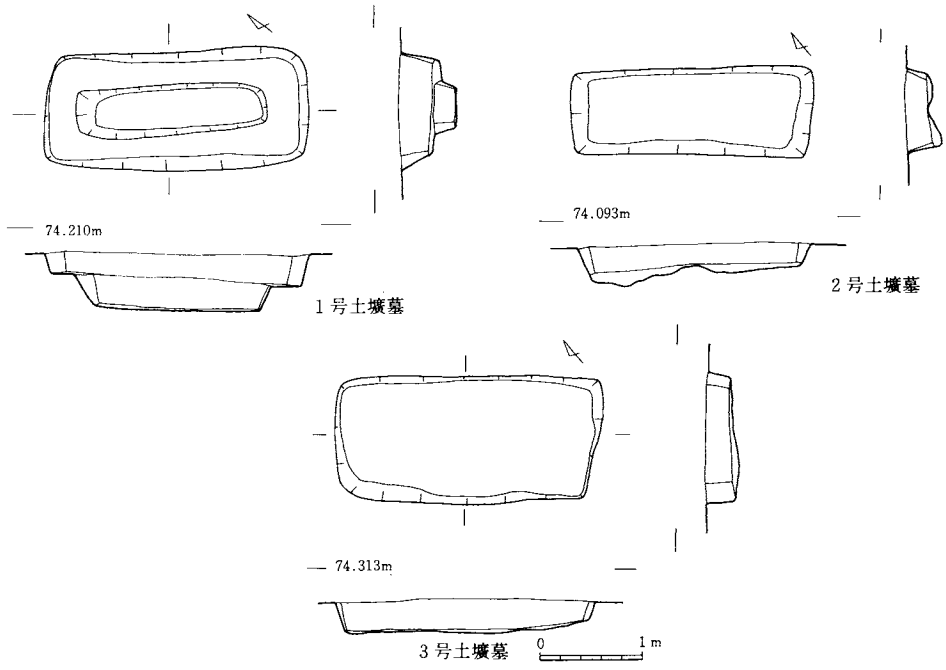
する不定な張り出しと、西端部にやや大きな一ヶ所の張り出し部を設ける。同じく西端は幅約20cmで一段高く（墓壙底より20cm）造られている。これは長側板が小口より内側にとりこまれる形の組合せ木棺の可能性が考えられる。

### 3. 一号円墳周溝

一号円形周溝墓から北東10mに隣接して検出された円形古墳の周溝である。墳丘部、主体部はすでに失われ、アカホヤ火山灰上面で検出された周溝も大幅に削られて最深部で25cmをはかるばかりである。計測値は、直径11m、周溝幅1.5～1.7mで周溝断面は逆台形状をしている。周溝内から遺物の出土はみられなかった。

### 4. 土壙墓

土壙墓は南北方向を軸線とする形で三基検出した。一号土壙墓は一号円形周溝墓の南西10mに隣接し、二号・三号土壙墓は一号土壙墓から北へ30m～40mのところに位置している。二号土壙墓と三号土壙墓はそれぞれから10m離れて、土壙主軸を一号土壙墓とともにほぼ同じくしている。墓壙形状には2タイプあり、二・三号土壙墓の形態が単純な一段掘りであるのに対して、一号土壙墓のそれは墓壙の中央を長方形に一段深く掘りこむ二段掘り込みタイプである。一・二・三号、いずれについても遺物は検出されていない。




**第48図　七又木遺跡土壙実測図**

表7　土壙墓計測表

| 項目 / 号 | 検出地区 | 規　模（主軸×幅×深さ）m | 主軸方位 | 副葬品 | タイプ |
|---|---|---|---|---|---|
| 1号土壙墓 | K 6 | 2.6×1.2×0.2～0.3 外<br>(1.85×0.5×0.2～0.3)内 | N－51°－W | な　し | 二段掘りこみ |
| 2号土壙墓 | H 6 | 2.35×0.85×0.3～0.35 | N－30°－W | な　し | |
| 3号土壙墓 | F 6 | 2.6×1.3×0.3 | N－30°－W | な　し | |

七又木遺跡集石遺構計測表

| 号 | 遺構規模<br>（長径×短径×深さ）cm | 掘込み | 床面配石 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 180×170×35 | 有<br>（円） | 無 | 広範囲に密に集石する。 |
| 2 | 170×170 | 有<br>（円） | 有 | 掘込みの床面中央に大円礫を敷いている。 |
| 3 | 150×(120＋α)×35～40 | 有<br>（不詳） | 無 | トレンチ内にかかったもので、完掘していない。礫は掘込み中に密に充塡されている。 |
| 4 | 130×(100＋α)×（－） | 無 | 無 | 拳大の円礫の他、多面に破砕して複雑な形状をした小角礫が多い。平面集石タイプ。 |
| 5 | (150＋α)×(150＋α)<br>×50 | 有<br>（円） | 無 | 深い掘込みをもち、床面ちかくまで、びっしり礫が充塡されている。礫間の埋土は暗褐色。 |
| 6 | 110×(95＋α)×15～18 | 有<br>（不整円） | 無 | 散礫と遺構の境が不明瞭 |
| 7 | 90×80×10 | 有<br>（不整円） | 無 | 礫の点数少なく、小規模に集積する。掘込みも浅い。 |
| 8 | 90×90×10 | 有<br>（不整円） | 無 | 小規模のわりには大礫が多い。礫の点数は少ないが比較的密に集積している。 |
| 9 | 150×110×50 | 有<br>（楕円） | 無 | 二段掘込みとなっており、土坑が深い。床面付近の埋土層は黄灰褐色の雲状斑がみとめられる。灰か。 |
| 10 | 90×80×（－） | 無 | 無 | 平面集積タイプ。床面の明褐色土に炭化粒が混る。 |
| 11 | 180×175×11 | 有<br>（円） | 無 | 広範囲に、かつ密に集積する。規模に比して浅い掘込みが特徴である。稀に大礫が含まれるが、その他の礫は比較的大きさがそろっている。 |
| 13 | 90×90×15 | 有<br>（不整円） | 無 | 礫に大、中、小礫が混在。 |
| 16 | 150×130×60 | 有<br>（不整円） | 有 | 深い掘込みがあり、床中央に偏平円礫を敷いている。その他の礫も平均よりやや大きめの礫を使用している。 |

# 第Ⅳ章　銀代ヶ迫遺跡

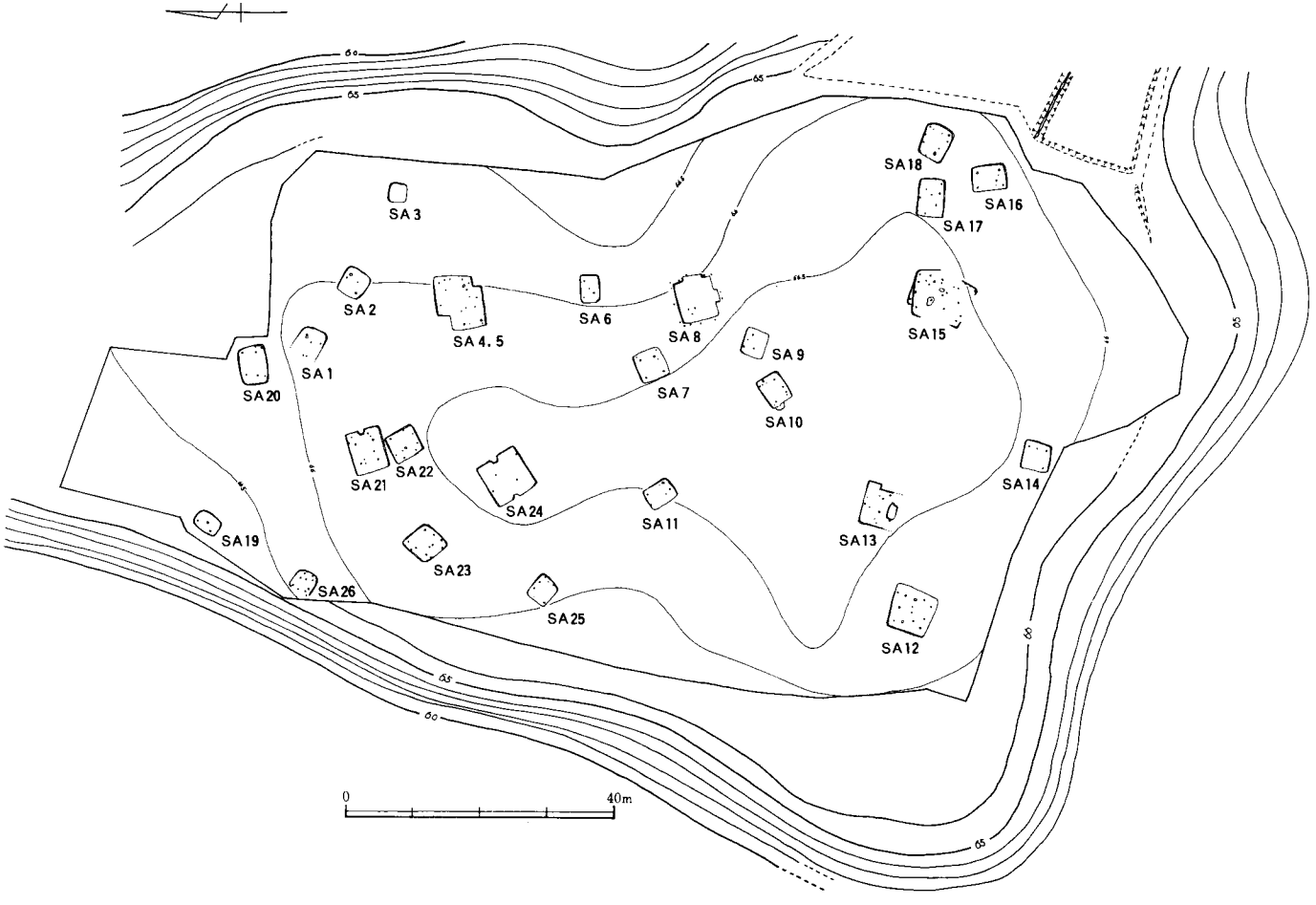
## 第１節　調査の概要

本遺跡は七又木地区遺跡のうら、八幡上・七又木遺跡のある主要な丘陵状台地の西端から約10m下位にあるもので、地形上は南へ延びる舌状丘陵となっている。

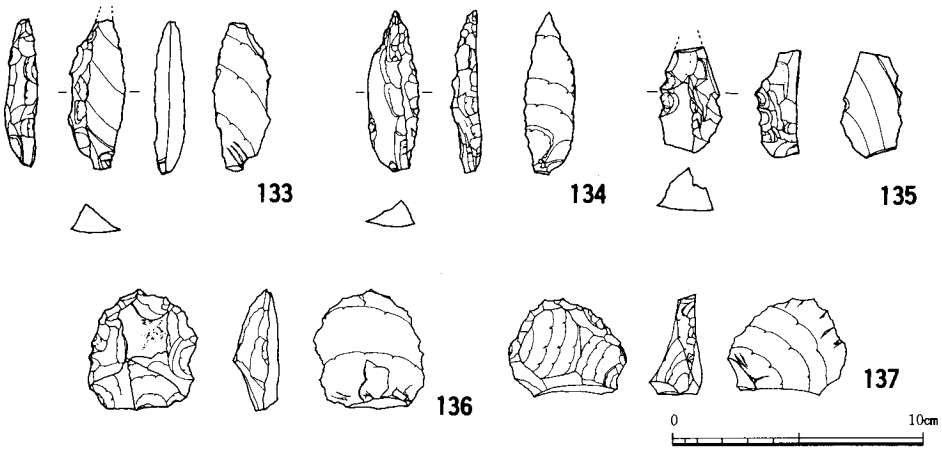
この丘陵は、北端がくびれ、南端は沖積地へと落ちて約10,000㎡の独立した丘陵台地状を呈している。

調査地は全面にわたって、耕作による削平がみられ、遺構の上部はカットされている。調査によって検出した遺構には、縄文早期の集石遺構、弥生時代後期中葉の竪穴住居19軒、古墳時代の竪穴住居７軒、土壙２基がある。住居址は丘陵の全面にわたって、とくに密集することもなく散漫に分布している。その中で、古墳時代の７軒の住居址は丘陵の北端（入口部？）寄りに偏って群集する傾向が窺える。弥生時代の住居は、基本的には方形プランを基調とするものが多くを占めているが、住居の一辺に長方形の張り出し区画を設けるもの(SA８・SA10・SA13)や、住居の中心に向かって突き出す突出壁を設けるもの（SA21・SA24）等の特徴をもつものが若干みられる。

各住居址から出土する土器により、時期的には弥生時代後期中葉を中心にそれよりやや新しい段階の時期にあてられ、時期差は少ない。出土した土器のうち甕形土器では「く」の字口縁直下に絡縄突帯を付ける甕と、絡縄突帯の代わりに線刻の斜線を刻する甕が主体となる。壺形土器では肩部に数条の刻目のない突帯を巡らす単口縁壺で、複合縁をもつ甕は出土していない。石器では、二孔を穿つ石庖丁、両端二ヶ所にえぐりのある石庖丁、磨製石鏃、磨製石斧、磨石、砥石等の出土が主なものである。



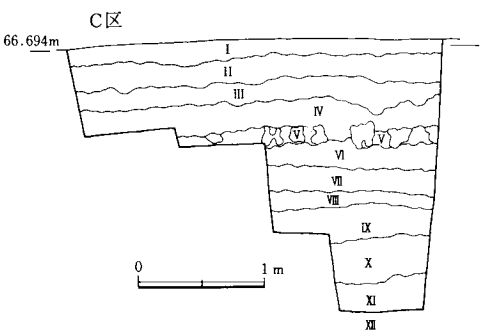

第49図　銀代ヶ迫遺跡遺構分布図




第50図　銀代ヶ迫遺跡出土旧石器実測図(1/3)

## 第2節　先土器時代面の調査

試掘調査の段階においては、先土器時代にあたる遺構・遺物の検出は認められなかったのであるが、調査地一帯はこれまでに数々の表採資料が記録されている新田原台地の延長上にあり、しかも自然環境にも絶好の地であるためその検出は十分に予想されるものであった。本調査において、表土を除去したあと赤ホヤ火山灰で揃えたところ、数箇所のいわやる風倒木痕とおもわれる地層の逆転箇所が確認され、そこでは下層の明褐色粘性土が楕円形状にせりだしていた。その明褐色粘性土中にたまたま硅質凝灰岩の剥片をみとめたので先土器時代の包含層が遺存していることが確認された。調査箇所は、調査期間の制約上、包含層までに人力で到達できる箇所を重点的に選定している。当遺跡の土層は、住居址プランの検出困難であったことでもわかるようにこの地域の基本的な層序に準拠しつつも、曖昧な二次的な土層が介在しており台地縁辺部特有の複雑な土層状況を呈しているようにおもわれる。なお、




| | | |
|---|---|---|
| I | 黄橙色火山灰 | 赤ホヤである。ブロック状にたて割れする。下層との層界斬移。 |
| II | 暗黒褐色土 | 粘性の少ない。かたくしまった層である。乾燥するとボソボソしてヒビ割れる。いわゆる黒ニガ土である。 |
| III | 暗褐色土 | IIよりはやわらかいがしまっている。粘性ややある。明褐色土が下層にゆくにしたがって混りはじめる。 |
| IV | 褐色土 | IIIよりさらに明褐色土が雲状に混り、褐色を呈する。さらにやわらかい層で、粘性が増す。 |
| V | 黒褐色硬土 | タテ方向の大ブロック状(波状ブロック)となりひじょうに堅い。ブロック中に5.0mm大のオレンジ色、白色パミスを数多く含む。火山灰とおもわれる |
| VI | 褐色土 | IV層によく似ている。粘性がつよく、少しやわらかい。明褐色の雲状斑があるがIVにくらべてこまかい。 |
| VII | 赤橙褐色土 | VIよりさらに明るい色調で、明褐色雲状斑もさらにちみつである。さらに粘性が高い。 |
| VIII | 黄褐色土 | 粘性つよく、さらにしまり、シルト質となる1.0mm大の礫を含む、しまっている。 |
| IX | 白茶褐色土 | 粘性つよく、さらにしまり、シルト質である。0.5~1.0mm大の礫を多く含んでいる。 |
| X | 白茶褐色土 | IX層より、やや黄味を帯びる。ひじょうに硬くしまっている。0.5~1.0cm大の礫を多く含んでいる。 |
| XI | 〃 | X層より、さらに黄味をよび、白色味を帯びた色調で、さらにかたくしまっている。礫の大きさが大となり、多く含む。1.0cm~2.0cm大。 |
| XII | 〃 | XI層より、大きな礫。拳大~人頭大の礫を含むようになる。 |

第51図　銀代ヶ迫遺跡土層断面図(1/60)

当調査区では、ＡＴ層はのっておらず、最下層は礫層となっている。

## 1. 遺　物

### ナイフ形石器

50図133は縦長の剝片を素材にしている。薄く鋭利な左辺をそのまま刃部とし、右側の一面は両方向から急角度の全面剝離を加え、とくに先端は左辺側からも剝離を加えて尖頭状に成形している。バルブは基部にあり平坦打面はそのまま残されている。器長6.4cm、最大幅2.05cm、最大厚1.05cm。暗灰色頁岩製である。

50図134は、縦長の剝片を素材にしている。左側の一面を両方向から急角度の剝離を加えて全面整形し、右側辺を基部をのぞいて全面刃部としている。先端部は折れて欠損。つまみ状の小さな基部には平坦打面がそのままのこされている。バルブは基部にある。器長（現存長）6.0cm、最大幅2.1cm、最大厚1.25cm。粒子のやや粗い暗灰色の頁岩製である。

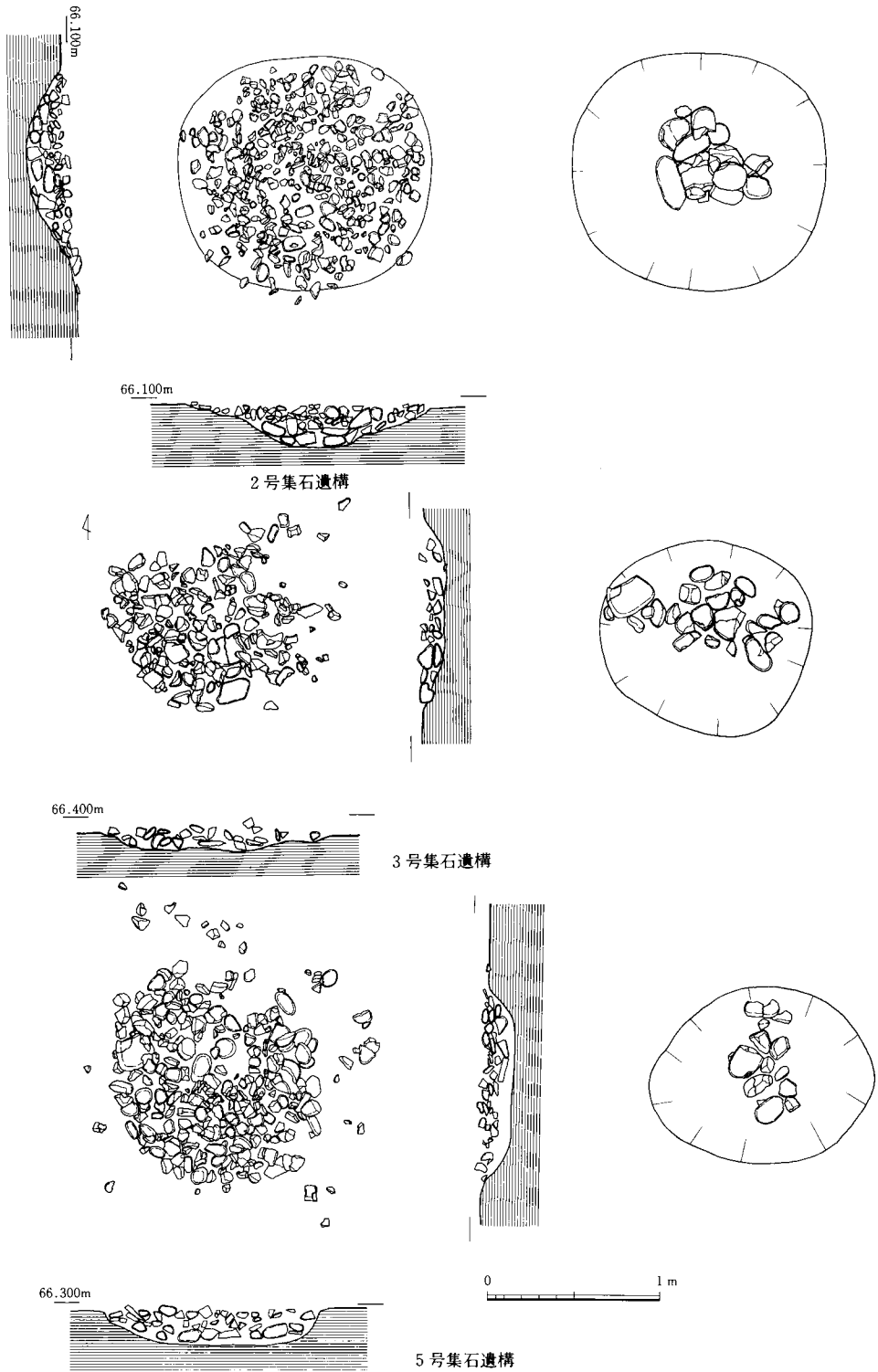
50図135は、断面正三角形のぶ厚い縦長剝片を素材とするもので先端は欠損、基部も折れたものと推定される。右辺側の一面は左右両方向からの急角度の剝離、左辺側の一面は一方向からだけの剝離が施されている。いずれの剝離も粗雑である。器長（現存長）4.2cm、最大幅2.3cm、最大厚1.65cm。

灰白色の硅質凝灰岩製である。

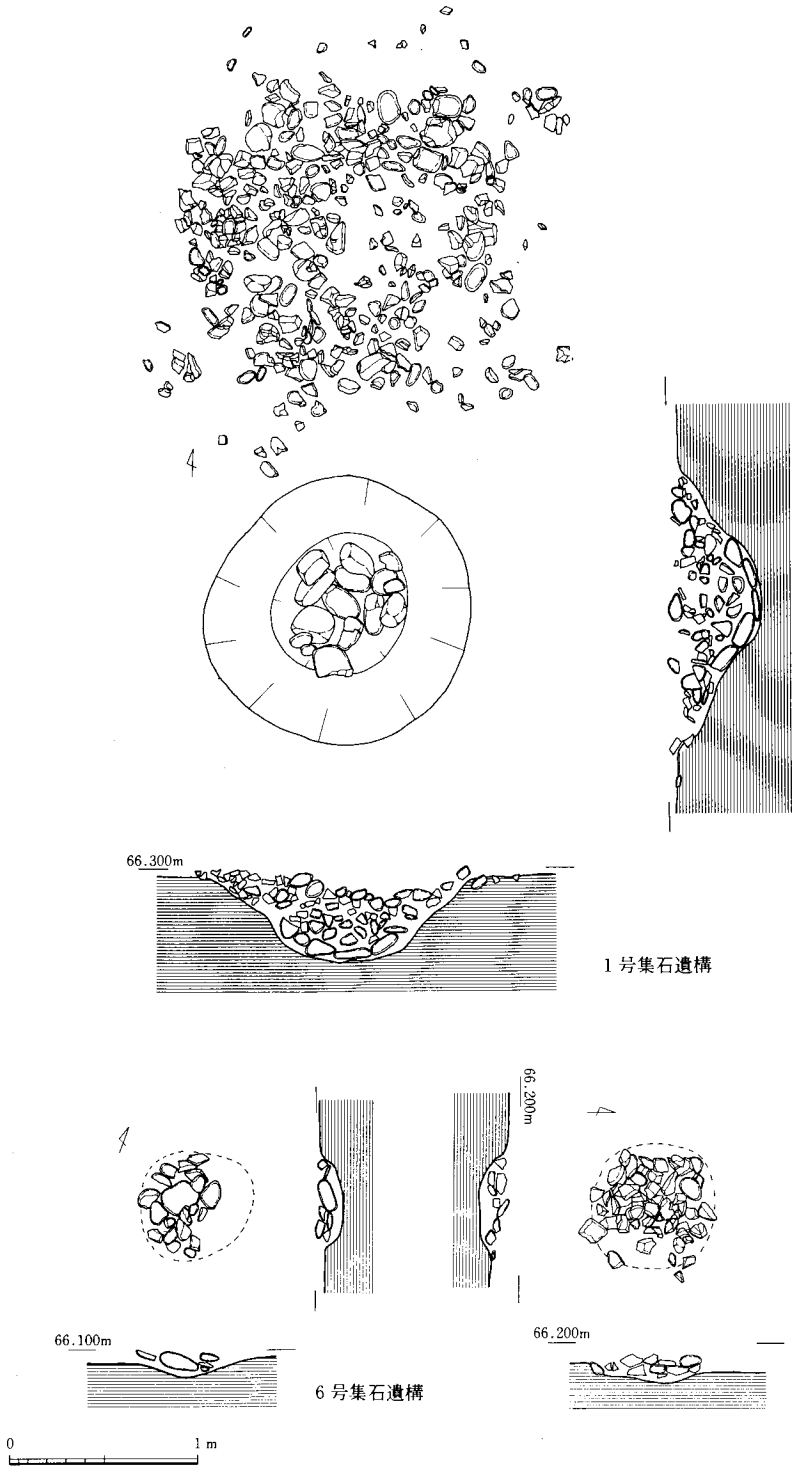
### ラウンドスクレイパー

円形掻器は、その頂点にすべて平坦打面を、腹面には明瞭なバルブをそのまま残し、平坦打面部分に主要剝離面からの急角度の剝離を施さないところに共通した特徴をみいだすことができる。

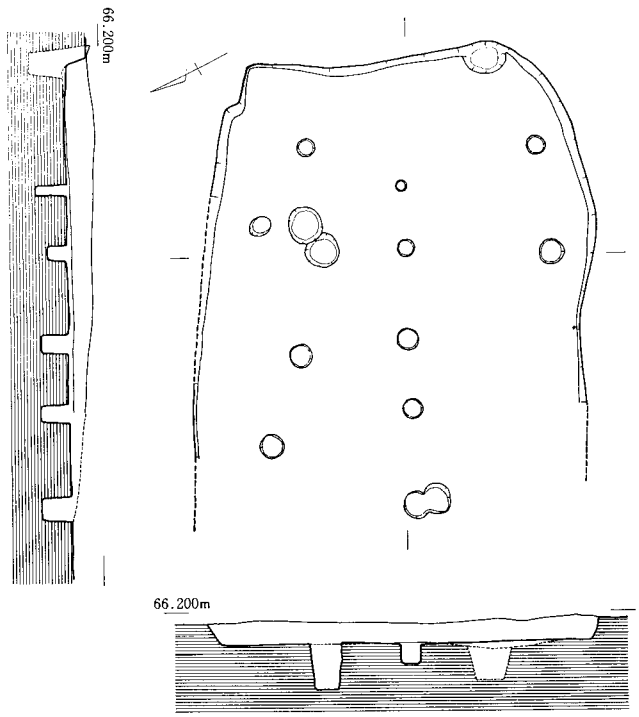
50図136は、長径4.8cm、短径4.1cm、最大厚1.8cmで暗青灰色の頁岩製、50図137は、平坦打面脇に大きな折れ面があり、半円形状を呈する。長径4.8cm、最大厚1.7cmの青灰色頁岩製。



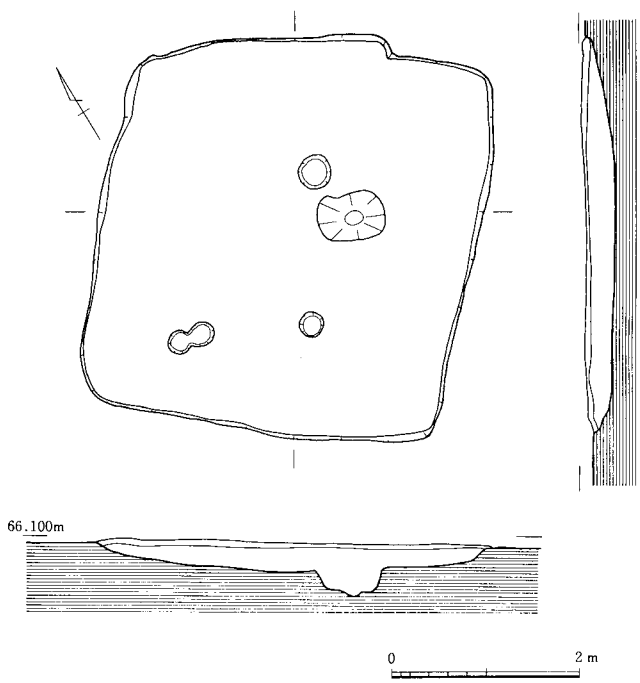

**第52図　銀代ヶ迫遺跡集石遺構実測図(1)(1/40)**



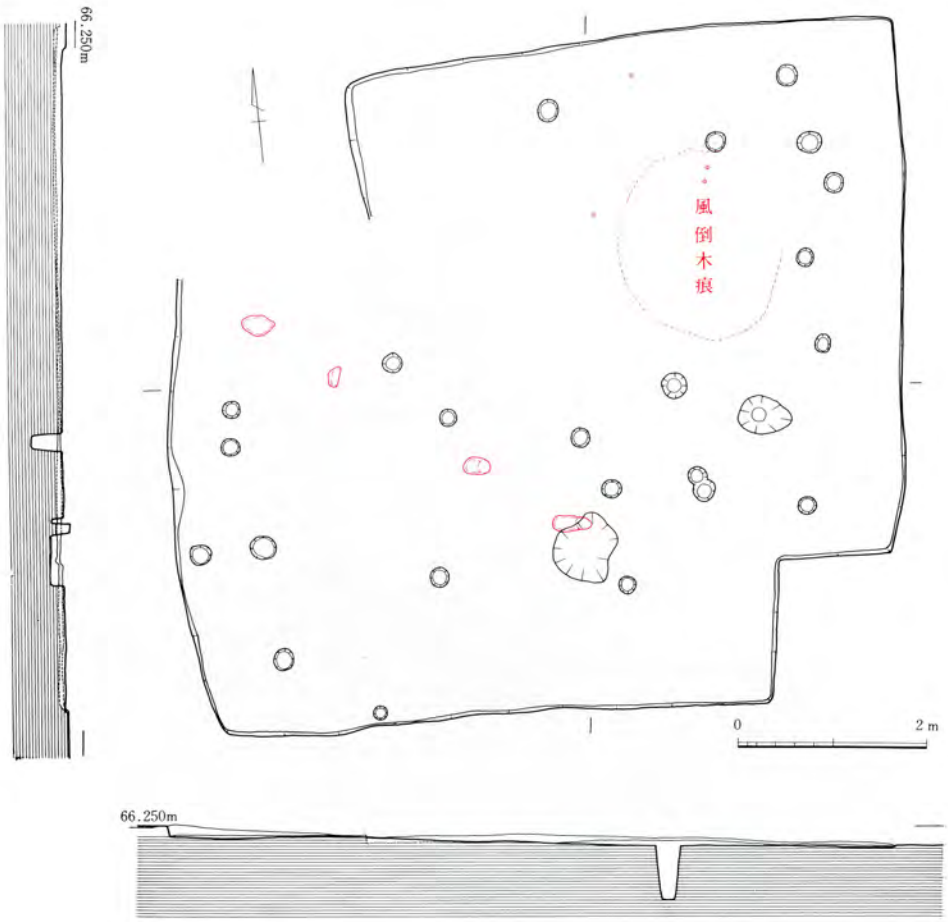

**第53図　銀代ヶ迫遺跡集石遺構実測図(2)(1/40)**



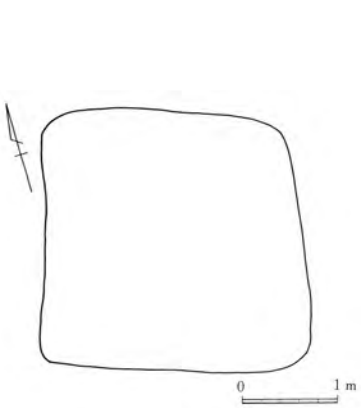

第54図　銀代ヶ迫遺跡１号竪穴住居実測図



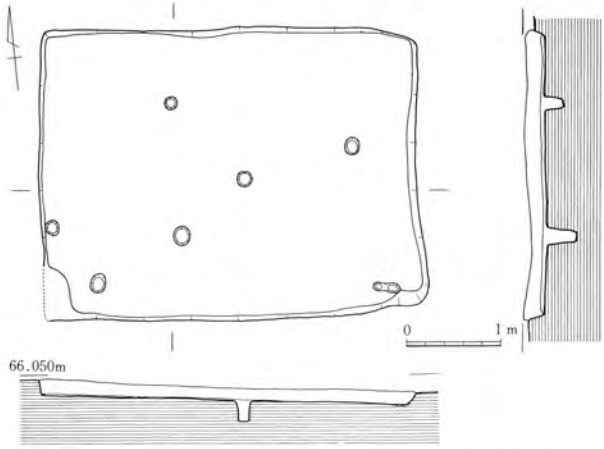

第55図　銀代ヶ迫遺跡２号竪穴住居実測図（1/80）



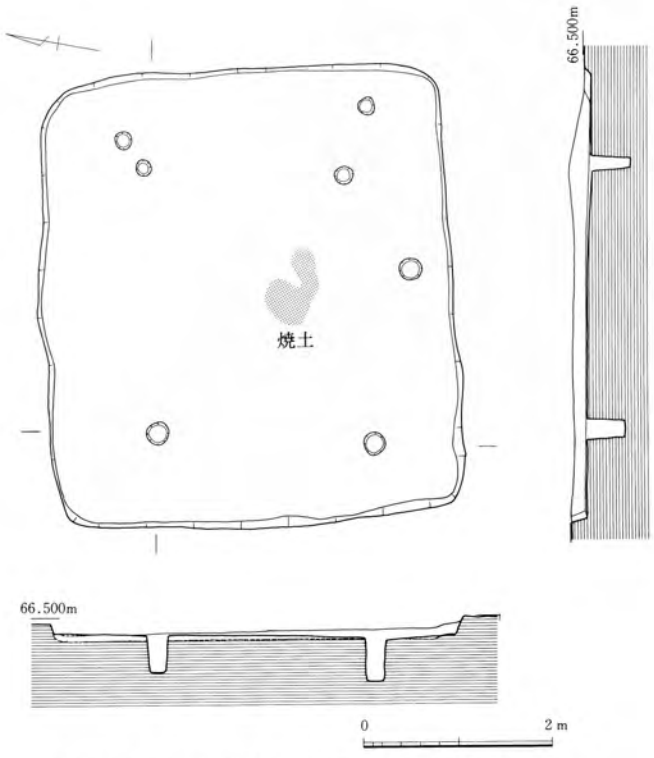

第56図　銀代ヶ迫遺跡４・５号竪穴住居実測図(1/80)



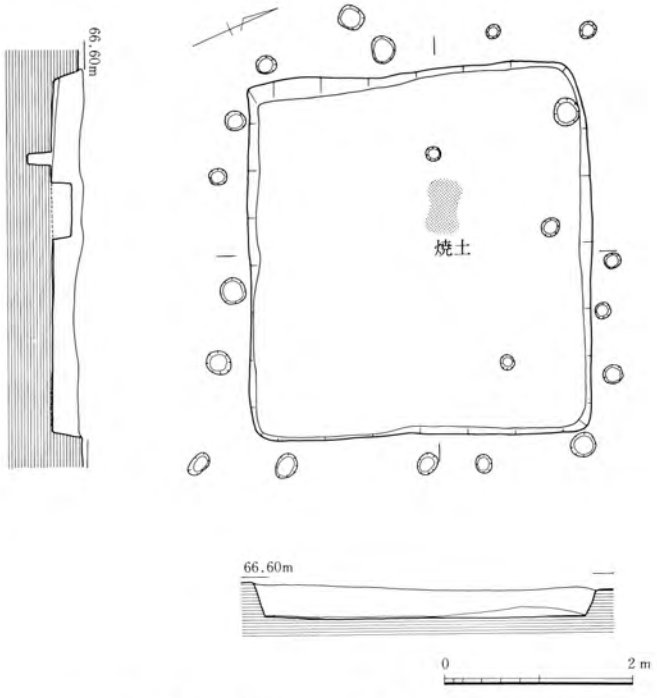

第57図　銀代ヶ迫遺跡３号竪穴住居実測図(1/80)




第58図　銀代ヶ迫遺跡６号竪穴住居実測図(1/80)




第59図　銀代ヶ迫遺跡７号竪穴住居実測図（1/80）




第60図　銀代ヶ迫遺跡９号竪穴住居実測図（1/80）

## 第3節　遺　　構

### 1.　竪穴住居

#### 1号竪穴住居

発掘区の北端に位置し、ほぼ同規模で同時期（古墳時代）の20号住居の南に隣接する。南北4.0m＋α、東西4.0mの長方形プランと推定されるが、西辺にかけては著しく削平されて壁は遺存していない。東辺の壁が残存している付近での検出面から床面までの深さは約30cmを計測する。住居内に多くの柱穴を検出しているが、床面と柱穴埋土が不明瞭、やや不確実で、基本となる柱穴を検出しえなかった。焼土面は検出されなかった。

#### 2号竪穴住居

発掘区の北端ちかくにあり、1号・3号・4号・5号に隣接している。検出面の二次的赤ホヤ火山灰と住居埋土とが極めて類似しており、検出が困難であった。55図にみる実測図ではやや床面まで不確実で掘りすぎである。同様に柱穴埋土も床面土に似かより、やや不確実。

南北辺3.9m、東西辺4.1mを計測する床面積14.6㎡の方形小型住居である。遺物は胴部細片が数点出土したにとどまる。

#### 3号竪穴住居

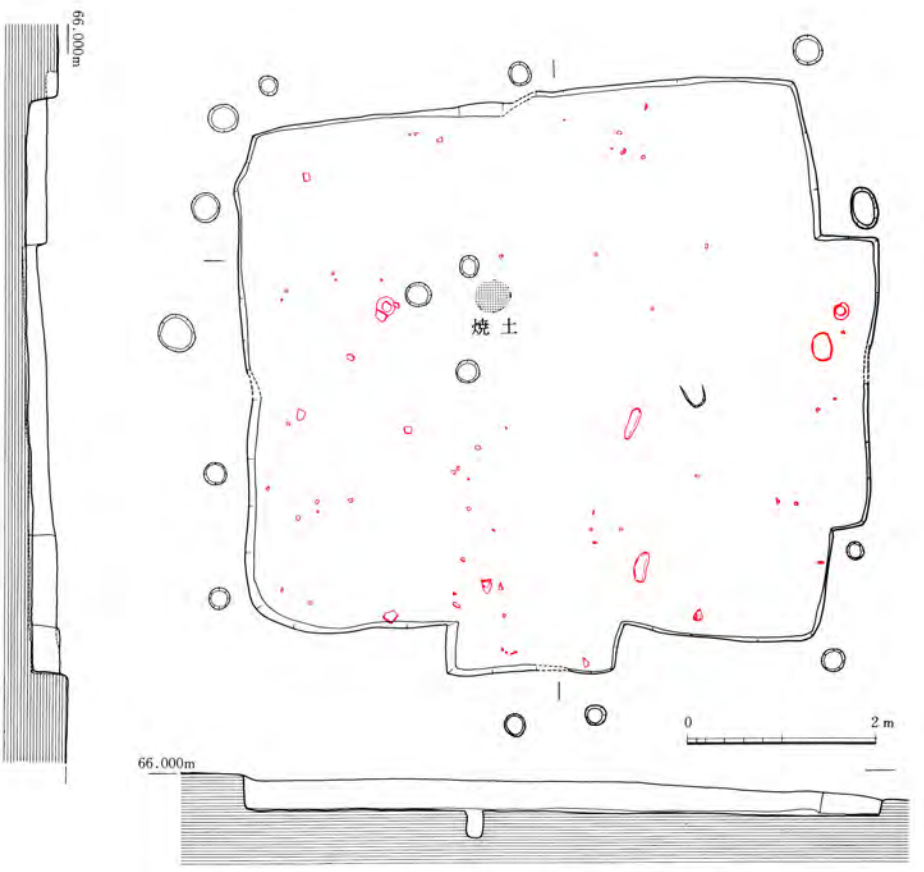
発掘区の北端にちかく、しかも東端縁に位置する。南北辺2.6m、東西2.7mのほぼ正方形状を呈する小規模な小型住居である。当住居は削平著しく、また埋土と周辺土層との分別も困難であったため、かろうじて輪郭を検出確認したのみで、明瞭な床面、壁高を検出することができなかった。

#### 4号・5号竪穴住居

唯一、重複して検出された住居址である。2号・6号住居に隣接している。上部の削平が著しく、検出面からの深さわずか3～5cmである。検出面と住居址埋土の色調にほとんど変化なく、切り合い関係をつかめていない。床面を精査しているが、土色に変化なく柱穴も検出し得なかった。

#### 6号竪穴住居

発掘区中央付近、6、7、8、9、10、11号住居の立地する一群中にあり、中央よりやや東側にある。住居の規模としては小型の部類に属し、長辺4.1m、短辺3.1mの長方形プランを呈する。西端の隅部は30cm×50cmの範囲で掘り残しがみられる。この住居も削平が著しく、検出面から床面まで平均15cmほどである。床面はやや粘性のある明褐色土、住居埋土は




**第61図　銀代ヶ迫遺跡8号竪穴住居実測図(1/80)**

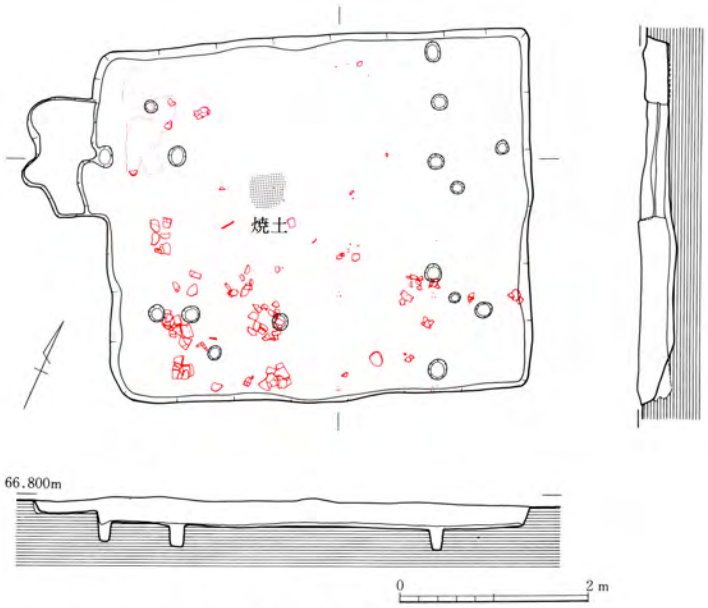
粘性のほとんどない明灰褐色土で、床面土との見極めが困難であった。7ヶ所検出された柱穴は規則性を欠いている。

7号竪穴住居

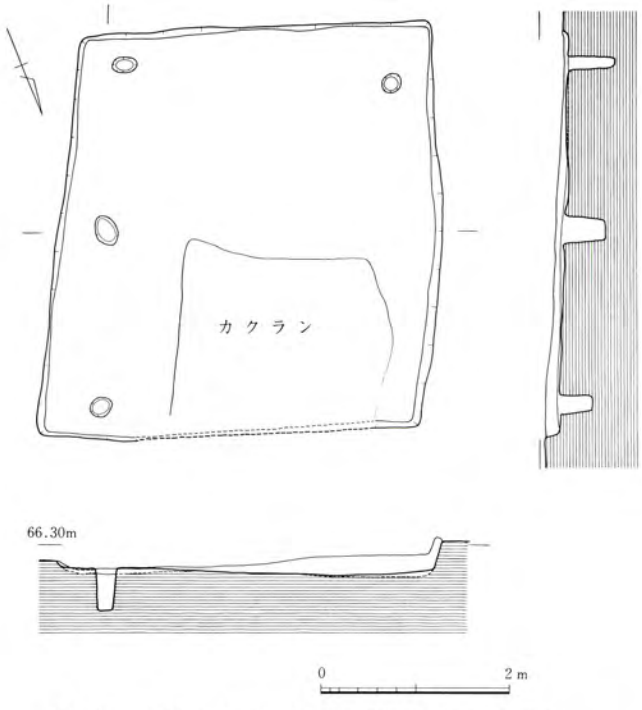
C区発掘区のほぼ中央に位置するもので、6号住居、8号住居（突出区画有）に隣接している。4.6m×4.2mのほぼ正方形を呈するが、上部を大きく削平されて、検出面から床面まで、わずか8～10cmほどが遺存しているにすぎない。対角線上の配列で基本的には四柱穴を配するものと推定される。柱穴の平均値は直径24cm、深さ35cmである。住居のほぼ中央に焼土面が検出された。

8号竪穴住居

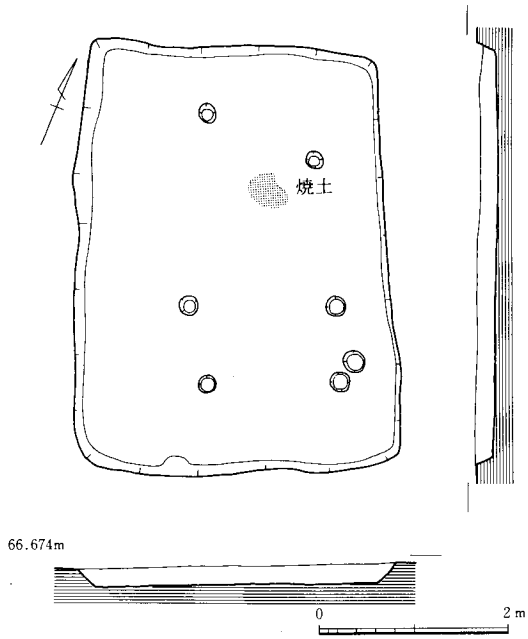
発掘区のほぼ中央、やや東寄りF9区にあり最寄りに7号・9号住居が隣接している。南北辺5.9m、東西6.1mのほぼ正方形のプランに二ヶ所の張り出し区画を有する平均より大型



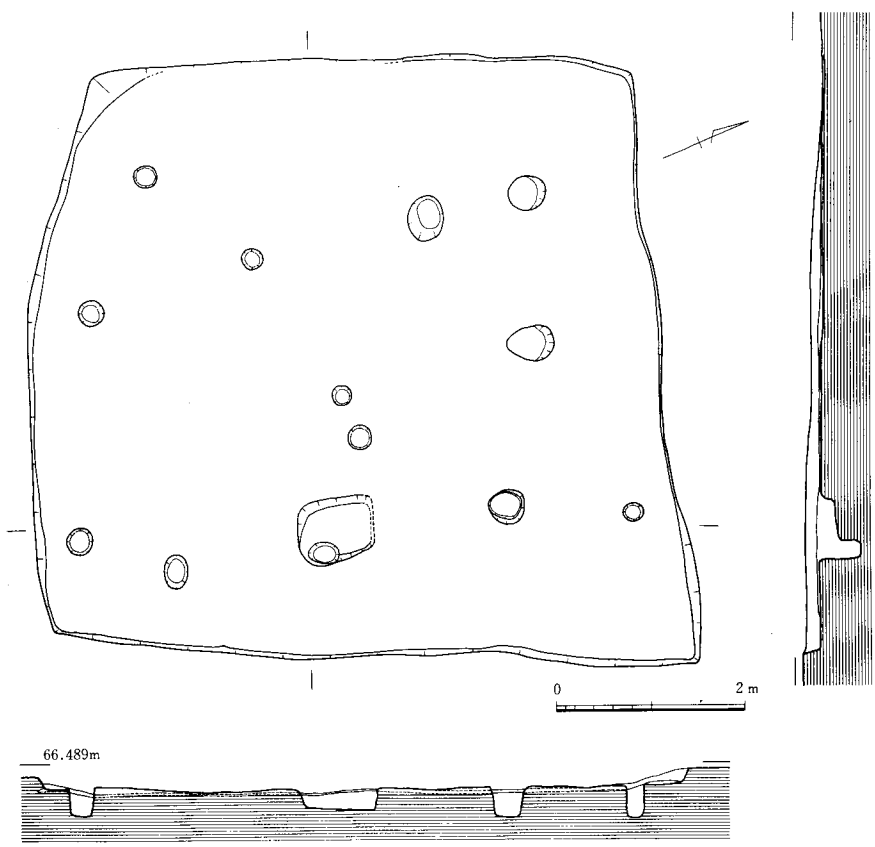

第62図　銀代ヶ迫遺跡10号竪穴住居実測図(1/80)



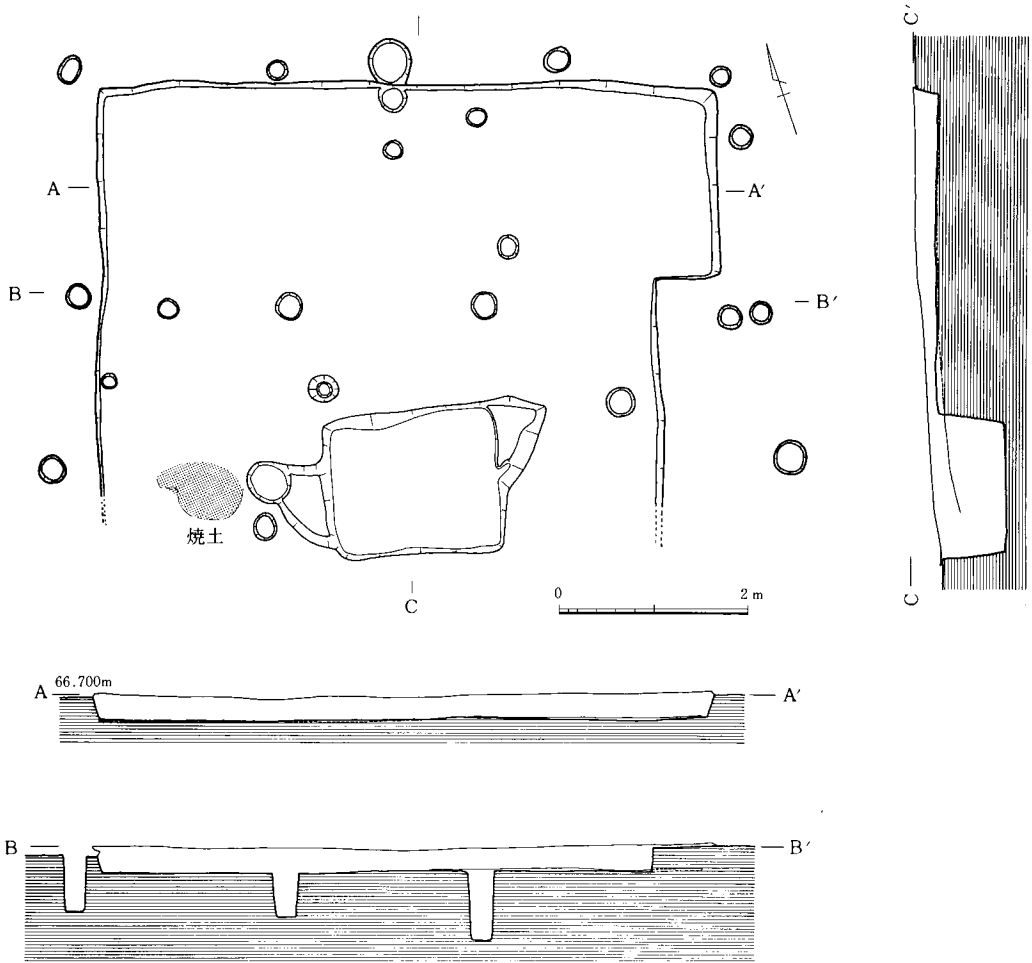

第63図　銀代ヶ迫遺跡14号竪穴住居実測図(1/80)




第64図　銀代ヶ迫遺跡11号竪穴住居実測図（1/80）

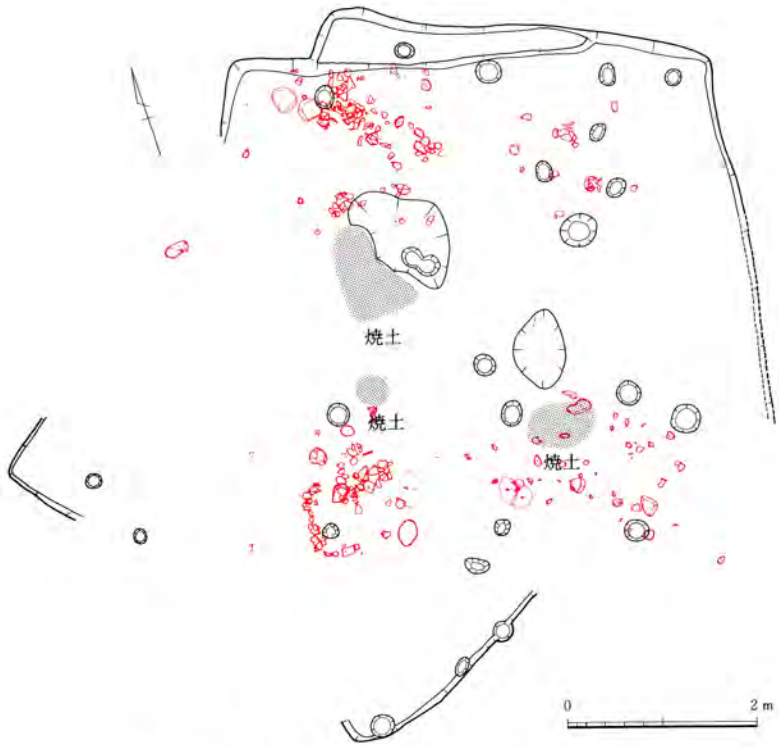



第65図　銀代ヶ迫遺跡12号竪穴住居実測図（1/80）




**第66図　銀代ヶ迫遺跡13号竪穴住居実測図（1/80）**

（34.52㎡）の住居である。住居址北辺中央部にある張り出し区画は、長さ3.1m、幅0.5mの規模をもつ長方形状を呈するもので、張り出し部のレベルは住居中心部レベルと同レベル値をとり段にはなっていない。東辺にもや小ぶりの長さ1.8m、幅0.45mの張り出し区画があるがこれも住居中央床面とつながっている。張り出し部については、床面がとくに踏みかためられているとかいった特徴をみいだせない。床面は全面明褐色でやわらかく柱穴埋土もまた床面とほとんど変わらない明灰褐色を呈して検出しずらいものであった。そのために原床面よりも約10cmほど掘り下げて柱穴の検出にあたっているが、焼土のちかくにＰ１～Ｐ３を検出したにとどまる。しかし、その他に住居縁辺に沿って複数の柱穴を検出し、これらが住居内柱穴にかわるものかと考えられる。




**第67図　銀代ヶ迫遺跡15号竪穴住居実測図(1/80)**

9号竪穴住居

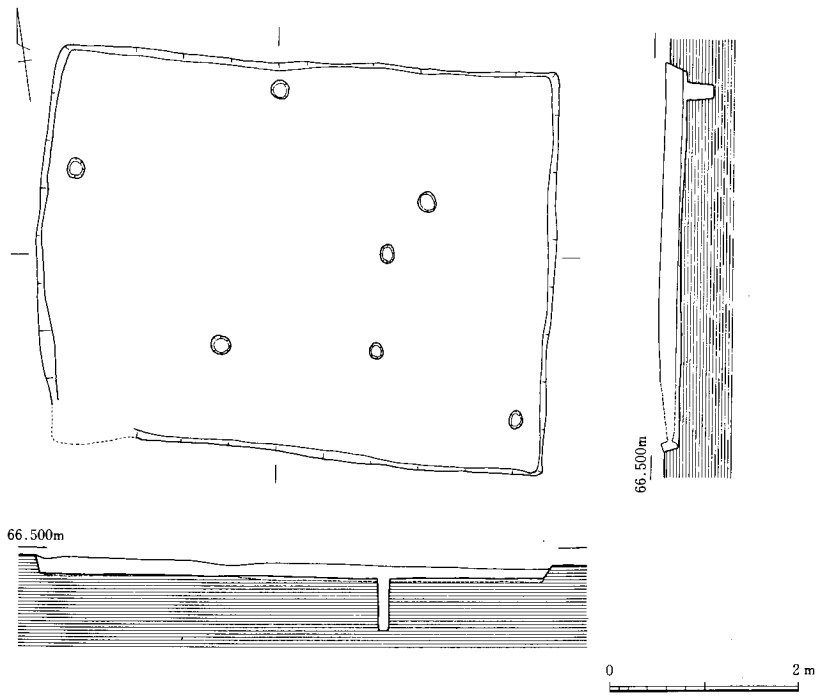
これも発掘区の中央部に位置する正方形住居で、規模では7号住居に似ている。突出した張り出し区画を設ける8号・10号住居に挟まれたかっこうで隣接している。3.9m×3.6m規模の9号住居では、住居内で明確な主柱穴を検出しえていない。そのかわりに住居址の縁辺部に近接して3個から4個の柱穴群が確認された。床面は褐色と明褐色土が雲状に混じりあう比較的やわらかい土層で、柱穴検出のため床面レベルより約15cm下げて精査しているが、未検出である。焼土面は中央からやや西寄りに60cm×30cmの範囲にみられる。

10号竪穴住居

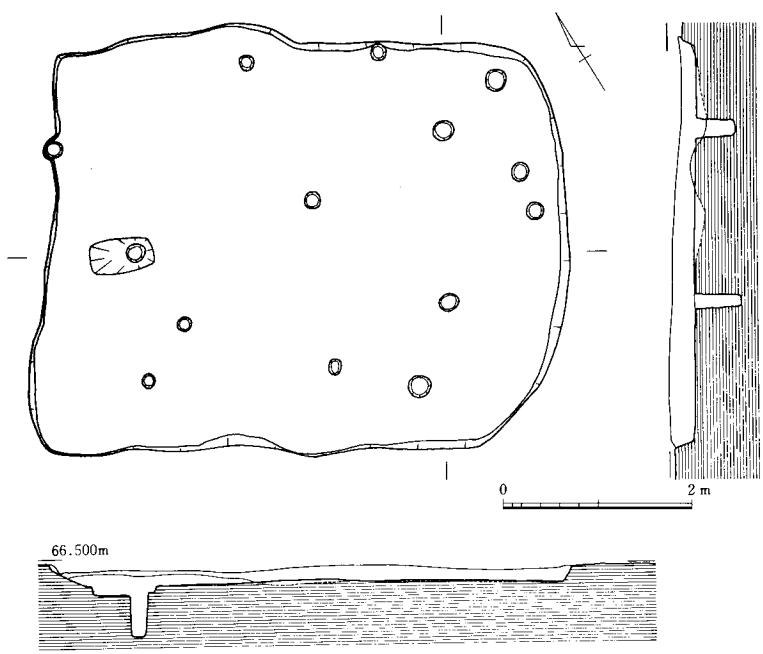
発掘区の中央部に位置して、9号住居に隣りあっている。長辺4.5m、短辺3.8mの長方形プランの西側短辺に1.2m×0.7m規模の突出した張り出し区画を設けるもの。張り出し区画は、居住区画部から約10cm高くつくられ、段となる。居住区中央よりやや西寄りに40cm×35cmの範囲で焼土面が検出されている。

11号竪穴住居

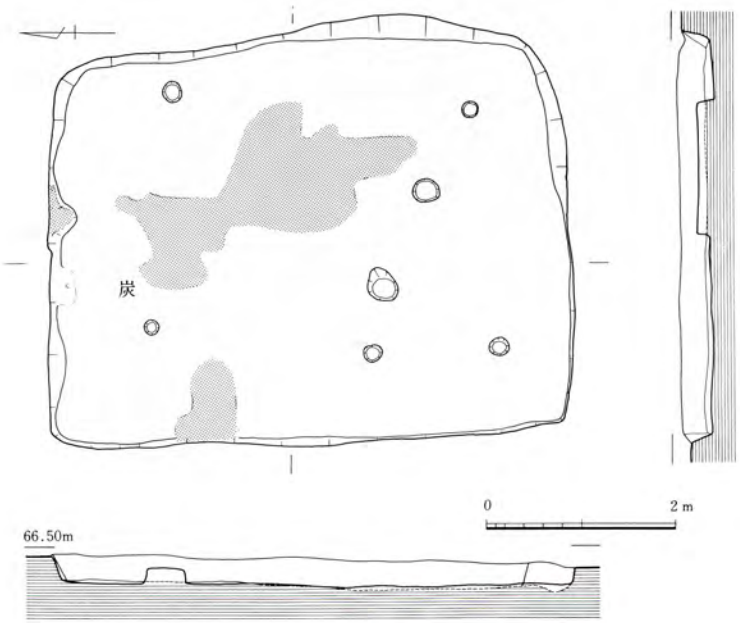
発掘区中央部付近から西側にあり、最寄りの7号住居から西15mに位置する。長辺4.5m



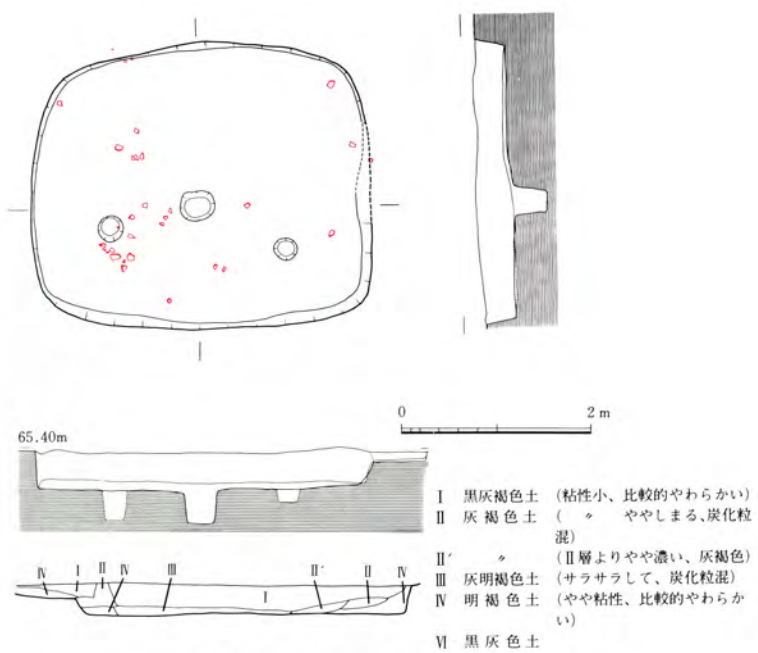

第68図　銀代ヶ迫遺跡17号竪穴住居実測図



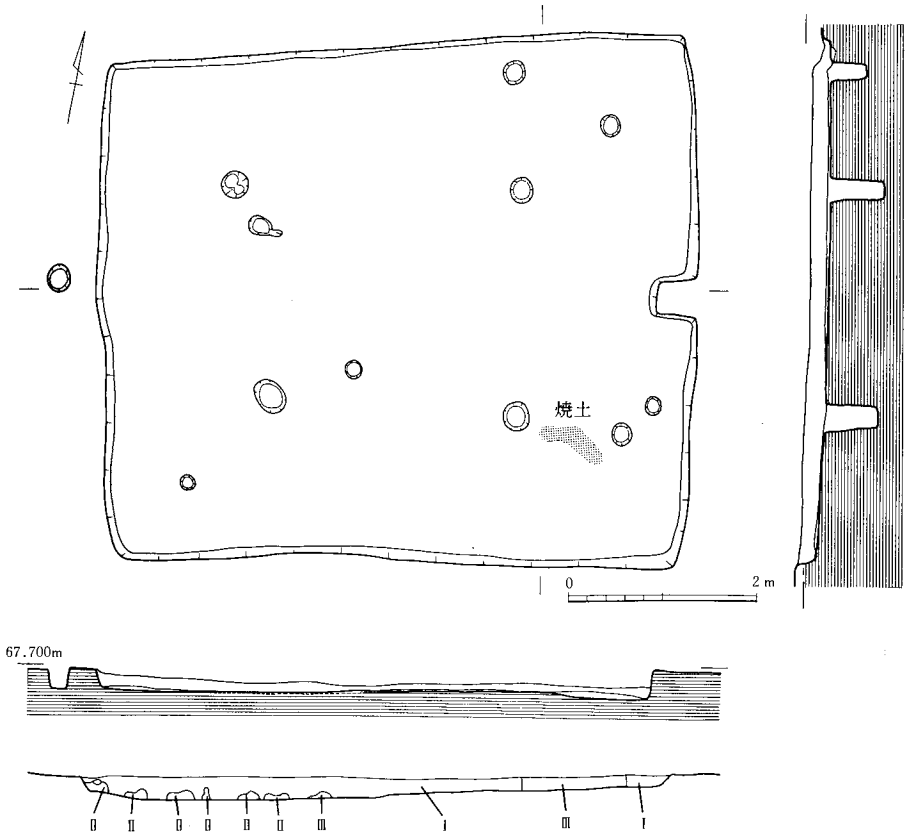

第69図　銀代ヶ迫遺跡18号竪穴住居実測図(1/80)




第70図　銀代ヶ迫遺跡16号竪穴住居実測図(1/80)




第71図　銀代ヶ迫遺跡19号竪穴住居実測図(1/80)



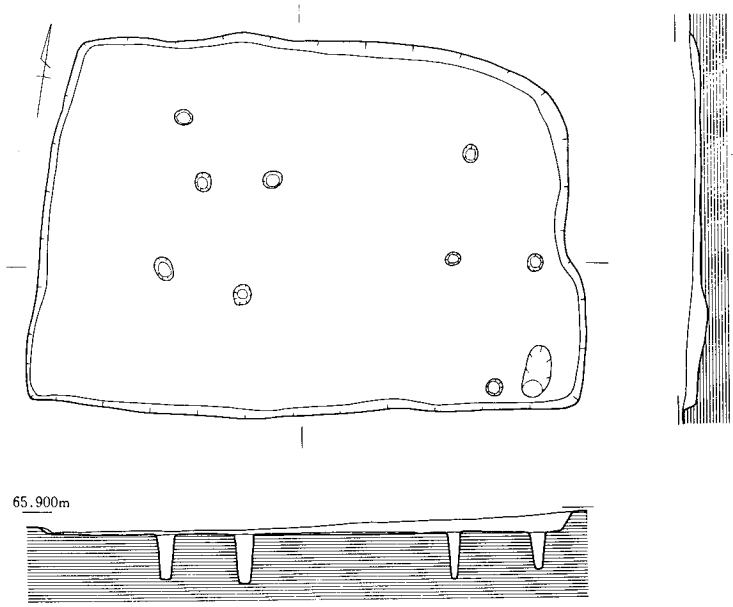

Ⅰ　褐色土　褐色土と明褐土が雲状に混る。赤ホヤブロック親指大を含む
Ⅱ　明褐色土　〃　明褐色土が多い、粘性あり、上層よりやわらかい
Ⅲ　褐色土　サラサラしている。(芋つぼ)

**第72図　銀代ヶ迫遺跡21号竪穴住居実測図(1/80)**

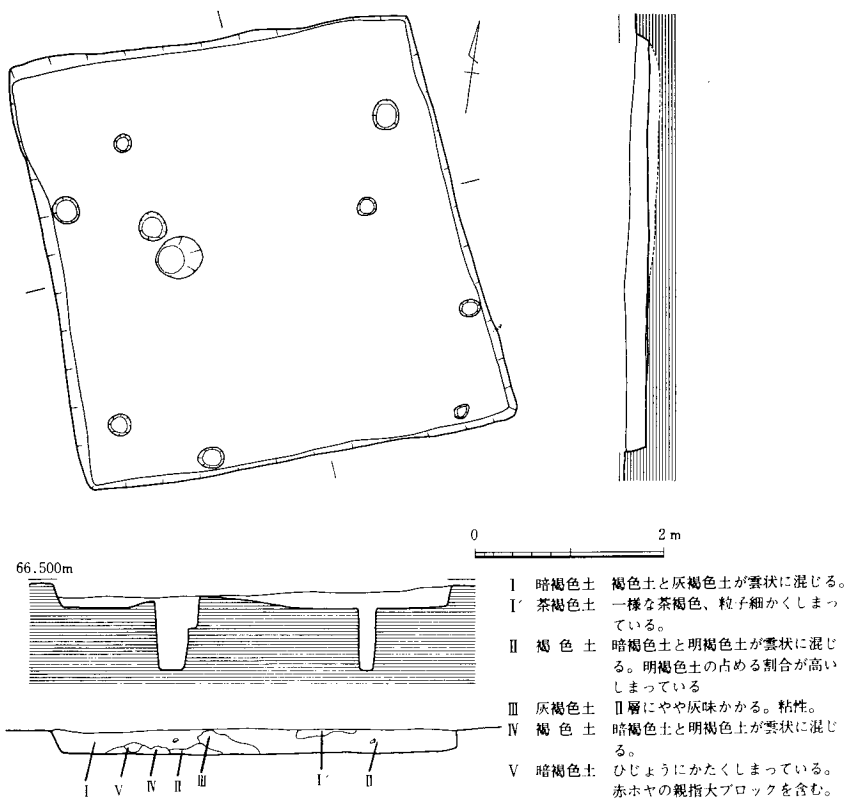
×短辺3.1(3.4)mを測り、南側の短辺が北側のそれに比べてやや長く、やや不整な長方形状を呈する住居である。住居址の上部は耕作による削平が著しく、検出面から床面まで17cm～22cmほどが残存するにすぎない。しかし、遺物は比較的よく遺存していた。床面より7個の柱穴を検出しているが、その不規則な配列から基本となる主柱穴を特定しがたい。中央からやや北寄りに径35cm～40cmの範囲で焼土面を検出している。

**12号竪穴住居**

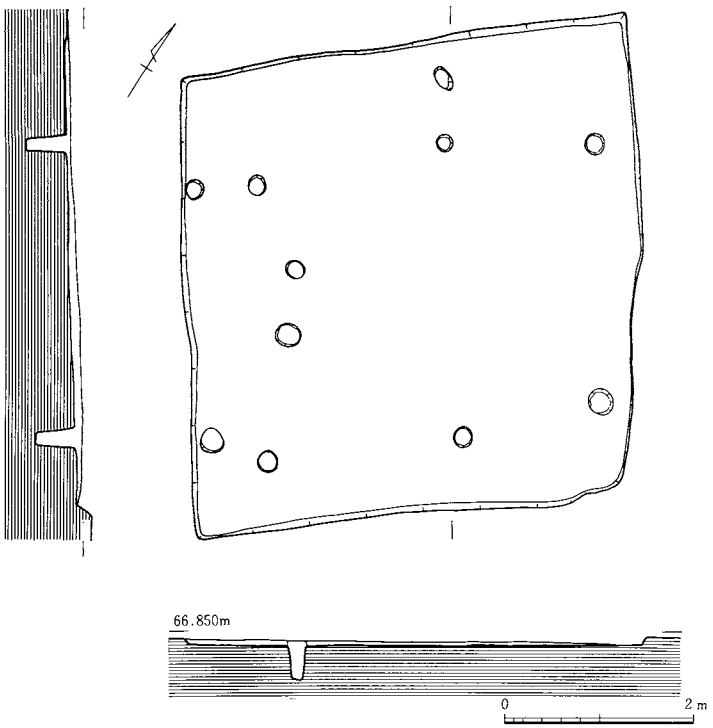
発掘区の南西端にあるもので、13号住居から西へ約8mの位置にある。南西端部は住居分布が疎となる部分で、12号・13号住居の比較的大型の住居がその中心にある。12号住居は、方形床面の各辺に長短の違いが著しく、不整な台形状をして、とくに西辺は東辺に比べて約1m短くつくられている。住居址の残存状態は上部の削平によってやや不良で、検出面から8～12cmを計測するにすぎない。柱穴は、北辺と南辺側にそってそれぞれ配列される基本的には六本主柱と考えられるものである。




第73図　銀代ヶ迫遺跡20号竪穴住居実測図(1/80)




第74図　銀代ヶ迫遺跡21号竪穴住居実測図(1/80)




**第75図　銀代ヶ迫遺跡23号竪穴住居実測図(1/80)**

13号竪穴住居

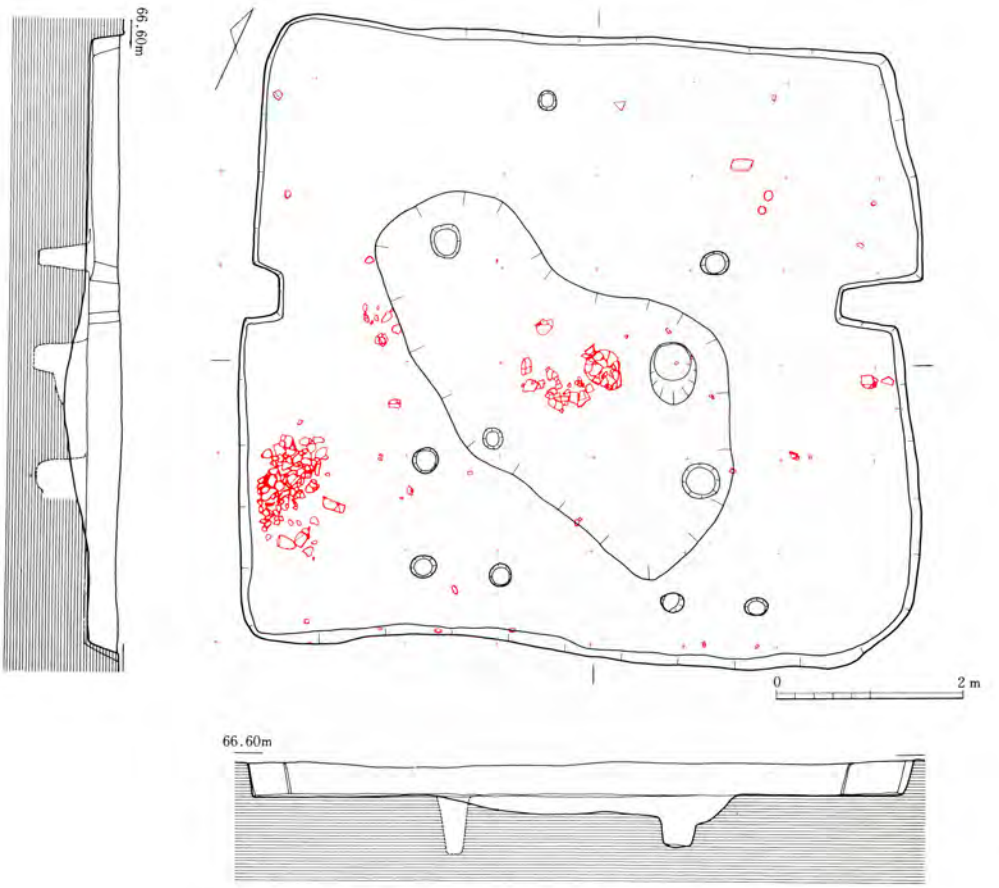
発掘区中央から南側、Ⅰ8区に位置する。発掘区中央の住居群7号～10号住居より、12号住居とともにやや離れて位置するもので、さらに10m南には12号住居がある。

東辺の北寄りに長さ2.0m、幅0.6mにわたって張り出し区画を有する。張り出し部の北側の一辺は住居址北辺と一体になったもので、北辺の長さ6.45mを測り、南辺は削平されて不明瞭ではあるが4.4m＋αの値を推定することができる。住居址の南端に1号土壙が検出されているがこれは13号住居に直接ともなったものではない。

焼土は住居の南西端に80cm×60cmの範囲にあるが、他の住居検出の焼土位置からすると例外的な位置とおもわれる。12号住居などとともに床面はやや粘性をおびたやわらかい明褐色土で、柱穴埋土はその内に明灰褐色の比較的色調のやわらかい輪郭としてとらえていることができたが、いずれも変則的な位置にあるがP1～P2～P3がしっかりした主柱穴であると考えられる。この住居址においても各縁辺に接するかたちで柱穴列が検出されている。

14号竪穴住居

発掘区の最南端にあって、16・17・18号住居の一群、および12・13号からも離れた位置にある。4.0m×4.2mのほぼ正方形プランの住居であるが、北辺はビニール等の廃棄物を埋設した2.0m四方の最近の土壙によって切られている。遺構の深さは検出面から西辺で25cm、



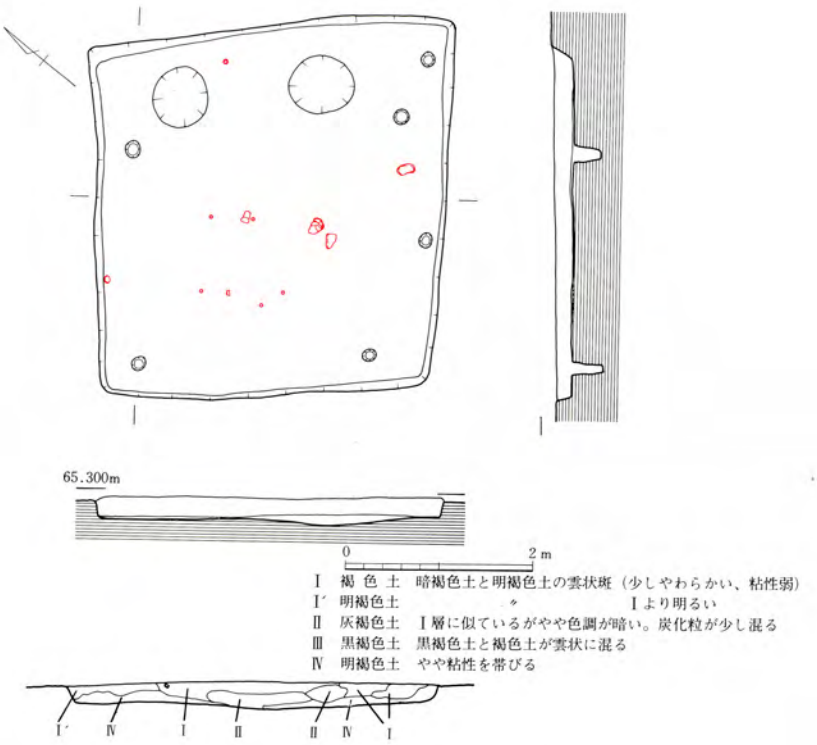

**第76図　銀代ヶ迫遺跡24号竪穴住居実測図(1/80)**

東辺で約4㎝～12㎝とこれも全体に削平されているものとおもわれる。柱穴は合計4個検出されたが、西辺近くのそれはさきの土壙によって不明である。東辺のそれは壁ぎわから約30㎝、中心によった位置に等間隔で3個認められた。埋土はやや灰味を帯びた灰褐色土で比較的やわらかい。床面には下層の焼礫が所々に顔を出している。焼土は検出されていない。

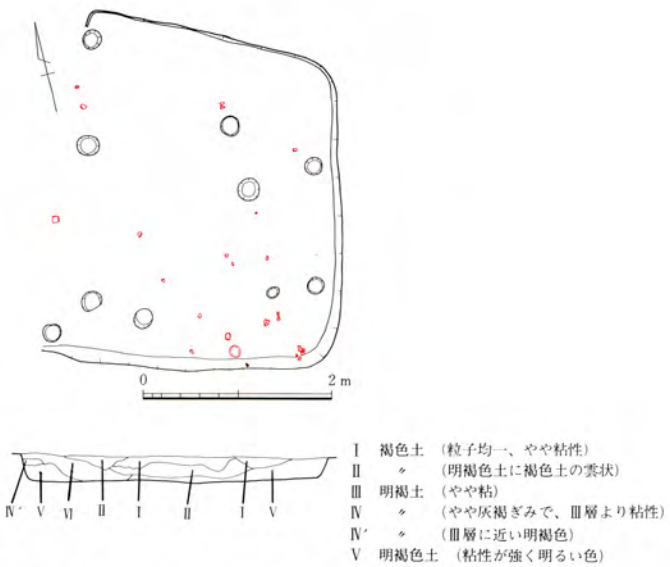
15号竪穴住居

発掘区の南端に近くあり、17号住居の西約10mに位置する。住居北側隅に住居プランの重複があり、建て替えが考えられる。

住居の南側は三分の二以上が削平されて、輪郭も検出不能であるが、北側一辺の残存により、一辺約5.1m規模の方形住居であったと推定される。残存する北側縁の壁高は検出面から約32㎝を測る。また重複する住居床面との比高は約12㎝である。住居中央部付近から、3ヶ所の焼土面が検出された。




**第77図　銀代ヶ迫遺跡25号竪穴住居実測図（1/80）**




**第78図　銀代ヶ迫遺跡26号竪穴住居実測図（1/80）**

中央よりやや北寄りに位置するもので、1.0m×0.6mの規模でよく焼けており、東側にこれも不定形の浅い掘り込みをともなっている。

16号竪穴住居

16・17・18号住居の3軒で最南東端において、一群を形成している。3軒は、その規模において、ほとんど同じであり、17号と18号ではその主軸がほぼ同方向、16号はそれらと直行する形をとっている。16号住居は5.5m×4.3mの長方形プランを呈するもので、内部に7個の柱穴を有するが基本的には四隅部に近い4本の主柱が基本になるものとみられる。16号住居の特色としては、住居内に焼土面、および炭化物を含む焼土面を、住居中心部を中心として、北辺縁部、西辺縁部に有することで、その住居面に占める割合が高い。

17号竪穴住居

発掘区の最南東端にあって、丘陵の鼻に近い位置にある。16号・18号住居とともに一群を形成するもので、18号住居とは主軸の方向を概ね同じくする。長辺5.4m、竪穴4.1m、検出面からの深さ平均約17cmで、住居址の上部は大きく削平されているものとおもわれる。

平面プランは長方形、床面はやわらかく明褐色を呈する土で、7個の柱穴がみとめられる。柱穴はその配列に規則性がみとめられない。柱穴埋土は床面土とほとんど変わらない色調（明黄褐色土）で、検出は極めて困難であった。

18号竪穴住居

発掘区の南東端隅にあり、16号・17号住居と一群をなしてそれぞれ極めて近接している。長辺5.2m×短辺4.4mの長方形をしているが東側の一辺はやや曲線状を呈する。床面に14個の柱穴を検出しているが主柱穴となる柱穴は明確でない。これも上部の削平が著しく、検出面から床面まで10cm～16cmの浅いものである。床面となる土層は褐色の雲状に土が混る軟らかい面で、柱穴埋土も床面とほとんど色調の変わらないものであった。

19号竪穴住居

発掘区の最北端にあり、しかも西側の縁辺隅にある。検出された住居址中でももっとも北に位置するややこぶりの住居である。近隣には、これも似たように縁辺に設けられた26号住居址が、東側20mにはこれも同時期の所産と考えられる20号住居が位置している。

住居プランは3.0m×3.5mの隅丸長方形を呈するもので、この遺跡の中では規模、プランともに他に同種のものがない。床面の中央および西側の3ヶ所に径約30cmの柱穴がみられる。

壁高は35～39cmで立ち上がる。

遺物はタタキ調整痕のある壺の小片、およびミニチュア土器２点、磨製石鏃１点が出土している。

20号竪穴住居

発掘区の最北端、本丘陵のくびれ部にもっとも近い位置にあって同時期の住居址１号住居と隣りあっている。北東の隅が隅丸形になるが長辺（東西)5.7m、短辺（南北)4.1mの長方形プランを呈する。住居址土層の削平が著しく床面からの壁高東辺で約20cm、西側ではほとんど高さが残らないほど削平されている。住居内に９個の小主柱穴を検出しているが規則的な対応関係にとぼしい。

住居内のほぼ中心に40cm×20cmの長円形の範囲で焼土を確認している。

削平の少ない東側を中心にタタキ成形による甕形土器小片のほか、半月型石庖丁(233)が一点出土している。

21号竪穴住居

発掘区の北端ちかく、丘陵の入り口（くびれ部）近くにあり、22号住居と極めて隣接する住居であり、22号・23号・24号・25号と主軸方向（北東）を一にする。東西辺6.2m、南北辺5.5m、床面までの深さ約20cmを測り、ほぼ方形のプランとなる。他の同時代住居と異なるのは東辺の中央に長さ50cm、幅50cmの規模で掘り残すことによって成形される中心に向かって延びる突出部があることで、この住居にもっとも似るものに相対する二辺に２ヶ所同施設を設ける24号住居がある。主柱穴はＰ１～Ｐ４を基本とするものと考えられ、焼土は住居中央にはみられず、南東部の主柱穴そばにある。

22号竪穴住居

舌状丘陵の北側（入口近く）にあって、21号住居と北辺が極めて接近して隣接している。南北辺4.5m×東西辺4.3mの正方形プランを有する住居で、検出面から床面まで20cm～25cmを測り上部を削平されている。床面直下は縄文早期の焼礫層になっており、一部は床面に突出している。床面に９ヶ所の柱穴が確認されたが、やや不定な配列となる。床面精査中に小型の磨製石鏃２点の他、土器胴部破片が数点出土したにとどまる。なお、焼土面は検出されなかった。

23号竪穴住居

発掘区の北部南端縁にあり、21号・22号・24号・25号・26号に隣接する。この中では、遺物により時期を同じくすると考えられる21号・22号・24号と同じ方向性を有している。不整方形の住居プランは南北辺5.1(4.9)m、東西辺4.7(4.5)m、床面積22.72㎡を測る。この住

居は、とくに上面の削平が著しく、検出面から5㎝の深さを測るのみである。床面より11ヶ所の柱穴が検出され、東西方向に3対の柱穴に対応関係がみとめられる。

24号竪穴住居

発掘区の中央よりやや北側にあり、22号・23号・25号に隣接する。東西両辺の中央に掘り残しによる突出壁を有するこの遺跡においては唯一のもので、床面積としても最大規模の住居址である。住居の一辺に突出壁をもつ同種のものとしては、21号住居がある。また21号住居とは突出壁の主軸方向を一にしている。24号は南北辺（突出壁側）6.3m、東西辺6.5mのほぼ正方形のプランで、突出部は東側で幅55㎝、長さ80㎝、西側で幅60㎝、長さ30㎝にわたって中心部に向かって延びている。遺構検出面から床面までの深さは約35㎝を測って各部分で平均しているが中心部は4.7m×2.0mの範囲で浅く窪んでいる。主柱穴は中央寄り四方に二対あって、P1～P2間2.9m、P2～P3間2.5m、P3～P4間2.95m、P4～P1間2.4mを測る。その深さは平均で55㎝。

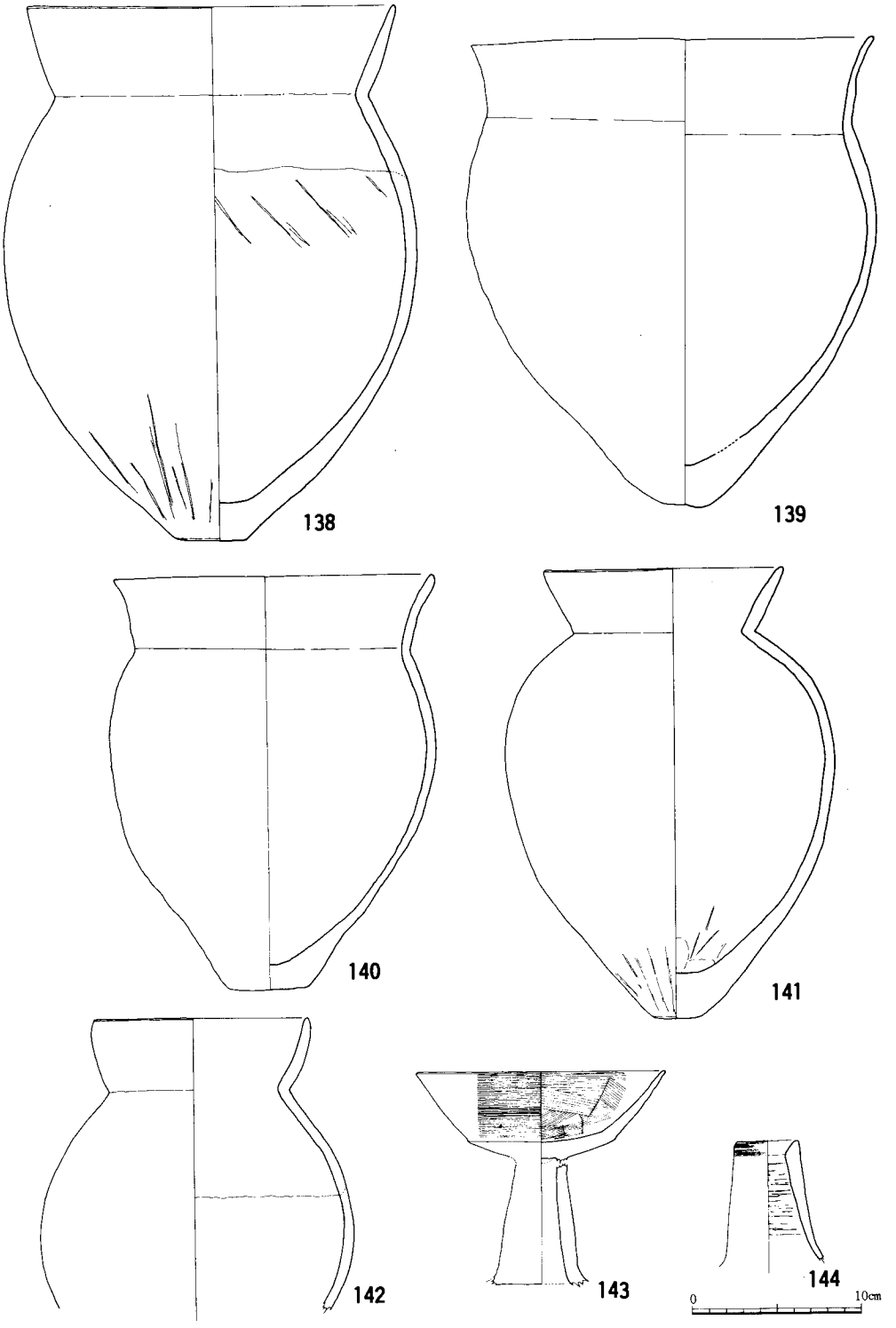
25号竪穴住居

発掘区の西端に位置するものであり、23号・24号・11号・26号に隣接する住居址である。このなかでは、時期的にみると26号住居址にもっとも関連をもつものと考えられる。古墳時代の住居址群のなかではもっとも南端に、ややかけ離れた位置にある。住居址の南北側の一辺は3.8(3.4)m、東西辺で3.9(3.6)mを計測し、その床面積は12.96㎡である。南北辺に沿って柱穴が6ヶ所検出されているが、それぞれの対応関係には規則性がうすい。これも住居上面が大きく削平されており、検出面から床面までの深さは20㎝を測るのみである。遺物は僅少であるが、小型丸底坩片、のほか石錘が一点出土している。

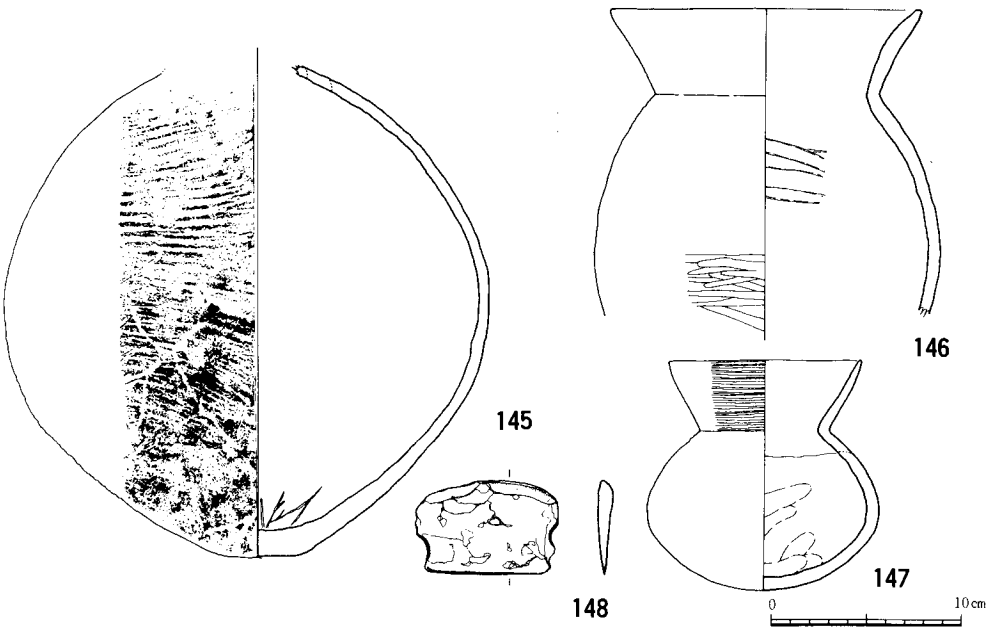
26号竪穴住居

発掘区の北端に集中する古墳時代住居のひとつで、19号竪穴住居に隣接する。なかでも、26号は発掘区の西端辺にかかる状態で検出された。一辺3.2mの小型の方形住居で、検出面から床面までの深さは25㎝を計測する。柱穴は11ヶ所検出されたが、主柱穴を特定するに至っていない。

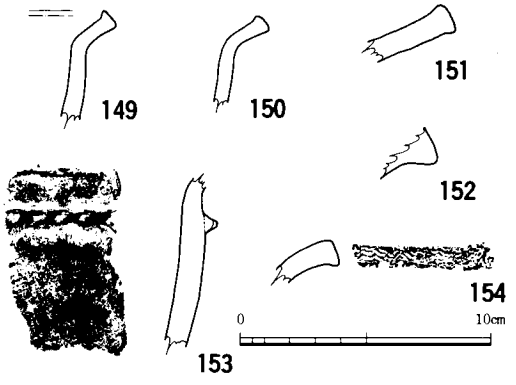
遺物は、土器細片が少量出土した。



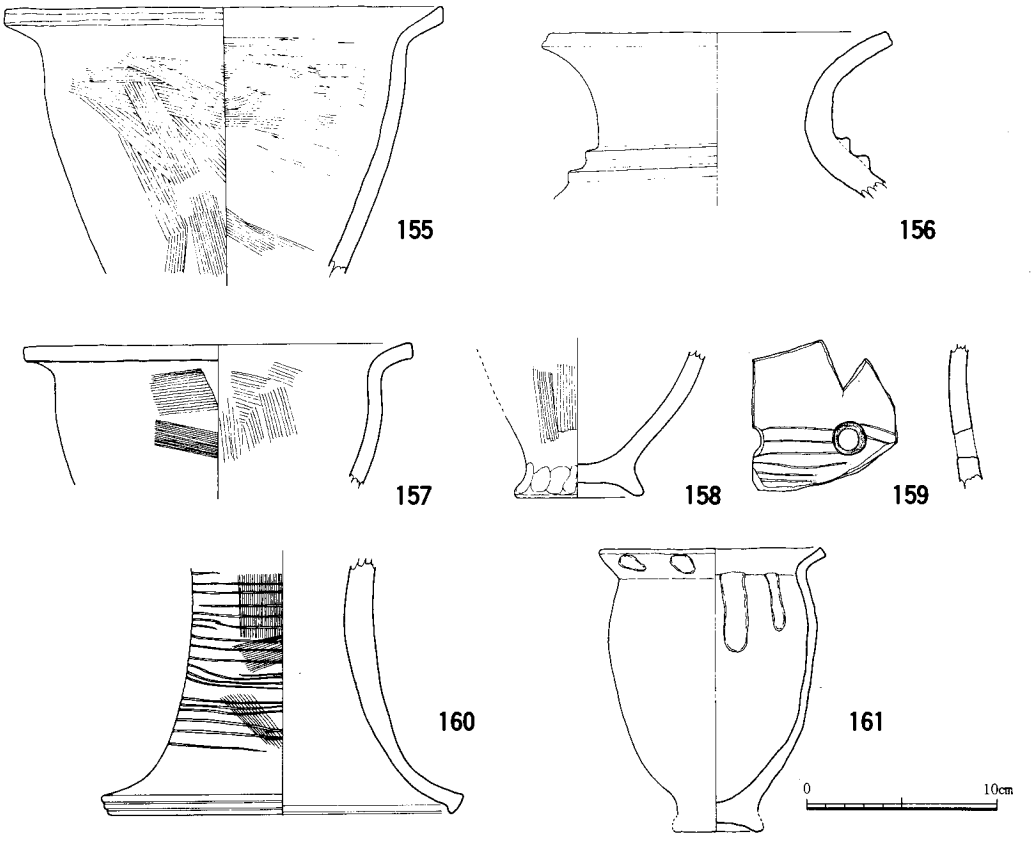

第79図　銀代ヶ迫遺跡１号竪穴住居出土遺物実測図(1)(１/４)



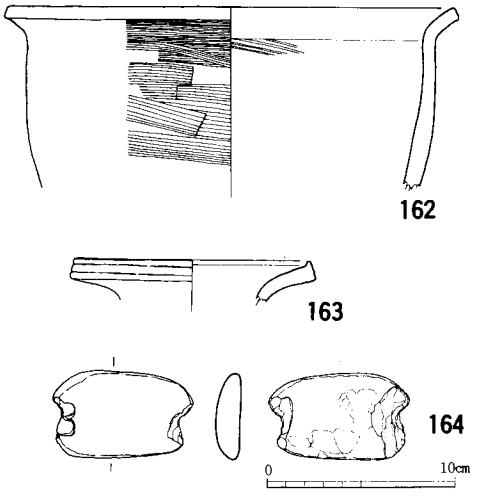

第80図　銀代ヶ迫遺跡１号竪穴住居出土遺物実測図(2)(１/４)



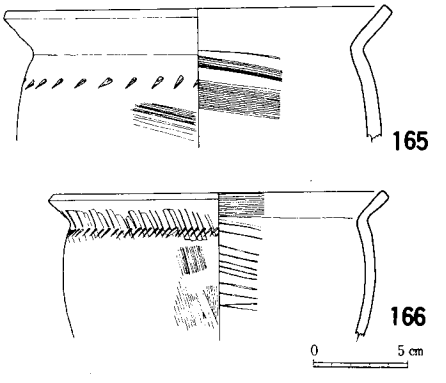

第81図　銀代ヶ迫遺跡４・５号竪穴住居出土遺物実測図(１/３)



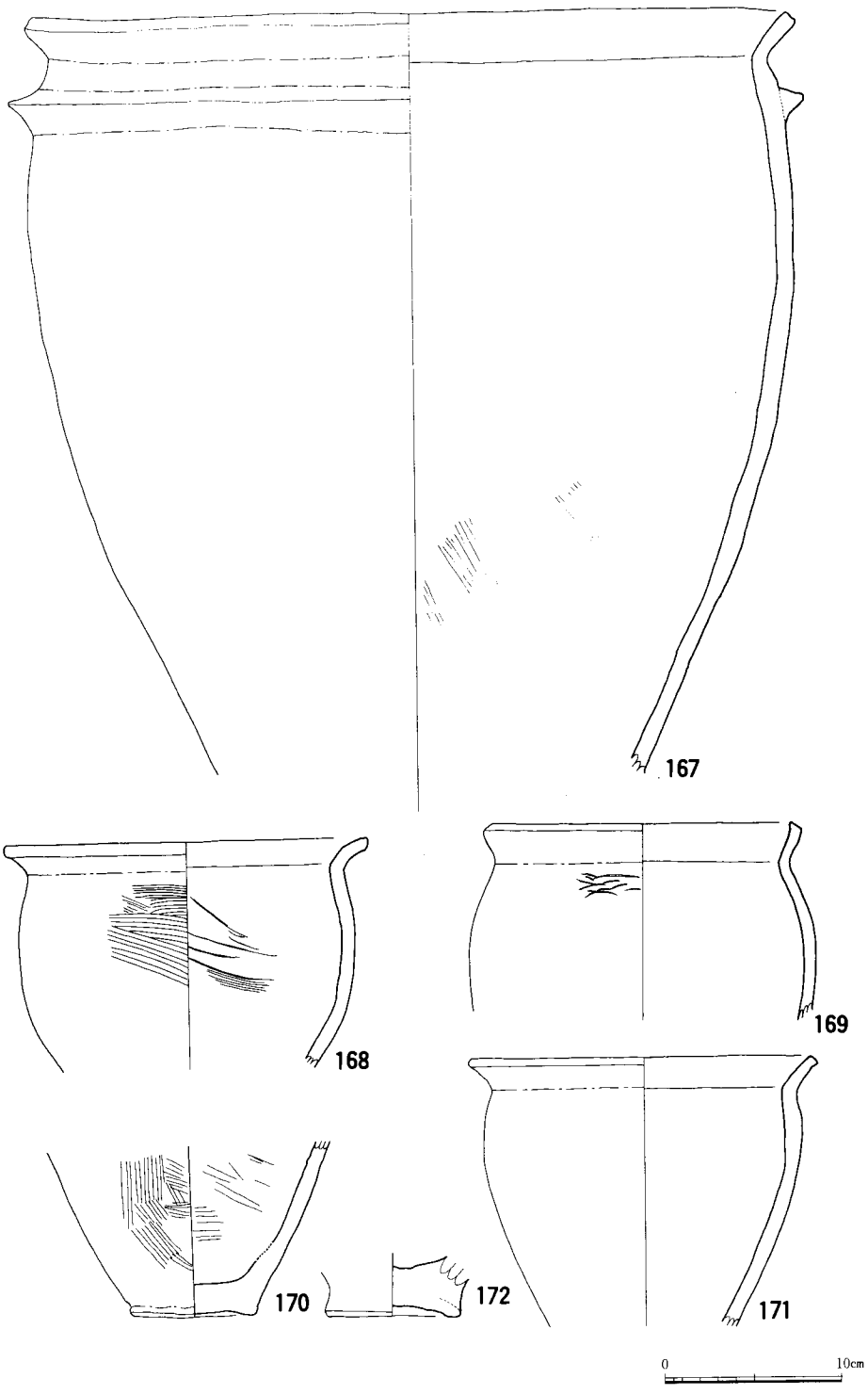

第82図　銀代ヶ迫遺跡８号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）



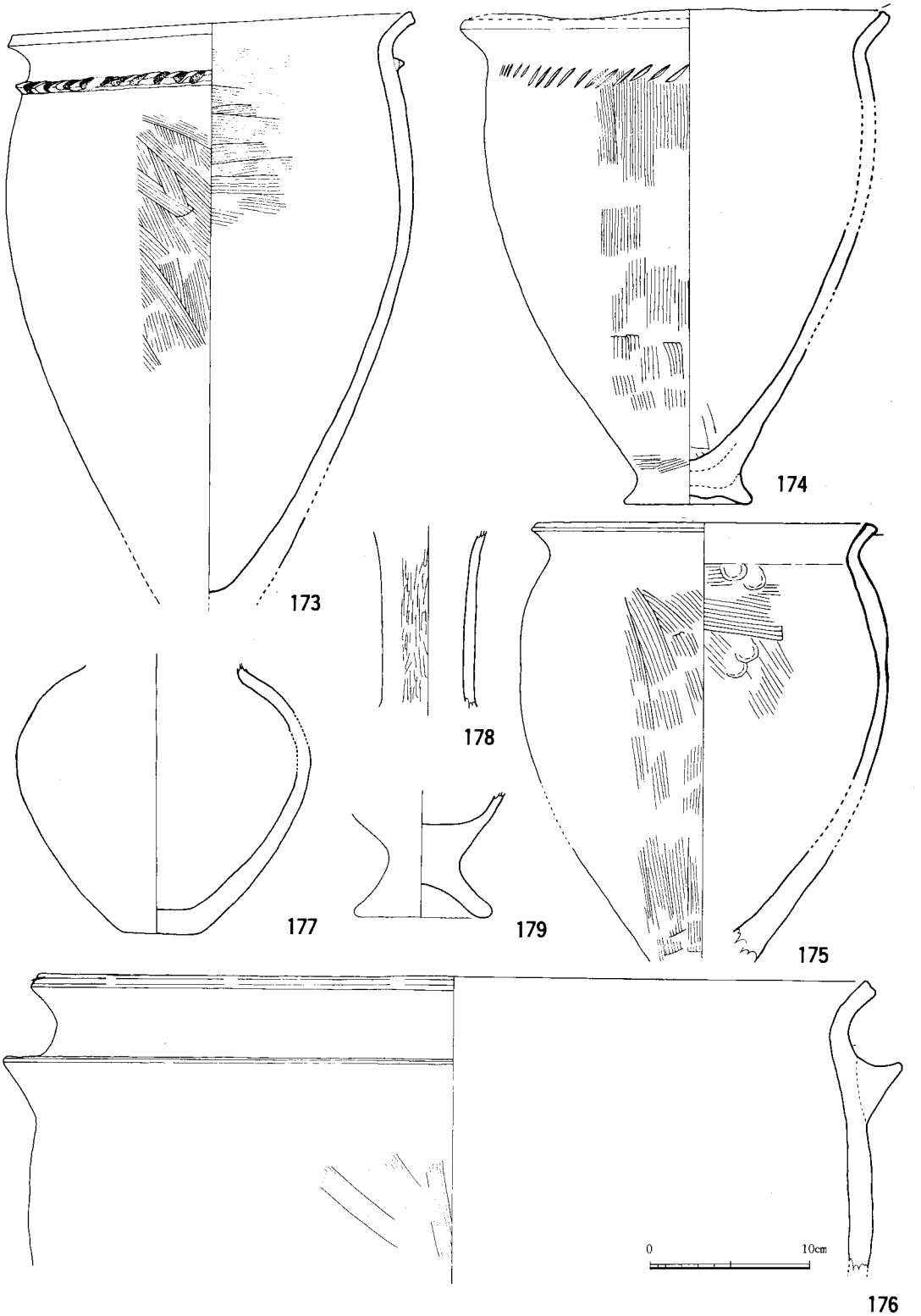

第83図　銀代ヶ迫遺跡６号
竪穴住居出土遺物実測図（1/4）



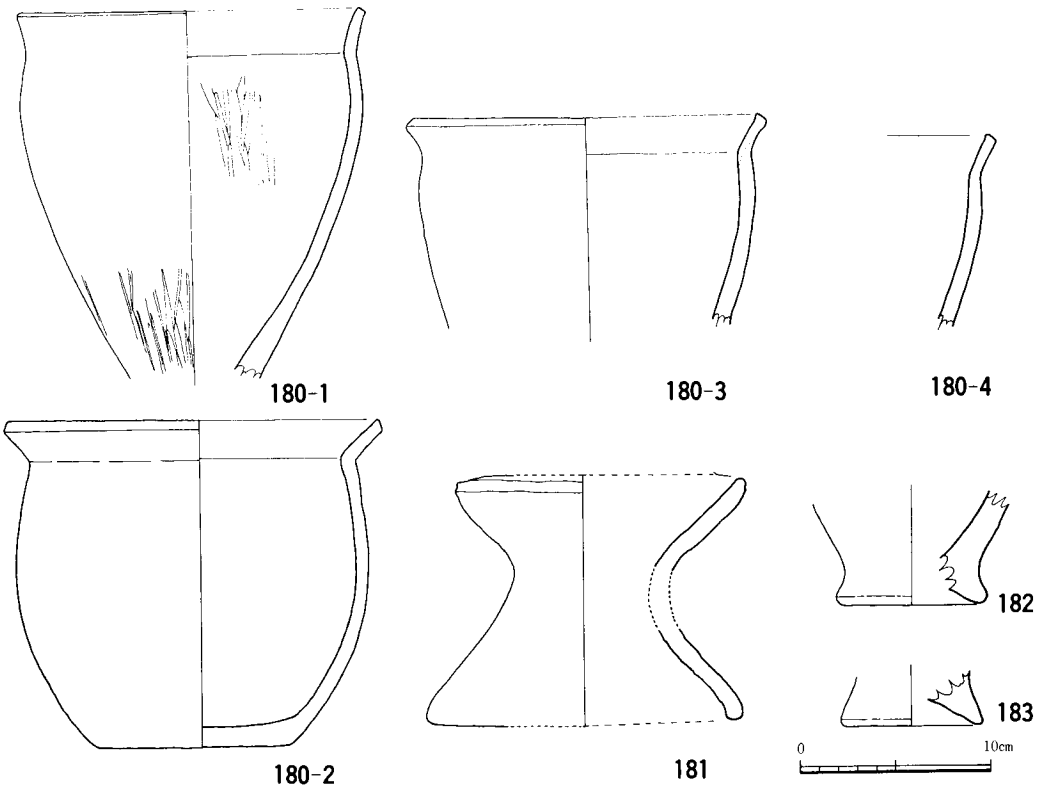

第84図　銀代ヶ迫遺跡７号
竪穴住居出土遺物実測図（1/4）



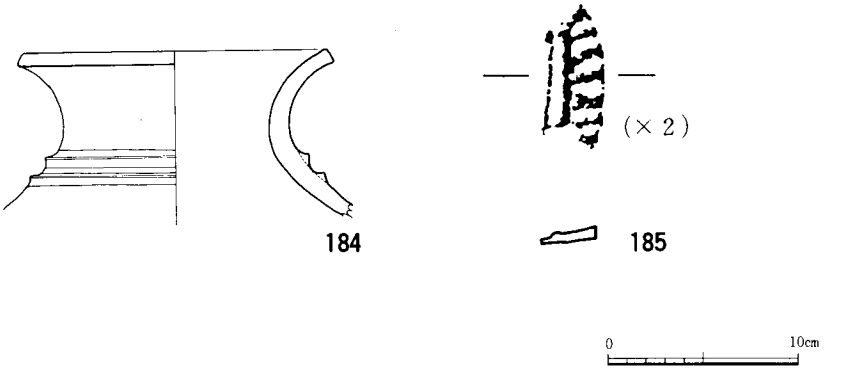

第85図　銀代ヶ迫遺跡10号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）



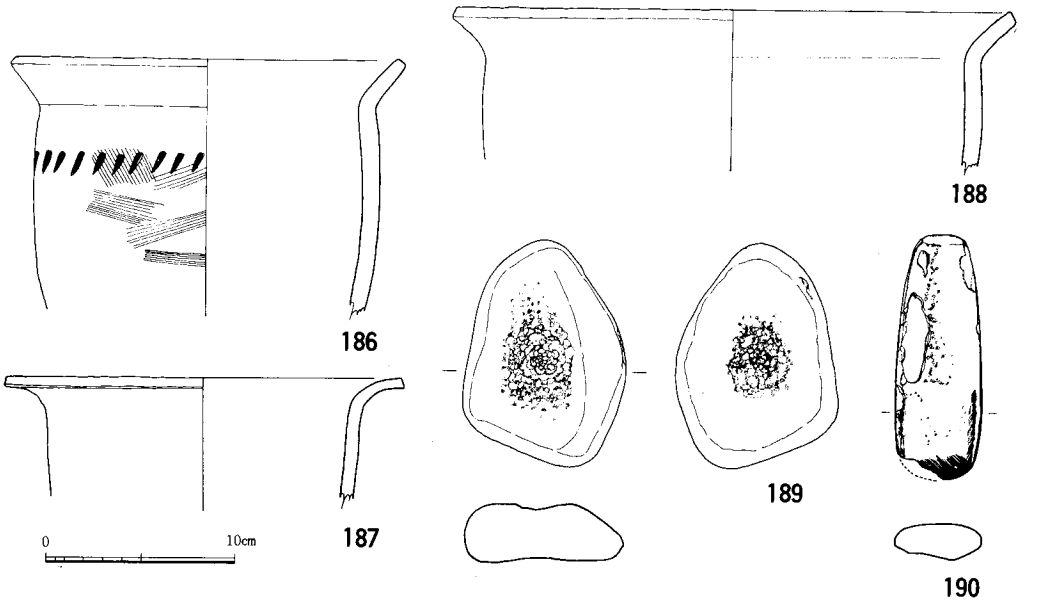

第86図　銀代ヶ迫遺跡11号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）



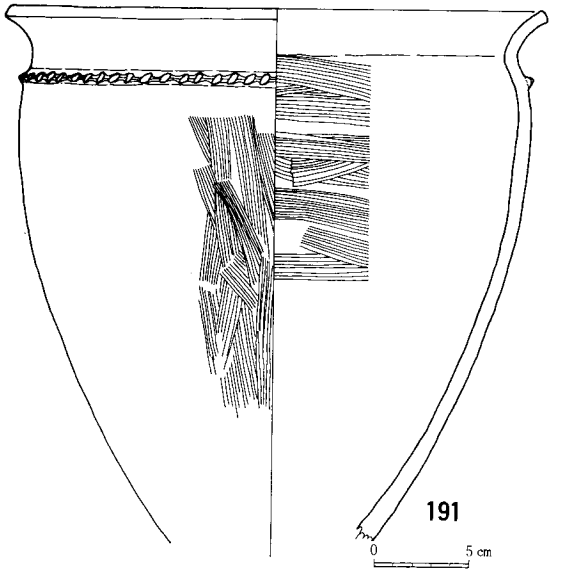

第87図　銀代ヶ迫遺跡12号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）



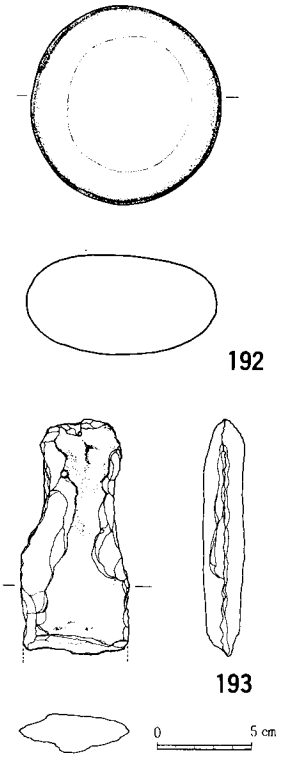

第88図　銀代ヶ迫遺跡9号竪穴住居出土遺物実測図（1/4．185のみ×2）



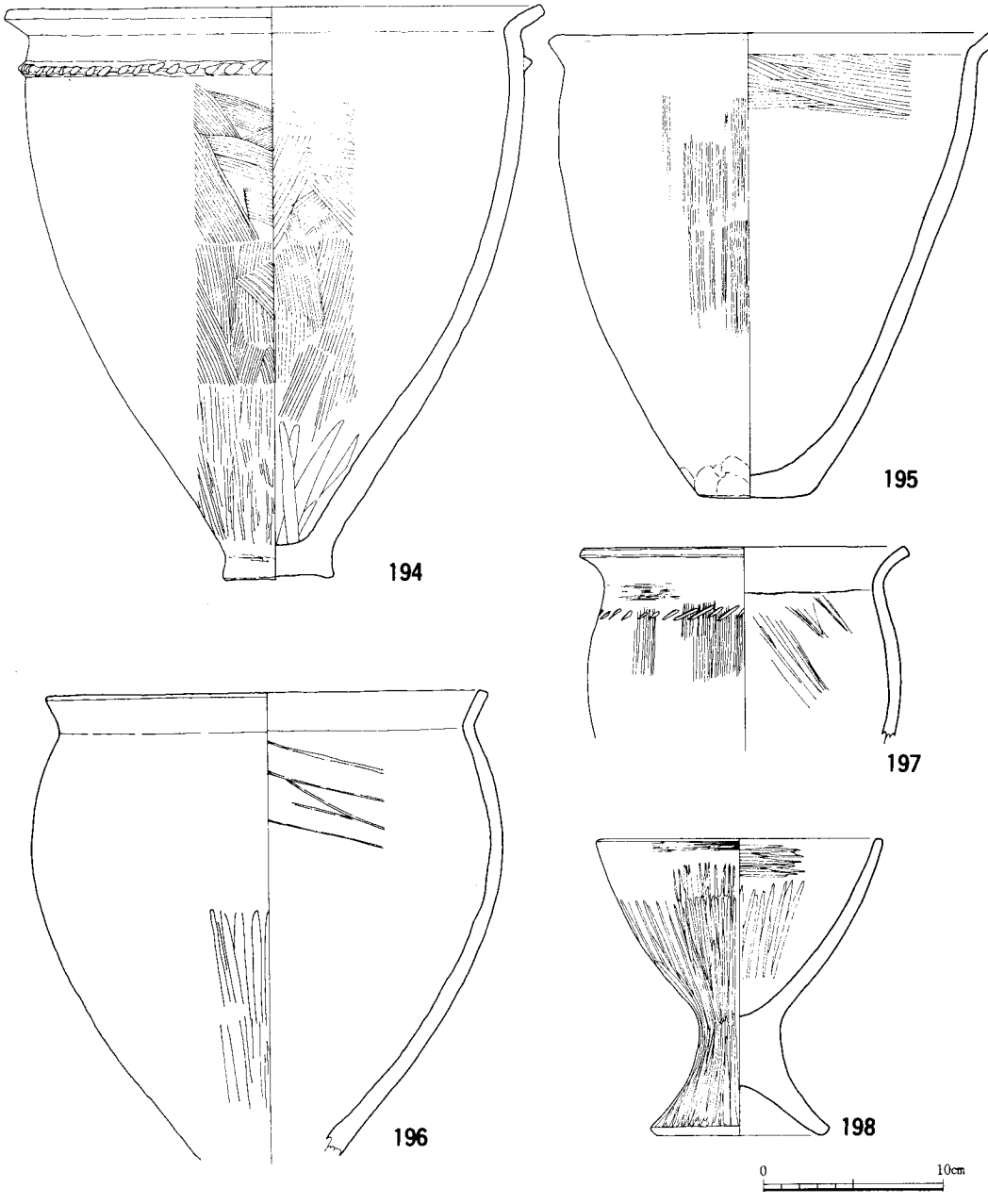

第89図　銀代ヶ迫遺跡13号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）



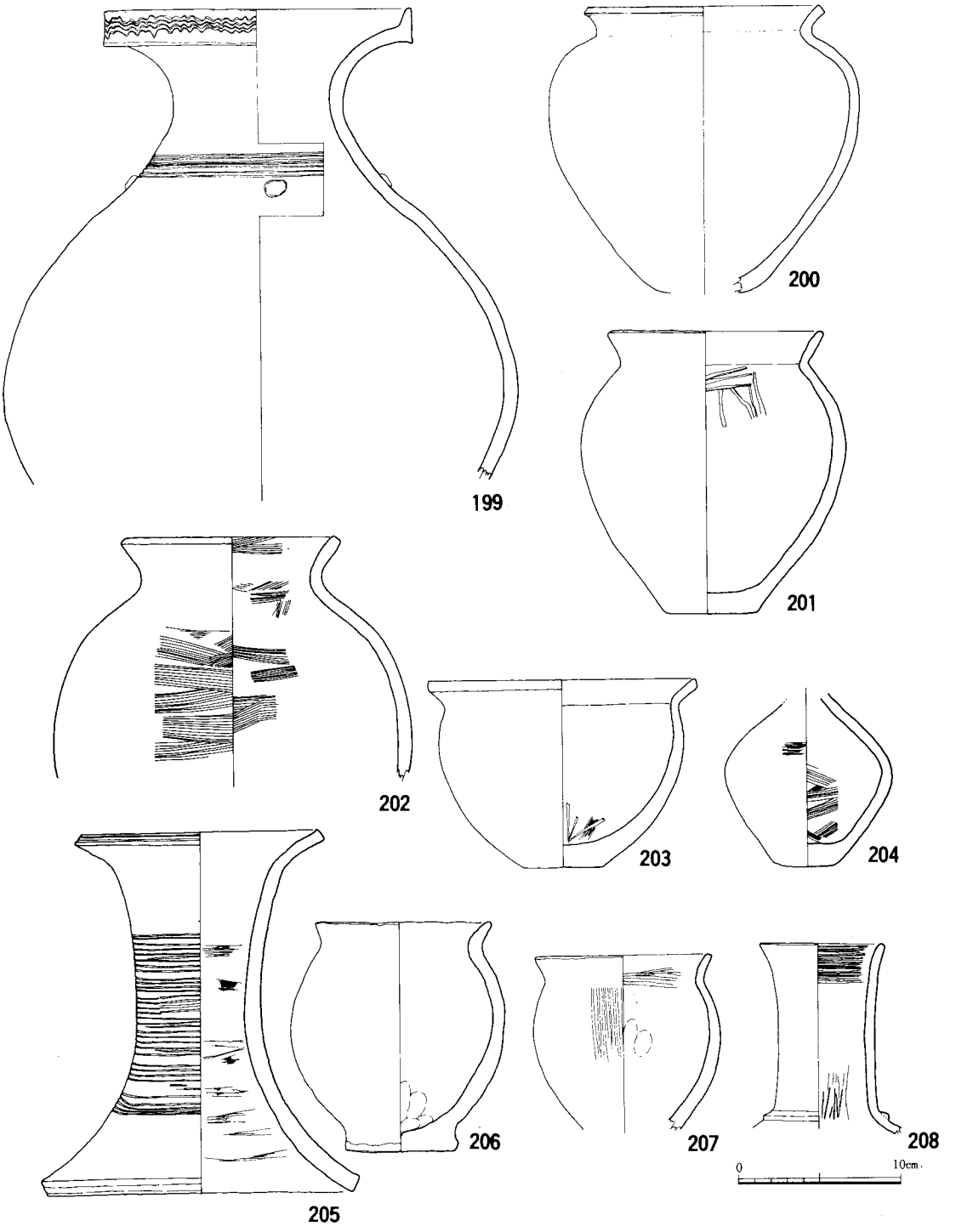

第90図　銀代ヶ迫遺跡14号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）



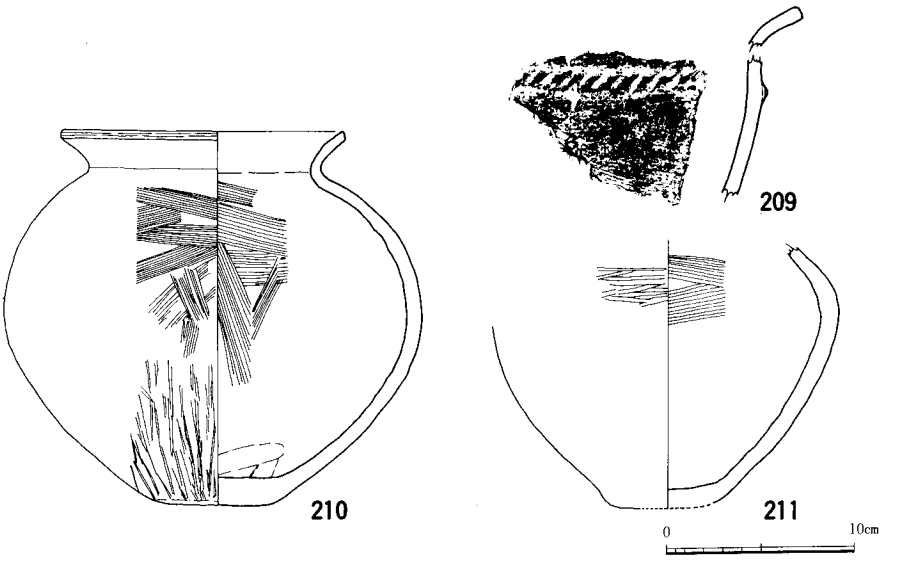

第91図　銀代ヶ迫遺跡15号
竪穴住居出土遺物実測図（1/4）



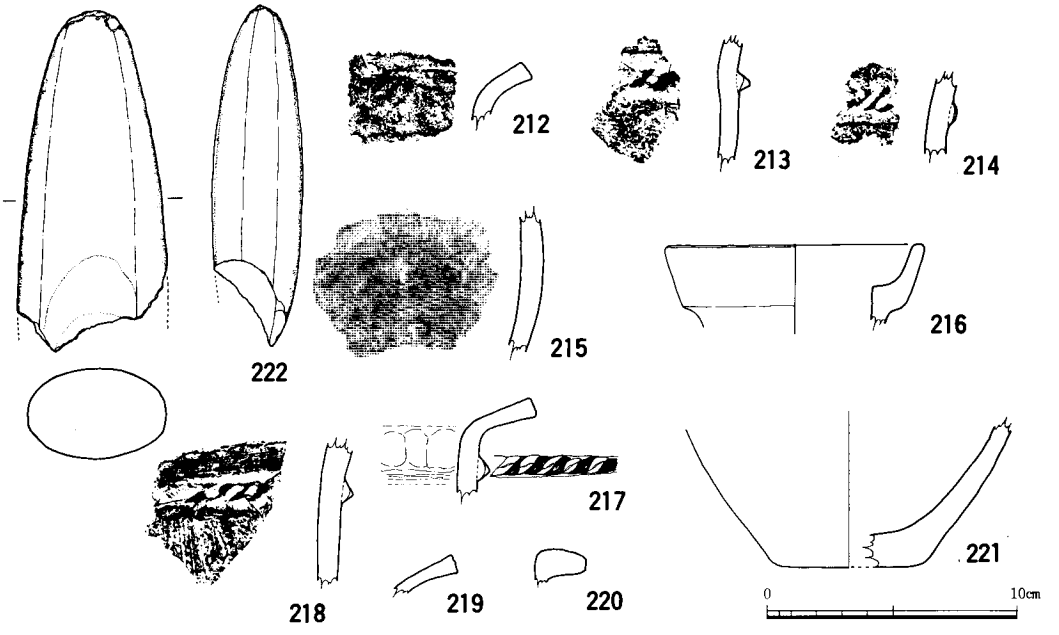

第92図　銀代ヶ迫遺跡15号竪穴住居出土遺物実測図(1)(1/4)



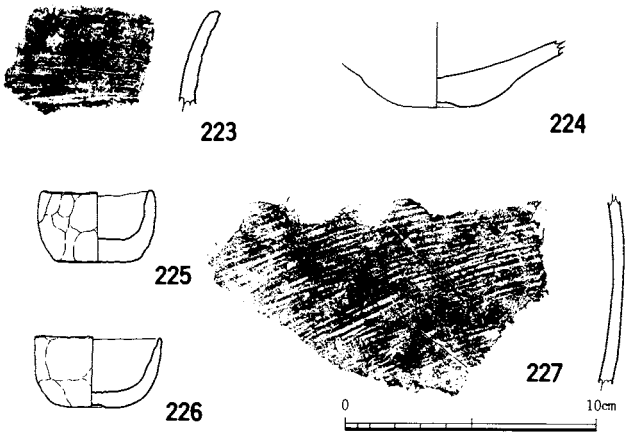

第93図　銀代ヶ迫遺跡15号竪穴住居出土遺物実測図(2)(1/4)



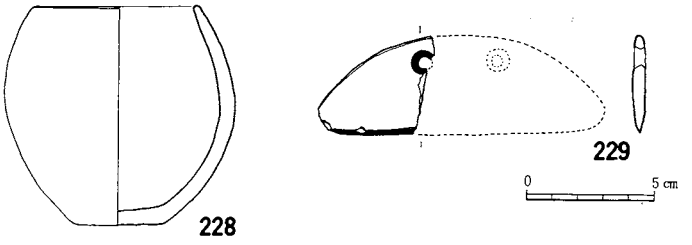

第94図　銀代ヶ迫遺跡17号竪穴住居出土遺物実測図（1/4）

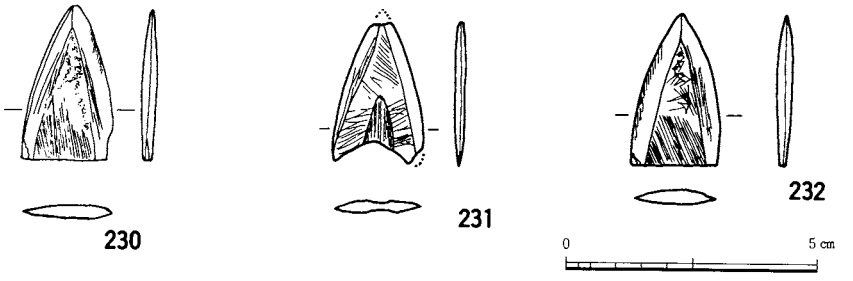



第95図　銀代ヶ迫遺跡18号竪穴住居出土遺物実測図（1/3）

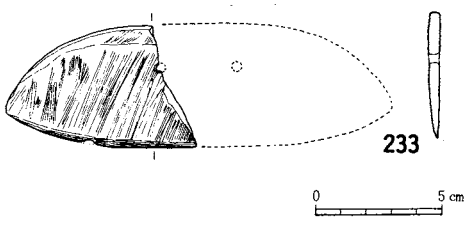



第96図　銀代ヶ迫遺跡19号竪穴住居出土遺物実測図（1／3）

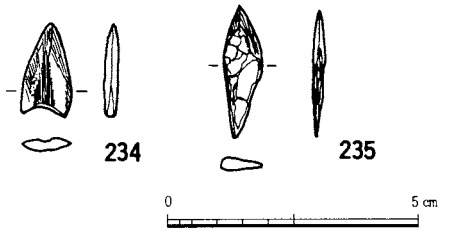


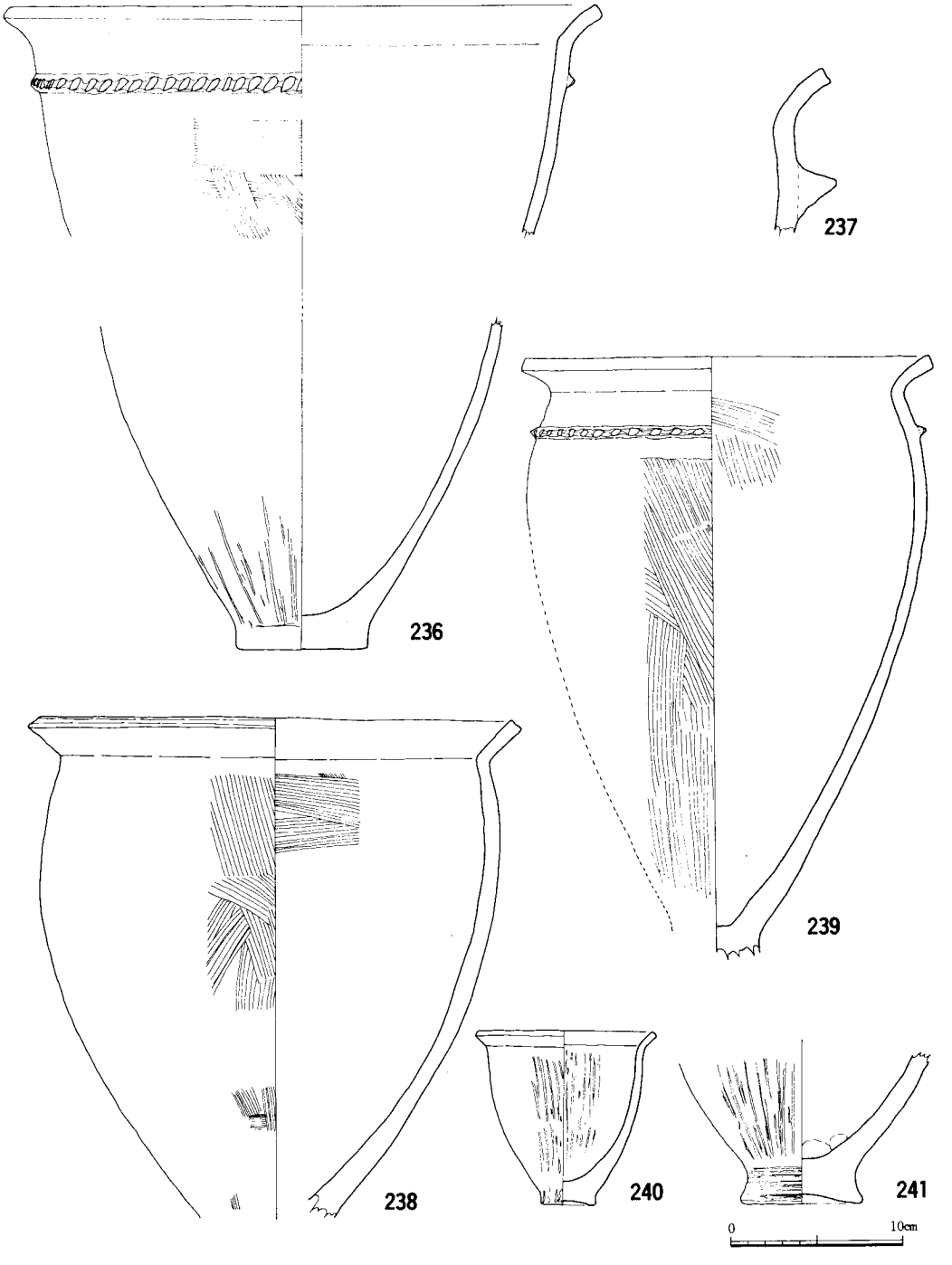

第97図　銀代ヶ迫遺跡21号竪穴住居出土遺物実測図（1／3．230～232は 2／3）



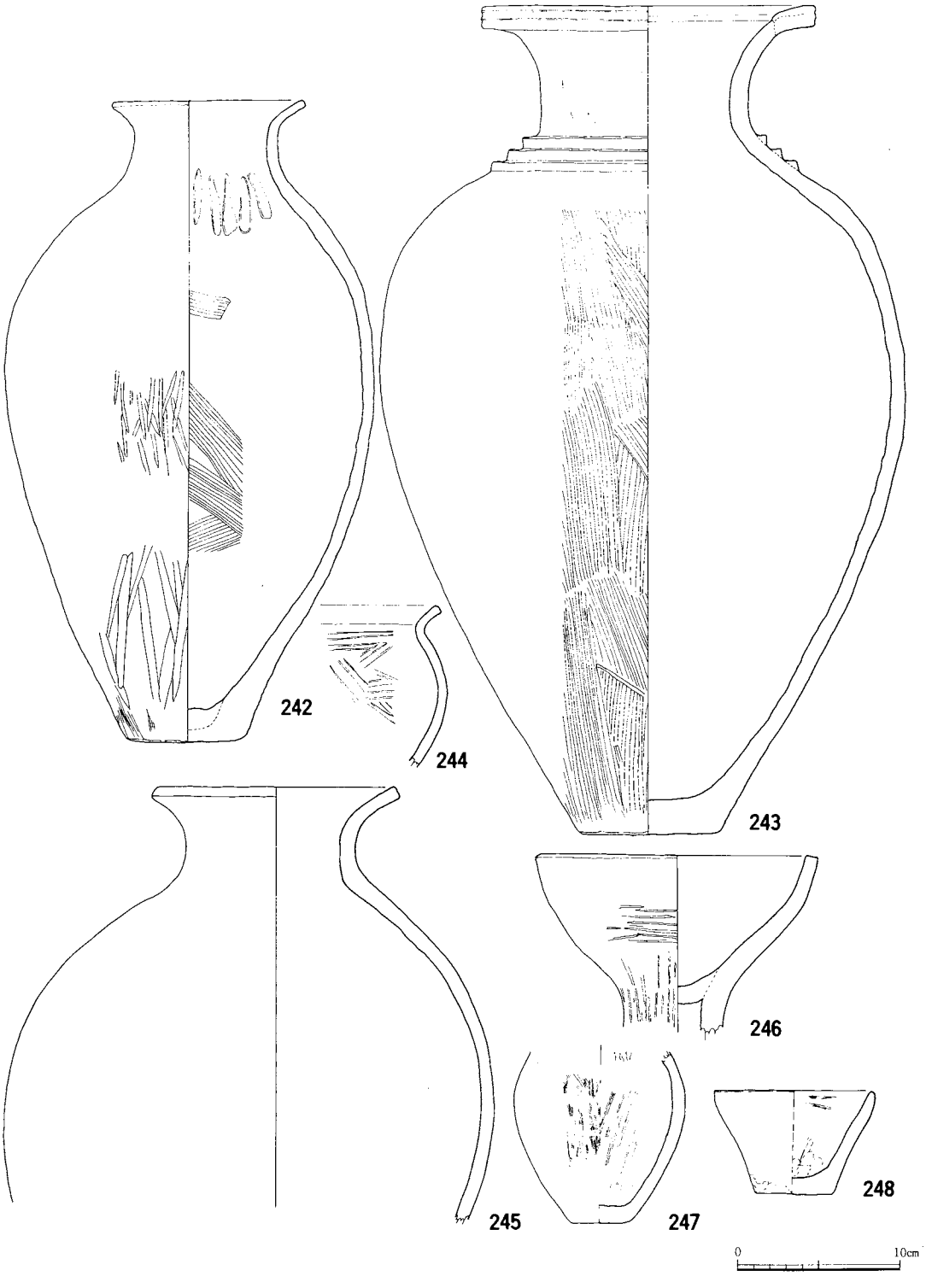

第98図　銀代ヶ迫遺跡20号
竪穴住居出土遺物実測図（1／3）



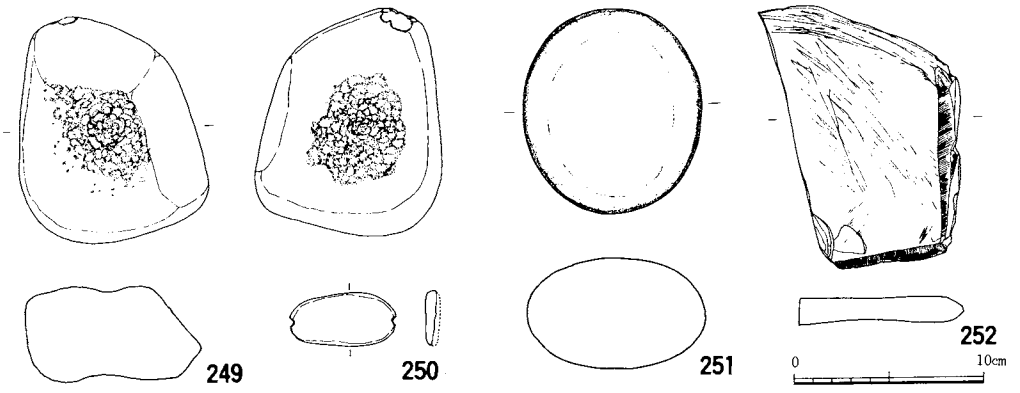

第99図　銀代ヶ迫遺跡22号
竪穴住居出土遺物実測図（2／3）



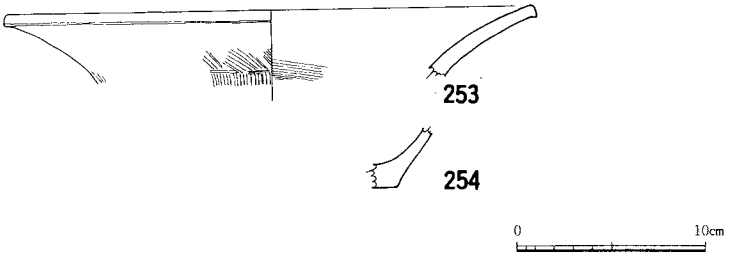

**第100図　銀代ヶ迫遺跡24号竪穴住居出土遺物実測図(1)(1/4)**




第101図　銀代ヶ迫遺跡24号竪穴住居出土遺物実測図(2)(1/4)




第102図　銀代ヶ迫遺跡24号竪穴住居出土遺物実測図(3)(1/4)




第103図　銀代ヶ迫遺跡26号竪穴住居出土遺物実測図(1/4)

## 2. 遺　物

### 1号竪穴住居出土遺物

| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 | | 焼成 | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外面 | 内面 | | 外面 | 内面 | | |
| 79 | 141 | SA1 | 甕 | 完形 | ヨコナデ、ナデ | ヨコナデ、ナデ | 良好 | にぶい橙 (Hue7.5YR7/3) | | ときに5.0mm大の茶砂礫を含む。 | 口縁から胴部上面にかけて煤が多く付着する。 |
| 79 | 142 | SA1 | 壺 | 口縁～胴部（底部を欠く） | 不明 | 不明 | 良好 | にぶい黄橙 (Hue10YR7/4) | | 3.0mm大の茶砂粒を多く含む。ときに5.0mm大の大砂粒を含む。 | |
| 79 | 138 | SA1 | 甕 | 完形 | ナデ、タテ方向粗いナデ（底部付近）（タタキのあとナデか） | ヨコナデ、粗いナデ | 良好 | にぶい橙 (Hue7.5YR7/4) | | 2.0mm大の茶砂粒を多く含む。 | |
| 79 | 139 | SA1 | 甕 | 完形 | 横ナデ、ナデ | ナデ | 良好 | 橙 (Hue5YR7/6) 浅黄橙(Hue10YR8/4) | | 2.0～3.0mmの茶色、灰色、白色の砂粒を多く含む。 | 胴部中～下に煤が多く付着。 |
| 79 | 140 | SA1 | 甕 | 完形 | ヨコナデ、タテナデ | ナナメナデ | 良好 | 浅黄 (Hue2.5YR8/4) 浅黄橙(Hue10YR8/4) | | 2.0～3.0mmの赤茶、灰色の砂粒を多く含む。3.0～5.0mmの茶色粒を少し含む。 | 胴部中～下に煤が多く付着。 |
| 79 | 143 | SA1 | 高坏 | 坏部～脚部（脚部裾を欠く） | ヨコハケメ、ナデ、ナデ（脚部） | ハケメ、ナデ | 良好 | 橙 (Hue5YR7/6) | | 極めて緻密、粒をみない。 | |
| 79 | 144 | SA1 | 高坏 | 脚部 | ナデ | ヨコ方向のケズリ | 良好 | にぶい黄橙 (Hue10YR7/4) | | 〃 | |
| 79 | 145 | SA1 | 壺 | 頸部～底部（口縁部を欠く） | 底部をのぞき、全面に粗いタタキ、調整良がある | ナデ | やや軟 | 明黄褐 (Hue10YR7/6) | | 1.0～2.0mmの茶色、灰色、砂粒、チャート粒、角閃石を含む。赤褐色粒(3.0～5.0mm大）を含む。 | 全面にタタキ調整を施す壺である。 |
| 79 | 146 | SA1 | 甕 | 口縁～胴部 | ヨコナデ、ナデ、ヘラによるナデ（胴下半） | 指頭によるナデか | 良好 | 黄褐 (Hue10YR5/8) | | 3.0～5.0mmの茶色砂粒を多く含む。 | |
| 79 | 147 | SA1 | 小坩 | 完形 | ヨコナデ、ナデ | ヨコナデ、指頭押え痕 | 良好 | にぶい黄橙 (Hue10YR7/4) | | きめ細か。茶色の礫、角閃石を含む。 | |

### 4号竪穴住居出土遺物

149・150は甕形土器の口縁部である。口縁端部の内側がいくぶん突起している。149は口辺部下が斜ハケメ調整で、煤が付着している。1.0～3.0mm大の大きな砂粒を含み、149・150とも明黄褐色を呈する。153は口縁端部を欠く甕形土器の突帯部付近である。突帯は、いわゆる絡縄状のもので、比較的高くつくられている。突帯下ナデ調整、3.0mm大の砂を多く含んでいる。

151・152は壺形土器の口縁部端かと推定する。

**5号竪穴住居出土遺物**

154は形態のわかる唯一のもので、口縁端の平坦部に櫛描による波状文をみる。胎土こまかいが、1.0～2.0㎜大の砂粒が含まれている。

**6号竪穴住居出土遺物**

162は口縁が短めに外反する甕で、内外面に稜をつくらずアールとなる。口縁下には突帯をもたない。遺存が少ないために、口径は不確実である。口縁外面にもヨコハケメ調整があるのが特徴となる。内面の上部にも一部、太めのハケメ痕があり、以下ナデ調整となる。内面、明灰色、外面明黄褐色で胎土に1.0～3.0㎜大の茶砂粒を多く含む。163は復元推定口径11.8㎝を計測する壺形土器の口縁部である。口縁端の内側がとがり気味につまみあげられている。口縁端の平坦面は凹線ふうに浅く凹んでいる。1.0～3.0㎜大の茶砂粒を多く含んだ明黄褐色をしている。内外面ともヨコナデ調整。164は中粒砂岩製の長軸側両端打欠石錘である。長軸7.5㎝、幅4.6㎝、厚さ1.2㎝である。

**7号竪穴住居出土遺物**

| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 | | 焼成 | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外面 | 内面 | | 外面 | 内面 | | |
| 84 | 165 | SA7 | 甕 | 口縁～胴部上部 | 口縁下に刺突列点文、細かいハケメ | ヨコナナメハケメ | 良好 | 淡橙色 (Hue2.5YR8/4) | | 胎土緻密。2.0㎜大の茶砂粒混入。 | 刺突列点文下に煤付着。 |
| 84 | 166 | SA7 | 甕 | 口縁～胴部上部 | 口縁下に刺突列点文、ハケメのあとナデ | 太いハケメのあとナデ | 良好(硬) | 黄灰 (Hue2.5Y6/1) | | 2.0㎜大の茶砂粒を含む。 | |

**8号竪穴住居出土遺物**

| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 | | 焼成 | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外面 | 内面 | | 外面 | 内面 | | |
| 82 | 155 | SA8 | 甕 | 口縁～胴部中 | ナナメの粗いハケメ | 細かなハケメ | 良好 | 明黄褐 (Hue10YR7/6) | | 1.0㎜大の砂粒を多く含む。 | 煤が厚く付着している。 |
| 82 | 156 | SA8 | 壺 | 口縁～頸部 | ヨコナデ | ヨコナデ | 良好 | 橙 (Hue5YR6/8) 黄橙 (Hue7.5YR7/8) | | 1.0～2.0㎜の茶褐色、灰褐色の砂粒を多く含む。 | |
| 82 | 157 | SA8 | 甕 | 口縁～胴部 | ヨコナデ、ハケメ | 太いハケメ | 良好 | 浅黄橙 | | 1.0～3.0㎜大の茶砂粒を多く含む。 | |
| 82 | 158 | SA8 | 甕 | 底部 | タテハケメ、指頭圧痕 | 風化 | やや軟 | 黄橙 (Hue7.5YR7/8) | | 1.0～2.0㎜大の砂粒を含む。 | 上げ底 |
| 82 | 159 | SA8 | 器台 | 孔付近 | ナデ、沈線あり | ナデ | 良好 | 浅黄橙(Hue10YR8/4) 黄橙 (Hue10YR8/8) | | 2.0㎜大の茶砂粒、白色石英含む。 | |
| 82 | 160 | SA8 | 器台 | 胴部～裾部 | タテ、ナナメハケメのあと沈線 | ナデ | 良好 | にぶい黄橙 (Hue10YR7/4) | | | |
| 82 | 161 | SA8 | 小型甕 | ほぼ完形 | 風化 | ヨコナデ、一部に指押え | 良好 | 浅黄橙 (Hue10YR8/4) | | 0.5～4.0㎜大の灰色、褐色、茶色砂粒を多く含む。 | |

9号竪穴住居出土遺物

出土した遺物は、土器片、および鏡片である。土器は、壺形土器の口縁から頸部にかけての大破片である。口縁の形状は、口縁端部の角を鋭く単口縁につくり、頸部に刻目のない断面三角形の突帯が2条巡っている。

鏡片は、9㎜×4㎜×1㎜（厚）を計測する小さなもので住居跡の埋土中から出土した。小型の舶載鏡（後漢鏡）となろう。鏡背部に櫛目文が観察される。内行花文鏡か方格規矩鏡であろうか。鏡面にツヤが残っている。短辺側の割れ面は鋭く、長辺側の割れ目には、磨耗がみられる。いわゆる破鏡であろう。

11号竪穴住居出土遺物

173は、器高（底部一部欠）36.7cm、口径24.3cmを測るやや長胴の甕である。突帯上部から強く外反する「く」の字口縁をもつが、屈曲部内側は稜とはならずアールがつく。突帯よりやや下に最大胴部径をもって底部にむけて尖りぎみにすぼまる。底部は欠落しているが平底を呈するものと推定される。突帯は絡縄状を呈するもので、刻目は施文具に布をあてがったもので斜位（右上がり）に刻まれている。胎土に1.0～5.0㎜大の褐、灰、白色の砂粒を多く含んでいる。

174は、「く」の字に外反する器高30.7cm、口径（推定）25cmの甕形土器で、中央より上部刻目下に最大胴部径をもってゆるやかにすぼまりながら底部に至るバランスのとれた器形である。底部はやや上げ底気味で外側に張り出して器台状につくられる。口縁直下にヘラ状工具による右上がりの長さ1.5～1.8cmの刺突斜線文が密に施文される。また刺突斜線文は波状に巡っている。器外面はタテハケ目調整。内面はハケ目がまったくみとめられず丁寧なナデ調整となっている。内外とも浅黄橙色を呈し、1.0～5.0㎜前後の茶褐色、灰色の砂粒が多く含まれている。

175は、口縁部が短く外反する器高（現高）30.8cm、口径（推定）25cmのやや小型の甕形土器である。胴部中ごろに胴部最大径をもって丸みのある器形を有する。器外面はタテハケ目調整、内面ヨコハケ目に、胴部上半を中心に指頭圧痕をのこす。内外ともに浅黄橙色を呈して胎土に1.0～4㎜台の茶褐色、灰色砂粒を多く含んでいる。

176は、大甕の口縁部であり口径51.5cmある。口縁は突帯部からアールをもってやや短く急反するもので、口縁端はやや凹み、厚みも口縁器壁とそう変わらない。突帯は、断面三角形で、やや上向きに貼付されている。突帯下にハケメ、内面は風化により、調整不詳。胎土に茶褐色の砂粒（1～3㎜）を多く含んでいる。

177は、口縁端と胴部を欠くが、長頸壺の頸部である。表面はタテ方向のヘラミガキ調整、内面上部はヨコナデ、下部は斜方向のナデ調整となる。胎土に1～4㎜の茶褐色、灰色の砂粒を多く含んでいる。

179は、底部がつよい上底、脚状の高台となるもので、鉢形土器となろう。器壁は比較的薄手で、そのままゆるく立ち上がりをみせている。

12号竪穴住居出土遺物

| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 外面 | 文様および調整 内面 | 焼成 | 色調 外面 | 色調 内面 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 87 | 180-1 | SA12 | 甕 | 口縁～胴部（底部欠く） | ―― | ヨコナデ、やや粗いナデ | 良好 | にぶい橙（Hue7.5YR7/4） | | 1.0㎜大の砂粒をを多く含む。 | 胴部上部に煤多く付着。 |
| 87 | 180-2 | SA12 | 甕 | 完形 | 風化 | 風化 | 極良好 | 橙（Hue7.5YR7/6） | | 3.0㎜大の砂粒をを多く含む。 | |
| 87 | 180-3 | SA12 | 甕 | 口縁～胴部片 | ヨコナデ、ナナメナデ | ナナメナデ、タテナデ | 良好 | 淡黄（Hue2.5YR8/3） | | 1.0～3.0㎜大の茶褐色、灰色粒を多く含む。 | 胴部に煤が多く付着 |
| 87 | 180-4 | SA12 | 甕 | 口縁～胴部片 | ヨコナデ、ナナメナデ | ナナメナデ、タテナデ | 良好 | 淡黄（Hue2.5YR8/3） | | 1.0～3.0㎜大の茶褐色、灰色粒を多く含む。 | |
| 87 | 181 | SA12 | 器台 | ほぼ完形 | ヨコナデ、ナデ | ヨコナデ、ナナメナデ | 良好 | 橙（Hue5YR7/8）浅黄橙（Hue7.5YR8/6） | | 1.0～6.0㎜大の茶褐色、灰褐色の砂粒を多く含む。 | |
| 87 | 182 | SA12 | 甕 | 底部 | タテナデ、ナデ | タテナデ | 良好 | 浅黄橙（Hue10YR8/3）灰（Hue7.5YR4/1） | | 1.0～3.0㎜大の茶褐色、灰色、白色粒を多く含む。 | あげ底 |
| 87 | 183 | SA12 | 甕 | 底部 | ナデ、ヨコナデ | ―― | 良好 | 浅黄橙（Hue10YR8/3）褐灰（Hue10YR6/1） | | 1.0～3.0㎜大の褐色、灰色砂粒を多く含む。 | あげ底 |

13号竪穴住居出土遺物

186は口縁下に刺突による斜刻線列を有する復元口径20cmの甕形土器である。外反する口径は口縁端部が平坦におさめられ、その屈曲部においては器壁厚が、口縁厚より厚くなっており、、全体に幾分シャープさに欠けている。胴部下半に媒付着、上半ヨコナデ調整で内面調整は風化のため不明。胎土に2.0～3.0㎜台の砂粒を多く含み、外面橙色、内面黄灰色を呈している。

187は、口縁部が長くゆるく外反する小型の甕で、外反部内面にアールがついて稜をもたない。内外ともナデ調整で、橙色を呈し1.0㎜大の砂粒を含んでいる。

188は、口縁部から屈曲部、胴部にかけて厚みの変化がない。口縁部はややゆるく外反し、内面に不明瞭な稜をつくる。全体に風化して調整不詳。30㎜大の砂粒を多く含み、石英

は1.0㎜大を含んでいる。

### 14号竪穴住居出土遺物

| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 | | 焼成 | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外面 | 内面 | | 外面 | 内面 | | |
| 90 | 191 | SA14 | 甕 | 口縁～胴部 | タテ～ナナメハケメ | ヨコハケメ | 良好 | にぶい橙 (Hue7.5YR7/4) | | 2.0～3.0㎜の白色砂、茶砂粒を多く含む。 | 突帯下から胴部にかけて煤付着。 |

### 15号竪穴住居出土遺物

| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 | | 焼成 | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外面 | 内面 | | 外面 | 内面 | | |
| 92 | 194 | SA15 | 甕 | 完形 | ナナメハケメ、タテハケメ（底部） | ナナメハケメ、ナデ（粗い） | やや軟 | にぶい黄橙 (Hue10YR7/3) | | 2.0～3.0㎜大の茶砂灰色砂粒を多く含む。ときに5.0㎜大のものあり。 | 口縁から突帯にかけて煤付着、刻目突帯あり。 |
| 92 | 195 | SA15 | 甕 | 口縁～底部（1/2） | タテハケメ、押え痕（底部） | ヨコハケメ | 良好 | 明黄褐 (Hue10YR7/6) | | 2.0～3.0㎜大の砂粒を多く含む。 | 口縁下、胴部上位に煤が厚く付着している。 |
| 92 | 196 | SA15 | 甕 | 口縁～底部（1/3） | ヘラ状のものでタテナデ | 太いナデ（胴上半）以下風化 | 良好 | 橙 (Hue7.5YR6/8) | | 3.0～5.0㎜大の茶灰色砂粒を多く含む。 | 底部付着。煤付着。 |
| 92 | 197 | SA15 | 甕 | 口縁 | タテハケメ | ナデ | 良好 | 橙 (Hue7.5YR6/8)<br>橙 (Hue7.5YR6/8) | | 1.0㎜大の茶砂粒を含む。 | 頸部に斜線線の刺突列がある。煤付着。 |
| 92 | 198 | SA15 | 高台付鉢 | 完形 | タテヘラミガキ | ヨコ・タテヘラミガキ | 良好 | 明黄褐(Hue10YR7/6)<br>明黄褐(Hue10YR7/6) | | 1.0～4.0㎜大の茶砂粒を多く含む。 | |
| 92 | 199 | SA15 | 壺 | 口縁～胴部（底部を欠く） | 風化 | 風化 | 良好 | にぶい黄橙 (Hue10YR7/3) | | 2.0～3.0㎜大の茶砂粒を多く含む。 | 波状文、沈線文、貼付文 |
| 92 | 200 | SA15 | 短頸壺 | 口縁～底部 | 風化 | 風化 | 良好 | 橙 (Hue7.5YR6/6)<br>橙 (Hue7.5YR6/6) | | 2.0㎜大の砂粒多く含む。1.0㎜大の石英を含む。 | |
| 92 | 201 | SA15 | 壺 | 口縁～底部 | 風化 | ナデ（胴上部） | 良好 | 浅黄橙 (Hue10YR8/4) | | 2.0～3.0㎜大の茶砂粒を極めて多く含む。 | |
| 92 | 202 | SA15 | 壺 | 口縁～胴部（底部を欠く） | ヨコハケメ | ヨコハケメ | 良好 | にぶい黄橙 (Hue10YR7/3)<br>明黄褐(Hue10YR6/6) | | 2.0～3.0㎜大の茶砂粒を多く含む。2.0㎜大の白色粒を含む。 | |
| 92 | 203 | SA15 | 鉢 | 完形 | ナデ | ヨコナデ、ナデ | 良好 | 橙 (Hue7.5YR6/8) | | 1.0～2.0㎜大の茶砂粒。2.0㎜大のチャート粒。3.0㎜大の赤褐色粒を多く含む。 | 全体に風化している。 |
| 92 | 204 | SA15 | 壺 | 頸部～底部 | ハケメのあとミガキ | ナデ | 良好 | 明黄褐(Hue10YR7/6) | | 2.0～3.0㎜大の茶砂粒を多く含む。 | |
| 92 | 205 | SA15 | 器台 | 完形 | ナデ | ヨコナデ、粗いナデ | 良好 | にぶい橙 (Hue7.5YR7/3) | | 1.0～2.0㎜大の灰色茶色砂粒を多く含む。 | 器胴部に沈線が多く巡る。 |
| 92 | 206 | SA15 | 壺 | 口縁～底部 | 風化 | 底部付近ナデ | 良好 | にぶい黄橙 (Hue7.5YR7/2) | | 3.0～4.0㎜大の丸粒砂を極めて多く含む。 | |
| 92 | 207 | SA15 | 壺 | 口縁～胴部（底部を欠く） | タテハケメ | ヨコナデ、指おさえ | 良好 | 橙(Hue7.5YR6/4)<br>明黄褐(Hue10YR6/6) | | 2.0㎜大の砂粒を多く含む。 | 煤付着。 |
| 92 | 208 | SA15 | 長頸壺 | 口縁部 | ヨコナデ、ミガキ | タテナデ | 良好 | にぶい黄橙 (Hue10YR7/3) | | 1.0～2.0㎜大の茶砂粒を多く含む。 | 頸部に突帯が巡る。 |

17号竪穴住居出土遺物

209は、ゆるく「く」の字に外反する甕形土器である。口縁と胴部は接合しないが同一個体である。低い突帯に右上がりの刻目（絡縄）が刻まれる。外面には口縁付近まで厚く煤が付着している。調整は突帯下約4㎝ほどまでナデ調整、以下ヨコハケメ調整となる。内面は砂粒がむきだしになっているが、ナデ調整とおもわれる。胎土に1.0㎜大の茶砂粒、石英を多く含むが、焼きが軟調で間隙がみられる。内外ともに浅黄褐色を呈する。210は、頸部が短く、強く外へ急反する短頸壺である。器高19.7㎝、口径14.0㎝。

18号竪穴住居出土遺物

212～214、217～219は甕形土器の口縁部、および口縁部付近の小片である。212はゆるく外反してアールのつく口縁部で、口縁端はほぼ同じ厚さで平坦である。213、214は絡縄突帯付近の部位である。214の絡縄は幅広くて低く施されている。213、214とも焼成やや軟であり、213はとくに間隙がめだっている。215は甕あるいは壺形土器の胴部であろう。外面にはひじょうに細かいハケメが左右方向にみられる。内面はヨコナデ調整となり灰褐色を呈する。216は遺存部分が全口径の約6分の1程度で器形やや不確実。小型の壺、あるいは器台となろう。推定口径9.2㎝で黄灰褐色を呈する。217の甕形土器片には内面に指頭圧痕がある。219は壺形土器の口縁部であろう。

19号竪穴住居出土遺物

223は甕形土器の口縁部で、外反はゆるく、直行にちかい。下端にタタキメの痕がわずかに残っている。口辺外面は粗いナデ調整で、タタキのあとのナデ痕であろう。227はその胴部片でありヨコ方向の浅いタタキメが残る。内面は細かいハケメ調整、この破片は器壁が同時期の甕・壺に比べて極めて薄いのが特徴である。224は223、227の底部となろう。底部の中心部が浅い上げ底となり、全体はやや肥厚した丸底となる。225、226は手捏のミニチュア土器で、225、226ともその法量がほぼ一致する。いずれも、胎土細かく、砂粒がほとんどめだたない。225は口径4.6㎝、器高2.8㎝、226はそれぞれ4.0㎝、2.8㎝となる。

20号竪穴住居出土遺物

半折した磨製石庖丁（223）が出土している。共伴した胴部土器片から土師器にともなう古墳時代の石庖丁である。刃部はゆるいカーブの直刃となる。残存刃部に使用痕がみられる。孔は石器幅に比して極めて小さく、径3.0㎜位と推定される。

21号竪穴住居出土遺物

228は、卵形状の小鉢である。内外面とも風化著しいが、ナデ調整痕を残す。229は、直刃

の半月形磨製石庖丁。大きめの孔は、表裏両面から穿たれている。器幅4.0cm。230、231、232は磨製石鏃である。230、232は平茎、231には表裏両面に鏃形状の凹みがみられる。3点とも灰緑色の硬質泥板岩製。

**22号竪穴住居出土遺物**

234、235は緑泥板岩のチップから、簡易に製作されたとみられる小型の石鏃である。234には片面に凹みをつける。235は、縦長のチップの一端を尖らせたもので、もう一端は無整形のまま茎となる。

**24号竪穴住居出土遺物**

| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 外面 | 文様および調整 内面 | 焼成 | 色調 外面 | 色調 内面 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 100 | 236 | SA24 | 甕 | 口縁～底部 | 風化、やや粗いハケメ（底部付近） | ヨコナデ | 良好 | にぶい橙 (Hue7.5YR7/4) | | 2.0mm大茶砂、灰色砂多く含む。ときに4.0mm大の大砂粒含む。 | 刻目突帯あり。 |
| 100 | 237 | SA24 | 中型甕 | 口縁～突帯 | ナデ、ハケメ | ナデ | 良好 | 橙 (Hue7.5YR7/6) | | 2.0mm大の茶色粒、チャート角粒を含む。 | |
| 100 | 238 | SA24 | 甕 | 口縁～胴部下（底部欠く） | ナナメハケメ | ヨコハケメ | やや軟 | にぶい黄褐 (Hue10YR7/3) | | 2.0～4.0mm大の茶砂粒、灰色粒、チャートを多量に含む。 | |
| 100 | 239 | SA24 | 甕 | 口縁～胴部下（底部欠く） | ナナメハケメ、タテハケメ（胴中～下） | ハケメ、ナデ（胴中～下） | 良好 | 明黄褐(Hue10YR7/6) | | 2.0～3.0mm大の茶砂粒を多く含む。 | 口縁付近に煤付着。 |
| 100 | 240 | SA24 | 小型鉢 | 完形 | タテハケメ | タテハケメ | 良好 | 橙 (Hue5YR7/6) 橙 (Hue5YR7/6) | | 1.0mm大の茶砂粒を多く含む。 | 口縁下に煤付着 |
| 100 | 241 | SA24 | 甕 | 底部 | タテハケメ | ナデ、指頭痕 | 良好 | 黄橙 (Hue10YR7/6) | | 2.0～3.0mm大の茶砂粒を非常に多く含む。 | 上底。 |
| 100 | 242 | SA24 | 壺 | 完形 | ヘラナデ（ツヤがある） | ナデ、指頭によるかきあげ | やや軟 | 明黄褐(Hue10YR5/8) 頸部から下内面は暗灰色 褐灰 (Hue10YR4/1) | | 3.0～5.0mm大の茶砂粒をときに含む。 | |
| 100 | 243 | SA24 | 壺 | 完形 | ナナメハケメ、タテハケメ（底部） | 風化してデコボコしている | 良好 | にぶい橙 (Hue5YR7/6) | | 2.0～3.0mm大の茶砂粒、灰色砂粒を含む。 | |
| 100 | 244 | SA24 | 壺 | 口縁部片 | ハケメ | 粗いハケメ | 良好 | 明黄褐(Hue10YR7/6) | | 2.0～3.0mm大の茶砂粒、チャート含む。 | |
| 100 | 245 | SA24 | 壺 | 口縁～胴部 | 風化 | 風化 | 良好 | 橙 (Hue7.5YR7/6) 橙 (Hue7.5YR7/6) | | 2.0～3.0mm大の砂粒が極めて多い。 | |
| 100 | 246 | SA24 | 高台付鉢 | 鉢部 | ヘラ状ナデ、タテハケメ | ヨコナデ | 良好 | にぶい橙 (Hue5YR7/4) | | 1.0～2.0mm大の茶砂粒を多く含む | |
| 100 | 247 | SA24 | 小壺 | 胴部～底部 | ハケメ | ナナメの粗いハケメ | 良好 | 明黄褐(Hue10YR6/8) | | 2.0mm大の茶色粒、チャート粒を含む。 | |
| 100 | 248 | SA24 | 小鉢 | 完形 | ナデ、下部おさえ | ナデ、下部おさえ | 良好 | にぶい橙 (Hue5YR7/4) | | 胎土こまかい。1.0mm大の茶色粒、石英を含む。 | |

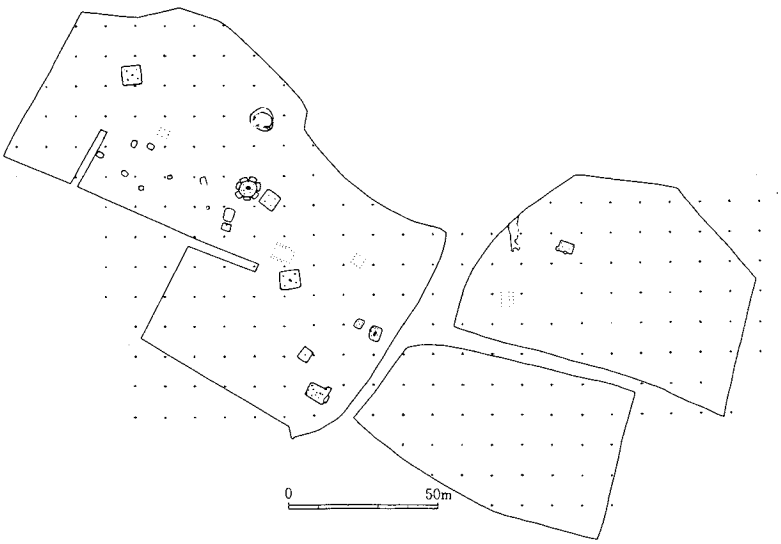
## 26号竪穴住居出土遺物

| 図面番号 | 遺物番号 | 遺構名 | 器種 | 器部 | 文様および調整 | | 焼成 | 色調 | | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 外面 | 内面 | | 外面 | 内面 | | |
| 103 | 253 | SA26 | 高坏 | 坏部片 | ヨコナデ、タテハケメ | ヨコナデ | 極めて良好 | 浅橙色 (Hue10YR8/4) | | 1.0mm大の茶砂粒石英を含む。 | |
| 103 | 254 | SA26 | 鉢 | 胴下半～底部片 | 凹凸のナデ | ナデ、底部ナデ | 不良 | 浅橙色 (Hue10YR8/4) | | 2.0～3.0mm大の砂粒を多く含む。 | |

# 第V章　ま　と　め

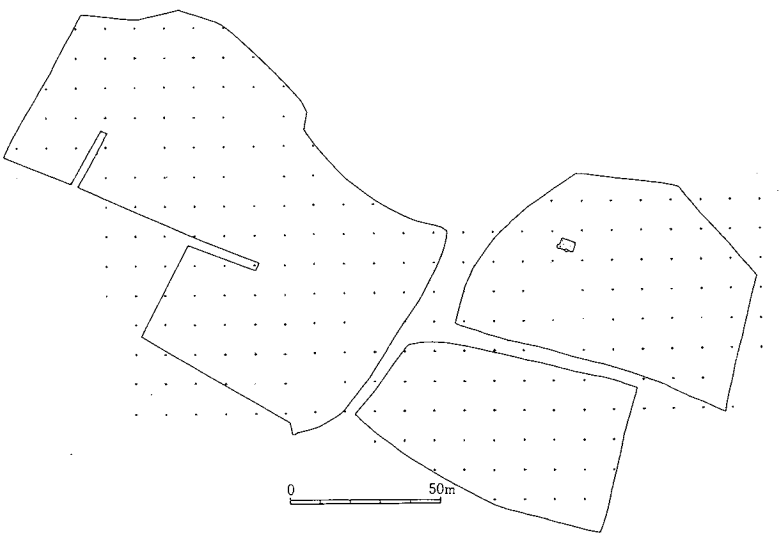
七又木遺跡、八幡上遺跡、銀代ヶ迫遺跡のある新田原台地縁辺部には、新田原遺跡(1)、上園遺跡(2)、鎧遺跡(3)をはじめとする弥生中期～古墳時代後期にわたる大きな集落が点々と営まれていたことが、ここ数年間に行われた発掘調査の結果明らかになっている。一方、一ツ瀬川、鬼付女川によって形成された沖積地においても、今別府遺跡(4)、鬼付女西遺跡(5)、園田遺跡(6)、など弥生前期～後期の集落が知られていて、台地縁辺部、沖積地ともに県内有数の集落遺跡の密集地である。さらに、一ツ瀬川上流には国指定史跡西都原古墳群があって、本遺跡一帯が古代日向の一大中心地といえる地勢にある。それでは、これらの台地上集落の生活の基盤になる生業の場は、集落ののる台地部あるいは沖積地のいずれにもとめることができるであろうか。今回の調査においては、生業に直接つながる遺構を検出していないが、比高60mの沖積地との往来は、シジミ、カワニナのつまった八幡上遺跡の８号土壙の検出によって、確実に行われていたことが明らかになった。また、住居内に稲が持ち込まれていたことも花粉分析の結果明らかになっており水稲、陸稲の問題は一時おくとしても稲作が行われていたことも確実である。その他、ハンノキの花粉検出によって、低湿地の開発が想定されたことも大きな成果であり、居住地を台地部にもちながら、主な生業の場を沖積地に依存していたことが考えられる。しかし、住居近くにおいて畑作も行われたと考えられるが、大面積の調査にもかかわらず畑作にかかわるような遺構を検出できなかったことは、発掘調査の技術的な問題にも係わることながら遺憾であった。検出された遺構では、貼り床によるベッド状施設をもつ花弁状住居や屋内に粘土を集積した長方形大型住居、土壙群、定形化した古墳時代の方形住居など弥生中期から古墳時代前期にわたる集落の変遷を明瞭に示す遺構が検出された。また遺物では、住居内検出としては県内初例である磨製石剣や同じく初例の後漢鏡片、丁字頭勾玉をはじめ、住居内一括出土のタタキ調整痕をのこす土師器など、県内基礎資料の蓄積にとって興味深い貴重な遺物が得られた。ここでは、八幡上遺跡、銀代ヶ迫遺跡の住居変遷、弥生土器や土師器について若干のべてまとめに替えたい。

## 八幡上遺跡における集落の変遷

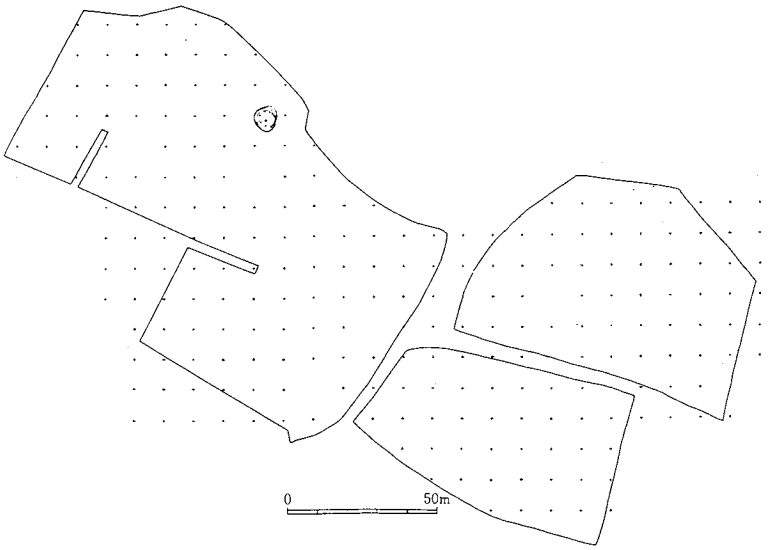



**第104図　八幡上遺跡検出の住居址群(弥生中期～古墳前期)**

八幡上遺跡の集落は、出土した土器の形態から中期末から古墳前期にわたる５期に破綻なく変遷するものと推定した。ただ、土器の編年観の違いにより、下記の１期とⅡ期を同時期ととらえる見方も成り立とう。弥生時代では、後期の初頭から後期前半期が本遺跡の最盛期である。なお、出土遺物のなかった掘立柱建物は時期の推定が困難であるが、周辺の柱穴から出土した遺物から弥生時代後期前半と推定しておきたい。




**第105図　Ⅰ　期(弥生中期末)**



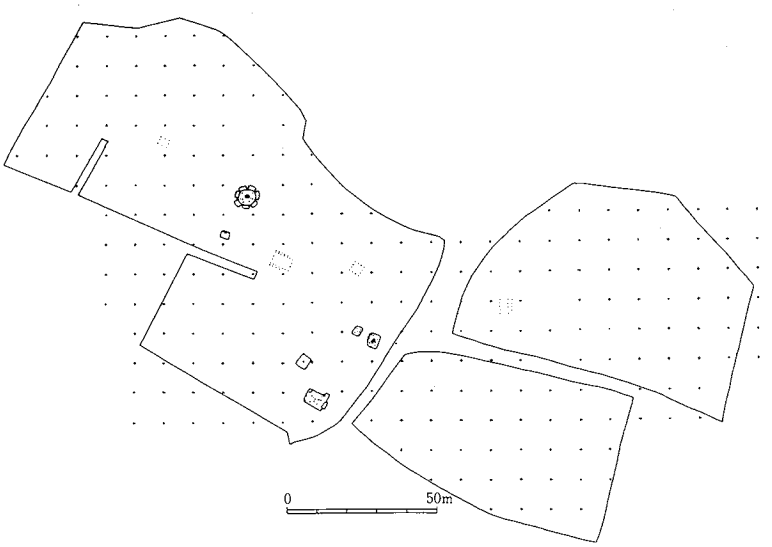

**第106図　Ⅱ　期（弥生後期初頭）**

Ⅰ期（中期末）

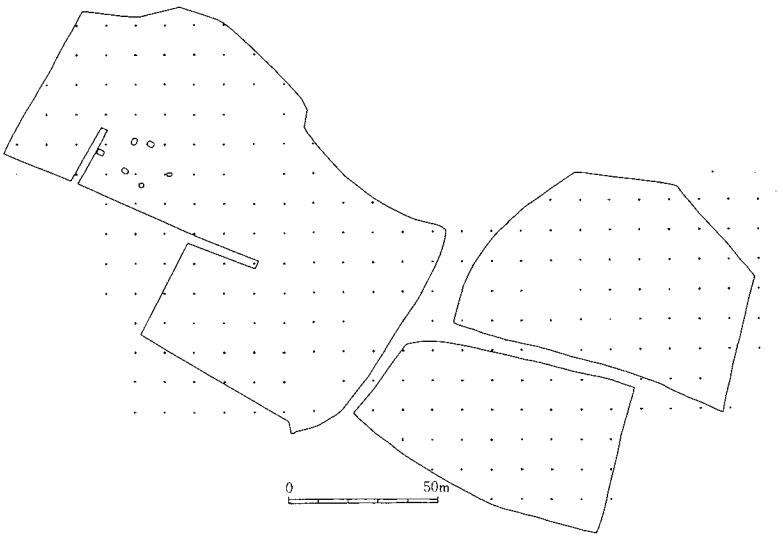
発掘区東端に13号住居がただ一軒営まれる。断面台形の逆Ｌ字形口縁によって中期末の時期が与えられる。

Ⅱ期（後期初頭）

13号住居にややおくれて、北端の深い谷部近くに磨製石剣の出土した円形の４号住居が営まれる。



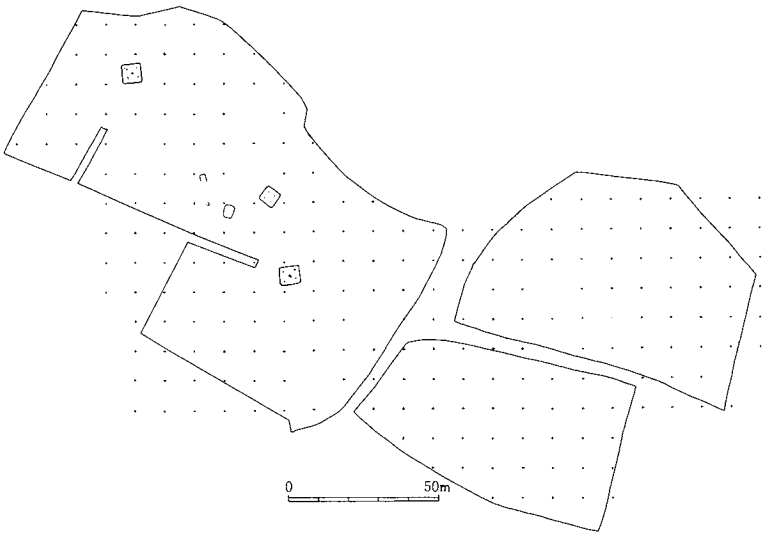

**第107図　Ⅲ　期（弥生後期前半）**




**第108図　Ⅳ　期(弥生後期中葉)**

Ⅲ期（後期前半）

この台地における盛期であり、6軒の竪穴住居と4棟の堀立柱建物がたてられる。しかし、11号と12号の近接関係から、さらに細かな時期差があるものとおもわれる。2号は特異な花弁状住居、10号は大型長方形に突出部もうける大型住居である。




**第109図　Ⅴ　期(古墳前期)**

Ⅳ期（後期中葉）

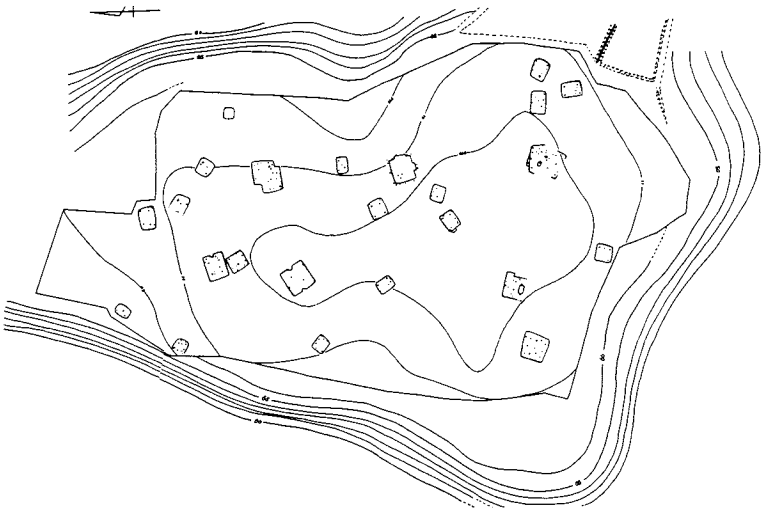
発掘区西端に6基の土壙が設けられる。4号土壙から出土した甕形土器により後期の中葉と推定される。しかし、ここにいたってこの台地は住居区ではなくなった。この時期の住居は、10m下位にある銀代ヶ迫遺跡にあり、集落の移動がおこなわれた。

Ⅴ期（古墳時代前期）

この時期になり、再び集落が営まれる。方形の定形化した大型住居を中心に5軒の竪穴住居（1号・3号・5号・7号・8号）がみられる。

## 銀代ヶ迫遺跡における竪穴住居群の集落単位の把握について

この小さな台地上を占有する26軒の住居は，いうまでもなく同時期に営まれたものではない。大別すれば弥生時代後期中葉と古墳時代前期に二分できる。さらに、この26軒の住居のグルーピングを住居の指向する方向性と占有位置関係、および出土遺物によって、同時性を追求して分類するとつぎのようになる。まず、南西方向を指向する一群（Ⅰ群）と西、北西方向を指向する一群（Ⅱ群）に大別、二分することができる。Ⅰ群は中央から北側により集中し、Ⅱ群は南端近くに密集する傾向にある。また、群中をさらに検討するとⅠ群およびⅡ群中にもSA 4，5，SA21，22，SA15などのように近接、あるいは建て替えがみられ、小時期差があることがわかる。しかし、Ⅰ群、Ⅱ群にはその方向の指向性が異なるだけで、同時に営まれた可能性も指摘できるのであって、それは、本遺跡においては一つの指標となる絡縄突帯を付帯する甕がⅠ群のSA 7，11，Ⅱ群のSA13，15から出土しており、この二群がかならずしも異なる時期とは限らないことをしめしている。このことによって、弥生期にあっては、Ⅰ群が先に占有していた時期、Ⅱ群が先に占有していた時期、Ⅰ群、Ⅱ群が同時に営まれていた時期の三種の組み合わせを想定することができる。この遺跡で時期的に確実な古墳時代の住居7軒を基準として考えたとき、Ⅰ群の8～9軒、Ⅱ群の7～8軒は、この小丘陵を占有した住居個体数として妥当な値と考えられよう。そうであれば、Ⅰ群とⅡ群の集落形成の間に（先行関係は置くとしても）何等かの要因が働くものと推定することができる。

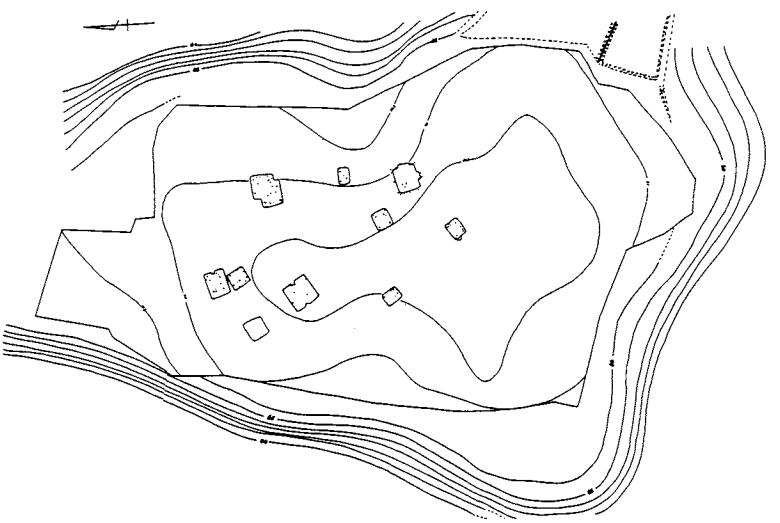


**第110図　銀代ヶ迫遺跡検出の住居址群(弥生後期中葉～古墳前半)**

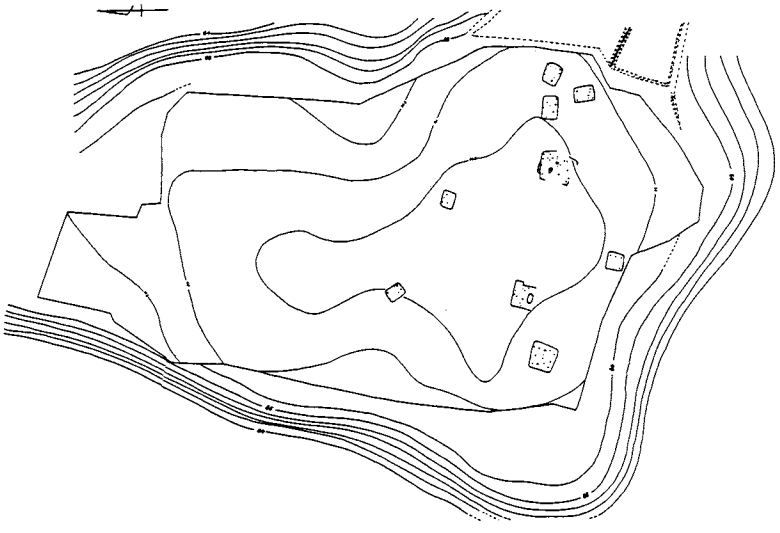
Ⅰ　群

発掘区の中央部から、北側中央寄りにかけて集結する弥生時代後期中葉土器をもつ11軒の一群である。各住居の指向する方向をNE−SWにとるものを一群としてとらえた。なお、SA21と22は近接すること、SA４と５は建て替えにより時期を異にすることは明白である。

このうちSA８が東と南側の一辺に張り出しをもつ大型住居、SA24規模的には大型で集



**第111図　Ⅰ　群**



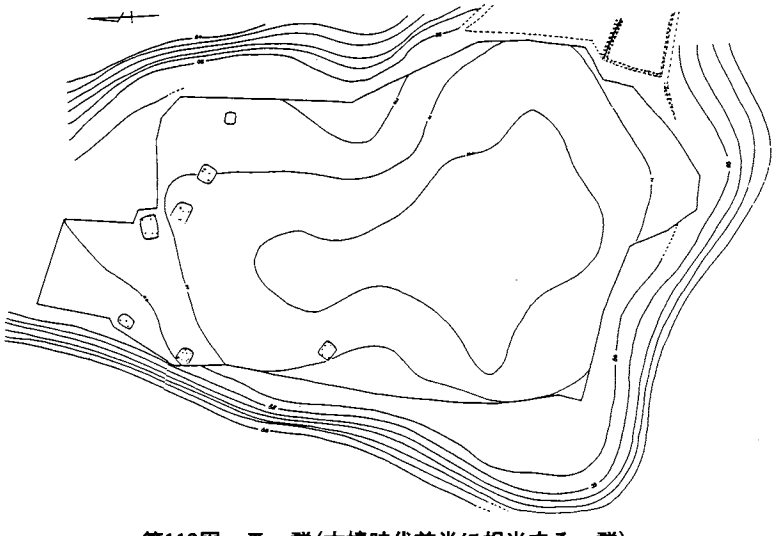
**第112図　Ⅱ　群**

落の中心的住居かとおもわれる。SA21とSA24は主軸の方向、形態ともに類似し、ほぼ同時期ととらえてよいであろう。これらから、同時期に8～9軒の共存が推定できる。

**Ⅱ　群**

Ⅰ群から一転して発掘区の南端を主に集結するもので、主軸方向をE－W方向にとるものを一群としてとらえた。

SA16，17，18は近接しすぎて同時期としてとらえるには無理がある。出土遺物によっ



**第113図　Ⅲ　群(古墳時代前半に相当する一群)**

ても前後関係を推定できない。SA15は建て替えがみられる。

Ⅲ　群

北端に集結する7軒である。出土遺物から4世紀後半の古墳時代に相当する住居であり、Ⅰ，Ⅱ群とは明確に時期を異にする住居群である。SA 1，SA20は近接し、時期を若干異にすると考えられるものである。

## 銀代ヶ迫遺跡出土土器について

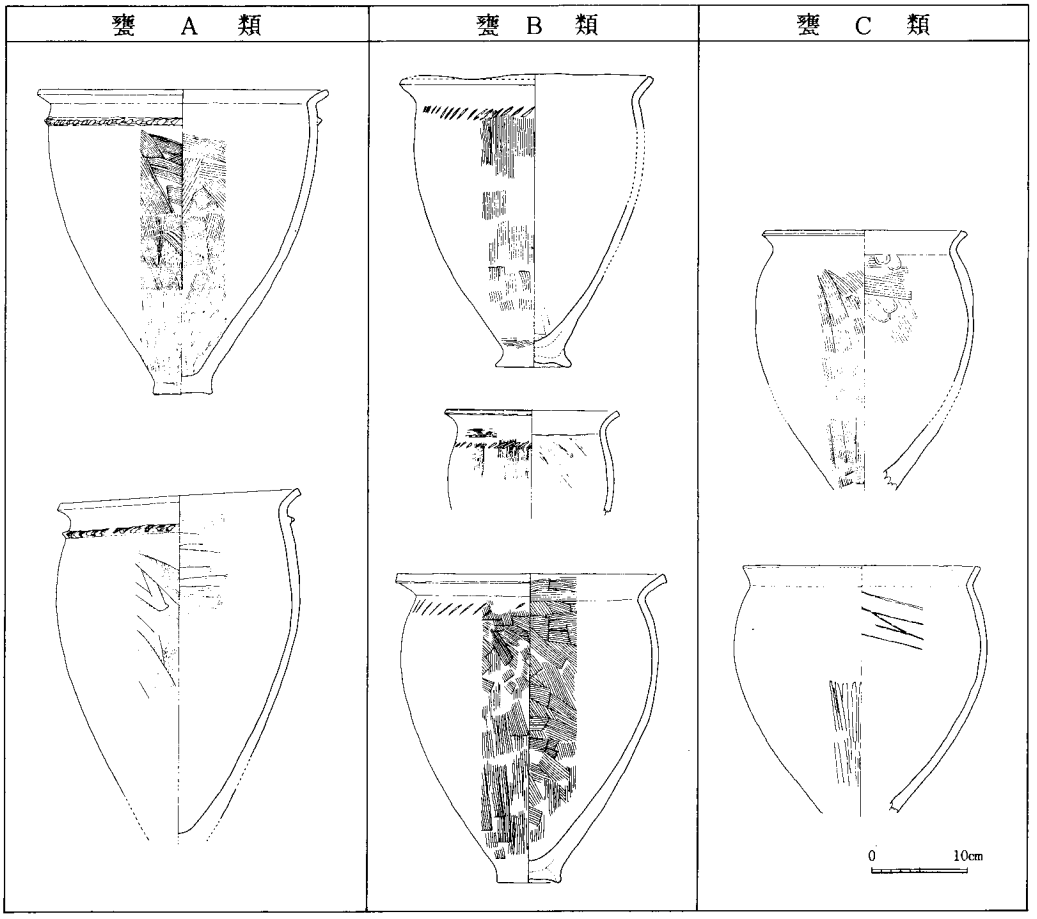
銀代ヶ迫遺跡から得られた弥生土器を、形態の変遷がより敏感な甕形土器を主にみてゆくと次ぎのようになる。出土した甕の形態は、もっとも出土量の卓越した中型甕の場合、口縁直下の突帯や刺突線文の有無によって3種に分類できる。そのひとつは、断面「く」の字に外反する口縁部をもち、やや上げ底気味の平底部から緩いカーブで立ち上がり、最大径が胴部上半にあるもの。これは、口縁の外反屈曲直下に粘土紐を貼りつけて、その上から施文具先端を押しつけ右上がり斜位の刻み目を平行に羅列し、一見絡縄突帯状を呈するもの。(甕A類)

これは、いわゆる下城式甕における刻目突帯の左右両方向からきわめて丁寧な手法で鋭利に切り取られた刻目、あるいは施文具を直に刺突して成形される刻目とはあきらかに異なる手法のものである。もうひとつは、口縁の外反屈曲部直下に粘土帯を貼り付けることなく、本来ならば、突帯のつく位置に、右上がり斜位の刺突線文を並行に羅列するもので刺突線文の形状は左斜下方に鋭く尖った三角形状を呈する。(甕B類) 刺突線文の多くは施文具の竹の横断面に似た押圧文様を残している。最後のひとつは、口縁の外反屈曲部直下に、なんら付帯しない単純な「く」の字口縁形状のものである。(甕C類)

これらの三種の形態の甕は、13号住居、15号住居で三種ともそろい、11号住居ではA，B類の二種と大甕が組み合わされる。これによって、この三種はある時期において併存したことが知られるが、この三種を出土量からみれば、やはり、A・B類が普遍的であって、B類の出方はやや従属的傾向が窺われる。B類は、当遺跡の他では、佐土原町下那珂遺跡においてまとまって出土しているほかは、類例の少ない普遍性を欠く一群であって、その出土地は一ツ瀬川から石崎川流域一帯に限定される可能性が現段階では指摘される。

B類とした「く」の字口縁の刻目突帯の甕と鋤先口縁を有する壺との共伴(24号住居)は、本遺跡によって初めて確認された。これによって、甕形土器を主体にして考えた場合、鋤先状口縁をもつ甕はかなり後まで残ると考えるか、あるいは、鋤先口縁壺を主体に考えれば、

「く」の字口縁刻目甕の出現が比較的早い時期に出現したものとの二通りの考え方が得られる。15号住居で出土した短頸壺や、8号、15号住居の沈線を巡らせる器台、先述の線刻列点文甕など共伴関係を見るとき、本遺跡出土弥生土器の主体は、佐土原町下那珂遺跡の主体となる時期よりやや上る後期中葉前半(石川ⅣC期)を受ける資料となり得よう。




**第114図　弥生土器（甕）の分類**

## 八幡上遺跡、銀代ヶ迫遺跡出土の土師器について

土師器は主に住居跡から出土している。八幡上遺跡では、定形化した大型の方形住居から、銀代ヶ迫遺跡では、やや小型の不整方形住居からの出土である。両遺跡とも須恵器は共伴しておらず、八幡上遺跡8号住居では鉄器との共伴がみられ、銀代ヶ迫遺跡20号住居では石包丁が共伴した。大半は通常の住居内出土状態を示していたが、八幡上遺跡3号住居出土土器のように廃棄されたとみられる状態で大量に出土したものがあった。土器の形態は口辺部の外反度合の少ない、直口にちかい口縁に丸底気味の底部をもつ甕形土器が主体を占め、外面調整に粗いタタキ調整痕を残すものが多かった。これらは、例外なく胴部に厚く煤がこびりついており、日常の煮炊きに使用された当時の普遍的な使用形態を示すものとおもわれる。この甕の形態は、同町内の上薗遺跡出土資料の一部とほとんど同様であり、この遺跡の一時期と併存した時期のあることをしめしている。壺形土器では口縁部が外反し頸部に×印の刻みのはいった突帯の巡る球形壺や、外反する口縁をもつ二重口縁壺、直口する口縁に胴部が球形に膨らむ丸底のものなどが出土している。壺形土器も甕形土器同様にタタキ調整痕を残すものの比率がたかい。この太いタタキ調整を残す土器の出土率は他の遺跡にくらべて格段に高く、いままでのところ川南町から高鍋町、新富町をへて佐土原町にいたる児湯郡を中心とする県央地区に特徴的に出土している。そのほか、小型の土器ではいわゆる小型丸底坩の系譜をひくものや、鉢形土器がみられる。いま少しその前後の時期の資料を蓄積を必要とするが、大勢においてその時期は、4世紀の後半から5世紀前半くらいの時期におさまるべきものであろうか。

註

(1) 「新田原遺跡」『新富町文化財調査報告書』第4集 1986
(2) 「北原牧地区遺跡（蔵園・上園遺跡）」『新富町文化財調査報告書』第6集 1987
(3) 「鎧遺跡」「藤掛遺跡」『新富町文化財調査報告書』第2集 1983
(4) 今別府遺跡「新富町の文化財」遺跡詳細分布調査報告書 新富町教育委員会 1982
(5) 「鬼付女西遺跡」（B地区・A地区－二次－）『宮崎県文化財調査報告書』第32集 1989
(6) 園田遺跡（一次）『宮崎県文化財調査報告書』第33集 1990

その他、関連報告書他

「新富町の文化財」遺跡詳細分布調査報告書 新富町教育委員会 1982
「川床遺跡」『新富町文化財調査報告書』第5集 新富町教育委員会 1986
「蔵園遺跡・上園遺跡・東牧遺跡」『新富町文化財調査報告書』第7集 新富町教育委員会 1988
後藤宗俊 弥生時代集落についての覚え書 －主として孤立型小集落をめぐって－
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『研究紀要 VOL.2』1985

# 附　花粉分析の結果

## 七又木地区遺跡の花粉分析

中　村　　純

従来、花粉分析の目的は自然環境の変遷の復元であって地表に堆積する花粉が分解消失しにくい場所、例えば水湿地の堆積物が専ら分析の対象であった。今回分析を委託された資料は洪積台地上に残された古代人の集落あとのもので分析の対象としては不適当とみなされがちなものであった。とくに家屋内への花粉の堆積は①家屋内は乾燥している。②屋根のため浮游花粉の落下が妨げられる。ことから花粉の残留量はきわめて僅かであろうと考えられ、この種の分析はほとんど行われない。しかし乍ら今回の試料の分析の結果、予想以上に多種類の花粉を含み、古代人の生活と植物との関係上について新しい情報を提供しうることが明らかとなった。このような試料の分析の機会を与えられた新富町教育委員会の方々に厚く感謝する。

### 試　　料

提供された試料はつぎの10試料であるが、いずれも火山灰質黒色土であり、肉眼的な有機物は含まれていない。

| 遺跡名 | 試料番号 | 備　考 |
|---|---|---|
| 銀代ヶ迫 | SA－8 | 住居址床面上 |
| 〃 | SA－11 | 〃 |
| 〃 | SA－20 | 〃 |
| 〃 | SA－24 | 〃 |
| 八幡上 | SC－6 | 土壙の埋土 |
| 〃 | SC－4 | 発掘された「カメ」中の土 |
| 〃 | SB－3 | 掘立柱建物柱穴の土 |
| 七又木 | SI－2 | 集石遺構の土 |
| 〃 | SI－3 | 〃 |
| 〃 | SI－5 | 〃 |

### 分　析　法

1. 100～200ｇの試料に10％KOHを加え、加熱かくはんし、２～３分静置後、上液を傾斜法で分離する。同様な処理を同一試料に数回くり返し上液を集める。
2. 集めた上液を遠心分離し沈澱物を集める。

3. これに塩化亜鉛液（比重1.65）を加え遠心分離し、表面に分離浮上した部分をとる。
4. これに弗化水素液を加え24時間放置後水洗いする。
5. この残渣にアセトリシス液を加え加熱醋酸分解させる。
6. 残渣をアルカリ中和させ、草本花粉をそれぞれの花粉粒数を基本数として種類ごとに％で出現頻度を示した。また150個以下の場合は試料50ｇ当りの粒数で示した。それらの結果は表１～４に示した。

## 分　析　結　果

1. 銀代ヶ迫遺跡（表１、２）

試料SA８、11、20、24はいずれも住居址面の土である。検出された木本類は32種類、うち風媒花は17種類、草本類はシダ類を含めて34種類うち風媒花は８種類であった。これらの花粉、胞子は住居址内で堆積する経路として２ルートが考えられる。

その一つは外気中に浮游している花粉が家屋内外の換気によって流入するルートである。これには家の構造、火気の使用頻度などによって量的な影響をうけるが当時の住居は現代のものに比べて恐らく気密性は低く、風媒花粉の多くはこのルートによって入ったものと考えられる。このような推定が肯定されるためには外気中の浮游花粉の組成と屋内に出現したそれの組成が等しいことが立証される必要がある。いま４試料の八媒花粉の出現頻度をみると何れもマツが最も多く、次いでコナラなどの二次林要素が多く、モミ、ツガなどの針葉樹やヤマモモ、カシ類などの照葉樹林要素も之に似た出現傾向を示している。この４試料の示す考古学的年代は弥生時代後期～古墳時代の間であるがその年代の西日本低地部の森林植生は次のように見做されている。

照葉樹林が最優勢であった植生は縄文時代晩期以降は次第に劣勢となり、弥生時代に入るとその傾向はますますはげしく、代わってアカマツやコナラを代表種とする二次林が増加するし、山地ではモミ、ツガなどの湿帯針葉樹も一時的に増加する。とくに弥生時代中期から古墳時代にかけてはマツの増加が著しく、荒地や草地も増加する。かくて有史時代になるとスギの植林が増加して現在に至っている。したがって浮游花粉の組成も上のような森林植生の変化を反映するから４試料の形成された当時の浮游花粉の組成は照葉樹類が劣勢でマツ、コナラの二次林の優勢な植生を反映しているはずである。したがって今回の４試料の風媒花粉組成は当時の外気の浮游花粉組成ときわめて似ていることになり、さきの推定は正しいと云える。

いま一つのルートは浮游花粉とならない種類が屋内で検出される場合である。このような花粉群は花の構造や花粉の形態、生産量などから外気中に広く散布されにくいと見做される種類で空中花粉の調査でもほとんど出現しないものであり、虫媒花をもつ低木類や草本類に多い。これらの花粉を集めた昆虫類が家屋内に入ることは時にあるであろうが、そこで死なない限り花粉は屋内に残らないであろう。したがって住居に出入りする人間が意

表1　銀代ヶ迫遺跡の木本花粉数

（　）内は粒数（50ｇ当り）　　×印は風媒花

| 種類＼試料番号 | SA 8 | SA 11 | SA 20 | SA 24 |
|---|---|---|---|---|
| マツ属 × | 52.8 % | 33.3 % | 33.3 % | ( 6) |
| モミ属 × | 3.1 | 1.0 | 1.0 | ( 1) |
| ツガ属 × | 4.5 | 1.0 | 1.0 | ( 2) |
| スギ属 × | 5.6 | 6.0 | 2.1 | − |
| コウヤマキ属 × | − | − | 0.5 | − |
| シイ属 × | 0.3 | 1.0 | − | ( 1) |
| アカガシ亜属 × | 11.2 | 11.8 | 3.2 | − |
| コナラ属 × | 10.9 | 24.7 | 18.2 | (10) |
| ヤマモモ属 × | 2.8 | 4.3 | 3.5 | ( 3) |
| ハンノキ属 × | − | 1.0 | 未熟花粉塊 | ( 2) |
| ハイノキ属 × | 1.0 | 4.3 | 3.5 | ( 1) |
| エノキ属 × | − | − | 0.5 | − |
| ケヤキ属 × | 1.0 | − | − | − |
| トネリコ属 × | 0.3 | 1.0 | 0.5 | − |
| アカガシワ属 × | 0.3 | 2.1 | 0.5 | − |
| カバノキ属 × | − | 1.0 | − | ( 1) |
| サワグルミ属 × | − | − | 0.5 | − |
| ミズキ属 | − | − | 0.5 | − |
| センダン属 | 0.3 | − | − | − |
| カラスサンショウ属 | 1.0 | − | − | − |
| ミカン属 | − | − | 0.5 | − |
| モチノキ属 | 0.7 | − | 10.2 | − |
| エゴノキ属 | 1.7 | 3.2 | 1.0 | − |
| ツバキ属 | − | 2.1 | 128.4 | − |
| ネズミモチ属 | 0.7 | − | 1.0 | − |
| ウツギ属 | − | − | 4.8 | − |
| ガマズミ属 | − | − | 10.2 | − |
| ハゼノキ属 | − | − | 2.6 | − |
| サカキ属 | 0.3 | − | − | − |
| ショウブ属 | − | − | 1.0 | − |
| ツツジ科 | 1.0 | − | − | − |

識的又は無意識的にこの種の花粉類を持込む場合の方が多いと考えられる。表1、2で示した風媒花意外のものはこのルートにより出現した可能性があるものである。これらの中で木本類のツバキ属はSA20でのみ異常に多く検出される。茶もこの属に入るが花粉の形

表2　銀代ヶ迫遺跡の草本、シダの花粉、胞子数

（　）内は粒数（50ｇ当り）　　×印は風媒花

| 種類＼試料番号 | SA 8 | SA 11 | SA 20 | SA 24 |
|---|---|---|---|---|
| アカザ科 × | 2.8 % | − | 4.9 % | − |
| アリノトウグサ × | 0.9 | − | 0.8 | − |
| ガマ属 × | 0.3 | − | − | − |
| イネ属 × | 7.1 | 16.3 % | 2.4 | − |
| コムギ属 × | 0.3 | − | − | − |
| オオムギ属 × | 0.3 | − | − | − |
| その他のイネ科 × | 17.5 | 38.0 | 4.9 | − |
| ヨモギ属 × | 9.3 | 6.5 | 8.6 | (12) |
| キク属 | 1.5 | − | 1.2 | |
| アザミ属 | 7.8 | 13.0 | − | − |
| クサヤツデ属 | − | − | 0.4 | − |
| その他のキク科 | 2.8 | 1.0 | 11.1 | ( 4) |
| オミチエシ属 | 0.3 | − | 1.2 | ( 1) |
| リンドウ属 | − | − | 1.6 | − |
| ウマノアシガタ科 | 6.8 | 9.7 | 41.7 | − |
| バラ属 | 0.3 | − | 3.3 | − |
| キイチゴ属 | − | − | 4.5 | − |
| キジムシロ属 | − | 1.0 | 2.4 | ( 1) |
| ナタネ科 | 3.7 | 6.5 | 5.3 | ( 9) |
| ナデシコ科 | 0.3 | 2.1 | − | − |
| ナンテンハギ | 2.8 | 2.1 | − | − |
| ネコハギ | 0.6 | − | 4.5 | − |
| キツネノマゴ | 26.8 | − | − | − |
| イヌタデ属 | 1.2 | 2.1 | 0.4 | − |
| ソバ属 | 0.6 | 1.0 | 0.4 | − |
| スミレ属 | 2.8 | − | − | − |
| セリ科 | 0.3 | − | 0.4 | ( 1) |
| スイカズラ属 | 0.3 | − | − | − |
| キツタ | 0.3 | − | − | − |
| シダ類胞子 | | | | |
| カニクサ属 | 24.3 | 4.3 | 18.0 | ( 9) |
| イノモトサウ属 | 0.6 | 3.2 | 4.1 | ( 2) |
| コシダ科 | 8.1 | − | 4.1 | − |
| ゼンマイ属 | 1.2 | − | − | − |
| ウラボシ科 | 39.6 | 47.8 | 47.5 | (33) |

態から、むしろヤブツバキであると考えられる。同じ様な出現傾向を示すものにモチノキ、ガマズミ属があるが持込まれた目的は明瞭ではない。

また、ミカン属の花粉がわずか乍らSA20で検出された。意図的に持込まれたかどうかは別として近くにこれが成育していたことは確かで同時から食用として利用されていたことを示している。その他特異なものとしてハンノキ類の未熟花粉塊が発見されている。この木は冬季は枝に未熟花が房状に集まった花序をつけており、翌春開花とともに浮游花粉を多量に散布させる性質をもっている。したがってこの未熟花粉が屋内で発見されたことは冬季にハンノキの枝がおそらく燃料として持込まれたことが想像される。

草本類ではアザミ、バラ、キイチゴ、キジムシロ、ソバの各属やナタネ科が出現するが、食用として持込まれたと考えられるが花そのものが利用されるよりも茎葉又は根部が利用された方が多いかもしれない。イネ、コムギ、オオムギは本来風媒花であるが稲わら、麦わらが持込まれた可能性もある。わら類には多量の花粉が付着していることが知られているからである。ソバでは脱穀調制が屋内で行われたためその花粉が検出されたものであろう。

ウマノアシガタ科が全試料に出現するがこの植物は有毒植物が多く、薬用としての持込みもあったかもしれないが、雑草として遺跡内に多数存在したためかもしれない。また、キツネのマゴはSA 8 でのみ異常に多くみられ、スミレもかなり検出された。これらは花粉生産量のきわめて少ない草本類であるから屋内に相当多量に持込まれたと考えられる。とくにキツネノマゴは弥生時代中期の農耕の拡大とともに出現する恐らく外来種であり、現在は農耕地周辺の雑草である。その当時としては比較的珍しい植物であったかもしれないが、これが多量に集められた目的は目下のところ判断できないが、あるいはスミレとともに子供の摘草ではなかろうか。

2. 八幡上遺跡

1. SC 6 土壙埋土に含まれた花粉について、本地点はさきの銀代ヶ迫遺跡から約350mはなれているが風媒花粉の主なものの出現頻度は大同小異で、木本類ではマツが最も多く、他は比較的少ない。草本類ではヨモギ属が多く、さきの 4 試料の結果とほゞ同時代のものと見做される。ただ前遺跡で住居内に持込まれたと推定した種類は大部分のものが本試料では出現せず、屋外での堆積であることを示唆している。
2. SC－ 4 土壙内の「カメ」の中の土。
3. SB－ 3 掘立柱建物の柱穴内の土

表３　八幡上遺跡の花粉、胞子数

（　　）内は粒数（50ｇ当り）　　×印は風媒花

| 種類＼試料番号 | S C | S C | S B |
|---|---|---|---|
| | 6 | 4 | 3 |
| 木本類 | | | |
| マツ属 × | 42.4 % | ( 5) | (23) |
| モミ属 × | 12.1 | ( 1) | ( 3) |
| ツガ属 × | 2.2 | ( 3) | ( 5) |
| ナギ属 × | 3.0 | − | − |
| コウヤマキ × | − | − | ( 1) |
| シイ属 × | 0.7 | − | − |
| アカガシ亜属 × | 6.8 | ( 1) | − |
| コナラ属 × | 10.6 | ( 3) | ( 3) |
| ヤマモモ属 × | 9.0 | ( 8) | ( 1) |
| ハンノキ属 × | 5.3 | − | ( 5) |
| ハイノキ属 × | 2.2 | ( 1) | − |
| ヤマモガシ属 × | 0.7 | − | − |
| サワグルミ属 × | − | − | ( 1) |
| ツバキ属 | − | ( 2) | − |
| ネズミモチ属 | 0.7 | − | ( 1) |
| タニウツギ属 | 1.5 | − | − |
| ツツジ科 | − | − | ( 1) |
| ヤナギ属 | 0.7 | − | − |
| 草本類 | | | |
| アカザ科 × | 3.6 | ( 6) | ( 3) |
| アリノトウグサ科 × | 12.4 | − | (16) |
| カヤツリグサ科 × | − | − | ( 1) |
| イネ属 × | 15.0 | ( 5) | − |
| その他のイネ科 × | 29.6 | (28) | (28) |
| ヨモギ属 × | 18.2 | (15) | ( 7) |
| アザミ属 | 2.6 | ( 6) | (118) |
| オナモミ属 × | 0.5 | ( 1) | − |
| 舌状花類 | 0.5 | − | − |
| その他のキク科 | 10.4 | 4 | − |
| ウマノアシガタ科 | − | ( 1) | ( 2) |
| オミナエシ属 | 0.5 | − | − |
| ナンテンハギ属 | 1.5 | − | 12 |
| イヌタデ属 | 1.5 | − | − |
| イタドリ属 | 0.5 | − | − |
| ソバ属 | − | − | ( 2) |
| キジムロ属 | − | − | ( 1) |
| セリ科 | 0.5 | ( 1) | ( 1) |
| スイカズラ属 | 2.0 | − | − |

| 種類＼試料番号 | S C | S C | S B |
|---|---|---|---|
| | 6 | 4 | 3 |
| シダ類 | | | |
| カニクサ属 | 144.7 | ( 9) | (19) |
| イノモトサウ属 | 2.6 | ( 1) | ( 1) |
| ゼンマイ属 | − | − | ( 1) |
| コシダ属 | 2.6 | − | − |
| ウラボシ科 | 238.0 | (47) | (44) |

両試料とも残留花粉は種類、量ともに少なく、これらの試料から堆積環境を明らかにすることはほとんど不可能である。いづれの試料ともイネ又はソバが検出されるが、はじめて出現するから本試料もそれより古くはないであろう。またSB－3では前遺跡で人間の持込み花粉とみなされたナンテンハギが見られ、屋内に持込まれたものの可能性がある。とすると小屋の床面土で柱穴は埋まっているのかもしれない。またSC－4の試料はこの土壙の埋土と比較検討すれば何らかの情報がえられるかもしれない。

3. 七又木

SI－2、3、5の三試料ともに集石遺構のものであるが遺構そのものとの時間的関係は必ずしも明確ではない。また花粉、胞子類ともに残留量が極端に少なく、これらから当時の情報をうることは殆ど不可能である。これらの試料は遺構の焼土に続いて堆積したものであるとすれば当時加熱されたことは十分考えられるから、そのため花粉、胞子は崩解されたのかも知れない。しかし三試料ともにキク科花粉のみ多く、一試料のみであるがソバがみられることから後期の堆積物が混じっている可能性も多分にある。

以上三遺跡を通じて出現した草本、シダ類はいづれも陽地性の草地や荒地に生育するもののみであること、木本類ではマツ、コナラなどの二次林要素が主であり、照葉樹類は少なく、マツを主とする疎林や草地が展開していたらしい。またシダ類が多く検出されるが、これらの胞子類は花粉に比べて分解されにくいため、堆積環境の不良なところほど、シダ類は過大に表現される傾向がある。

また、住居址内の試料のみ比較的に花粉が多く検出されたのは換気のため屋外よりも浮游花粉が多く流れ込んだこと、人間により意識的無意識的とを関わらず植物が持込まれたことの他に屋内では紫外線の照射がないことも原因の一つと云へよう。花粉、胞子膜の主成分、スポロポレーニンはこの種の光線により崩解されやすいことが知られている。

表4　（集石遺構）試料の花粉、胞子粒数（50ｇ当り）

七又木遺跡

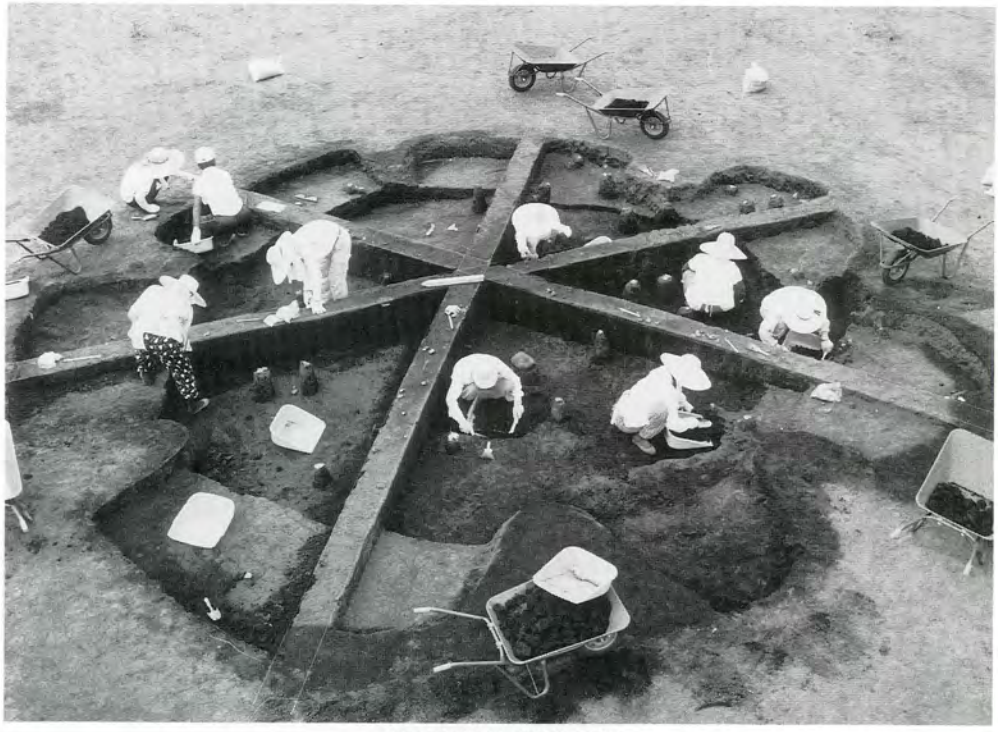
| 種類＼試料番号 | S I | S I | S I |
|---|---|---|---|
| | | 3 | 5 |
| 木本類 | | | |
| マツ属 | 5 | − | 1 |
| ツガ属 | 1 | − | − |
| シイ属 | 1 | − | − |
| ヤマモモ属 | − | 1 | |
| ハイノキ属 | − | 1 | 3 |
| カラスザンショウ属 | 1 | − | |
| ツバキ属 | 1 | − | 3 |
| | | | |
| 草本類 | | | |
| 舌状花類 | − | 29 | 1 |
| アザミ属 | 27 | 48 | 11 |
| オナモミ属 | 1 | − | |
| アリノトウグサ属 | 1 | − | − |
| アカザ科 | − | 1 | − |
| ソバ | 1 | − | − |
| | | | |
| シダ類 | | | |
| ウラボシ科 | 2 | − | − |
| その他のシダ類 | − | − | 3 |

図版1

発掘前の状況（八幡上遺跡）

遺構の検出状況（八幡上遺跡）

## 図版 2



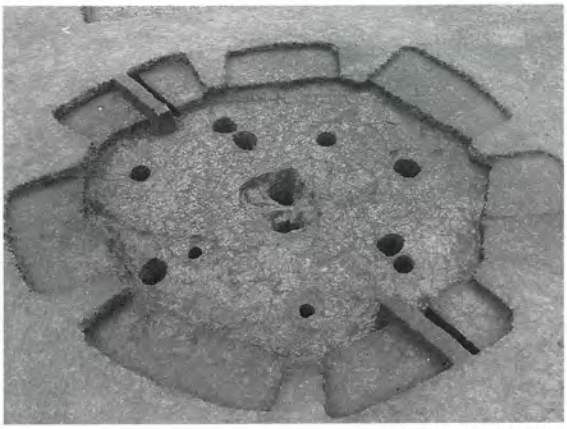
2 号竪穴住居精査状況

2 号竪穴住居全景

# 図版 3

住居址の検出状況

10号竪穴住居



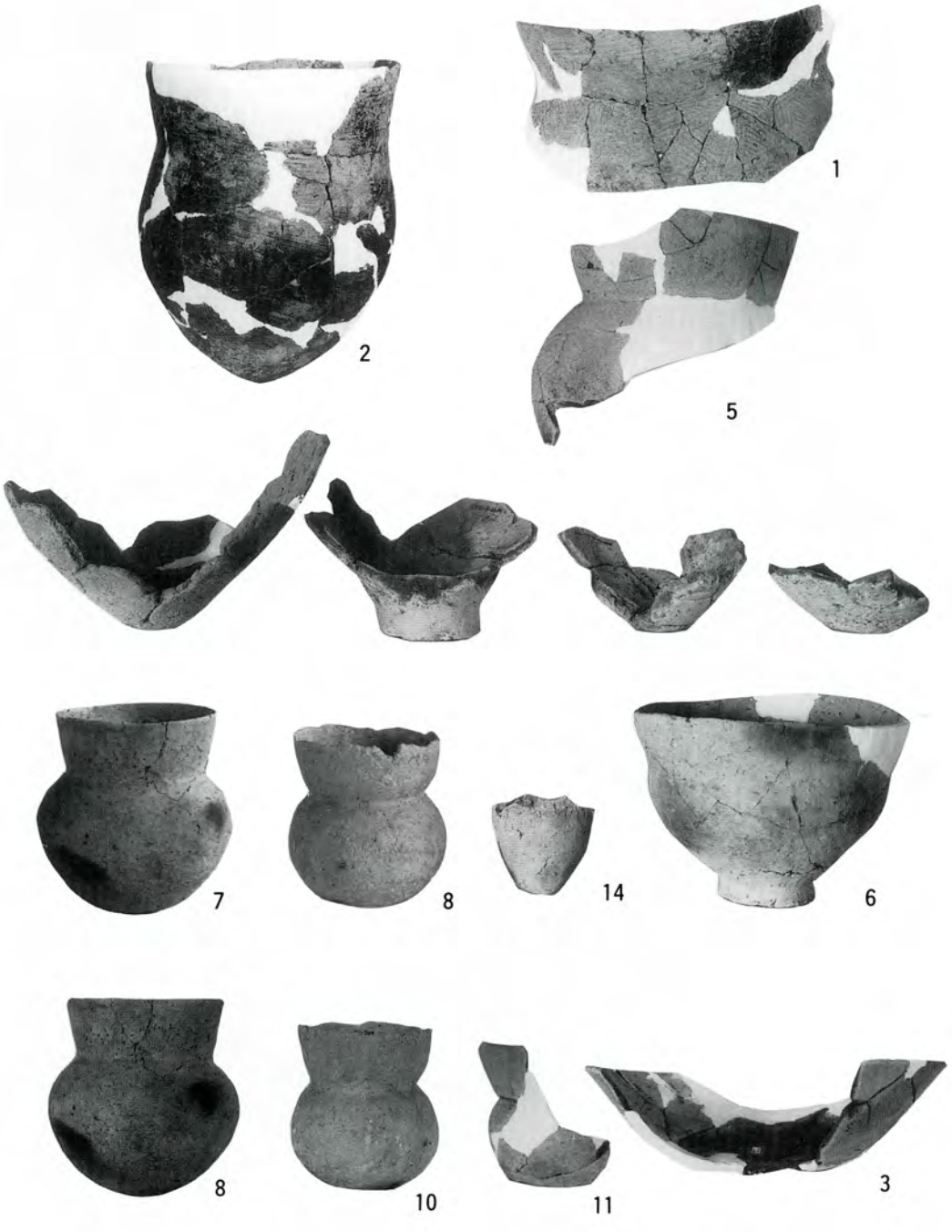
2 号竪穴住居

13号竪穴住居

4 号竪穴住居

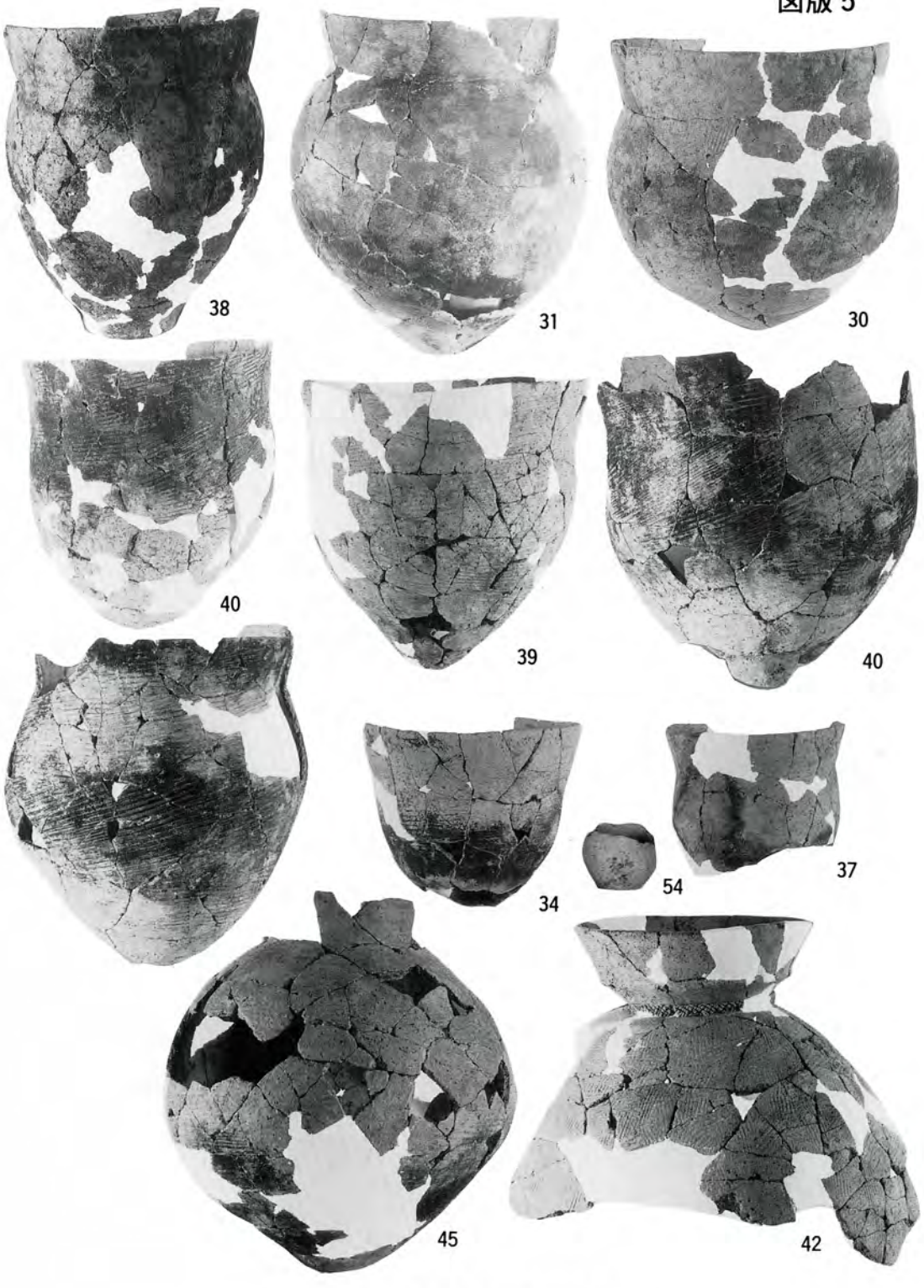
8 号土壙

# 図版 4




八幡上遺跡 1 号竪穴住居出土土器

図版 5




八幡上遺跡 3 号竪穴住居出土土器

# 図版 6

29

41

44

33

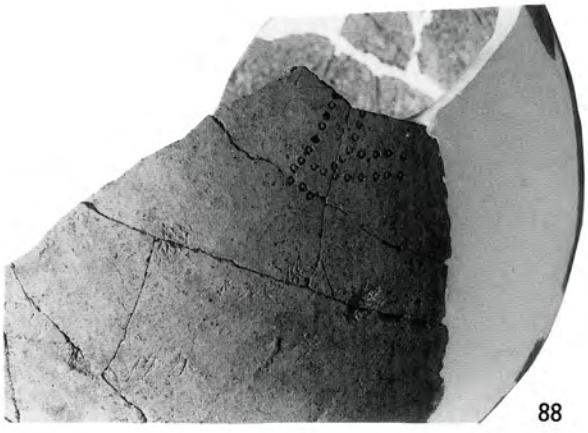
35

八幡上遺跡 3 号竪穴住居出土土器

八幡上遺跡 2 号竪穴住居出土遺物

85

87



88

八幡上遺跡10号竪穴住居出土土器

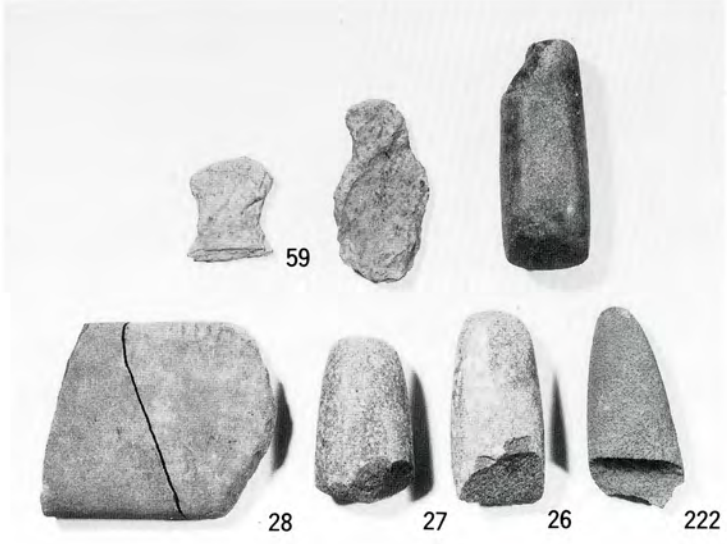
# 図版 8

八幡上遺跡 7 号竪穴住居出土土器

八幡上遺跡 8 号竪穴住居出土土器

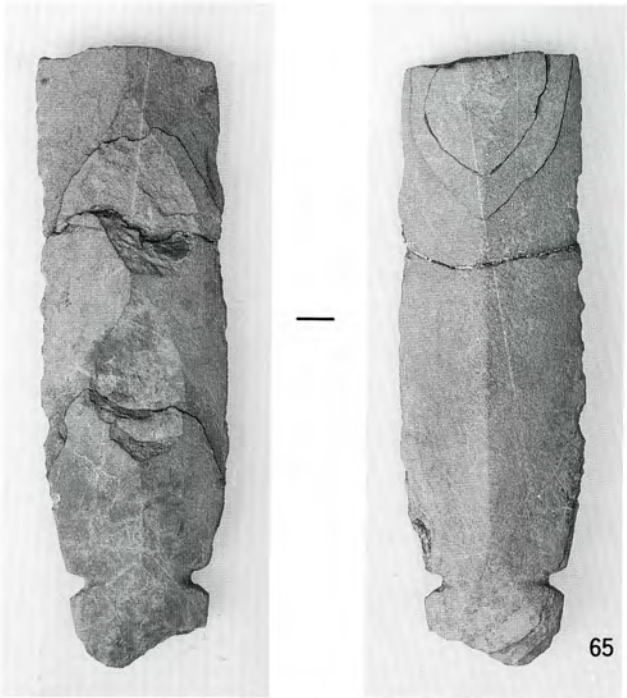
八幡上遺跡13号竪穴住居出土土器

八幡上遺跡 4 号土壙出土弥生土器




八幡上遺跡出土石器

# 図版10

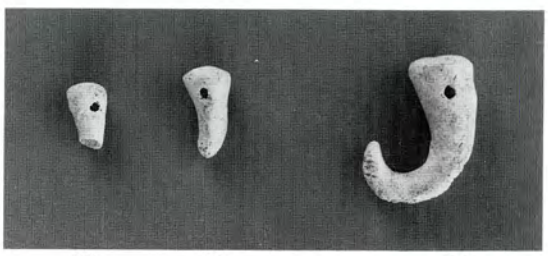



磨製石剣（八幡上遺跡ＳＡ４号）

76　　75

磨製石鏃（八幡上遺跡ＳＡ９号）

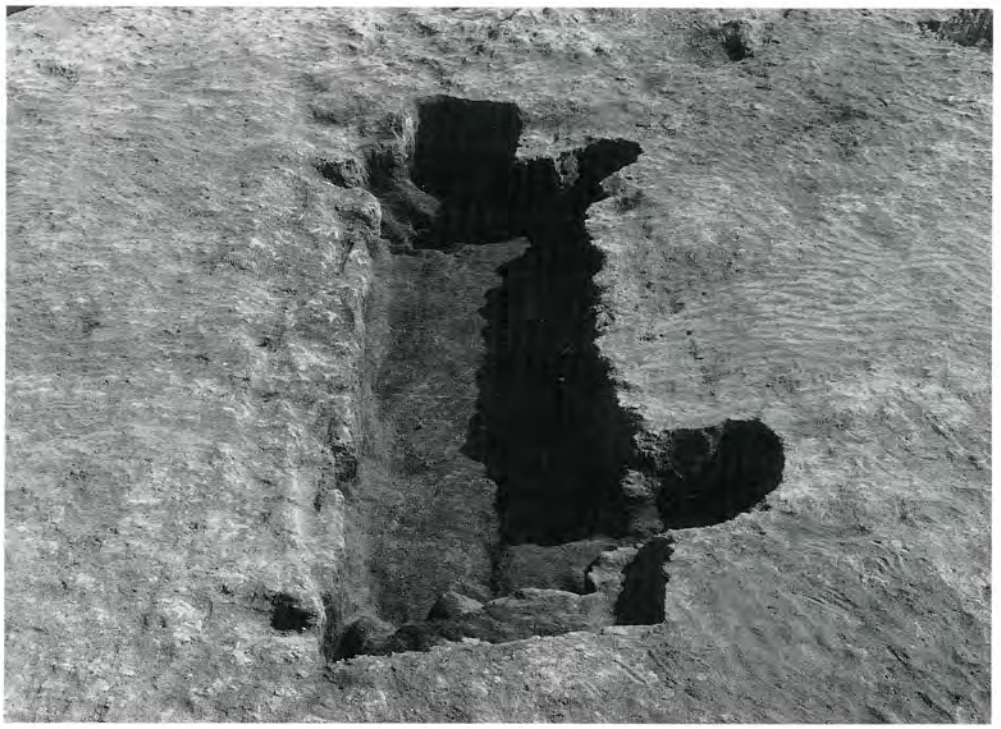
89



90　　91　　92

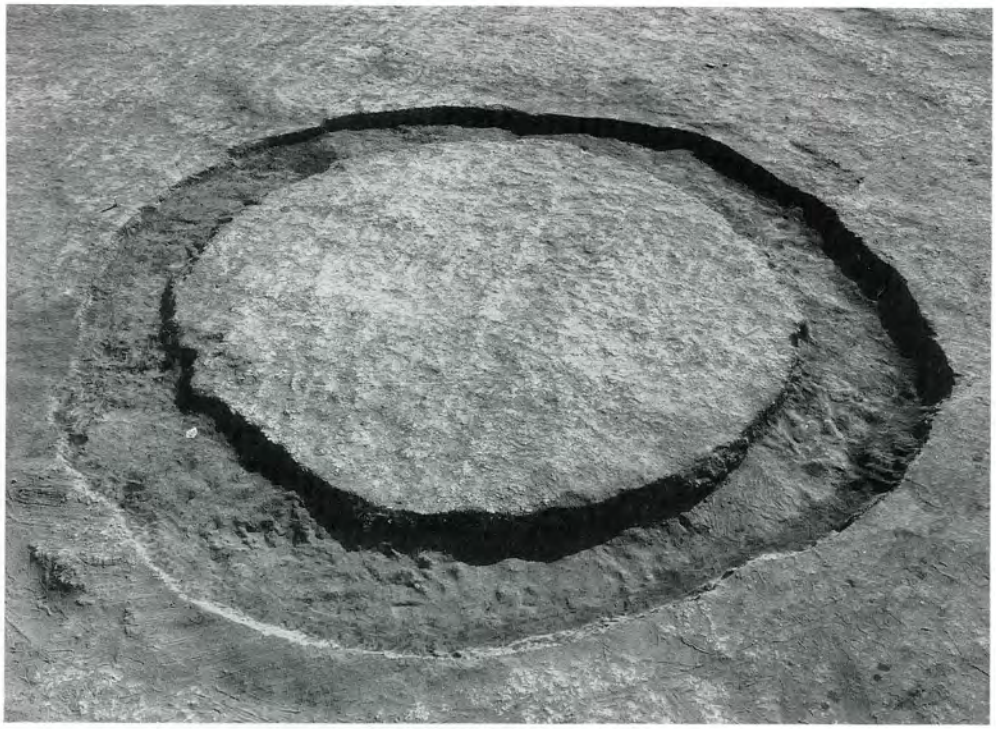
土製勾玉（八幡上遺跡SA10号）

一号円形周溝墓（七又木遺跡）



同上（主体部）

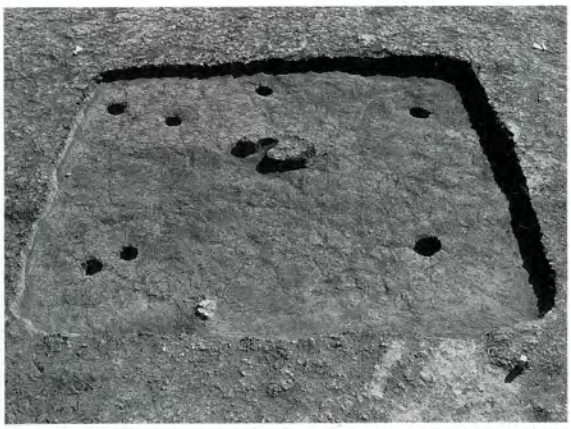
# 図版12



一号古墳周溝（七又木遺跡）

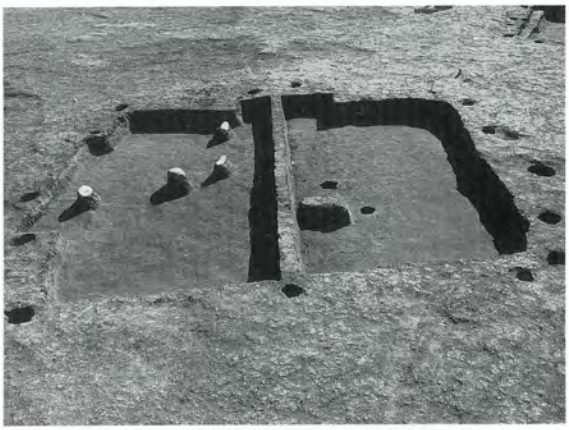
七又木遺跡集石遺構精査状況

2 号竪穴住居



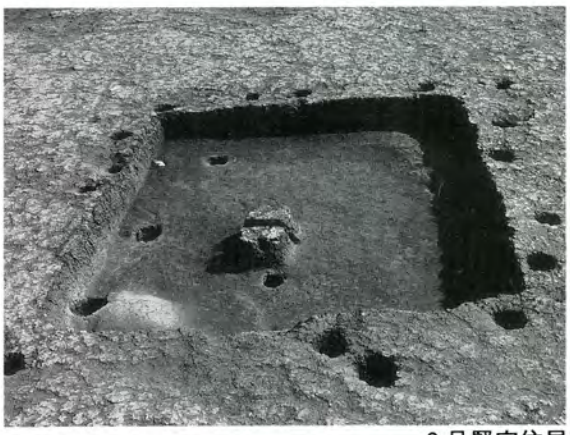
7 号竪穴住居

3 号竪穴住居



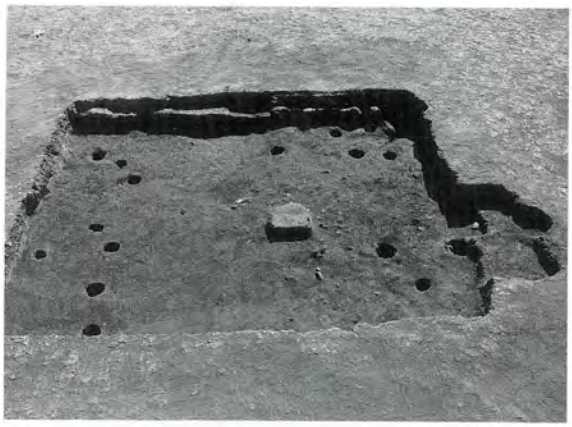
8 号竪穴住居

4・5 号竪穴住居



9 号竪穴住居

# 図版14



10号竪穴住居

20号竪穴住居

15号竪穴住居

24号竪穴住居

19号竪穴住居

25号竪穴住居

24号住居精査状況

24号住居出土の壺形土器

# 図版16

2 号集石遺構

2 号集石遺構床面の敷石状況

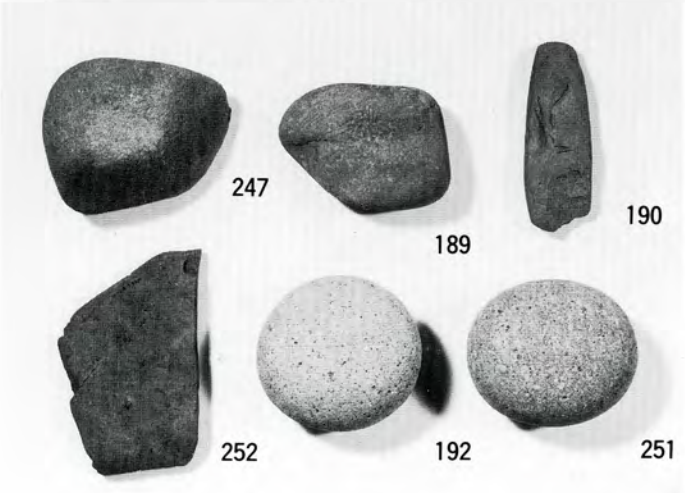
184

弥生土器口縁部

185

鏡片

銀代ヶ迫遺跡 9 号竪穴住居出土遺物



247

189

190

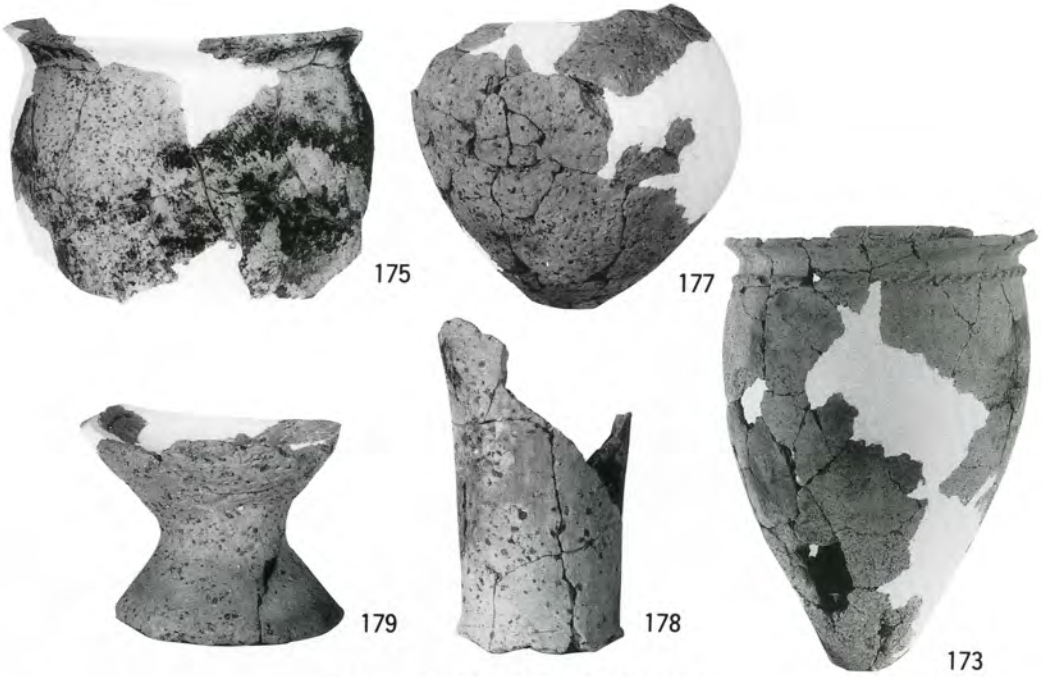
252

192

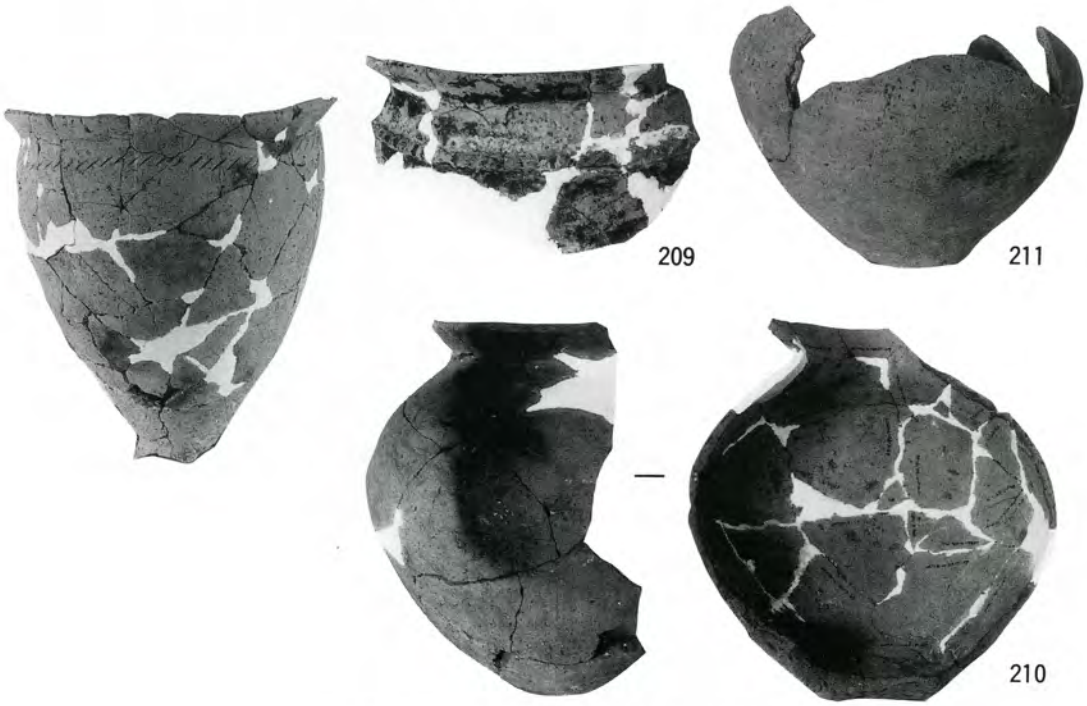
251

銀代ヶ迫遺跡出土石器（凹石、磨製石斧、砥石、磨石）

# 図版18




銀代ヶ迫遺跡11号竪穴住居出土土器




銀代ヶ迫遺跡17号竪穴住居出土土器

194

195

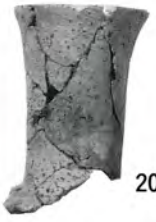
196

200

202

204

206

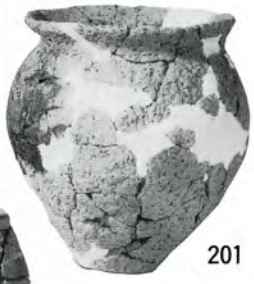

208

197

205

198

199


201

銀代ヶ迫遺跡 15号竪穴住居出土遺物

# 図版20

239

238

243

242

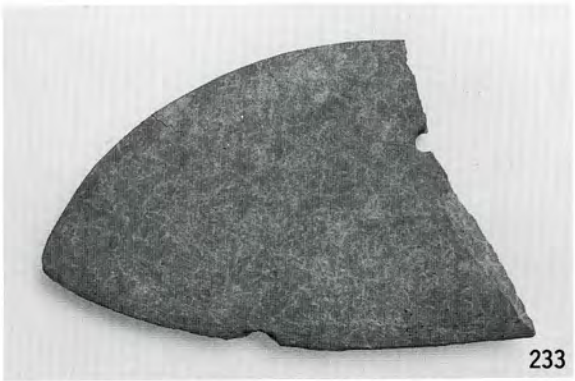
240

246

銀代ヶ迫遺跡24号竪穴住居出土遺物

石庖丁（銀代ヶ迫遺跡１号）

石庖丁（銀代ヶ迫遺跡21号）




石庖丁（銀代ヶ迫遺跡20号）

銀代ヶ迫遺跡13号

磨製石鏃（銀代ヶ迫遺跡19・8・14・6・24号）

新富町文化財調査報告書 第13集
県営農村基盤総合整備パイロット事業
（尾鈴Ⅱ期地区七又木工区）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
七又木地区遺跡
八幡上遺跡
七又木遺跡
銀代ヶ迫遺跡
発行年月日　１９９２年3月２５日
発　　行　新富町教育委員会
印　　刷　㈲印刷センタークロダ